

本作品の一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改竄等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償に関わらず本作品を第三者に譲渡することは出来ません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

【ふたなり女学園へようこそ】

CHARACTERS

〈香奈 一章〉

〈友梨佳 一章〉

〈友梨佳 二章〉

〈友梨佳 三章〉

〈香奈 二章〉

〈香奈 三章〉

〈友梨佳 四章〉

〈香奈 四章〉

〈香奈 五章〉

〈友梨佳 五章〉

CHARACTERS

女教師友梨佳 序章

女教師友梨佳 一章

美姫 序章

女教師友梨佳 二章

女教師友梨佳 三章

美姫 一章

女教師友梨佳 四章

美姫 二章

美姫 三章

女教師友梨佳 五章

ふたなりお嬢様 紗耶香編

ふたなり女学園へようこそ

しやーぷ。

CHARACTERS

（二年生）

香奈 主人公の一人。まじめで物事をしっかり考える。
詩織 香奈の幼馴染。相部屋になる。おだやかな性格。

（二年生）

友梨佳 主人公の一人。香奈の姉。少しだらしないところがある。ふたなりになってしまう。
紗耶香 友梨佳のクラスメート。金髪碧眼のお嬢様。様子がおかしいが……？
彩陽 友梨佳のクラスメート。茶髪をおさげにしている。
英梨 彩陽のルームメイト。八重歯が特徴的。その正体は……？

（三年生）

夏希 生徒会長。黒髪ロングにカチューシャの、清楚な美少女。

（教師）

凜 保健室の先生。白衣が似合う大人の女性。
美優 友梨佳のクラスの担任。グラマラスな体型。

〈香奈 一章〉

この学園に来るまで、わたしは、ふたなりというものを知らなかった。

ふたなり——〈ちんぼが生えた女の子〉。そんな女の子がいるだなんて想像もつかなかったけど、それは確かに、この学園に存在するものののだ。

ふたなりの女の子たちは、この学園に来る前は普通の女の子だったと聞いていた。この学園で毎日を過ごしていくうち、何か不思議な力によって、ちんぼが生えてきてしまうのだ。

そして、女の子たちは射精を一度体験すると、皆やめられなくなって、女の子たちに抜いてももらわないではいられなくなってしまう。

保健室の凜先生は、それを〈病気〉だと言っていたし、最初はわたしも、ただただ異様なことだとは思っていなかった。

お姉ちゃんの友梨佳が、わたしが知らない間にふたなりになっていた時は、驚いて声も出ないくらいだった。その時のわたしは悲しくて、もとのお姉ちゃんに戻って欲しいと思っていた。

女の子に覆いかぶさって、生えてきてしまったちんぼから精液を出して喘ぐお姉ちゃんの姿は、淫らでどうしようもなく汚れてしまったように見えた。

でも——それは違うのだ。わたしが間違っていた。

友達の詩織はふたなりちんぼのことを、〈贈り物〉だと言っていた。今では、わたしもそう思っている。

わたしはちんぼでイカされる快樂を知ってしまった。

犯される気持ちよさ。おまんこを突かれ、えぐられ、ナカだしされるその快樂に溺れてしまった。男の人じゃなくふたなりに処女を奪われてしまったことも、後悔なんてしていない。

だって、あんなに気持ちいいんだから♥

今日も、ふたなりの子たちとエッチする予定になっている。今からおまんこが疼いて、どうにかなりそう……。

自分で言うのもおかしいけど、わたしは国語が得意で、中学校の時、作文のコンクールに出場したことがある。文章で他人に物事を伝えるのは、他の人よりきつと上手だ。

わたしが経験したことを、誰かに聞かせたい。これから書いていく文章で、これまで起きたすべてを、余さず伝えられるはずだ。順番に、ここに記していこうと思う。わたしが、ふたなりセックスにハマってしまったのは、なぜなのか——

それは登校初日に、すでに始まっていた。

わたしはお姉ちゃんと一緒に、転校した白百合女学園に登校した。これがお姉ちゃんが普

通の女の子だった最後の時間だったと思うと、なんともいえない気持ちになる。

そんなことは知る由もなく、わたしはクラスが張り出された学園の昇降口で待ち合わせしていた見慣れた女の子に声をかけた。髪を結んだ、小動物みたいな、可愛らしい女の子。

彼女は、幼馴染みの詩織だ。

「おはよう、香奈ちゃん」

「詩織っ」

わたしは詩織を見つけると、駆けよって抱き着いた。

中学の時からずっと一緒だった詩織。毎日のように二人で登下校し、遊びに行ったり、勉強したりしていた。一度は別々の高校に進学したものの、わたしがこうして転校してきたことで、わたしたちは晴れて同じ制服を着ることが出来ている。

「やめてよお、香奈ちゃん。くっつかないでえ」

「ちよっとくらいいいじゃん、詩織い」

「みんなの前だと恥ずかしいよお」

体をくねらせて、逃げようとする詩織を、わたしはさらにぎゅっと抱きしめる。

詩織の柔らかい体。胸はそこまで大きくない、ほっそりしたやせ型の女の子。わたしのほうが胸は大きくて、自分の胸を押し付けてあげると、詩織は頬を赤らめている。

わたしとお姉ちゃんは、姉妹揃ってけっこう胸が成長しているのだ。話しているときに、男の子の視線が胸に向くのを感じることがあって、わたしはそれが嫌だったけど、今日からこの女子校で過ごすから、それに悩まされることはなくなる。

女の子だけの幸せな世界。わたしはそういう場所に來たのだと信じて疑わなかったけど、この後、それが間違っていたことを思い知らされることになるのだった。

「ねえねえ、一緒に部屋だよ、わたしたち……!!」

クラスが違っただけで、わたしたちがいたところに、寮の部屋が同じことを知って、わたしたちは大喜びをした。

何百人と生徒たちがいる中で、相部屋になれたのはとても低い確率だと思う。

「これから、毎日お泊り気分だね! 詩織っ」

「うん……夜まで一緒にお話しできるね!」

わたしたちは、自宅から持ってきた荷物をうきうきしながら部屋にしまっていた。

制服以外のお洋服、ちよっとした化粧品、教科書……新生活への期待でいっぱい、面倒な作業も苦にならなかった。

その日はもう、お風呂に入ったら横になりたかったから、床にお布団も敷いてしまっていると、ドアをコンコン、と叩く音がした。

「はーい」

「見回りに来ました。初めまして」

ドアを開けると、綺麗な女の子の顔が出た。

その人は、グラビアアイドルみたいな抜群の体つきで、胸もお尻も大きい女性らしい人だ

った。

白いシャツに、タイトスカート——服装から、すぐに先生だとわかった。わたしは登校初日なのもあって、まだまだ先生たちの名前を知らなかった。

「ごめんなさい、先生のお名前、聞いていいですか……？」

「みんなからは、美優先生^{みゆう}って呼ばれているわ。寮の管理をしています。よろしく。一年生はまだ寮生活に慣れていないと思うから、たまにこうして見回りに来るけど、あんまり嫌がないでね」

「美優先生、これからよろしくお願いします」

話しているうちに、担任のクラスが「2―D」だと聞いて、香奈はすぐに反応した。

「お姉ちゃんのクラスだ！ 友梨佳って人、わたしのお姉ちゃんです」

「そうだったの。どうりで、なんとなく見覚えがあったのね。でも、香奈さんは妹なのに、友梨佳さんよりしっかりしている感じがするわ」

「……よく言われます」

お姉ちゃんは結構自由奔放な人だ。やりたいことをやって、好きなように生きている感じがする。

わたしはそんなお姉ちゃんを見ていて不安になって、その分しっかり者になってしまったのだと思う。

「今度、友梨佳さんと二人でいるところを見てみたいわ。仲良しなの？」

「お姉ちゃんとは、家だともうでもいいことくだらない喧嘩してるが多くて……でも、仲はいいですよ」

しばらくなんでもない話をした後、詩織と二人で挨拶をすると、美優先生はまた来るわね、と言って隣の部屋へと移動していった。

「綺麗な人だね。詩織」

「そうだね、香奈ちゃん。あんな人が担任だったら、毎日男の子が嬉しがっちゃいそう」

「何言ってるの？ ここはもう、女子校なんだから、そんなこと気にしなくてもいいんだよ」

「あっ、そっか。ぼおつとしてた」

「まったく、もう」

詩織があはは、と笑ってごまかすのを見て、わたしもおかしくなって笑ってしまった。

この時はまだ、何も異変は起こっていなかったはずだ。しかし数時間後に、わたしは悪夢のような出来事に遭遇することになる。

学園に蔓延る呪い——しばらくわたしは、それを〈贈り物〉として捉えることは出来なかった。

この学園の寮には、それぞれの部屋にシャワー室があったけど、その他に、共同浴場が設置されていた。

綺麗なお風呂だと聞いていたから、わたしたちは、下着や寝間着、バスタオル、そして持

参したシャンプーなどを持って、浴場へと向かった。

「わあ、女風呂しかないんだね」

「そりやそうでしょ。女子寮なんだから」

「そっかあ。変な感じ」

とぼけたことを言う詩織を可愛がりながら、わたしたちは脱衣室で服を脱ぎ始める。ちようど、混んでいる時間だったから、周りでは女の子たちが服を脱いで、下着姿になっていたり、バスタオルを体に巻いていたったりした。

わたしたちも、制服を床に落として、ブラジャーを外して、パンティを脱いでいく。

その途中で、詩織が何か異変を察知したのか、もぞもぞとしていたが、その時はまだ、彼女の身にどんな変化が起こっているのか、わたしは想像もしていなかった。

「香奈ちゃん、はやく入ろうよ」

「う、うん……わかった」

裸になった詩織はタオルで体を隠して、なんとなく挙動不審な感じだった。

もともと恥ずかしがり屋だから、知らない女の子たちに自分の身体を見られたくないだけかと思っていた。

それでも、体を洗っている最中、意を決したように詩織が話しかけてきた時は、何か異様な雰囲気を感じ取っていた。

「あのね、香奈ちゃん……なんだろう、これ……？」

詩織は、風呂椅子に座ったまま、体をわたしの方に向けた。

顔を真っ赤にしながら、少し足を開いて、下腹部のところを指さした。

「え……っ」

わたしは詩織の下腹部についているそれを初めて見たとき、それが何だかわからなかった。

腫れ物——そうとしか、わたしは思わなかった。それ以外に思いつかなかった。

後から考えれば、すぐにちんぼが生えてきていると気付いてもよかったのかもしれないけど、そう気付くには、まだそれは小さすぎた。詩織のちんぼは、その時はほんの二センチくらいの出っ張りだったのだ。

「できるの、かな？　すごく腫れてるように見えるけど……痛くないの？」

「うん……ひゃんっ♥」

詩織は、自分のそれを触って、なんだかはしたない声を上げた。

「ど、どうしたの？」

「ううん、なんでもない。ここ、なんだかすごい敏感で……」

「そうなんだ。念のために、誰かに見せた方がいいかもね。あとで保健室に一緒に行つてあげる」

わたしは真剣に詩織を心配して、保健室に行くよう強く勧めた。

詩織は風呂に入っている間も、ずっともじもじとしていて、なんだか可哀想だった。その

夜になっても、詩織は股間を気にして、折角一緒に夜までお喋りする予定が台無しになっってしまった。

「ごめんね……わたし、今日は早めに寝るね」

「全然いいって。早く寝て、早く治そう？ 明日、保健室で先生に診てもらおう」

「さっきから、むず痒くて……居ても立っても居られない感じで……」

詩織は、布団に入っても、つらそうにむずむずと体を動かしていた。

わたしがいつもみたいに、詩織に抱き着いて、背中を撫でてあげると、詩織はわたしの胸に顔を埋めて、ようやくぐっすりと眠り始めた。

わたしもそれで安心して、落ち着いて眠ることが出来た。

翌日、保健室で悪夢のようなものを見せられるとは知らずに。

その日、朝起きた時から詩織の様子はおかしかった。

「香奈ちゃん……落ち着かない……」

なんだか頬を火照らせ、やたら隣で寝ているわたしにくっついてくる。

普段はわたしの方から抱き着くことはあっても、詩織から体を寄せてくることはほとんどない。嫌ではないけど、なんだか、隣にいるのが詩織ではなくなってしまったような気がして、怖かった。

「もう少しこうしてたい……んん……」

詩織はわたしのお尻に、腰を押し付けてくる。

固い何かが当たっていた。小さい突起のようなもの。柔らかいわたしのお尻の割れ目に食い込ませるように、ぐいぐいとなすりつけてくる。

「詩織、どうしたの……？」

「わ、わかんないけど……なんか、これ……はぁ」

「やめてよ、詩織……なんか、変だよ？」

放っておくといつまでもわたしの身体を抱きしめていそうだから、わたしは無理やり詩織から身体を引きはがし、朝の準備を始めた。

その間も、詩織はぼおっとしていて、目の前が見えなくなって、何か想像の世界に入り込んでいるかのようなだった。

二人で部屋を出て、教室に向かうときも、どこか上の空の様子だったから、わたしたちは一限が始まる前に保健室に行くことにした。

部屋に入ると、そこには女の先生が一人、机に向かっていた。

この人も、美優先生と同じく、白衣が似合う大人のお姉さんだった。美優先生より胸は小さいけれど、それでもGカップくらいはありそうだ。

「あら、新入生の子？ こんな時間からどうしたのかしら？」

その人は、机の上に置いてある白い液体の詰まった試験管をいじるのをやめて、こちらを

向いた。

にっこりと微笑んで、椅子を二人分用意してくれた。

「そこに座って、可愛い二人組さん。わたしは凜先生ってみんなから呼ばれてるわ。あなたたちは一年生よね？」

「はい……香奈っていいです。この子は、詩織です」

「……」

詩織は、ぼんやりと凜先生を眺めたまま、頬を赤く染めていた。まるで見惚れているようだった。

「大丈夫、詩織ちゃん？ わたしのこと、そんなに見つめちゃって。どこか体調が悪くなっちゃったの？」

「ええつと……それが……」

わたしは、詩織に例のアレを見せるように促した。凜先生にも「脱いでっらん♥」と微笑まれ、詩織は恥ずかしがりながらも、スカートを脱ぎ始める。

「なんだか……変なのが生えてきちゃったんです」

「ううん？ 変なのって、どんなのかしら」

「固くて、さつきからずつと、びくびくしてて……」

詩織はついにパンティに指をかけて、ゆっくりと下ろす。保健室で友達が下着まで脱いでいくのを見るのはなんだかおかしい気分だったけど、詩織の股間を見て、わたしは瞠目した。

「昨日より、おっきくなってる……？」

割れ目の少し上にあった腫れ物が、大きくなっているのだ。

ちよつとした突起くらいだったものが、五センチくらいの棒になっていた。しかも、固くまつすぐに、ピンと伸びている。棒の下には、小さな球体上のものが二つくっついていた。

これは、腫れものなんかじゃない——わたしは、その棒からイメージするものがあった。

裸の小さな男の子を、ちよつと見てしまったことがある。その股間についているものと同じ、アレ——。

「あら、小さくてかわいいちんぽ♥」

凜先生が、それをあっさりと言葉にした。

男性器になった腫れ物は、今びくびくと震えながら、固く勃起して、上を向いていた。先っぽからは、透明な汁がとろりと光っていた。

「普通は最初からもっと大きく成長するんだけど、詩織ちゃん……だったかしら？ あなたのちんぽは、イマイチ発育がうまくいっていないわね」

「ちよ、ちよつと待ってください！ どうして詩織に、こんなものが……？」

「慌てないで。詩織ちゃん、よく聞いてね。あなたは、今日からふたなりになったのよ。おめでとう」

「えっ……」

詩織は、何を言われているのかわからないというように、困り顔でわたしの顔を見返して

きた。

ふたなり……わたしはその言葉を聞いたことがあった。ちんぼが生えた女の子。そんなもの、変態の男の子が好きな漫画やビデオにしか出てこないものだと思っていたけど、そんなものがなぜ、現実存在しているんだろ……？

夢でも見ているのかと思って頬を引っ張ってみても、目が覚めるようなことはなかった。凜先生は、戸惑うわたしたちを見てクスクス笑いながら言った。

「このふたなりちんぼが、うずうずして仕方ないのよね？」

「そ、それはっ」

「恥ずかしいことじゃないのよ。ちんぼが射精したがって、勃起しちゃうのは当然のことよ？ もうちょよつとわたしのそばにおいで」

「はい……っ」

吸い寄せられるように、詩織は凜先生のそばに椅子を動かした。

そして、ふいに詩織が高い声をあげ、体をびくりと震わせた。凜先生が、詩織の五センチくらいのちんぼを、優しく握ってあげていた。ちんぼがびくびくと動いて、わたしには詩織が気持ちよさそうにしているように見えた。

「ひやつり、凜先生……」

「うふ、どんな感じかしら？ ゾクゾクする？ その感覚に身を任せていいのよ」わたしの手で、精通しちゃうおうね」

「そこ、そんなに触ったらダメですうっ」んん……」

詩織は、体を強張らせてそう言いながらも、眉を寄せてなんだか色っぽい声をあげてしまっていた。わたしは目の前の光景が理解できなくて、ただただ啞然として見守ることしかできなかった。

「し、詩織……！？」

「香奈ちゃん、これ、気持ちいい……」凜先生の手、すごい、気持ちいいの……」

「あら、ありがとう。もうちょつと強くシゴいてあげてもいいのよ？」

「はああっ」そんな、強く」ダメ、なんか、なんか出ちゃいそうですう」

そして詩織は、一際甲高い声をあげて、体をのけぞらせた。

びゅっ！　びゅるっ！

詩織のちんぼから、わずかな量の白い液体が勢いよく飛び出していく。わたしは何が起きているか、知っていた。詩織は今、射精しているのだ。

ほんのわずかな精液を出すために、体を震わせ、快楽に身を震わせる詩織。異様な光景に愕然として、声すら出なかった。

詩織のちんぼは精液を何度か迸らせた後、しなびて小さくなった。詩織は、恍惚とした表情を浮かべていた。

「な、なにこれ……気持ちよかったあ……」

「これが、おちんぼ射精の快感よ」すっごくよかったでしょう？　もしまたムラムラした

ら、わたしのところにいらっしやい。好きなだけ精液出させてあげる◆」

床に垂れた白濁液をティッシュで拭いながら、凜先生は淫らに微笑むのだった。

詩織は、わたしに一部始終を見られていたことを恥ずかしがって、しばらくはわたしと会話することができなかった。話しかけても、顔を真っ赤にしてこくこくと頷いたり首を横に振ったりするだけで、わたしに目すら合わせてくれなかった。

どうすればいいのかわからないまま、その日の授業が終わって、一緒に部屋に戻ろうかという頃、ようやく、詩織の方から言葉をかけてくれた。

「香奈ちゃん……わたしのこと、気持ち悪いって思っただけ？」

「思っただけよ」

「だって、ちんぽが生えてきちゃったんだよ……？」

「思っただけよ。詩織は詩織だもん」

そう言っただけで、やっとほっとした面持ちで詩織は胸をなでおろした。

「よかったあ……」

「安心して。生えてきちゃったものはしょうがないよ。でも、他の人には知られたくないよね？」

「うん。見られたら、大変なことになっちゃうよ」

「そうだよ。お風呂に入るときとか、ふたなりってことを隠すときには、わたしが力になるから」

「ありがとう……あ、あとね、香奈ちゃん」

急に、詩織はわたしのことをキラキラとした瞳で見つめて、妙なことを言い出すのだった。

「あのね……射精したとき、すっごく気持ちよかったの……」

「そう、なんだ……」

「あんなに気持ちよかったの、初めてなの……」

詩織はぼつぼつと、精液を出した時の感想を聞かせてきて、わたしはどう反応していいのかわからなかった。

ちんぽの生えたふたなりになってしまったことに対して、詩織自身は嫌な気持ちはないらしくて、それどころかさつきから、射精のことを話しながら、頬が緩みっぱなしだ。

わたしは聞いていられなくなつて、話をつい遮ってしまった。

「今もアレを思い出すと、ちんぽが勃ってきちゃうくらいで……」

「や、やめてよ。そんな……みつともないよ」

「そうだよ。でも、わたし、今ドキドキしてるの……次に凜先生に会う時が楽しみで」

「……詩織」

わたしは、穢れていない、綺麗だった詩織が汚れてしまったような気がしていた。別に詩織を嫌いになつたりはしないけど、なんともいえない気分になつてしまう。

頬を赤らめ、ぼんやりとした表情でちんぼのことを喋る詩織を見ると、ありえないことも考えてしまった。もしかしたら、詩織は男の子みたいなのに、凧先生だけじゃなく女の子みんなに欲情するようになるんじゃないか……そう考えると、不安だった。

この日の夜にされたあることも、余計にわたしを不安にさせた。

わたしたちはとりあえず、今日のところは部屋に備えつけのシャワーで済まして、寝床についた。

並んで横になっていると、詩織は相変わらずわたしにくっついてきて、股間のそれをわたしに擦りつけてきた。固くなったちんぼがお尻の割れ目に食い込んできて、わたしはドキリとしてしまう。

「し、詩織……何やってるの？」

「あつ、ごめん……なんだか腰が勝手に動いてたの……気持ち悪かったよね」

「大丈夫。きやつ、だから、やめてつてば……」

「ほんとにごめん……なんだか落ち着かなくて……もうちょっとこうしていい？」

詩織はわたしのことをぎゅっと抱きしめて、勃起ちんぼをぐいぐいと押し付けてきてくる。わたしはそれを仕方なく我慢して、詩織が落ち着いて眠るのを待つのだった。

まだ、このときはその程度で済んでいた。

次第に詩織はちんぼの欲求に抗えなくなって、わたしにちんぼをこすりつけるだけでは飽き足らなくなってしまふのだった。

今思い出せば、はつきりとわかる。きつと、そのきつかけはあの人が詩織に近づいたことだろう。

彩陽先輩。あやひ友梨佳お姉ちゃんの同じクラスにいた人だ。

あの人が、詩織を狂わせてしまった――

彩陽先輩に出会ったのは、詩織がふたなりになってから数日後のことだった。

詩織は凧先生に手コキしてもらってからというもの、たまに、わたしに黙ってどこかへ行ってしまうようになった。わたしは薄々勘付いていた。たぶん、一人で保健室に行つて、凧先生に相手をしてもらっているのだ。

ちんぼが生えてきてしまった詩織。ふたなりになったからには、きつと男の子みたいに、精液を出さなければ気がおかしくなってしまうのかもしれない。

詩織自身も、わたしに隠し通すのは無理だとわかつているようで、一人でいなくなった後の昼休みに何をしていたのか聞くと、素直に答えてくれた。

「具合が悪くて……保健室に行つてきてたの」

「具合？」

「ええつと……もう、はつきり言っちゃうね。ちんぼが疼いて、どうしようもなくて……」

「やっぱり、そうなんだ」

詩織の言葉に思わずそういう風に答えると、詩織はしゅんとなって、肩を落としてしまった。

「おかしいよね……射精するために、保健室に通うだなんて……」

「ううん、そんなことない。変じゃないよ。だって、射精したくてたまらないんでしょ？」

「そうなの……ちんぼがギンギンになって、精液出したいよお、っていう思いで、頭がいっぱいになって、それだけしか考えられなくなっちゃうの」

「凜先生に優しくしてもらえてよかったね」

「うん。凜先生がいなかったら、わたし、きっと……」

詩織はわたしのことをじっとりとした視線で見つめてきた。

まるで、欲情した男の子みたいな目だった。わたしの身体が触りたくて、欲しくてたまらない、という目。

急な詩織の行動に、一歩後ずさってしまった。詩織は、慌ててわたしから目を反らした。

「な、なんでもない……わたし、おかしいよね」

「ううん、詩織はおかしくないよ。今の、忘れるから……いつも通りでいてね」

「うん」

気を反らそうと思って、わたしは詩織と何も話さず、ただただ並んで廊下を歩いた。

その時、向こうから歩いてくる人影があった。わたしのよく知っている人物。

お姉ちゃんの友梨佳が、友達らしい二人の女生徒と一緒に、こっちに向かって歩いてくるのだ。

わたしは声をかけようとして、視線を送ったが、その時お姉ちゃんの様子がなんだかおかしいことに気がついた。仲が良さそうにしている金髪碧眼の女の子と、その隣にいる茶髪をおさげをした女の子がいるのだけど、漂う雰囲気妙なのだ。

お姉ちゃんが金髪の子と一緒に、茶髪の子のお尻を追いかけて、言い寄っているような感じだった。

そして何より変なのは、お姉ちゃんがやけに前かがみになって、苦しそうな体勢をしていることだった。

「おねえ……ちゃん」

結局、かけた声は小さくしぼんでしまっ、お姉ちゃんに気付かれることはなかった。

お姉ちゃん熱に浮かされたように周りが見えていないようで、すぐ隣を通り過ぎたわたしの姿を見つけれなかったのだ。

「あれ……？ あの人、香奈ちゃんのお姉ちゃん？」

「うん。なんか、気づいてもらえなかった」

「どうしたんだろうね」

その茶髪の子が彩陽先輩だったということに気付いたのは後のことだったけれど、今考えれば、あれがわたしたちと彩陽先輩との最初の出会いだった。

さらに数日が過ぎて、わたしたち一年生が新しい場所に入っていく時期が訪れた。

この聖白百合学園にはたくさんさんの部活がある。体育会系の部活から、文化系の部活まで、数えると数十の部活が、活発に活動していた。わたしたちはまず、体験入部という形でそれに参加していくことになっていた。

この学園は普通より一年生が部活に参加する時期が遅くて、偶然わたしはちょうどその時期に転校してきたのだった。

「香奈は、何部に入る予定なの？」

「まだ、わかんない……」

わたしは中学時代、詩織と同じ水泳部に所属していた。

もともと詩織は水泳が得意で、小学生の時からずっと続けていた。わたしも詩織と一緒にいたいという理由で、中学生の時は詩織にくっついて水泳部に入っていたのだ。

もし詩織が水泳部に入っていなかったら、わたしも入っていなかっただろうな、というくらい、水泳には興味がなかったけれど、詩織と一緒にいるだけでわたしは十分だった。

「わたしは、高校も水泳部かなあ」

「そうだよね。それじゃあ、わたしもそうするかも」

「中学の時もそう言ってたね、香奈ちゃんは」

というわけで結局、わたしはこの聖白百合学園でも、とりあえず最初に水泳部に体験入部してみることにした。水泳の授業があると聞いていたから、スクール水着は用意していた。わたしたちは放課後、水泳道具を持ってプールへと向かった。

聖白百合学園は私立高校で、普通の公立の高校より、設備が充実している。校舎はピカピカだし、体育館は新しく改装されたばかりだ。プールも同じで、大きくて綺麗だった。

プール特有の塩素の香りが漂って、中学生の頃を思い出した。

「わあ、やっぱり改めてみると聖白百合のプールは大きいね」

「詩織はこのプールに憧れてこの高校に来たんだったよね」

詩織は水泳が得意で大会にも出場経験があった。よりよい練習環境を求めて、この学校を目指したというわけだ。

わたしは、特技を持っている詩織が羨ましかった。水泳をしているときの詩織は、どんな時より輝いていて、まぶしい。詩織が大会で良い記録を出した時は、友達であるわたしまで、誇らしく思っていた。

わたしは思いもよらなかった。幼いころから水泳を頑張ってきた詩織への残酷な仕打ち——詩織が、水泳など興味が無くなってしまうくらい、あることにハマってしまうなんて。

体験入部では、スクール水着に着替え、わたしたちは先輩たちに部の説明を聞いた後、一緒にプールで泳いだりした。

着替える時、詩織はちゃんぽを水着の中にしまえるか不安そうにしていたけど、なんとかもつこりするのを隠すことが出来ていた。詩織のちゃんぽは勃起していないときは本当に小さくて、ぱっと見たくらいではわからないくらいだったのだ。

先輩たちの説明を聞いている段階で、昨日廊下ですれ違った、お姉ちゃんと一緒にいた先輩がいることに気付いていた。グループに分かれて練習することになったのだけれど、偶然、その人がわたしと詩織と一緒にのグループになった。

「こんにちは。あなたたち二人は、わたしと一緒に練習ね。わたしは彩陽って言います」
「よろしくお願いします」

わたしたちは彩陽先輩と一緒に練習して、すぐに仲良くなった。練習の最中、会話は途切れることなく続いて、楽しい時間が流れた。

「へえ、大会に出場したことがあるんだ。きっと詩織ちゃんのほうが、わたしより上手だね」
「そんなことないですよ」

「……ところで、詩織ちゃん。なんか……水着の中に、変なものが入ってない？　そこ、膨らんでるけど」

彩陽先輩の言葉で、わたしはようやく気がついた。水面の下で、詩織の股間がもっこりと膨らんでいるのだ。どうやら、ちんぽが勃起してきてしまったみたいだった。

詩織はその自覚がなかったみたいで、自分の股間を見て、慌てて水着の上から手で隠した。
「な、なんでもないんです……これは……」

「そうなの？　わたしには、そう見えないけど」

「あつ、詩織！　それは……腫れ物みたいなのが出来ちゃったんだよね？」

「う、うん……っ、そうなんですっ」

わたしがフォローして、その場はなんとか凌げたと思っていたけれど、その考えは甘かった。この時、すでに彩陽先輩は、詩織がふたなりであることを見抜いていたのだらう。詩織のことを考えるのなら、もっと詩織がふたなりであることを隠す努力をするべきだったのかもしれない。

その後、もう一度グループ替えがあつて、わたしたちは別々のグループになった。その後も親切的な先輩と一緒に練習できて、わたしも水泳部に入ろうかと思いはじめた。

身体を流すために、着替え室の隣にあるシャワー室に向かおうと、詩織を探したけど、見つからなかった。

「あれ？　しおりーっ」

一年生たちと先輩が、一斉にシャワー室に向かい始める中、詩織の影は見つからなかった。同時に、彩陽先輩の姿も見つからなかったから、もしかしたら彩陽先輩と二人でシャワーを浴びに行ったのかと思って、わたしは一人でシャワー室へ向かった。

そのまま、一人でシャワーを浴び、スクール水着から制服へ、着替えも済ませてしまった。詩織が着替え室に来るのを待って、シャツやスカートをノロノロと身に着けていたせいで、わたしは最後の一人になってしまった。その頃に、ようやく気付いた。まだ、着替えていない生徒たちがいることに。

「あれ……どうして二人が？」

荷物が、二つだけ着替え室に残っていたのだ。詩織のものと、もう一つ、先輩のものと思

しき荷物が一つ。おそらく、彩陽先輩のものだった。

どうして、二人がまだ残っているのだろう、と思った。彼女たちは一番最初にシャワー室へ向かったはずなのに。ようやく、わたしは危機感を抱いた。もしかして、二人はまだ一緒にいるんじゃないか。彩陽先輩は、詩織の秘密に気がついてしまったのではないだろうか。わたしは考えた。二人がいるなら、きっとシャワー室じゃないだろうか。どこか遠くに行ってしまったわけじゃなくて、まだ、シャワー室に残っているんじゃないか。

シャワー室で、一体何をしているんだろうか……？

わたしは、そっと着替え室を出て、隣にあるシャワー室の扉を開ける。

水がシャワーから流れる音。そして、人の気配があった。なぜだかわからないけど予感が出て、わたしは出来るだけ音を立てないように、靴と靴下を脱いでシャワー室の中へと入っていった。

シャワー室の構造は、一人ひとりシャワーを浴びる個室が、入口から奥までいくつも並ぶ形になっている。一番奥の個室から、詩織のものらしき声が聞こえていた。

「せ、せんばあいっ♥ ダメですうっ♥」

小さな声は反響し、わたしの耳にはつきりと届いた。妙に甘ったるくて、媚びるような声だった。詩織のこんな声は聞いたことがない。いや、一度だけ聞いたことがあった。保健室で凜先生に相手をしてもらっているときの詩織の声――

もしかして……？

わたしは、見てはいけないと思いますが、好奇心と不安を同時に掻き立てられて、一層足音が出ないように気を付けながら、その個室へと向かっていった。

じゅぽっ……じゅるるるっ、じゅぽっ

そんな卑猥にも聞こえる音に、わたしはごくりと唾を飲んだ。そして、はつきりとそれとわかる会話が聞こえた。

「そんなに吸ったらあ、らめえっ♥ もう出ない、もう精液、出ないからあっ♥」

「うーそ♥ まだまだちゃんぽ、固くなったままじゃん。ちゅっ♥」

「そ、そうだけどおっ♥ こんなの、おかしいよおっ♥ あんなにいっぱい出したのに、なんか、奥からくるう♥ 出ちやう、また出ちやうからあっ♥」

「じゅるじゅるっ……好きな時に出しちゃっていいんだよ？ ほら、もう一回びゅっぴゅしよう？」

「はああっ♥ もうイク、またイっちゃう……彩陽先輩にイカされちゃうう♥」

個室に手が届くまで近づいた。すりガラス越しに、二人の影が見える。

立っている詩織の足元で、彩陽先輩がしゃがんで、詩織の股間に顔を近づけたり、離したりを繰り返していた。そのたびに、じゅぶじゅぶと卑猥な音が鳴っている。

詩織はその刺激がたまらなそうに足を震わせ、天井を向いているように見えた。

そんなはずない――彩陽先輩が、そんな人なわけがない。真相をこの目で見なくては。わたしは憑りつかれたように個室の扉に手をかけ、そして開いた。

「い、イクうつ◆ ああああつ◆」

ぴゅーっ！　ぴゆるるっ！　ぴゅくっ

目の前には信じられない光景があった。

詩織が小さなちんぽを一生懸命勃起させ、一生懸命、精液を放っていた。彩陽先輩の口内に。

彩陽先輩は詩織の五センチくらいのちんぽを口に咥え、射精を促すように、玉を指で転がしていた。一通り、詩織が眉を寄せて体を震わせるのを終えると、ちんぽをちゅぽっと口からはきだして、その先端をぺろぺろと舐めた。

唇の端から、とろりと白い精液がこぼれていた。

「うつ……はああつ◆ またいっぱい出ちゃったあ……◆」

「詩織ちゃんの可愛いちんぽ、おいしくてやみつきになっちゃう◆ こんなに小ぶりで、小学生みたいな短小ふたなりちんぽ、初めて見たよ。……あつ」

そこでもうやく、彩陽先輩は、そばで見つめるわたしの存在に気がついた。詩織も、ようやくわたしのほうに顔を向ける。

「ふああ……◆ あれえ……香奈あ……◆」

詩織は、夢見心地の表情で、すでに正気を失いかけていた。唇の端から涎を垂らしながら、恍惚とした表情で、へらへらとわたしに笑いかけた。

最後に、詩織はまだ尿道に残っていた精液を、ぴゅっと彩陽先輩の舌の上に放つのだった。

〈友梨佳 一章〉

転校してきた最初の日から、違和感を感じていた。

この聖白百合女学園に転校することになって、わたしは喜んでいた。この学園には女の子しかない。これからは男の子のいやらしい視線で見られることはないのだ。わたしは普通に可愛い自信はあったし、胸も結構大きいから、以前から男の子にいやらしい視線を向けられることが頻繁にあった。中学に入ってからずっとそうだったから慣れてきていたけど、やっぱり嫌なものは嫌で、女子校と聞いたときは素直に嬉しかった。

しかし、それは糠喜びだった。

「転校生の友梨佳さんです！ わたしたちのクラスへようこそ！」

担任の美優先生は、グラビアアイドルみたいな抜群の体つきで、胸もお尻も大きい大人の女性だった。

美優先生は、にこやかに迎え入れてくれたけど、同級生になる女の子たちの様子が、なんだかおかしいのだ。

全員ではないけど、かなりの数の女の子が、わたしのことをねっとりとした視線で見つめていた。男の子が向けてくるいやらしい視線そっくりだった。胸のあたりや、制服のミニスカートから出たナマ足に、視線が集中してくる。

「えっと……よろしくお願いします……」

戸惑いながら自分の席に向かうと、隣の女の子にもそういう目を向けられて、どうすればいいかわからなかった。

隣の女の子は、ハーフなのか、金髪ストレートに青い目の可愛い女の子だったし、なんとなく高貴な雰囲気が漂っていてお嬢様みたいだったから、本当だったらもっと仲良くなりたい！ と思うところなんだけど、ねっとり全身を舐めるように見つめられて、困ってしまう。

「ゆ、友梨佳さん……お隣ですわね」

ホームルームが終わったとたんに話しかけてきたと思ったら、なんだか言葉遣いが本当にお嬢様みたいだ。仕方なく顔をあげて目を合わせると、ぱっと顔を赤らめて、何やらもじもじしている。

「わ、わたくし……名前を、紗^さ耶^や香^かといいますの。ど、どうぞよろしくお願いしますわ」

「う、うん、よろしく」

背筋がぴんと伸びていて、お行儀正しく足も閉じている。やっぱり、どこか良いお家のお嬢様なんだろうと思っていたら、横から女の子が口をはさんできた。

「紗^さ耶^や香^かはね、凄い家系のお嬢様なんだよ。しかも、お父さんが外国人。すごいよねー」

その女の子は、茶髪をおさげにした、かわいい女の子だった。手首や首にアクセサリーを

つけていて、ちよつとやんちゃな雰囲氣を漂わせている。

「わたしは、彩陽^{あやひ}。紗耶香はこういう風にたまに様子がおかしいけど、たまにだから……許してあげて♥」

「おかしくなっちゃうの？ 面白いね、ふふ。よろしく」

「友梨佳さんがかわいいから、緊張してるんだよ、きっと」

「ええ？ どういうこと？」

その時は、彩陽が冗談を言っただけかと思っていた。紗耶香の様子がおかしい意味が、わたしにはわからなかった。

その日の授業が終わって、仲良くなった紗耶香と彩陽と、女子寮へ向かうことになった。聖白百合女学園は、全寮制の学校なのだ。わたしは、着替えの入ったスーツケースを持って、二人に連れられて寮の玄関に立った。大きい建物で、この女学園の女の子たちがみんな、ここに住んでいると思うとすごいと思った。

ただ、寮へ向かう最中も、そして今も、通りすがりの女の子に、いやらしい目で見られて、わたしはやっぱりおかしいな、と首を傾げた。

「ゆ、友梨佳……なんだか、いい匂い、しますわね」

突然、紗耶香がそんなことを言って、はあ、はあ、と息を荒げているから、正直ちよつと引いた。

「紗耶香もいい匂いするよ。シャンプーは寮のお風呂の使ってるの？」

「いいえ、わたくしは家から送られてきたものを……そうですね、今日、一緒にお風呂に入りませんか……♥」

「ええ？ べ、別にいいけど……」

わたしがどう答えればいいのかわからないでいると、彩陽があはは……と困ったように笑った。

「ちよつと紗耶香、しつかりしてよ。あんた、さすがに気持ち悪いわよ」

「も、申し訳ありませんわ……でも……」

「わかったわかった。ちよつと紗耶香のこと借りるね、友梨佳。あ、部屋はその角を曲がった突き当りだから」

紗耶香を連れて彩陽がいなくなって、わたしは狐につままれたような気分だった。紗耶香の調子が良くなることを祈るばかりだった。

スーツケースを引きずり、自分の部屋を見つけてドアを開けて入ってみると、けっこう綺麗な部屋だった。置かれている勉強机や本棚、洋服箆笥はどれもおしゃれで、わたしは気分がよくなった。

まるでホテルのように、ベッドが二つ並んでいる。そう、この部屋は二人部屋なのだ。もう一人の女の子が誰なのか気になるけど、部屋のドアに名前は書いていなかった。ほかのドアにはそこにいる生徒の名前が書いてあったのに、わたしの部屋にはわたしの名前だけし

か書いていなかった。

「もしかして、一人部屋なのかな……」

部屋には生活感が全くない。本棚や机の上に教科書が置いてあったり、洋服箆笥には服が入っているんだけど、ゴミ箱は空だ。よくわからない。

いずれにせよ、一人部屋ならそれはそれで嬉しかった。一緒に暮らすルームメイトに気を遣うのは、けっこう疲れるのだ。

「これからわたしの新しい学校生活が始まるんだ……!」

彩陽とは仲良くなったし、紗耶香はよくわからないけど、まあ、友達は出来た。いい滑り出だ。

今思うと、そんな風に思っていたのがばかばかしい。

気が付くと、わたしは自分の部屋のベッドで眠っていた。

たしか、自分の荷物を開いて、洋服を箆笥にしまったりしていたら、疲れてしまって、一休みしようとベッドに飛び込んだのだ。

「痛いっ」

ベッドから起き上がった時、何の前触れもなく、股間に激痛が走った。

体験したことのない痛み。まるで体の内側を擦られたような痛みだった。慌てて自分の股をスカートの上から目で確認したけど、なんともない。何かと思って、制服のスカートの上から触ってみたけど、腫れたりはしていない。

「な、なんなのよ……」

わけがわからないでいると、ドアをコンコンと叩く音が聞こえた。はい、と言って出ると、紗耶香と彩陽が訪ねてきてくれていた。

「二人とも、来てくれたの？ はいってはいって」

「さっきは申し訳ありませんでしたわ」

「え？」

おかしかった紗耶香の様子が、普通に帰っていた。のぼせたみたいに上気していた頬は普通に帰っていて、ねつとりと絡みつくようだった視線も、ごく普通に帰っている。わたしが部屋で寝ていた短時間で何があったのかと気になった。

「これがおかしくなっていないときの紗耶香だよ、友梨佳」

「そうなんだ……うん、普通に帰ってよかった」

「はしたないところをお見せしましたわ。お詫びに、ダージリンを持ってきましたの。ぜひ一緒に飲みませんか？」

「わあ、ありがとう！ なんだか高級な香りがする!」

「わたくしのお母さまが送ってくれましたの。余分にあるから、もらってちょうだい」

そんなわけで、丸い机に三人で膝を寄せ合って座り、紅茶を頂いた。普通の時の紗耶香は

本当に礼儀正しくおしとやかで、さっきまでの彼女が嘘のようだ。

「もし二人でいるときに紗耶香がおかしくなったら、保健室に連れて行ってあげて。保健室の凜先生が、なんとかしてくれるから」

「お願いいたしますわ」

「ふーん、わかった。任せておいて」

何かの病気なんだろうか、と気の毒に思ったけど、翌日、その病気がわたしに降りかかるだなんて、わたしは思ってもいなかった。

次の日、ごく普通に午前の授業が終わり、お昼休みに紗耶香と一緒にお昼ご飯を食べようということになった。

彩陽は用事があるらしく、どこかに行ってしまったから、紗耶香と二人きりで購買部に向かった。

「痛いっ！」

向かう途中の廊下で、また股間に昨日と同じ激痛が走って、わたしはふらついた。紗耶香が支えてくれて、助かった。

「大丈夫ですの……？」

「ごめん、なんでもないの」

まともな時の紗耶香は本当に優しく、購買部でお昼ご飯を買っている最中も心配してくれた。しかし、その辺りから、段々と様子がおかしくなり始めた。

「友梨佳……」 転ばないように、手をつなぎませんこと……」

頬を染めて、はあ、はあと吐息しながら言われて、気持ちが悪かったけど、転ばないためならと思つて、手をつないで歩いた。紗耶香は嬉しそうにわたしの手を握って、例のねつとりとした視線でわたしの体を舐めるように見る。

「友梨佳の手、柔らかい……」

「う、うん……ありがと」

「友梨佳は、胸も大きいですわよね……あの、その……」

わたしの胸を凝視して、どう考えても異様なことを言い出したので、わたしは彩陽に言われた通り、紗耶香を保健室に連れていくことにした。

「凜先生のところに……？ いやだわ、お恥ずかしい……」

なんだか前かがみになって、歩きにくそうにしている紗耶香を連れて行くのには時間がかかった。さっきまでわたしを支えてくれたまともな紗耶香に早く戻ってほしい。

保健室につくと、白衣を着た、綺麗なお姉さんが出迎えてくれた。柔らかい物腰と、ほんのり漂う色気。大人のお姉さんという感じ。

「あら」 紗耶香ちゃん、またおかしくなっちゃったのね。あなたは？ 初めてお会いしたかしら」

「友梨佳です。この間、転校してきました」

「ふうん、そういうこと。ということは、紗耶香がなんていう病気か、ご存じないのね」

椅子に座った紗耶香は、甘えるような目で、凜先生を見ている。なんだか手なづけられた犬みたいだ。

「凜せんせい……◆ また、お世話になりますわ……◆」

「お友達の前だけど、いいのかしら？ この子はこの学園に来たばかりで、何も知らないと思うのだけど」

「構いせんわ……◆ はやく、はやくしてください……？」

「もう、紗耶香さんは本当にだらしないわね」

そういつて、凜先生は机から何かを取り出した。数センチ四方の、プラスチックの包装。その中には、透明なピンク色の丸いゴムが入っていた。

高校二年生のわたしはそれが何か、知っていた。コンドームだ。訳が分からなくて、ひたすら困惑した。

「紗耶香さんはね、〈ふたなり〉っていう病気なのよ」

凜先生の言葉も意味不明だったし、そのあと、紗耶香がした行為も理解不能だった。スカートの下に手を入れて、急に下着を脱ぎだしたのだ。かと思うと、スカートをまくりあげて……そこにあったものを見て、戦慄した。

太くて、血管の浮き上がったちんぽ。ガチガチに固くなって、ヒクヒク震える男性器が、紗耶香の股間に生えていた。

スカートをめくりあげ、下着をおろし、ちんぽを露出した紗耶香の姿を見て、わたしは目を見張っていた。あまり見たくないもののはずなのに、目を離せない。異様に、視線を釘付けにされていた。

「先生……◆ お願いしますわ……◆」

紗耶香はちんぽを突き出し、待ちきれないという表情ではあ、はあ、と息を荒げている。お嬢様然とした気品ある美しさをもった、ハーフ美少女の紗耶香が、こんなことをしていることに衝撃を受けた。

「しよがないんだから。すぐ、ゴムつけてあげるから◆」

保健室の凜先生は、椅子に座ったまま紗耶香に向き合って、コンドームをちんぽの先端につける。そのまま、コロコロと慣れた手つきで優しく装着していくと、紗耶香はびくびく震えた。

「あんっ◆ 先生の手が触れるだけで、感じちゃいますう……◆ はああ◆」

紗耶香のちんぽは、先生が触るたびに、ヒクヒクと震えている。ますます太く勃起して、ぱんぱんに膨れ上がっている。

凜先生がコンドームの上からちんぽを優しく握り、しごき始めると、紗耶香は蕩けた表情で嬌声をあげた。

「お、おほおっ◆ 気持ちいいですわっ◆ んああっ◆ 先生、シコシコするの、たまりませんわっ◆」

「もう、紗耶香ちゃんは見かけによらずだらしがないんだから……もっと静かに、声を我慢で

きないのかしら」

「こんなの、我慢できるはずありませんっ♥ んひいっ♥ た、たまりませんわっ♥」

「情けないわねえ……友梨佳さん、こんなところ見ちゃって、大丈夫？」

紗耶香の乱れ具合に正直ドン引きしているところに凜先生に話しかけられて、言葉すら出てこなかった。ひたすら、目の前で繰り広げられていることに圧倒されていた。

凜先生は、紗耶香のちんぽをシコシコとしごき続けている。根元からカリ首までをしつかり握り、優しく上下に撫でさすっている。カチカチに固くなったちんぽの先端から我慢汁を垂らしながら、紗耶香はひたすら快感に打ち震えていた。

「あっ、そこおっ♥ カリのところ責めないでください♥ んほおっ♥ こんなに気持ちいいこと、他にありませんわあっ♥」

高貴な雰囲気醸し出していた紗耶香がここまで墮落した姿を見せるだなんて、どれだけ気持ちいいんだろうと、少し気になってしまった。あんな風に手でしてもらうだけで喘ぎ狂うだなんて……想像すると、なんだか体の奥がじいんとしてくる。

「せ、先生い♥ もうそろそろ、ダメですっ♥ 奥から、精液込み上げてきますっ♥ あっ、あ♥ あっ♥」

「あら、そろそろかしら？ 我慢しないで、存分に出してしまいなさい」

「わ、わかりましたあ♥ いっぱい、いっぱい出しますっ♥」

紗耶香はゆがんだ口元から涎を垂らしながら、うわ言のように呟く。紗耶香の細い足に力が入っている。どうやら、絶頂に近いみたいだった。固唾を飲んで、その瞬間を見守る。

「んひいっ♥ イキますっ♥ イキますわあっ♥ 凜先生の手コキで、精子、びゅるびゅる出てしまいますわあ♥ ——んぎいっ」

びゅくっ！ びゅるるっ！ びゅるるるうっ！！

コンドームの中で、紗耶香のちんぽが猛り狂って、白濁液を噴き出した。大量の精液がコンドームの先端にみるみる溜まって行って、ようやく射精が終わる。

凜先生が握るちんぽは、まだヒクヒクと蠢いていたが、段々と小さく萎んでいった。

「……っはあ、はあ♥ わたくしのちんぽ、いっぱい射精して喜んでますわ……」

紗耶香はそのままぐったりと壁に寄りかかり、余韻に浸って熱い吐息を漏らしている。衝撃的な一部始終だった。思わず見入ってしまったって、最後まで見届けてしまったけど、これから紗耶香とどういう風に接すればいいんだろう、と考えると先が思いやられた。

凜先生は、使用済みのコンドームを紗耶香のちんぽから外し、コンドームを目の高さに挙げて、そこに溜まった精液を観察している。

「今日も健康そのものみたいね。よかったわ♥」

そして、その精液を試験管にトロトロと移し、机の上に立てた。

よく見ると、保健室の机には同様に白濁液が入った試験管が、いくつも置かれていた。まさか、あれは全て女子生徒から採取した精液なんだろうか……？ もしかして、紗耶香の他にも同じようなちんぽが生えた女の子がたくさんいる……？

そう考えていた時だった。急に、股間を例の激痛が襲った。昨日から経験していた断続的な痛み。今回は、これまで経験した痛みより遥かに強烈で、耐え難い痛みだった。

「痛っ！！！」

思わず叫んで、その場にうずくまる。大丈夫？　と凜先生が駆け付けけるのを、朦朧とする意識の中で見た。視界がぼんやりと薄らぐ中で、わたしは痛みの走る部分を手で押さえていたのだけど、そこに何か違和感があった。何か、突起物が手のひらに当たる気がするのだ。

それが何か判別する前に、あまりの痛みでわたしは気を失った。

目が覚めると、保健室のベッドの上だった。白いカーテンがわたしを隠すように四方を取り囲んでいる。

がばり、と慌てて起き上がって、自分に何が起こったのか思い出そうとした。保健室の凜先生にちんぽをしがれる紗耶香。そのあと、わたしは……。

記憶が鮮明になった。そう、股間の痛み。何か突起物が触れた。嫌な予感。わたしはこわごとと、自分の股間に、スカートの上から手のひらを乗せた。

もにゆり。何か、柔らかいものが、ついていた。

形を確かめると、棒のようなものと、その下に玉のようなものが二つ。

頭が真っ白になった。これは、一体どういうことなんだろう……？

「おはよう、友梨佳。やっと目が覚めたね」

カーテンがさっと引かれて、向こう側から現れたのは……彩陽だった。わたしは慌てて、思わず股間を両手で押さえていた。それを見て、彩陽がくすりと笑った。

「大丈夫、何があったのかは、凜先生から聞いてるよ。まさか、友梨佳も、紗耶香みたいになっちゃうとはね」

「ど、どういうことなの？　わたしの体に何が起こったか、知ってるの？」

「ふふん、それはもう、自分でもわかってるんじゃない？　認めたくないだけで」

そんな……。わたしは、もう一度自分の股間を触る。さっきのは何かの勘違いで、そこに何もないことを祈りながら。

やっぱり、棒と、玉がふたつ、ついている。わたしの手を感じ取っている。そして、その棒と玉も、わたしの手の感触を感じ取っていた。これは、わたしの体の一部なのだ。

頭が真っ白になった。わたしは、本当に……紗耶香みたいに、なってしまったのだろうか？

「一体、これは、な、なんなの……っ！」

「友梨佳は、〈ふたなり〉になっちゃったんだよ。女の子なのに、おちんぽが生えている、〈ふたなり〉にね」

初めて聞く言葉だった。わけがわからないでいると、ふいに、彩陽がベッドの上にあがってきて、わたしの正面に顔を寄せた。目を伏せながら、なぜか、自分の制服のブレザーを、

脱いでしまった。

「そこでね……凜先生に頼まれたんだけど、いいかな……友梨佳」

「な、なに……？ どうしてワイシャツのボタン、外してるの……？」

「あなたのちんぽを、精通させてあげて欲しい、って頼まれたの。だから、ね……」

彩陽が、ワイシャツのボタンを外し終わり、ピンク色の可愛いブラジャーに覆われた、柔らかな膨らみが目に入った。

その瞬間、どくん、と自分の中で何かが脈打った。頭が、かぁと熱くなる。目が、その谷間に釘付けになっていた。ねつとりと、舐め回すようにその胸を見てしまう。以前、わたし自身に向けられていた視線を、彩陽に向けてしまう。

「んふ♥ 友梨佳ったら、鼻の下が伸びてる。コウフンしてきちゃったのかな？」

彩陽はそして、後ろ手にホックを外し、ブラジャーをシャツに落とした。

まるやかな曲線で彩られた、おっぱいが、わたしの目の前にあった。先端で、かわいらしいピンク色の乳首が、びくんと上向いて立っている。

わたしは、生唾をぐくりと飲んで、頬が熱くなるのを感じた。そして、体験したことのない感覚が襲った。

下半身に——わたしに生えてきた、ちんぽに血液が集まって行って、ちんぽが、固くなり始める。大きく膨らんで、カチカチに勃起してしまった。

戸惑っていたけど、それ以上に、頭の中が目の前のおっぱいを触りたいという欲求で埋め尽くされた。

「ねえ、触りたいんですよ。いいよ♥ ほら、揉んでみて♥」

手をつかまれて、導かれるままに彩陽の胸に触れた。ふにょん、と効果音が出そうなほど、柔らかくて、弾力がある。思わず、夢中になって揉みしだいてしまう。

「柔らかい……♥ 彩陽のおっぱい、柔らかいよお……♥」

「でしょ？ さて、そろそろこっちのほうも、準備が出来てきたかなあ？」

「あひいつつ♥」

股間に、感じたことのない感覚が電撃のように走った。彩陽が、わたしのスカートをめくりあげ、勃起して下着からはみ出したちんぽに、指で触れていた。

指が絡まって、しゅこしゅここと、ちんぽの皮を上下に動かし始める。すると、震えるような何かが、こみ上げてくる。

「なに、この感じ……？ あ、あゝんっ♥」

「たっぷり射精して、楽になろうね、友梨佳♥」

につこりと淫靡に微笑む彩陽の手で、わたしは喘ぎ始めてしまっていた。

これまで感じたことのない感覚。しごかれるたびに、ちんぽが力を増して固くなって、昂っていく。

「や、やあっ♥ なに、これえっ……♥ あ、ああっ！」

わけもわからず、その感覚に翻弄される。バチバチと、電撃が走るような感じだった。

次第に、その感覚の正体がわかってくる。くすぐったいような、気持ちがいいような……それはクリトリスでオナニーするときの快感に、よく似ていた。

シコシコとわたしのちんぽをしごきながら、彩陽は淫らに笑みを浮かべている。

「うふふ♥ そんなに可愛い喘ぎ声あげちゃって……♥ これがそんなにいいの？」

彩陽は、親指と人差し指でリングを作って、ちんぽのカリ首のところをきゅっと締め上げる。皮の上から上下に動かされると、たまらない快感が押し寄せた。

「あああっ♥ そこ、だめえっ♥ そこ、ちんぽ、ひもちいいいっ♥」

「呂律が回ってないよ、友梨佳。大丈夫？ まだまだ、気持ちいいのはこれからだよ♥」

彩陽はいったん、しごく手を止めた。いつのまにか汗だくになっていたわたしは、やっと一息つくことができた。

改めて、ブラジャーを外し、前を開いた姿の彩陽を見る。以前まで、体育の前に女の子のあられない姿を見ても、なんとも思ったことはなかった。でも今は違う。食い入るように見入ってしまった。柔らかそうなおっぱいや、その先っぽでピンク色に咲いている乳首から、目を離すことができない。

彩陽は、ぺろりと舌を出した。唾液でテラテラと光る舌。さらに、その唇の前でさつきしたように親指と人差し指でリングを作り、上下に動かして見せた。その仕草にも、途方もない魅力を感じてしまっていた。

「わたしの舌で、イかせてあげるね♥ たっぷり、出していいから♥」

「出す……？ それって……？」

「何言ってるの？ ちんぽで、〈出す〉って言ったら、あれじゃないじゃん♥」

彩陽はぺろりと自分の唇を舐めて、わたしのちんぽにふうっと息を吹きかけた。

「ひゃんっ♥ な、なに……もしかして？」

「決まってるじゃん♥ しやぶってあげるって、言ってるの♥」

わたしは喜ぶというより、ちよっとした恐ろしさを先に感じていた。

ちよっとしごかれただけであんなに気持ちが悪かったのに、そんなことをされたらどうなっちゃうんだろう？ 想像すると、背中に鳥肌が立った。

「そ、そんな、しやぶるって……！」

「安心して。実は昨日、紗耶香のちんぽも、おクチでヌイてあげたんだよ♥ わたしにしゃぶられるの、大好きなんだから」

「紗耶香が……？ っていうことは、あの時、様子がおかしかった紗耶香が、元に戻ったのは……」

「そういうこと。それじゃあ、わたしのおクチ、楽しんでね♥ あったかくて、ヌルヌルで、気持ちいいって、紗耶香は言ってたよ。あむっ」

「ちよ、ちよっと待って——んひいっ♥」

心の準備が出来る前に、彩陽はわたしのちんぽをばくりと咥え込んだ。

彩陽が言った通り、生温かい、人肌の温度の粘膜が、ちんぽを包み込んでいた。トロトロ

の唾液が、たっぷりとまとわりついてくる。正真正銘、初めて感じる感触だった。

気持ちがよすぎて、さつきよりひときわ甲高い声をあげていた。ちんぽから頭のとっぺんまで、強烈な快感の電流が走り抜ける。頭が真っ白になりそうで、ほとんど何も考えられない。こんなに気持ちいいことがこの世にあるなんて、知らなかった。

「んあ、ああっ！こ、これ、気持ちいいいっ」ちんぽしゃぶられて、気持ちよくなってる」

「んふ……」ひやつぷり、たのひんでね」んじゆるっ……」ちゅぱっ、じゆるる……」
「ひいっ」そんなに吸ったらあ」気持ち良すぎて、おかしくなるうっ」こ、こんなの、らめえっ」

「じゆるうう……」ぐぼっ」んぐううう……」

彩陽は、涎を垂らしながら、わたしのちんぽを夢中になつてしゃぶり続けている。ピンク色の舌がちんぽを這いまわって、ちゆるちゆると吸引される。どうやら、相当ちんぽをしゃぶるのに慣れているみたいだった。比べるものを知らないからわからないけど、相当上手だと思った。

剥き出しの亀頭を舌がくすぐるたびに、何か熱いものが奥から込み上げてくるのが分かった。タマタマがうねうねとうごめいて、狂おしい感覚が押し寄せる。

「あっ、ダメえ」ちんぽから、なんか出るうっ」もらしちゃうう」んああっ——ぐうっ」

どびゆるっ」びゆるるるっ」ぴゅっぴゅっ」

頭が今度こそ真っ白になって、何もかも自分の中から出ていくような気がした。全身に快感が駆け回っていた。

彩陽が咥えた肉棒がビクビク震えながら、液体をびゆるびゆると出していた。その唇の端から、白濁した液体が、とろりとこぼれた。彩陽はちんぽを口から出した後に、べえ、と舌を出した。

「ん……」んぐう……」んはあ」わたしのおクチで、精液、いっぱい出しちゃったね」その舌の先から、たっぷりと白いねばねばした液体が、流れ落ちる。その光景がわたしの目にはたまらなくいやらしく見えた。ちんぽが、びくりと反応した。

「せ、精液……？わたしが、出した……？」

「初めての射精、おめでとう」精通ってやつだね。ふふ、気持ちよかったでしょ？へふたなり」になった子はみんな、一旦射精の気持ちよさを知ると、やめられなくなっちゃうって聞くよ？」

「うん……」すっごくよかった……」

わたしは余韻に浸りながら、机に置かれた鏡にうつすらと映った自分の顔を見た。とろけきって、だらしなく歪んだ表情。こんな自分を見たのは初めてだった。

不思議と嫌悪感は湧いてこなかった。こんなにも気持ちよくなれることが嬉しい気持ちのほうが大きかった。もっとしたくて、仕方ない。

彩陽は、ハンカチで口元を拭いながら、にっこりと笑った。

「わたしも、友梨佳のちんぼ、紗耶香のと同じくらい、おいしかったよ」

「彩陽……紗耶香とは、普段からそういうことしてるの？」

「ううん、ちがうの。わたし、おしゃぶりが上手で……」 紗耶香だけじゃなくて、他の「ふたなり」の子にも、褒めてもらってるよ」

「つていうことは……？」

「この学園の「ふたなり」の子は全員、しゃぶってあげたと思うよ」 みんな気持ちよくてたまらなそうにしてた。最近は何日、誰かのちんぼをしゃぶってあげてるかなあ。友梨佳も、してほしい？」

「い、いいの……？ それなら……」

「でも、ずいぶん先まで予約が埋まっちゃってるし、どうしよっかなあ……ふふっ」

悪戯っぽい笑みを浮かべられて、わたしは必死になってしまった。

もう一度、ちんぼをしゃぶって欲しい。その強烈な思いが湧き上がってきて、恥ずかしいだなんて思っている暇もなかった。それほどちんぼの快感に夢中になり始めていた。

「そんなに欲しいんだ……でもしばらくお預け、かな？」

「な、なんで……？ わたしも、してほしい……」 もつといっぱい、ちんぼしゃぶってほしい……」

「さっきまでちんぼが生えてきたのに戸惑ってたのに、もうちんぼ快楽の虜だね」 かわいそうに……。本当に我慢できなくなったら、保健室の凜先生に頼めばいいと思うよ」

そう言ったところに、ちょうど、カーテンが開かれて、凜先生が顔を出した。

白衣を着た、綺麗なお姉さん。あらためて観察すると、豊かな胸は、揉んだら柔らかさそうだ。彩陽の触った時のことを思い出して、その揉み心地を想像してしまう。そのくらいには、わたしの心は薄汚れ始めていた。

「あら、終わったところかしら？ 友梨佳さん、初めて射精させてもらって、気持ちよかったです？」

「すっごく、よかったです、先生……」

「大人気の彩陽ちゃんにしてもらえるだなんて、よかったわね。でも今度から、もし我慢できなくなったら先生のところにもいらっしゃい。たっぷりヌキヌキしてあげるから」

「わかりました、先生……」

にっこりと微笑む巨乳の凜先生に見惚れながら、わたしは上の空で答えていた。

凜先生で精液を出したい……そんな欲求で、はやくも頭がいっぱいになり始めていた。でも、出したばかりなせいかな、まだちんぼはそれほど疼いてはいなかった。

……まだこの時は。

紗耶香の様子から、察することが出来てもよかった。「ふたなり」になった弊害を、わたしは思い知ることになった。

〈友梨佳 二章〉

異変が起きたのは、翌朝のことだった。

「な、なにこれ……!」

目が覚めた時に、股間に違和感を感じて、てのひらで触ってみた。すると、すっかり固くなったちんぽが、刺激を求めるかのようにヒクヒクと震えていた。

パジャマ姿のわたしは飛び起きて、姿見の前に立つ。パジャマのズボンの前が、大きくせり出してテントを張っていた。それも、昨日と比べるとどう見ても、おかしかった。

「な、なんで、こんなに大きくなっちゃってるの……?」

勃起した状態のちんぽが、昨日より一回り大きくなっていた。

昨日、保健室で彩陽に又いてもらった後、しばらくちんぽはおとなしくなっていた。寮へ戻っても勃起することはない。他の可愛い女の子に発情しても、欲求を自制できていた。わたしはちよつと安心して、その日は誰にもちんぽを見られないように、部屋に備え付けのシャワーで済まして、眠りについた。

その結果、朝にはこんなことになっていた。ズボンを膝のあたりまでおろして、そり立つちんぽを外に出すと、ますますカチコチに固くなって、勃起が収まる気配がない。

わたしは姿見に移った自分のみつともない姿が情けなくて、ちよつとげんなりしたけど、それより湧き上がってくる強烈な感情があった。

「はあ……! オナニー、してみよっかな……!」

昨日、彩陽にしごいてもらったり、しゃぶってもらったりした時の快感が忘れられなかった。もう一度あの快感を味わいたい。その気持ちがどんどん大きくなって、わたしはちんぽに指で触れた。

自分でちんぽをしごくだなんてみつともないという気持ちもあったけど、しごき始めるとそんな気持ちは一気に掻き消えた。

「あつ! これ、気持ちいい……! どうしよう、止まなくなっちゃいそう……!」

ちんぽのカリ首から、根元にかけてを片手で握って、皮の上から上下に動かす。シコシコと上下運動を繰り返していると、夢のような快感が、押し寄せてくる。

わたしは姿見の前に立ったまま、ちんぽをしごく手を止められなかった。

ひざをちよつと曲げて、腰を突き出すような変なポーズになりながら、甘い吐息を漏らす。

「んああつ! どうしよう、これえ! ちんぽ、シコシコするの、たまんないっ!」

勝手にしごくスピードが上がっていき、わたしはオナニーにのめりこんでいった。普段、オナニーをすることはあっても、こんなに夢中になることはなかった。我慢汁がダラダラ鈴口から垂れて、手のひらにこびりついていたけど、そんなことは気にならなかった。

「ふう! ふうっ! ダメえ! こんなことばかりしてちゃ、ダメなのにい! しごくの止

まんない♥ はああ♥」

姿見に映る、ちんぽを懸命にしごいてオナニーにふける自分の姿は女の子として色々と終わっていたけど、どうしようもなかった。表情はすっかり快楽に浸って、とろけきっているし、口の端から涎が垂れそうになっている。腰を小刻みに振って、少しでも刺激を増やそうと躍起になっていた。

「あっ♥ でるう♥ 精液びゆるびゆるしちゃうっ♥ ——うぐうっ♥」

びゆるっ♥ びゅっびゅっ♥

勢いよく、白濁液が噴き出して、姿見にこびりついた。射精は何度も続いて、そのたびに、姿見が汚れていく。

終わったところには、いくつもの白い筋が鏡の表面をタラタラと垂れていた。

一通り精液を出して、ようやくしごく手の動きが落ち着いて、わたしはその場でへたり込んだ。萎び始めたちんぽは、まだヒクヒクとうごめいている。

「気持ちよかったあ……♥」

わたしは、毎朝、こうなつちやうのは面倒だな、と思いながらも、得られる快感がたまらなくて、このままでもいいかな、と思い始めていた。

しかし、異変はこれだけに留まらなかった。

制服を着て寮を出て、待ち合わせした彩陽と合流した。彼女の姿を見て、ふいにちんぽが反応した。

可愛らしい彩陽の顔を見ると、汚してやりたくなった。昨日の記憶——しゃぶってもらって、その口にしたっぶり射精した。あれをまたやりたいという欲求が急に大きくなって、ちんぽが大きくなり始める。

「どうしたの、そんな風にわたしのこと、見つめて。もしかして、朝から発情しちゃってる？ ふふ♥」

「ち、違うよ……そんなんじゃないって」

「本当？ 紗耶香は（ふたなり）になった次の日は大変だったよ？ いつでもどこでも発情して、ちんぽをしごいてって、頼み込んできて。何回出せるのってくらい、射精してたよ」

「わ、わたしは……そこまで節操くないよ」

そう言いつつも、スカートの下で、ちんぽが勃起し始めるのを感じていた。さっきオナニーで出したばかりなのに、もう勃起するなんて。昨日までみつともない紗耶香をバカにしていたけど、謝らなくちゃいけないかもしれないなかった。

こんなにも射精したくてたまらないとは思わなかった。体が熱くなって、息が荒くなってくる。きつと今のわたしは紗耶香みたいに、頬を染めて発情しているに違いなかった。

ちよっと前かがみになりながら歩いていると、彩陽にくすぐす笑われた。

「素直に言えばいいのに♥ 可愛いなあ……射精したいの？」

「で、でも……ホームルーム遅れちゃうし」

「そっかあ、それなら残念。しばらく我慢だね、頑張れ♥ わたしはお昼休みは別のふたな

りの子と約束があるから、保健室で凧先生に頼んでくるといいんじゃない？」

わたしは結局彩陽にヌいてもらわずに、教室で授業を受けた。

一限から二限まで、ずっと上の空だった。勃起したちんぽが疼いて、先生の話も頭に入っていないし、何も手につかなかった。ヒクヒク震えるちんぽは一向に小さくなる様子はなくて、ずっと勃起しっぱなしだった。

隣の席の紗耶香にもわたしの様子がおかしいことに気付かれたようで、心配そうに声をかけてきた。

「あの……友梨佳さん、具合が悪いのではなくて……？」

「紗耶香、ありがとう……はぁ」

きっと発情してとろんとした顔をしているだろうから、紗耶香に見られたくなくて、そっぽを向いていると、申し訳なさそうに声をかけられた。

「昨日保健室で、わたしがふたなりつてこと、ご存知になったと思うけれど……わたしのこと、もうお嫌いになってしまったのかしら……？」 気持ちが悪いもの、当然ですわ……」

「そ、そんなことないよ！ 実はね……」

わたしは、 TENT を張っているスカートを、紗耶香に見せた。目を丸くされたけど、どこか嬉しそうな表情でもあった。

「まあ！ 友梨佳さんも、ふたなりになってしまったのね！ でも、よかったですわ……これで、悩みを共有できますわね」

「紗耶香……さっきから、勃起が止まらなくて……はぁ」 紗耶香もこういう日、あるよね？」

「もちろんですわ。ちんぽがどうしても言うことを聞かない日は、一旦射精しないとどうしようもないんですの」

「そうだよ。そろそろ昼休みだし、保健室の凧先生に頼んでくる……」

「それがいいですわ！ 凧先生は色んな生徒たちの相手をしているから、気持ちよく出させてくれますわよ。そうですわ、わたしも最近初めてシてもらったのですけれど、凧先生は頼むと、手以外でもヌいてくれますのよ」

「そうなの？ わかった、ちょっと頼んでみるね！ ありがとう……」

紗耶香は別の用事があるみたいなので、わたしは一人で保健室に向かった。その最中も、廊下を歩いている女の子たちに襲い掛かりそうになったけど、なんとかこらえた。朝オナニして以来、ずっと我慢しているから、どうにかかなりそうだった。保健室に入ると、凧先生が笑顔で出迎えてくれた。

「あら、友梨佳ちゃん。どうしたの？」

白衣が似合う美人の先生。胸が大きくて、揉みたいという気持ちでいっぱいになった。凧先生に向かい合って丸椅子に座ると、スカートを押し上げてちんぽが勃起しているのが、凧先生にも見て取れた。

「やっぱ、そういうことね。ふたなりになったばかりの頃は、ちんぽが疼いてしょうがな

いつて、他の生徒からも聞いてるわ」

「お願いします……ずっと朝から、我慢してて」

「しょうがないわね、シコシコしてあげる。ちんぽを出しなさい♥」

凜先生の前で、ちんぽを出すのは顔から火が出そうなくらい恥ずかしかったけど、しごいてもらいたい気持ちのほうが大きかった。

スカートをめくりあげて、下着からはみ出たちんぽを見せる。ヒクヒクと震え、がちがちに勃起して、我慢汁が先から垂れている。

「こんなになるまで放っておいて……体に悪いわよ？ それじゃあ、ゴムつけるわね♥」

「あの……先生っ、紗耶香から聞いたんですけど、手以外でも、又いてくれるって本当ですか？」

「紗耶香ったら、あまり広めないように言ったのに。一部の仲のいい子にだけ、特別に気持ちよくしてあげてるの。でも、友梨佳さんも、してあげてもいいわよ♥」

「あ、ありがとうございます……ええっと、それじゃあ……」

「わたしのおっぱい、大きいと思わない？ これを役に立てたくって、これでへふたなりの子を癒してあげてるの♥」

「ってことは……」

「ばいズリって、言うのよ♥ おっぱいでちんぽを挟んで、気持ちよくしてあげるの」

凜先生は、白衣の袖から手を抜いて、はらりと肩から床に落とした。

その姿にわたしは見惚れていた。色気のある綺麗な凜先生が、目の前で脱いでくれているのだから、興奮しないはずがなかった。

シャツのボタンを外し、前を開く。ブラジャーに包まれた凜先生のおっぱいをこうしてみると、大きいのはつきりわかった。Gカップくらいありそうだ。

「わたしのおっぱい、たっぷり楽しんでね♥ うふふ♥」

凜先生がブラジャーをずらすと、豊かな膨らみの先端で、大きめの乳首がぷつくりと膨らんでいた。

少し体を揺らすだけで、たゆたゆと揺れる巨乳。大き目の乳首は、吸い付いてほしいと言わんばかり。

これから、ばいズリをしてくれると言われて、ちんぽはバキバキに勃起していた。血管が浮き上がって、元気そのものだ。

「ごめんなさい、精液を採取するから、ゴムはつけさせてね♥」

凜先生は優しく微笑んで、コンドームの封を開けた。紗耶香にもしたように、ちんぽにつけてもらえるのかと思ったら、驚くことに、凜先生はそれを口に含んだ。

「おくちでつけてもらうのは、初めて？ うふ♥」

凜先生はそっと前屈みになって、わたしのちんぽに口を近づける。指でちんぽの根元を支えてもらうだけで、ビリビリと電気が走るような快感があった。唇が触れて、温かい凜先生の口の中に、ちんぽが飲み込まれていく。

「あ、あはぁっ♥ 凜先生に、ちんぼ、啜えられてるぅ♥」

凜先生がわたしの股間に顔を埋めている。どうしようもなく興奮して、ちんぼがますます固くなった。口でされただけで気持ちよくて、体がこわばった。

ぺろり、とちんぼを舌が舐めまわして、たっぷりと唾液をまぶされた。

涎の糸をひかせながら、凜先生がちんぼから口を離してにっこりと笑った。

「はい、ちゃんとゴムつけられたわね♥ ここからが本番だからね♥」

凜先生は、わたしの手を取って、おっぱいに触らせてくれた。わたしもおっぱいはそこそこあるけど、それよりもずっと大きくて、柔らかいおっぱい。友達同士でふざけて触ったことはあったけど、こんな風に魅力を感じたことはこれまでなかった。

興奮して、頭がくらくらしてくる。思わず、欲望をそのまま言葉にしていた。

「どう、柔らかい……？ うふ♥ ちんぼがビクビクしてる。興奮してるのね♥」

「すごいです……♥ あの、乳首、吸ってもいいですか……♥」

「あら、いいわよ♥ ほら、ちゅーって吸ってみなさい♥」

凜先生はおっぱいを手で支えて、吸いやすいように身を乗り出してくれた。わたしは、夢中になってその大きな乳首を吸った。こんなに幸せな時はないんじゃないか、っていうくらい、満足していた。

「あんっ♥ そんなに強く吸っちゃダメよ♥ わたしまで気持ちよくなっちゃうじゃない♥」

「凜先生のおっぱい、おいしい……♥ じゅるるぅ♥」

「ほらほら、そのくらいにしておきなさい♥ そろそろ、友梨佳ちゃんのちんぼも刺激が待ち遠しくて仕方なさそうよ♥」

その通りで、おっぱいを吸っている間、ちんぼはビクビク震えて、はやく射精したくてたまらなそうだった。わたしは椅子から立ち上がって、反り立ったちんぼを凜先生の前に突き出した。

「お願いします♥ 凜先生♥ いっぱい射精させてください♥」

「こんなに勃起しちゃって……♥ いいわよ♥ 谷間にちんぼを挿れてみて♥」

「はい♥ んんぅ……♥」

わたしは、息を荒げながら、凜先生のたわなおっぱいの谷間に、ちんぼをぐっと突き入れた。先生は左右から、両手でおっぱいを挟んでくれる。

柔らかいおっぱいが、左右からびったりと押し付けられていた。思わず、甘い吐息を漏らしてしまうぐらい、気持ちがいい。先端から根元まで、先生のおっぱいで包まれて、卑猥な見た目だった。

「あぁっ♥ 凜先生っ♥ 気持ちいいですぅ♥ ちんぼが、先生のおっぱいで見えなくなっちゃってますぅ♥」

「ふふ、そんな可愛い顔で喘がないで♥ そんなにわたしのおっぱいの具合、いいのかしら♥」

凜先生は、手のひらでおっぱいをこねくり回して、わたしのちんぼをやさしく刺激してく

れた。むにゅむにゅと、形を変えるおっぱい。先生が、わたしを見上げてにっこりとほほ笑む。

「どうかしら◆ もつともつと、気持ちよくなってちょうだい◆」

「あはあ◆ 凜先生っ◆ わたし、そろそろイキそうです◆◆ ちんぽがビクビクして、我慢できないって言ってます◆」

「それじゃあ、たっぷり気持ちよくなって、たっぷり射精しちゃってね◆ ふふ◆」

先生は、ぎゅっとおっぱいを手のひらで押し付けて、刺激を強くした。

わたしは我慢できなくなって、いつのまにか腰を振っていた。男の子みたいにガシガシ振るような力はないから、へこへこと、ゆっくりな腰の振り方になってしまったけど、それでも気持ちがよくて、ますます射精の予感が高まった。すぐそこまで、こみあげてきているのが分かった。

「あああっ◆ あああーっ◆ 凜先生は、わたしイキます◆◆ びゆるびゆる精子、出しちゃいます◆◆ ———んんっ」

どびゅっ◆ びゆるびゆるっ◆ びゅーっ◆

朝からずつと溜めていた精液が、一気に迸った。気が遠くなりそうなほどの快感で目の前がチカチカした。全身がちんぽになっちゃったかのような快楽で、どうにかなりそうだった。射精が終わると、力が抜けて、その場でぐったりへたり込んでしまった。ちんぽはようやく萎びて、おとなしくなってくれた。

凜先生は、そのちんぽに装着されたコンドームを指でつまんで持ち上げる。その中にはたっぷりと白濁液が溜まっていた。

「すごい量……◆ こんなに出すなんて、相当我慢してたのね◆」

先生は、紗耶香の時と同じように、精液を試験管に移して、保管した。

一体、その精液は何に使うんだろう？ わたしは、疲労感でその場から立ち上がれないまま、ぼんやりとそう思ったけど、質問するほどのことでもないと思って、存分に余韻に浸った。

凜先生は、服を整え、再び白衣を着直しながら、にっこりと微笑んだ。

「また、射精したくなったらいらっしやい◆ いつでも待ってるわよ」

保健室で凜先生に射精を手伝ってもらって以来、わたしはあることばかり考えるようになっていた。

——もつと気持ちよくなる方法はないのかな？

ただ射精するだけでは物足りない。まだまだ上があるはず。最高の快感を得るためには、どうしたらいいんだろう、とわたしはぼんやりと夢想する。

最初は、彩陽にしごいてもらったり、舐めてもらうだけで天に昇るような心地を味わえた。その後自分でオナニーもしてみた。でも、やっぱり自分でするより、他の女の子にちんぽ

を刺激してもらった方が、気持ちよくなれる気がする。

凜先生のパイズリは、これまでで一番気持ちよかった。あのマシュマロみたいなGカップおっぱいで挟んでもらうのは、唯一無二の心地よさだった。

本当だったら、毎日のように凜先生のところに行ってパイズリしてもらいたいところなんだけど、一つ問題があった。

凜先生は学園中のふたなりの女の子を相手しているわけで、わたし一人のために時間を使ってくれるわけじゃない。この間、保健室に行った時も先客がいて、危うく気まずくなってしまうところだった。

「ん……くあぁっ♥ 凜先生い……♥」

「頑張れ、頑張れ♥ 詩織ちゃん」

少し開けた保健室の扉から、そんな先生と生徒のやりとりが聞こえてきた。覗いてみた感じだと、一年生の女生徒の相手をしてあげているらしかった。

また鉢合わせになっちゃうのも御免だから、わたしは出来るだけ他の相手を見つけないといけないな、と思っていた。凜先生と同じくらい気持ちよくしてくれる人は、他にいないだろうか？

「もっと、気持ちよくなりたい……♥」

「友梨佳さん、ぼおっとしてますけど、具合でも悪いのではなくて？」

「え……？」

隣の席の紗耶香が、心配そうにわたしのことを見つめていた。

金髪碧眼の、おとぎ話にでも登場しそうなお嬢様にして、ふたなりの紗耶香。今は欲求が収まっているようで、とくに挙動不審な様子はなくて、礼儀正しいお嬢様そのものだ。

「ちよっと、ムラムラしちゃってて……ちんぽが、勝手に勃起してきちゃって」

「それは大変ですね。凜先生のところに行ったほうがいいんじゃないかしら」

「ううん、いいの。凜先生じゃない人に、相手してほしくて……」

そういう会話をしていると、教室に入ってくる人影があった。

担任の美優先生に、わたしの知らない綺麗な女生徒が連れ立っている。

風にたなびく長い黒髪が、カチューシャで留められている——清楚な雰囲気、魅力的に映って、鮮烈なイメージが頭に残った。

その人は、わたしより一つ年上、三年生の先輩だろうか、なんとなく大人びた雰囲気を感じていた。

そして何より、思わずその胸に目が行ってしまう。Gカップの美優先生よりも、さらに大きいおっぱい。制服の前が、大きくせり出している。

すらっとした体型なのに、胸だけはボリューム満点なのだ。まさに理想的と言ってよかった。目が釘付けになってしまっているわたしに、首をかしげながら微笑を返してくれて、わたしは頬がかぁっと熱くなった。

美優先生が親しげに話しかけてくるのも、耳に入ってこない。

「あら、もう放課後なのに、二人で何しているの？　もう他の皆は帰っちゃったわよ」

「特に何も……お喋りしてただけです」

紗耶香は行儀よく会釈した後、わたしが見惚れっぱなしのグラマラスな先輩にごく普通に話しかけた。驚くことに、紗耶香とその人は、知り合いらしかった。

「そうですね、夏希先輩……確か、生徒会のメンバーはまだ募集していましたよね」

「ええ、しているわよ、紗耶香さん」

しつとりとした声でその先輩は答え、にっこりと微笑む。

夏希先輩。わたしはその名前を記憶に刻み込んだ。まだこの人と話したこともないのに、一目惚れしてしまっていた。

——夏希先輩とエッチしたい……◆

そんな思いが一気に湧き上がってきて、わたしはどうすればいいかわからなくなり、何も言葉が出てこなくなってしまう。

だが夏希先輩は、意外にも急にわたしの手を取って、嬉しそうに話しかけてきた。温かい手のひら——心拍数が一気に上がる。

「あっ……！　隣にいるあなた、友梨佳さん、よね？　話は聞いているわ。可愛い女の子が二年生に転校してきたって」

「そ、そんな、可愛いだなんて……はじめまして、友梨佳です」

「わたしは夏希。よろしくね◆」

「よろしくお願いしますっ。な、夏希先輩」

夏希先輩とこんなに仲良く話せている上に、可愛いと言ってもらえた。どうやら、夏希先輩は初対面にも関わらず、わたしのことを気に入ってくれているみたいだ。気分がよくなつて、股間がうずうずと勃起しそうになってしまふのを、必死に抑える。

「夏希先輩は、生徒会に入っているんですか？」

「うふ◆　そうね、転校してきたばかりなのよね。知らないのも仕方ないわ。わたしはこの学園の生徒会長なの」

初耳だった。この目の前にいる綺麗な先輩が、生徒会長だったなんて。

確かに、雰囲気は洗練されて華やかだし、受け答えなどがしつかりしていて、言われてみれば納得だった。

「す、すみませんっ、知らなくて」

「別に謝らなくてもいいの。そういうわけで……もし予定が空いていたら、今から生徒会に遊びに来てみない？　生徒会はいつでも可愛い女の子を募集中よ◆」

ぐい、と近づいてくる夏希先輩。息が当たるほどの距離。

意外にも積極的なお誘いに、ドキドキしてしまう。さっぱりしたシャンプーの匂いが漂い、わたしは勃起を止められなくなったちゃんぽを、さりげなくスカートの上から手で押さえた。そうしないと、スカートを押し上げて、ふたなりであることがバレてしまいそうだった。

「生徒会……生徒会ってどんな活動してるんですか？　わたし、あんまり知らなくて」
「最初は遊びに来るだけでいいわ。今日はお菓子を食べたりお茶をしたりしながら、ゆっくりお喋りをしようと思っていたところなの。ぜひ、来てみない？」

お茶するだけ……そう言われると気になってしまう。

生徒会と聞くと、仕事があつて大変そうなイメージがある。結局、どんな仕事をしているのかわからなかったけど、乗り気になってきてしまった。

夏希先輩は、紗耶香に尋ねた。

「紗耶香さん、約束していたお菓子は持ってきてくれたかしら？　紗耶香さんはいつも豪華なものを持ってきてくれるから、みんな楽しみにしているわ」

「もちろんですわ、とっておきのものを用意しましたの」

「あれ、紗耶香さんって、生徒会に入ってたの？」

「そうですわ。まだお話ししていませんでしたっけ？」

紗耶香はあら、と口に手を当てて自分でも驚いた様子だ。これまで用事がある、と言ってどこかに行ってしまった時は、きっと生徒会のお仕事があつたのだろう。

わたしの腕をつかんで、紗耶香はにっこりと微笑む。

「一緒に生徒会に来ませんか？　楽しいことは保証しますわ」

「そこまで言うんだったら……今日、試しに行ってみていいですか？」

「歓迎するわ。そろそろ始まる時間よ。友梨佳さん、早速行きましょう」

夏希先輩は、わたしの手のひらを引いて、にっこりと笑った。

わたしは温かいその手のひらの感触や笑顔にぼんやりとなつて、夏希先輩と紗耶香の後に、ついてしまった。

こういう風に可愛い女の子に誘われたら、断り切れそうにない。以前の自分だったら、相手が可愛いだけで誘いに乗るだなんてありえなかった。自分が変わってしまったことを認識しつつも、そのことが嫌になることはなかった。

生徒会室で、わたしたちは楽しい時間を過ごした。生徒会の役員の女の子たちは歓迎してくれて、わたしはすっかり入部する気になってしまった。

紗耶香が用意していたケーキは美味しくて、顧問の美優先生も優しくしてくれて、至れり尽くせりでどうしてこんなに優しくしてくれるんだろう、と思うくらいだった。

話に花が咲き、あつという間に時間は過ぎていった。先生や生徒の噂、見ているドラマの話……話の種は尽きない。

次第に会話は、生徒会の活動に移っていった。隣に座った夏希先輩が説明してくれた。

「この学園の生徒会は少し変わっていて……パティーの開催が主なお仕事なの。一部の生徒たちをこの教室に呼んで、楽しく遊ぶのよ」

「パティー……一体、どんなことをして遊ぶんですか？　ゲームとか？」

「それは見てのお楽しみ」

夏希先輩は、ふふと笑つて、机の下でわたしの太ももに手を乗せた。

ドキリとしてその表情を見返すが、夏希先輩はどうしたの、と言わんばかりに首をかしげて足をさわさわと撫でてきた。

どうしてこんなことをしてくれるんだろう、という思考はどこかに行ってしまったって、わたしは夏希先輩に見惚れながら、ちんぽをガチガチに勃起させてしまった。

あざとくて、いやらしい手つき。まるで、愛撫するのに慣れ切っているかのようだった。ちんぽがカチカチに勃起してスカートを押し上げているのを見られてしまった気がしたけど、夏希先輩は表情を変える様子はない。

「夏希先輩……？」

「今度のパーティーには、友梨佳さんも招待させて。来てくれるよね？」

「は、はい……♪」

わたしは気がついたら首を縦に振っていた。

「へえ、生徒会に入れてもらったんだ。よかったね」

「うん、そうなの……」

並んで廊下を歩き、何気ない会話をしながら、わたしは彩陽の横顔に見惚れていた。

今日は、ちんぽがやたら元気だった。さっきから、女の子を見ると興奮して仕方ないのだから、ちんぽが勃起したまま全然もとに戻らない。射精することしか考えられなくて、もうスカートを押し上げているのを隠す余裕すらない。

剥きだしになった亀頭が直にスカートの擦れて、痛痒いような妙な感覚だった。先端から我慢汁がにじみ出てスカートを汚しているのにも気付いたけど、どうでもよかった。とにかく、誰かにちんぽを刺激してもらって、精液を出したい。

「もしかして、夏希先輩に勧誘されたの？」

「そうだけど……」

「やっぱり、ね。そういうことかぁ……これからが楽しみなね♪」

「どういうこと？」

「ううん、なんでもない。そのパーティー、わたしも参加することになってるから、その日は一緒に楽しもうね♪」

彩陽はなんだか含みのある言い方をしていたけど、そんなことは後で考えればいい。一旦イかないと、頭がおかしくなりそうだった。

少し前かがみになりながら、彩陽を追いかけていると、くすくすと笑われた。

「もう……友梨佳、今わたしに興奮してるでしょ？」

「な、なんでわかったの……？」

「すっごくトロけた目でわたしのこと見てくるし、ほら、ちんぽが勃起してるのバレバレだよ」

「ひゃっ」

つんつん、とスカートの上からちんぽをつつかれて、わたしは股間を両手で押さえる。指の間から勃起したちんぽの形がはっきりわかった。

ちよつと触られるだけで甘ったるい声が出てしまう状態だった。ちんぽがヒクヒクして、もつと刺激を求めている。

「ねえ、紗耶香もさつきからずつと黙ってるけど、興奮してるんでしょ？　しゃぶって欲しいような目してるよ◆」

「そ、そんなことはありませんわ……わたしは……」

「さりげなくちんぽを押さえつけてるつもりかもしれないけど、勃起してるのわかってるからね」

「ご、ご存じなのだったら、その……どうにかしてくれませんか？◆」

紗耶香は、節操なく彩陽に言い寄っている。わたしも彩陽にまたフェラして欲しくてたまわなくて、彩陽の手を取って、頼み込んでしまう。

「わ、わたしも……何とかしてほしい……◆」

「しょうがないなあ、二人とも。わたしが特別に、気が済むまで気持ちよくしてあげるよ。この後、浴場に来て。まだ皆が来るには早い時間でしょ。裸の付き合い、してあげる◆」

〈友梨佳 三章〉

わたしは、下着や寝間着、バスタオルを持って、着替え室に予定していたより早く来てしまった。射精が待ち遠しくて仕方なかった。ちんぼはずっと勃起しっぱなしだ。

すぐに、紗耶香も着替え室にやってきた。待ち合わせの時間はまだまだなのに、紗耶香も我慢していらなかったのだろう。

「先に、着替えてしまいませんか？」

「そうだね、彩陽が来たらすぐに始められるようにしようか」

わたしは制服を脱いでいく。リボンを外し、ボタンを外したシャツを床に落とす。スカートのジッパーを下ろして下着姿になる。

パンティからは醜悪なちんぼが思い切りはみ出していた。ヌルヌルとした液体で鈴口が濡れて、はやく精液を吐き出したいと言わんばかりに震えている。

隣にいる紗耶香を見ると、同じような状況だった。はみ出したちんぼに血管が浮き出して、ぱんぱんに膨れ上がっている。

下半身のそれさえ見なければ、普通の美少女だ。でも、ちんぼの存在感は異様だった。

「わたしたち、すごいのが体にくっついてるんだね……改めてみると、びっくりしちゃう」

「そうですわね……でも、もうこれがない生活なんて、考えられませんわ」

確かにそうだった。わたしたちの生活は、もうちんぼとは切っても切り離せない。

毎朝のようにオナニーをして、たっぷりと精液をティッシュに吐き出してからクラスへ向かう。午後の授業中は周りの可愛い女の子たちに発情して、ちんぼが勃起してしまう。保健室の凜先生や彩陽にお世話にならないと、いつ女生徒を襲ってしまうかもわからなかった。

下着も脱いだ紗耶香が、わたしのそばに近づいてくる。

「なんだか……友梨佳さんのちんぼ、この間より大きくなっていませんこと？」

「そうかなあ……ひゃっ」

紗耶香が、そっとわたしのちんぼに指先で触れた。それだけで、わたしのちんぼは「反応して、びくびくと震えた」。

いくらふたなりでも、紗耶香が可愛いことには変わりない。こうしてちんぼを触ってもらうと、興奮してしまう。

その指は太さを確かめるように、わたしのちんぼを優しく握った。温かい手のひらに包まれて、気持ちがよくなってしまう。

「紗耶香あ……♡ もっと触ってえ……♡」

「あら、いいですよ。……それなら、わたくしのちんぼも握ってください……んんうっ♡」

紗耶香のちんぼを恐る恐る握ってみると、わたしのちんぼより一回り小さい感じがした。それでも、ギンギンに固くて、熱くて、カリ首がやたら大きい。自分のちんぼと比べてこん

なに違うんだ、とわたしは不思議な気分になった。

「しごいてくださいませんか……♥」

「わ、わたしも頼んでいい？ ……あんっ♥」

わたしと紗耶香は、お互いにちんぼを握った手のひらを動かして、喘ぎ声をあげてしまった。

自分でオナニーするのは違う快感がこみ上げてきて、腰砕けになってしまいそうになる。紗耶香も毎朝のようにオナニーしているのもあって、しごき方はとても上手だ。

女の子同士、ちんぼを向かい合ってちんぼを握りあうのは変な感じだったけど、紗耶香の手のひらが滑らかな動きでちんぼを擦るたびに、気持ちがよくてたまらなかった。

紗耶香も、わたしにしごいてもらってたまらなそうに身体を揺らしている。そのたび、長い金髪と柔らかそうなおっぱいが揺れた。

「友梨佳さん、そこ、すごくいいですわっ……んほお♥」

「紗耶香も、しごき方がねちっこくて、あんっ♥ やらしい……」

目の前で紗耶香は恍惚とした表情を浮かべていて、わたしもたぶん同じような顔になっているんだろうな、とぼんやりと考えた。

夢見心地で、ふたなり同士の手コキを楽しんでいると、着替え室に入ってくる人影があった。慌ててちんぼを隠そうと思ったけど、入ってきた人物を見て安心する。

「あれえ？ 二人でもう楽しんだの？ そうとう溜まってるみたいだね♥」

「彩陽……♥ 我慢できなくて」

「彩陽さん、お願いしますわ……こんなに勃起して、亀頭が真っ赤になっちゃってますの♥」しごきあって準備万端になったちんぼを、二人して彩陽に向ける。紗耶香のちんぼは我慢の限界なのか、ぴゅっと透明な我慢汁を噴き出している。

わたしたちの反り立ったちんぼを見て、彩陽はくすぐすと笑いながら、わたしたちの背中を押して浴場に連れて行った。

「まあまあ、落ち着いて♥ ゆっくり三人で楽しもうよ」

「待ちきれませんわぁ……♥」

切ない表情の紗耶香が急かしたおかげで、彩陽はすぐに服を脱いで裸になった。ちんぼが生えていない、正真正銘の女の子だ。小さめの乳首がつんと立ったおっぱい、などらかな体の曲線……股間に入っている縦の割れ目を見て、頭にさっと血が上ってくるのがわかるくらい興奮した。

彩陽はわたしたちを連れてまだ誰もいない浴場へと入る。

白く立ち上る湯気の中、彩陽の女体はやたら美しく見えた。あの女体に精液をかけて汚してやりたい——そんな欲望がふつふつと湧き上がってくる。

「彩陽さん、はやく、はやく気持ちよくしてくれませんか……♥」

「あははっ、紗耶香ったら面白いんだから。わかってるから、こっちおいで♥」

「はあい……♥」

紗耶香は促されるまま、風呂椅子に座らされて、ちんぽをひくつかせている。またしても、我慢汁がびゅっと飛び出している。

わたしもその隣に座ると、彩陽はボディソープを手にとって、泡立て始める。

「まずは、綺麗にするね。二人とも、ちゃんとおちんちん洗ってる？ カリ首のところは、放っておくとチンカスが溜まっちゃうんだからね」

「ちんかす…：初めて聞きますわ」

「今日はわたしがお手本として、二人のおちんちんを洗ってあげるから」

「んひっ♥」「おほおっ♥」

彩陽は紗耶香とわたしのちんぽを、片手ずつ握った。ヌルヌルした手のひらの感触で、わたしたちはあられのない嬌声をあげてしまった。

しゅこしゅこ…：そのままボディソープをたっぷりと塗られて、泡立てられると、気持ちがよくてどうにかなくなってしまいそうだ。

彩陽はわたしたちのちんぽをしぎながら、洗い方を教えてくれた。

「紗耶香のちんぽはズル剥けだから、わりと綺麗だね。チンカスも全然溜まってないよ。友梨佳のは勃起するときだけ剥けるちんぽだから…：ん、ちよっと汚れが溜まってきてるかも」

「きやつ、そんなにいきなり剥かれたらあっ♥」

ずるり、と思い切り皮を向かれて、わたしは何とも言えない不安感で悲鳴をあげた。

「皮がちゃんと剥けてないと、エッチするときに気持ちよくなれないからね♥ ほら、カリ首の裏のところ、白いのが溜まってきてるよ。ごしごしと」

「やあっ、そこおっ♥ 敏感だからあっ♥」

カリ首の裏を強くこすられて、痛気持ちいいような感覚でお尻にぎゅっと力が入ってしまふ。刺激が強すぎるせいかな、ちんぽの亀頭は真っ赤になってしまった。

「そっか、友梨佳のちんぽはまだ童貞ちんぽだもんね♥ もっと優しくしてあげなきゃ」

わたしは必死になって彩陽のやさしい手つきに耐えていたけど、紗耶香は一足先に限界を迎えた。足の先までびんと伸ばして、ちんぽから勢いよく精液を放つ。

「あああ…：イクう♥ イクイクうっ♥ そんなにしごかれたらすぐ精液出ちゃいますわあっ♥」

びゅーっ！ びゅるるっ！ びゅるっ！

大量の精液がすごい距離を飛んで、わたしの足にまでかかった。一通り出し終えると、ふう…：と息をついて、ご満悦の表情になる。お嬢様とは思えない、だらしない頬の緩み方。ちんぽさえ生えていなければ美少女そのもののなのに、もったいないとつくづく思う。

紗耶香が余韻に浸る間に、彩陽はわたしたちのちんぽにシャワーをかけて泡を流した。わたしはその水流でさえイキそうになりながら、なんとか射精をこらえた。

「友梨佳はまだ我慢できそう？ ちんぽが綺麗になったことだし、しゃぶってあげようかな♥？」

「いいの……♥ それじゃあ、お願い……♥」

「ふふ、嬉しそうな顔。あーむっ」

「彩陽い♥ ああんっ……おくち、ひもちいいっ♥」

彩陽の唇が亀頭に口付けて、舌がぬるりと這いまわった。亀頭の周りを舌が一周して、ぺろぺろとアイスキャンディーを舐めるかのように、美味しそうに舐めしゃぶる。

痺れるような強烈な快感で、わたしは我を忘れて喘いでしまう。

ゆっくりとわたしのちんぽを口に含んでいって、桃色の唇が徐々に亀頭を覆い、ちんぽの中ごろまで咥えてしまう。

ひよつとこのような顔になってわたしを見上げる彩陽は、なんだか可愛かった。

「うぐうう……♥ 彩陽、もう限界っ……♥」

「ひいよ、ひっぱいらして……」

「うっ、あ、ああっ♥ でるうっ♥ 彩陽のお口にお漏らししちゃう♥ ——くうっ」

びゅー♥ びゅくくっ♥ びゆるっ♥

気が狂いそうな快楽と共に、精子が尿道を通って勢いよく放たれるのがわかる。彩陽はそれを全部口で受け止めて、ごくごくと喉を動かした。どうやら、全部わたしの精液を飲んでくれているみたいだった。

「うふ、飲んじやった♥」

わずかに唇に残っていた精液でさえも舐め取って、彩陽は妖艶に微笑んだ。わたしの精液を味わいきって、彩陽も満足げに言った。

「さて、二人ともいっぱい出して、すっきりしたね」

「あ、彩陽さん……わたくし、そのお……♥」

紗耶香が、恥ずかしそうに顔を伏せる。その股間のちんぽは、まだまだ元気に屹立していた。

わたしも同じ。情けないことに、あれだけ口で気持ちよくしてもらったのに、欲張りなちんぽの勃起はちっとも収まっていない。

目の前に裸の女体がある。それだけで、いくらでも精液が出せそうだった。

「わたしも、なんだけど……もうちょっとだけ、相手して？」

彩陽に頼み込むと、彩陽はわたしたちのみつともないちんぽを見て、おかしそうに笑った。「ふふ、すっごいね、二人のおちんちん♥ しょうがないなあ……そこまで言うなら、精液が出なくなるまで搾り取ってあげる」

「彩陽……♥」「もっと気持ちよくして欲しいですわ♥」

「でも、二人ばかり気持ちよくなつて、ずるいよ？ その前にわたしのことも気持ちよくして欲しいなあ……二人でわたしの身体、洗ってよ」

わたしの精液を飲み込んだ彩陽は、そんなことを言い出した。彩陽も心なしか頬を染めて、興奮してきているように見えた。

彩陽の女体を好きなように触れる。この柔らかそうなおっぱいも、ぷりつとしたお尻も、

全部わたしのものにできる……興奮が体を駆け回る。

わたしと紗耶香は彩陽の言葉に反対するはずもなく、手にボディーソープを取って、泡立て始める。

「ほ、本当に触っていいの、彩陽？」

「ええ？ わたしたち女の子同士だもの。全然いいよ」ほらあ、わたしのおっぱい、柔らかい？」

さっそく、彩陽はわたしの手のひらを自分の胸に持って行った。

ぬるぬるとした手のひらで、彩陽のおっぱいを味わう。初めて彩陽に抜いてもらった時に触ったのと同じ感触。柔らかくて、いつまでも揉んでいたくなる。

「あんっ」夢中になっちゃって」もっと優しく揉んでよ」

「彩陽、彩陽い……」

「彩陽の身体、すべすべで気持ちいいですわ……」

紗耶香は、彩陽の背中や腕を手のひらで泡立てて、その感触を楽しんでいる。その股間で、ちんぽがひくひくと震えて、興奮しているのがよくわかる。

彩陽の胸から手を離せなくなっていると、彩陽がいたずらっぽい表情で誘ってくる。

「ねえ、友梨佳、ちゅーしょ」

「い、いいの？」

「女の子同士のちゅーは、ノーカウントでしょ？」

にっこりと微笑む彩陽の桃色の唇に目が吸い寄せられる。小ぶりだけど、つやつやとしてぷるんとしていそうな唇。彩陽は目をつぶって、唇を尖らせる。

わたしは、彩陽に向き合って、顔を近づける。自分の心臓の音がやけに大きく聞こえた。

鼻がくつつくくらいまで近づくと、彩陽の温かい息や、匂いが感じられて、ますます興奮した。ぴったりと唇をくつつけるとゾクゾクとしてしまう。

「ん……れろっ」

「んふう……ちゅう」

彩陽が舌を出してきて、わたしの口の中に入れてきた。ちょっと驚いたけれど、受け入れると、口の中を彩陽の舌が這いまわる。なんともいえない心地よさで、わたしはされるがままに口の中を蹂躪されてしまった。

気持ちがよくて涎がどんどん湧いてくる。二人の唇の間からとろりと唾液が垂れた。彩陽の唾液がわたしのと混じって、ぐちゃぐちゃになっていく。

唇を離すころには、興奮でちんぽがビンビンになって、もう我慢が出来なくなっていた。

「ふふ」女の子同士のえっちなキス、気持ちよかった？」

「溶けちゃいそうだったよお……彩陽」

「友梨佳のおちんちん、すごいことになってるね」二人とも、そろそろ射精したい？

…ひゃんっ」紗耶香、そんなに太もとかお尻ばかり触らないで」

「だ、だって、彩陽さんの身体がいやらしいのがいけないんですわ……」

わたしがキスしている間、紗耶香は夢中になって彩陽の足やお尻を撫でていた。あまりにも変態じみた愛撫をしていたことに自分でも気づいたのか、恥ずかしそうにそっぽを向いた。その股間のちんぽが相変わらずびくびくして、よほど興奮していたのだろうか。

「それじゃあ、二人でじゃんけんして」

「どうしてじゃんけんなのでして……？」

「いいから、紗耶香。友梨佳とじゃんけんして」

「わかりましたわ……」

じゃんけんばい、とグーを出すと、紗耶香はパーを出した。

一体何の意味があるのだろうかと思っただけ、これはあまりにも重大な勝敗を決めるじゃんけんだったのだと思い知ることになった。

「それじゃあ、今日は紗耶香が、わたしのおまんこ使っていいよ♥」

「ほ、本当ですよ！？ お、おまんこ……彩陽のおまんこ……♥」

明らかに目の色がおかしくなっている紗耶香を見て、ずるい、という感情が込み上げた。もし勝っていたら、彩陽のおまんこにわたしのちんぽを突き込めた……その様子を想像すると、たまらなくなる。

「えっ、ちょっと彩陽、わたしは……？」

「友梨佳は、わたしのくちまんこでいい？」

「フェラしてくれるってこと……？」

「ただのおしゃぶりじゃないよ？ 最近、ディープスロートっていうのが上手になってきたの。喉の奥まで、おちんちんを入れても、おええってならないの♥」

知らない単語が出てきて、よくわからないけど、気持ちよさそうなのは間違いない。彩陽の喉の奥までちんぽで犯せると思うと、早くしてみたくてたまらない。

わたしたちはいつまでもシャワーのところにいるのもつまらないから、お風呂の方へ移動した。大きな浴場には温かいお湯がたっぷりと張って湯気を立てている。ちゃぶちゃぶとわたしたちはそこに浸かって、行為を始めた。

彩陽は四つん這いになって、お尻を紗耶香の方へと向ける。紗耶香はそれに顔を近づけて、おまんこの割れ目を指で広げた。まじまじと彩陽の女の子の大事なところを見つめている。

「こ、これが彩陽の……♥ も、もつとじっくり見ても構いませんか？」

「恥ずかしいから、そんなに见ないでよ。紗耶香は本当に変態だね♥」

「しょ、しょうがないんですわ。だって、見たくて見たくて仕方ないんですよ……？」

「少しは我慢してよ。ヌレヌレになってるの、わかる？ あんっ♥」

「すごいですわあ……愛液がとろとろ溢れて、柔らかいお肉がほぐれてますわ……♥」

紗耶香は彩陽のおまんこを指でくちゅくちゅと音を立てて、感動の声をあげている。

「それじゃあ、わたしのおまんこに、そのカリ首ばんばんのおちんちんを挿れてみて♥」

「ほ、ほんとうに挿れますわよ♥ ……ん、んほおっ♥ こ、これですわあ♥」

わたしは、四つん這いになった彩陽の顔にちんぼを近づけながら、紗耶香の痴態を見ていた。

紗耶香が彩陽のお尻を両手で押さえながら、腰をずぶずぶと前に進めていく。結合部分が見えないのが残念だったけど、紗耶香の蕩けた表情を見れば、気持ちがいいのはよく伝わってきた。

羨望の気持ちでいっぱいになりながら、わたしは未知のおまんこの快楽を想像した。ヌメヌメの愛液たっぷりの蜜壺の中、柔らかいヒダヒダの媚肉に包まれ、ちんぼをずばずば抜き差しする……気持ちよくないわけがない♥

「ん……んっ♥ 全部、入っちゃったね。どう、わたしのおまんこは？」

「はあ、はあ……♥ こ、言葉になりませんわあ……♥ んひい♥」

「動かしてもいいんだよ？ 大丈夫、紗耶香？」

「い、今から動かしますわ……んぎいっ♥ こ、これたまりませんわあ♥」

紗耶香がゆつくりと腰を前後させ、快楽を貪り始める。胸を揺らしながら、一生懸命腰を振って、よほど気持ち良さそうだった。口から舌が出て、涎がぼたぼたと滴っている。

紗耶香が快楽に溺れる様子を食い入るように見つめていると、ちんぼが彩陽のほっぺに当たった。

彩陽が、わたしのちんぼに頬ずりして、ふえろっ舌を這わせる。

「ほら、友梨佳もわたしのおくちまんこ、欲しくないの？ ……あんっ♥ 紗耶香、そこ気持ちいいよ♥」

彩陽はおまんこにちんぼを突き込まれる快感で時折、喘ぎ声をあげながらも、欲しそうな顔でわたしを見上げて誘惑してくる。

「友梨佳のぶっといおちんちん、奥まで咥えてあげるよ。ちようだい♥」

「わかった……ん、んっ♥」

わたしは、彩陽の顔を両手で押さえて、ちんぼを咥えさせた。大きく口を開けた彩陽の中に、ちんぼが入っていく。

中ごろまでちんぼを入れたところで、彩陽の舌に亀頭が当たる。

「こ、これえ……いいっ♥」

ヌルついた彩陽の舌が絡みついてきて、わたしは気持ちよすぎてどうにかなりそうだった。

でも、喉の奥まで挿入していいと、彩陽は言った。もっと先がある。わたしはさらに彩陽の口の中に、深くちんぼを突き込んでいく。

喉の穴に、亀頭が当たった。その穴に、ちんぼを突き入れていっても、彩陽は苦しそうな表情をすることはなかった。

気管にちんぼの先端がぎゅっと締め付けられる。狭い穴にちんぼを押し込んでいく感じが、たまらなく気持ちがいい。おまんこに挿入するのはきつとこんな感じなんだろうと思っ

て、感動がこみ上げる。

「あ、彩陽い……♥ すごい、おくちまんこ、気持ちいいよ……♥」

「ん、おお……♥」

彩陽は動物じみた声をあげながらも、根元までちんぽを咥えてわたしを上目遣いしている。

わたしはそのまま彩陽のお口にちんぽを入れたり、出したりを繰り返した。彩陽は呼吸が苦しいのか、ちんぽを気管に入れるとびったりと粘膜が吸い付いてきて、ますます気持ちが悪かった。

おまんこを疑似体験しながら、これでも十分気持ちがいいのに、本当のおまんこはどれだけ気持ちがいいのかと途方もない気分だった。

紗耶香は、次第にピストンのスピードをあげ、ぱちん、ぱちん、と懸命にお尻を振って喘ぎ続けていた。

「ああっ♥ もう駄目ですわあ、我慢できませんわあっ♥ 彩陽さん、イキますわあっ♥ イクイクっ♥」

そして、紗耶香はびくん、と体をわななかせて、腰振りを止めた。きつとおまんこの中で、たっぷりと精液を吐き出しているに違いなかった。

わたしも、そろそろ限界が来ていた。精液がすぐそこまで来ているのが分かる。ちよつと乱暴にちんぽを出し入れしながら、うわごとのように言う。

「出る、出るっ♥ 彩陽の喉の奥に精液出ちゃうっ♥」

「んぐう……♥」

「ああっイクっ♥ ——んくうっ」

びゅー♥ びゅるる♥ びゅっ♥

たまらない感覚とともに、ドクドクとちんぽが震えて精液を懸命に送り出していく。射精は長々と続いて、全部出し終わってようやくわたしはちんぽを彩陽から引き抜いた。

涎まみれのちんぽが糸を引いて出てくる。彩陽は口の中に溜まった涎と精液が混じったものをたらたらと垂らしながらも、何ごともなかったような顔で微笑んだ。

「……ふふ♥ わたしのくちまんこ、気持ちよかったでしょ？」

「よかったよ、彩陽♥」

「満足してくれて嬉しいよ♥ 次にセックスするときは、童貞卒業させてあげるからね、友梨佳♥」

彩陽はそう言いながら腰を動かして、未だに余韻に浸っている紗耶香のちんぽを引き抜いた。結合部からも紗耶香の精液がとろとろとこぼれだしていた。

口からも股間からも精液を溢れさせる彩陽は淫らでだらしないはずなのに、わたしには魅力的に見えてしまっていた。

わたしは快樂に溺れるばかりで、自分がどうしてこんな行為をしているかなんてどうでもよかった。彩陽はどうしてこんなに淫乱な女の子になってしまったのか、そして彩陽が妹の香奈をどんな目に遭わせているかなんて、まるで興味がなかった。

この後その答えを知ることになっても、わたしはこのたまらない快樂を味わえばそれでよかった。

女学園に蔓延るふたなりたちは、どういった存在なのか。それを目撃するのは、まだしばらく後の話だ。

〈香奈 二章〉

詩織は彩陽先輩に初めてフェラされてから、何を言ってもふにやふにやと笑い返すだけで、上の空だった。

「詩織、大丈夫？」

「香奈あ……◆ えへ◆」

どうして詩織がこんなことに……わたしはどうすればいいかわからなかった。

怒ってもいいかもしれないし、悲しんでもいいかもしれないけど、あまりにも想像を超えたことが立て続けに起き続けているせいで、感情が追い付いていなかった。

ずっと前から仲が良かった詩織にちんぽが生えてきてふたなりになってしまっただけでも十分衝撃的だったのに、彩陽先輩のフェラを経験してこんなに幸せそうな顔をされるなんて。

彩陽先輩は、あの後すぐに逃げるようにどこかに行ってしまったって、着替え室に戻っても、すでにそこにはいなかったから、結局わたしの気持ちはどこにもぶつけることが出来ずに宙ぶらりんだった。

「詩織……ニヤニヤしすぎだよ」

「だって、わたし、これまで生きてきた中で、今が一番幸せかも……◆ 彩陽先輩、明日も会えるかなあ◆」

「もう……とりあえず部屋に戻るよ」

どれだけ気持ちが悪かったら、こんな風になってしまっただろうか。詩織の気持ちを考えると、途方に暮れるしかなかったけど、その快楽がどんなものなのか気になってしまっただけの本音だった。

ちんぽをしゃぶられる……詩織は、唾液まみれの舌で、精液が涸れるほどたっぷりいじめられたのだろう。舌を肉棒を添うように這いまわされたり、唇で優しく甘噛みしてもらったり……香奈が経験したことを想像するだけで、思考は、ますます卑猥な方向へと向かっていく。

「こんなことを考えてたらいけない……ふたなりだなんて、変だよ……!」

一人でそう呟きながら、ぼおっとしてまともに動いてくれない詩織をよそに布団を敷く。詩織を布団の上に横にさせると、すぐに眠ってしまった。彩陽先輩に何度も射精させられて、よほど疲れてしまったらしかった。

「はあ……詩織は、これからどうなっちゃうんだろう……」

わたしは不安でいっぱいになりながら、その夜は早めに眠りについた。隣で寝ころんだ詩織はぐっすり熟睡しているようで、わたしに抱き着いてきて、ちんぽをこすりつけてくることはなかった。

本格的に詩織がおかしくなってしまったのは、次の日からだった。

朝起きたら、詩織はいつも通りの詩織に戻っていたが、すでに彼女の心は、どうしようもなく汚れた快楽への欲求に支配されていた。

パジャマの前が、小さいながらも TENT を張っていたのだ。ちんぽが勃起している証拠だった。

「あ……おはよう、香奈ちゃん」

「おはよう。詩織……昨日のこと、覚えてる？」

「う、うん……」

詩織は、ぼつと頬を赤らめた。どう見ても、嫌な記憶を思い出した顔ではなかった。わたしは焦ってさらに問い詰める。

「彩陽先輩のこと、本当に信用していいの……？」

「信用していいに決まってるよ！ いっぱいエッチなこと教えてもらったの！ ちんぽって、いろんなやり方で気持ちよくなれるんだよ」

頭を強烈に殴られたかのような衝撃があった。これまで、エッチなことなんか全然興味のなかった詩織が、こんなにいやらしい笑みを浮かべている。信じられなかった。

「し、詩織っ！ あんなこと、やっぱりダメだよ！ 詩織、おかしくなっちゃってるよ……！！」

「そうかも……でも、あんなに気持ちよくされたら、誰でも頭おかしくなっちゃうよお」
ちんぽを涎たつぷりのお口でじゅるじゅるおしゃぶりされて……天国に飛んで行っちゃいそうだったよ

「……し……おり」

詩織の目の色は、明らかにおかしかった。今目の前にいる詩織は、もうわたしの知っている詩織ではないかもしれないと思うと、胸が強く痛んだ。

以前の詩織に戻って欲しい——そう願って、わたしは詩織の肩を揺さぶった。

「あんなの、おかしいってば……あんなことしちゃ駄目だよ、詩織……」

「……香奈ちゃん」

詩織は、ようやくわたしの言葉が届いたのか、ふと笑みを消して、しょんぼりとなった。

「そう、なのかな？ 今のわたし、気持ち悪い……？」

「うん……」

「そっか……。できるだけ、我慢する……」

「そうだよ、我慢してよ……ちんぽなんて、なくなっちゃえばいいのに……」
しゅんとした詩織の股間は、それでも生理現象なのか、少し膨らんでいた。

その後数日間、詩織は凜先生のところには行かなかった。正式に水泳部に入ることが決まり、部活動を真面目にし始めた。彩陽先輩と部活中に話すことはなくなった。わたしは二人の関係が切れたのだと、勝手に思い込んだ。

でも、それは甘い考えだった。

わたしはひとまず、詩織がもとに戻ったと安心してしまった。ちんぼの誘惑を甘く見ていた。一度ふたなり射精の快楽を味わったら、後戻りできない……そんなことは、知らなかった。

詩織が快楽から逃れられていないことを思い知らされたのは、それからすぐのことだった。

ある日の晩、わたしは詩織と一緒に、同じ部屋で寝ていた。

詩織は、寝ている最中に、わたしにくっついてきてちんぼを擦りつけるようなこととはしなくなっていて、欲求を抑えることができているのだとわたしは勝手に解釈していた。その日もごく普通に横になり、色々何気ない話をして楽しんから、幸せな眠りに落ちた。

わたしは何か動くのを感じた。ごそごそと、隣の布団で動いている人がいる。

かすかに目を開いて、何が起きているのか確認した。

詩織が、布団から出て、立ち上がっていた。一体何をしているんだろうか。わたしは寝ぼけながらも、様子を見ようと思って、そのまま寝たふりをし続けた。

寝間着姿の詩織は、ふらふらと歩いて、部屋の外へ出る扉に向かっていた。

怪しい——目的地はどこなのか、わたしは詩織が部屋を出た後、こっそりと立ち上がり、後をつけた。こんなことをするなんていけないとも思った。詩織を信じられないなんて、友達としてどうなんだ、と自問自答もした。それでも、このまま詩織を放っておいてはいけない、という気持ちが勝って、わたしは部屋を出て詩織を追いかけた。

開いた窓から冷たい風が吹くのも気にならないのか、詩織は脇目も降らずに廊下を突き当りまで行つて、階段を上り始めた。よほど急かされているかのように、足取りには迷いがない。

そして——なんとなく、前かがみになって歩いてた。以前、お姉ちゃんがしていたのと同じ体勢。一体あれには何の意味があるのかと思いつながら、わたしはバレないように、詩織が階段を上り切った後で、わたしも一段目に足をかける。

どうして、上の階に行くのだろう……上の階は、二年生の女生徒たちが寝泊まりする部屋がある階だ。もしかして、上級生との密会だろうか。頭に、すぐ彩陽の姿が思い浮かんだ。

二人が会っていたら、止めなければならぬ。わたしは使命感に燃えながら、急ぎそうになる気持ちを抑えた。

ここで詩織に見つかったら、意味がない。誰と会っているか、しっかりとその場を目撃してから止めないと、詩織に言い訳されて、はぐらかされるかもしれない。慎重に、足を進めた。

だが——詩織の前に現れたのは、予想とは異なる人物だった。

「あら、詩織ちゃん。もう来たのね♥」

「……あの、我慢できなくて」

わたしは、ぎよつとして目を見開いた。

美優先生——初めてこの寮に来た時、見回りに来たグラビアアイドルみたいな容姿の先

生。どうしてこの人が、詩織にあんなにも妖艶な笑顔を浮かべているのだろうか。

見回りの役目を担っている美優先生は、こんな時間に立ち歩いている詩織をすぐにでも部屋に戻すのが、本来あるべき姿であるはずだ。

それなのに、先生は詩織の手を取って、まるで誘うかのように、頬を赤らめて隣にある部屋へと導いた。

「可愛いわね、もう…… 今日もいっぱい、楽しませてあげる♥」

「は、はい……♥」

詩織は、ぼわぼわと美優先生に見惚れながら、部屋に入っていつてしまった。

わたしは閉まったドアを前にして、入るべきかどうか、迷いが生じていた。一体、中で二人は何をしているのだろうか……いやらしいことを、しているのだろうか。

胸がドキドキしてきて、唾をぐくりと飲んでしまう。美優先生は詩織のちんぽを優しく触ってあげて、射精にまで導いてあげるのだろうか。それとも、彩陽先輩みたいに、ちんぽを舐めてイカせてあげるとか……？

今入ったら、どんな風に二人が絡み合っているのか、見たい気持ちと見たくない気持ちがせめぎあった。

「逃げちゃダメ……ちゃんと詩織を連れ帰らないと」

気持ちを切り替える。これは詩織のためだ。わたしがたとえ見たくなくても、このドアを開けないと――

「あれ、香奈ちゃん？」

唐突に、背後から声をかけられて、わたしはひつ、と声をあげて飛び上がった。

聞いたことのある声。いや、さつきから、この声が聞こえることを予想して、わたしはここまで詩織を追ってきたのだ。

恐る恐る振り返ると、そこには詩織を目覚めさせてしまった例の先輩がいた。

「ここ、わたしの部屋だよ。今、取り込み中だから静かにしてね？」

彩陽先輩は、しいーと唇に人差し指に当てた。

彩陽先輩に見つかってしまった――どうにか言い訳して逃げようかと思ったけれど、すでに手遅れだった。どうしてここにいいのか、言い当てられてしまった。

「詩織ちゃんのこと、追いかけてきたんでしょ？」

「……そうです」

「ふふ、香奈ちゃんは、詩織ちゃんが夜な夜なわたしの部屋に来て何してるか、知らないんですよ？ 気になるよね。一緒にこっそり覗いてみる？」

「や、やめてください……わたしは詩織を連れて帰るんです」

「詩織ちゃんは帰りたくないと思ってるかもしれないよ？」

「そんなはず……っ」

詩織はきつと、彩陽先輩や美優先生に、ここに来ることを強要されているんだ。そう思った。

そうでなかったら、詩織はもう、昔の詩織じゃない。ふたなりになってしまったからと言って、夜にわたしに内緒で、こっそりエッチなことをしているわけがない。

この時のわたしは、そういう希望にすがっていた。

でも、それはただの願いだった。冷静になつて考えれば、部屋で詩織と美優先生が何をしているか、答えは一つのはずだった。

彩陽先輩が、くすくすと笑いながら、わたしに現実を語って聞かせた。

「この間、プールのシャワールームでわたしと詩織ちゃんが、何をしていたか見たよね？」

「……っ！」

「詩織ちゃんに、フェラチオしてあげてたんだよ？ おちんぼ、ちっちゃいのにかチカチに固くなつて、すごいい可愛かった」舐めてあげると、ひざをカクカク震わせて悦んでたよ」

「そんなこと、聞きたくありません……っ」

「信じてくれないの？ もう一回、詩織ちゃんがどんな子か見てみたほうがいいんじゃない？」

そう言つて、彩陽先輩は、部屋の扉をわずかに開いた。中から、わずかに二人の声が聞こえてくる。甘ったるい成分が含まれていそうな声——信じたくなかった。

わたしがその場で立ちすくんでいると、彩陽先輩はわたしの腕を掴んで、引っ張った。

「ほら、一緒に覗いてみよう？ 詩織ちゃんのエッチなところ——」

その時だった。廊下の角を曲がつて、こちらに向かって歩いてくる女生徒がいた。

助かった——そう思った。ほっとして、足から力が抜けそうになった。まさか、こんな時間に立ち歩いている生徒がわたしたちの他にいるとは思わなかった。

これで、彩陽先輩から逃げ出すことが出来る。詩織を置いていくことになるけど、その時のわたしは現実には直面するのが怖くて、とにかくこの場から離れたい一心だった。

「あれ、彩陽じゃん。おつかれーっ」

その女生徒は、どうやら彩陽先輩と同学年のようで、手をひらひらと振った。にやつと笑うと、口の端に八重歯が覗いていた。なんだか、彩陽先輩と同じような、奔放な雰囲気的女生徒だ。

お風呂に入った後なのか、濡れた長い髪をタオルで拭きながら、こっちに向かって歩いてくる。カラフルなパーカーのポケットに手をつ突っ込んでいて、一言で言うと、ギャルって感じのイメージだ。

隣にいるわたしをじろじろと見てきた。その視線に優しさが感じられなくて、一度安心してしまったことを後悔し始めた。

もしかして、この人も彩陽先輩とグルなのだろうか……？

「この子、可愛いじゃん」わたしたちに随分ビビってるみたいだけど」

「ね、縮こまっちゃつて、可愛いよね」今、この子の友達と美優先生がわたしたちの部屋

で二人でムフフなことしてるから、一緒に覗いてみよう、って言ってたの。英梨も覗かない？」

どうやら、この八重歯の先輩は、英梨という名前らしかった。

この英梨先輩という人と彩陽先輩がグルだということがはっきりして、わたしはしゃがみこみたくなるくらい、絶望していた。わたしたちの部屋、と彩陽先輩は言った。きっとこの部屋は二人の相部屋なのだろう。

英梨先輩はわたしのことをチラチラと見て、舌なめずりをしながらにやつと笑った。

「別にわたしはこっそり覗くのは趣味じゃないけど……この子に美優先生と詩織ちゃんの絡みを見せてあげるところなら、付き合うよ♥」

「それなら話がまとまったね」

「この子、名前は？」

「香奈ちゃんだよ」

「ふーん、香奈ちゃんか……わたし、香奈ちゃんみたいな子めちゃくちや好みだからさ……ちよっかい出してもいいよね？」

「ふふ、いいよ♥」

「え……っ？」

戸惑うわたしに、英梨先輩は八重歯を見せながら近づいてくる。

「またびつくりするくらい可愛い子連れてきたね、彩陽は……香奈ちゃん、つかまえたっ」「きやつ」

がばつ、と抱きつかれて、背後に回られる。わたしは怖くなって体が痺れたようになり、その場で動けなくなってしまった。

この人……女の子のはずなのに、何かが違う。まるでわたしを捕って食おうとでもしているような感じだった。わたしは嫌な予感がした。この人は、もしかして、普通の女の子じゃない……？

英梨先輩はわたしの首筋の匂いをくんくんと嗅いで、満足そうな声で言った。

「香奈ちゃん、いい匂いするね……甘い匂い♥」

「せ、先輩……？」

英梨先輩は胸が結構大きくて、わたしの背中にぴったりと押し付けられるとポリウム感があった。

そして、押し付けられたのはそれだけではなかった。嫌な予感的中したことを、わたしは察した。お尻に、何か固い棒状の物が押し付けられていた。

この八重歯のギャルっぽい先輩——英梨先輩は、ふたなりだったのだ。

「ちんぽが固くなつてきちゃったじゃん♥ ふふっ♥」

「き、気持ち悪い……離れてください……っ」

「悪いことはしないから。ちよつとだけ、こうやってわたしと一緒にいるだけでいいからさ

◆

「ひっ……!」

首筋に、ぬるつとしたものが這った。英梨先輩の舌。そのままぺろぺろと舐められて、くすぐったいような、妙な感覚が体に入ってくる。ぞわぞわと身体が反応しているのが分かった。

変な感じ——わたしはそれが快感だということに、この時はまだ気づいていなかった。今思えば、この時が、ふたなりの女の子に攻められるよさを知った最初の時だった。

彩陽先輩は、ぴくぴくと震えるわたしを夢中になって舐める英梨先輩を見てくすぐすと笑っている。

「気に入っちゃったみたいね、英梨? あんまりいじめたら可哀想だから、ほどほどにね?」

「ふえろっ◆ わかってるって……もしかしてこの子、処女?」

「わからないけど……たぶんそうじゃない? そうだよね?」

彩陽先輩が首をかしげて見つめてくるのに、わたしは震える声で返した。

「し、知りません……っ! ひいっ……っ!」

「可愛いね、香奈ちゃん◆ 大丈夫、わたしがゆっくり教えてあげるから◆」

「やめて……助けてください、彩陽先輩……っ」

「安心していいのよ? 英梨はわたしが知ってるふたなりの中だと一番のテクニシャンだから◆」

首筋から耳まで舐め、甘噛みしていた英梨先輩が、ふいに手のひらでわたしの身体を撫でてくる。

妙な撫で方だった。羽毛で撫でられているかのような感触。触れるか触れないかのところでお尻やお腹の上をさわさわと手のひらが通り過ぎていく。

もどかしいような、くすぐったいようなその愛撫に、自分の口から信じられないくらい甘ったるい声が出た。

「ひゃんっ◆ あ、ああ……っ◆」

わたし、どうしちゃったんだろう。わけがわからないうちに、体の中に、熱いものが溜まり始めるのがわかった。

お尻に押し付けられる英梨先輩のちんぽが、ますます固く、大きくなるのがわかった。

「声もすっごくいい感じじゃん◆ もっとその声、聞かせて◆」

「い、いやです……なんで、こんな声……んっ◆」

「英梨ったら、ちよつとは手加減してあげればいいのに。そんな風にしたら、香奈ちゃん立つてられなくなっちゃうよ?」

「そうしたら、わたしたちの部屋に連れ込めばいいじゃん◆ ね、香奈ちゃん?」

「や、やめて……んあ◆」

英梨先輩の手のひらは、腰のあたりからお腹へと徐々にあがってきていて、ついにわたしの胸を触り始めた。

寝間着だったから、ブラジャーはつけていなかった。服の上から、ぎゅっ、と胸を揉みしだかれる。

「おっぱい、大きいね◆ 手のひらから溢れちゃう。柔らかくて、揉み心地最高だよ？」

「いやぁ……揉まないでえ◆」

わたしは、こんなことをされて嫌なはずなのに、体は裏腹に何かを感じていた。

やわやわと指が食い込むたびに、甘い痺れのようなものが生じていた。

こんな感覚、知らない——わたしは頭が真っ白になってしまつて、されるがまま、口に手を当てて、声を抑えることしかできなかった。

「香奈ちゃんも興奮してきたでしょ？ ふふ◆ おっぱい気持ちいい？」

「き、気持ちよくなんかぁ……◆」

「可愛い……もつといじめたくなつてきちゃうじゃん◆ 香奈ちゃんに、ちんぼしやぶらせなくなつてきちゃった……◆」

わたしはごくりと唾を飲む。英梨先輩のギンギンに勃起してわたしのお尻をぐいぐい押してくるちんぼを、舐めしやぶる。想像するだけで卑猥だった。

でも、想像の中で英梨先輩のちんぼをしやぶるわたしの姿は、なんだか嫌ではなさそうで困惑してしまう。詩織のちんぼをおいしそうにしやぶっていた彩陽先輩の姿と、自分が重なつて、心がかき乱される。

わたしは、一体どうなつてしまうのだろう……？

「それは後にしてよね？ こんなところでフェラしてるの見つかったら、大変でしょ？ せめて部屋に入ってからにして」

「わかつてるって◆ 彩陽、そろそろ部屋に入ってもいい？」

「そうね、そろそろ香奈ちゃんも温まつてきたところだし……詩織ちゃんと美優先生、どこまでいったかな？」

彩陽先輩が扉の隙間から中を見て、くすくすと笑った。そして、わたしに隙間を覗くよう促してくる。

「ちようど、おもしろいところだよ◆ ほら、こっち」

英梨先輩に胸を揉まれて、なんともいえない心地よさで、頭がぼんやりとしてきてしまつていた。このままではいけない。そう頭の片隅で思いながらも、促されるままわたしは部屋の中を覗いてしまった。

部屋の中では、美優先生と詩織が、触れ合う距離で向き合っていた。

さつきから、扉の隙間から甘ったるい声が聞こえていたから、もともと覚悟はしていたけれど、目にするonyやっぱり衝撃的だった。

「美優先生……◆ んっ、ああ……◆」

詩織ははぁ、はぁと息を荒げながら、恍惚とした表情を浮かべていた。

普段通り、シャツにタイトスカートという教師らしい姿の美優先生に五センチくらいしかないちんぼを握られ、優しくしごかれている。ちんぼは限界まで勃起して、びくびくと悦

んでいた。

「先生におちんちん触られて気持ちよくなっちゃうなんて、いけない子ね」

「ふああ……」もつと、もつとシコシコしてください……」

「そんなこと言っちゃって」詩織ちゃんは素直なんだから」

美優先生は、につこりと妖艶な笑みを浮かべ、ねつとりとした手つきで手コキを続ける。

両手でちんぽを包み込まれ、根元から先端へ。先端から根元へ。柔らかく動く十本の指が詩織を追い立てていた。詩織は頬を桃色に染めて、目を緩ませて喘いだ。

「あっ……先生、そろそろお……」

「イっちゃいそうなのね？ いいわよ」そのちっちゃいおちんぽから、精液びゅっぴゅしちやいなさい……んちゅ」

美優先生は、夢見心地の詩織に顔を寄せて、唇を触れ合わせた。

女の子同士のキス。初めて見る光景だったけど、わたしは妙に興奮してしまった。後ろから英梨先輩に体をまさぐられて、ぼおとしながらも、二人が唇を合わせる様子を魅入ってしまう。

「んっ……」ふう……れろお」

「ちゅう……」詩織ちゃん、舌、出してえ……」

詩織は慣れていない感じだったけれど、美優先生は唇を触れ合わせるだけでは飽き足らず、詩織が一生懸命突き出した舌にしゃぶりついて、吸いたて始める。

じゅるじゅる……」という唾液が混じりあう卑猥な音が立ち、詩織は気持ち良さそうにあられない声を出した。舌を吸われているせいで、獣のような汚らしい声だ。

「あえ……」んん……へえ……」

「詩織ちゃん、可愛いわよ」れろ、ちゅばあ……」

「い、イク……」先生、わたしイっちゃいますう——んぐうっ」

びゅるっ」びゅるるるっ」

詩織の小さなちんぽから、白濁液がびゅっと飛び出して、布団の上を汚した。一部は先生の着ている服にまでかかってしまっている。

美優先生は詩織の射精が終わるまで、しっかりちんぽをしごき続けてあげていた。

涎のアーチを作りながら唇を離すと、詩織は緩み切った表情にされてしまっていた。

「あらあら……精子、すっごい勢いだったわね」うふふ、そんなに気持ちよかったの？」

「……もう、ダメですう」

「ええ？ これで終わりのつもり？ ふふ、まだまだ、詩織ちゃんには頑張ってもらわないと」

美優先生は、おもむろにシャツのボタンを外し始めた。ぼちぼちと外れるうちに、中に着ている紫色のセクシーなブラジャーが露わになる。

Gカップはありそうなボリューム感満載の巨乳が、ブラジャーから溢れ出していた。くつきりと谷間を作り、ふにふにと揺れている。

隣にいた彩陽先輩が、こそこそと囁いてくる。

「ほら見て、美優先生のおっぱい、すごいでしょ？ 香奈ちゃん」

「……すごく大きいです」

「今から、あのたふたふおっぱいで、詩織ちゃんを気持ちよくしてあげるんだよ」

「え……？」

わたしは、どのような光景が繰り広げられるのか、想像が追い付かなかった。

おっぱいで、ちんぽを気持ちよくする……言葉ではわかってても、一体どうしてあげるのか、理解できなかった。わたしはそういう知識にその時は疎くて、男の子がどういうプレイが好きだとか、考えたこともなかったのだ。

英梨先輩は、興奮しきっているのか、鼻息を荒くしながら、わたしの胸をますます強く揉んだ。

「香奈ちゃんのおっぱいもあのくらい大きければ、挟めたのに……」

「あんっ♥ 英梨先輩、そんなに揉まないでえ……」

「胸で感じられるようになってきてるじゃん。ここも触ってあげるね」

「んひゃっ♥」

体を貫いた鋭い感覚に、わたしは思わず声を上げてしまう。

英梨先輩がわたしの乳首をつまんでいた。胸を揉まれたせいですっかり膨らんでしまっていた乳首を、コリコリと刺激されて、わたしは仰け反ってしまふ。

これって、もしかして気持ちいい……？ わたしは、胸を触られて得ていた何とも言えない感覚が、快感と言われるものではないのかと、ようやく気付き始めていた。

本当はこんなこと、いけないはずなのに。いつのまにか英梨先輩に胸をもっと揉みたい、と思い始めてしまっていた。

「や、やめてください……♥ ああっ♥」

「そんなに蕩けた顔で言われても、やめてあげない♥ こっちも、そろそろビショビショなんじゃない♥」

「えっ……そ、そんなところ……んひいっ♥」

英梨先輩の手のひらが、そろそろとわたしの寝間着の中へと入ってきて、おへその辺りから、その下の股間へと伸びてきた。

くちゅ♥ と音が鳴った。いつのまにか、股間がヌルヌルした液体で濡れそぼっていた。どうして……そう考える前に、おまんこの割れ目を指で撫でられて、感じたことのないほどのあの感覚が体を駆け巡る。

「すっごい濡れてる♥ 香奈ちゃんも、わたしたちの仲間入りする日も近そうだね。いっぱい気持ちよくしてあげる♥」

「だ、ダメっ！ こんなこと……あんっ♥」

「気持ちいいくせに♥ ほら、見て。こんなにトロトロなのが、わたしの指にこびりついてるよ♥」

「ち、違う……それはっ」

「違うの？ それじゃあ、このエッチな匂いのするお汁は、なんなのかな？ ちゃんと答えて♥」

「でもっ、ちがう……ちがうんですう」

「もう、言っちゃいなよ♥ おっぱい触られて発情して、おまんこヌレヌレになっちゃいました、って♥」

英梨先輩の声が、わたしの頭の中に何度も響く。胸を触られて、おまんこがこんな風になっちゃうほど興奮してしまった——これまでエッチなことに興味のなかったわたしが、こんなことに。

新しい扉を開けてしまった気がしていた。ふたなりの女の子に首筋を舐められ、体を愛撫される。こんなに心地がいいだなんて、信じたくなかった。

それでも、この体の疼きは誤魔化せない。触られると、気持ちいい……わたしは、そのあまりにも簡単な事実を、初めて知ってしまった。

今だって、わたしのおまんこの奥の方が、何かを求めてトロトロと愛液を溢れ出させていた。英梨先輩の指が割れ目の中に入ってくると、ますますぐちよぐちよになってしまう。

「さ、触らないでえ♥ それ、気持ちいいから、ダメえ♥」

「やっど気持ちいいって、言えたね？ 香奈ちゃんもっともっと気持ちよくなれるんだよ♥ わたしに身を任せてごらん」

「んはあ……♥ほんとに、ダメ、だからあ……あっああっ♥」

「そんなに声出したら詩織と美優先生を邪魔しちゃうよ？ ほら、二人も気持ちいいコト、始めてる♥」

わたしが、目を戻すと、これを書いている今でも記憶に鮮烈に残っているほどの、例のアレを二人はやっていた。

立ち上がった詩織が、ちんぽを突き出して——美優先生の柔らかそうなおっぱいに、挟んでもらっていた。むしろ、埋もれていると言った方がいいかもしれない。詩織の小さいちんぽは、おっぱいでほとんど隠れて見えなくなっていた。

パイズリ。あまりにも卑猥で、わたしはますますおまんこが熱くなるのを感じた。

「詩織ちゃんのちんぽ、わたしのおっぱいまんこに、全部はいっちゃったわね♥」

「……せ、先生い♥ 柔らかくて、温かくて……んはあっ♥」

「ちんぽ、もうビクビクしてるよ。我慢しないと、すぐ終わっちゃいそう♥ 詩織ちゃん、頑張れ♥」

「気持ちよすぎですう……♥ 美優先生♥」

おっぱいで見えないけれど、詩織のちんぽはすでに、限界まで勃起して射精寸前に違いない。美優先生はそれを余裕の表情で眺めて、うふふ、と淫らに笑っている。

胸を手のひらで左右から押して、ふにふにとちんぽを刺激してあげている。

さらには、体ごと動かして、詩織のちんぽをしごいてあげると、詩織は甲高い嬌声をあげ

る。

「あっ◆ダメですう◆ 出ちゃいますう◆」

「先生のおっぱいに精子、気持ちよく出しちゃいなさい◆」

「あゝ あっ◆ またイクうつ——んうつ」

ぴゅーっ◆ ぴゅっ、ぴゅるっ◆

美優先生の胸にちんぽを入れたまま、詩織はびくびくと痙攣した。美優先生は、気持ちよく射精が終わるように、最後までびったりと胸でちんぽを挟んであげている。

やがて、谷間からお腹へ、とろとろと精液が垂れて流れた。詩織はちんぽを引き抜いて、その場にへたり込んだ。

「搾り取られちゃいましたあ……もう一滴も、精液出ません……◆」

美優先生は、唇の端から涎を垂らした詩織の頭を優しく撫でてあげるのだった。

一方、わたしは英梨先輩におまんこを指で掻き回され続けて、頭がぼんやりしてしまっていた。快感がこんこんと湧き上がってきて、すっかり体に力が入らない。

「な、なんか……英梨先輩……◆」

「うん？ そろそろ香奈ちゃんもイキそうなんじゃない？ ここ押してあげるから、いつちやいなよ◆」

英梨先輩は、おまんこの中で、指をおへそのほうへぎゅっと折り曲げた。裏側から、お腹を押されるような感覚と共に、強烈な快感としか言いようもないものがこみ上げた。

その時刺激された部分がGスポットといつ部位だと、わたしは後で知ることになるのだった。

わたしは声を出すこともできず、初めて「イク」ということを体験したのだった。

「~~~~っ◆!」

火花が散って、頭が真っ白になるようだった。

ひざに力が入らなくなつて、完全に英梨先輩に体を預けてしまった。おまんこが、きゅうきゅうと英梨先輩の指を締め付ける。

気がつくと、わたしは床に座り込んでいた。

「気持ちよくイケたね、香奈ちゃん◆ これ、しゃぶつてみなよ◆」

そして英梨先輩がいきなり口の中に指を突っ込んできて、わたしは何も考えられずそれを咥えてしまうのだった。

なんともいえない不思議な味——わたしは恍惚としながら、自分の愛液がこびりついた指をしゃぶらされていることをぼんやりと頭の片隅で認識した。それはまるで、自分の中にある欲情の味を、思い知らされるかのようだった。

〈香奈 三章〉

わたしは、その晩以来、宙ぶらりんな気持ちでいた。

英梨先輩に身体を触られて、嫌なはずなのに感じてしまった——自分が信じられなかった。

あの時のわたしは、どうかしていたに違いない。そう思い込もうとしたけれど、英梨先輩の指先、手つきを思い出すと、身体の奥に妙な疼きを感じてしまうようになっていた。

「わたし、どうかしてる……」

朝早く目が覚めてしまつて、わたしはぐっすり眠っている香奈を眺めながらひとり呟いた。

身体が覚えてしまつていた。英梨先輩に胸をまさぐられ、立った乳首を指でこすられる感触。

ヌルヌルに濡れてしまったわたしのおまんこに、英梨先輩の指が入ってくる……あの時の得も言われぬ感触。

その指先の記憶をなぞるように、自分で自分の身体をいじろうとしていることに気付いて、わたしは慌てて自分の胸から手を離れた。

体の奥がじん、と痺れて、何かトロリとしたものが溢れ出しそうになっていた。

「こんなの、ダメ……」

わたしは頭を振り、何もかも記憶から振り落とそうとする。美優先生の痴態、詩織のだらしなく緩んだ表情、彩陽先輩や英梨先輩のクスクスという笑い声……全部不快なはずなのに、体の奥が熱くなつてきてしまう。

「ん、香奈……？ おはよう、早いね」

詩織が目を開き、体を起こす。目を擦りながら、純粹そのものという感じでっこりとなたしに笑顔を向ける。

「おはよう、詩織。……あつ」

わたしは詩織の股間で、またしても寝間着を押し上げてちんぽが勃起しているのを見つけてしまう。詩織はそのことに気付き、恥ずかしそうにちんぽを手で押さえた。

「ごめんね、勝手にこうなっちゃうの……香奈ちゃんはこの、嫌なんだよね」

「うん。そんな風になっちゃつても、また美優先生や彩陽先輩のところには行かないでね」「大丈夫だよ。何度も言ってくれなくても、香奈ちゃんとの約束、覚えてるって」

詩織は辛さを隠すような笑顔を見せる。

わたしはあの後、ぼんやりとしながら詩織と一緒に部屋に戻った。快感に溺れて英梨先輩に身を任せてはいけない、このままではいけないと必死に理性を働かせて、強引に連れ帰ったのだ。

お互いに表情が快楽でゆるんでいて、どうすればいいかわからなかったけど、詩織はそんな状態のわたしも可愛いと言ってくれた。ひたすら恥ずかしいだけだったところにそう言われて嬉しかった。

でも、わたしは詩織があんな風にだらしなくちんぽから精液を飛び出させている姿をこれ以上見たくなかったから、詩織のことをきつく叱った。

美優先生や彩陽先輩に誘われても、ついていけないこと。それを固く約束させたから、今度こそ本当に詩織はちんぽ快楽に負けずに生活していけるはずだった。

「あの人たち、絶対おかしいよ……あんなに嬉しそうに、詩織のちんぽをしゃぶったり、おっぱいで挟んだり……おかしいよ」

「二人とも、いい人たちなんだけどな……香奈ちゃんがそう言うなら、もう会わないよ」

「わたし、美優先生が一番いけないと思うの。生徒たちがいやらしいことするのを黙認して……あの人がそういうことを止めるべきなのに」

「そう、だよな……本当は、いけないことだもんね」

「先生なのに、いやらしいことに参加して……最悪だよ」

「でも、美優先生って、優しいって評判良いよ。きっと何か理由があって、彩陽先輩とか英梨先輩を黙認してるんじゃないかな……？」

わたしたちはこの時、この学園のことを全然わかっていなかった。

彩陽先輩や英梨先輩以外に、あんなことをしている生徒たちはいないと思っていた。自分たちが見た物以外のところまで想像力を働かせていなかった。

わたしは知らなかった。二人とか三人とか、その程度じゃない数の女の子たちがこの学園のせいでちんぽが生えてきてしまっていたのだ。

もっとたくさんのふたなりの女の子たちがいて、その相手をしてあげている女の子たちがあんなにもたくさんいるだなんて。わたしがそのことを知る時は刻刻と近づいていた。

そもそも、どうして詩織にちんぽが生えてしまったんだろう？

わたしはそのことが気になって仕方なかった。勝手に生えてきちゃうだなんて、どう考えてもおかしい。

生えてきた理由がわかれば、消す方法もわかるんじゃないか。そういう考えが閃いて、どうにかその理由を突き止めようと、わたしは動き始めた。

謎を解くカギが何もないから、とにかく思いつく限りのことを試してみるしかなくて、わたしは最初に一番怪しいと思う人物を追いかけることにした。

美優先生の日を、追跡するのだ。

わたしが犯される快楽を知り、堕ちてしまうことになるその日、美優先生が先生たちが寝泊まりする寮を出て、校舎へ向かい始めるのを自分の部屋の窓から発見した。

「詩織、ちよっと行ってくるね」

「うん……頑張ってるね、香奈ちゃん」

詩織に見送られ、先生の後ろ姿を追いかけて足早に校舎に向かう。

その時間はまだ朝早くて、ほとんど校舎には誰もいない。美優先生は職員室に入っていて、わたしはこっそりと職員室を覗いた。

職員室には女の先生たちがたくさんいて、こんな早い時間から色々準備をしているのか、と全然関係ないところで感心した。

わたしは美優先生が出てくるまで、廊下の陰に隠れていた。結構時間が経って、生徒たちが大勢登校してきて、そろそろホームルームの鐘が鳴ろうかと言うくらいの時に、ようやく美優先生は再び現れた。

「うふふ、それでね……」

「……へえ、生徒会の新しい子かあ、楽しみね」

美優先生は、白衣を着た凜先生と並んで職員室から出てきて、廊下を一緒に歩いて行った。どうやら、抜群にスタイルが良い同士、二人は仲良しみたいで、笑い声が絶えない。

わたしは二人をこっそりと追いかける。凜先生が保健室に戻っていった、美優先生は一人になって、校舎の階段を上っていく。相変わらず、白いシャツと黒いタイトスカートがよく似合っていて美人さんだ。髪もちゃんと結っているし、メイクもばっちり。女の子らしいこの学校でも、毎日きちんとしている。

詩織とのあの痴態さえ見る前は、わたしも美優先生ことは好きだった。

その後ろ姿に思わず憧れながら、別の可能性についても考えていた。

——そういえば、凜先生も怪しいかも。

一番最初に、詩織に生えてきたちんぽを、何の驚きもなく受け入れて、射精を促してあげていた姿が脳裏に蘇る。すっかり慣れ切っていた仕草で、これまで似たようなことを何度もしてきたかのような雰囲気があった。

とりあえず、美優先生を追いかけた後、凜先生のことも探ってみようと思って、わたしは美優先生が二年生の教室へ向かうのを見届けて、自分の教室に戻った。

お昼休み、わたしは慌てて自分の教室を出て美優先生が二限に授業していたはずの教室へ向かう。お姉ちゃんに連絡して二年生の時間割を確認すると、ちょうど担当している「2―D」で授業しているということだった。もしかしたらもうどこかに行ってしまったかと思つて小走りで向かうと、思わず別の人と出くわした。

お姉ちゃんが、教室から綺麗な金髪の同級生の子と一緒に出てきた。

「あれ、香奈じゃない。こんなところで何してるの？」

「お姉ちゃんっ、今お姉ちゃんと話してる暇はないのっ」

「なによそれ、香奈のばーか」

べー、と舌を出されて、わたしも舌を出し返す。お姉ちゃんとは、いつもこんな感じだ。別に仲が悪いわけではなく、機会があるとよく一緒に出掛けたりしていたけど、すごく仲が良いわけでもない。

お姉ちゃんのほうからよく絡んでくるのだけど、この学園に来てからというもの、ちつともそんなことはない。きっと他に良い友達が出来てわたしに構っている暇はないんだろ

うなと思う。

気を取り直して教室を覗くと、美優先生は教壇でプリントを整えて、ちょうど出てこようとしているところだった。わたしは慌てて目を反らしたけど、見つかったしまった。にこりと微笑んで、わたしに話しかけてくる。

「あら、香奈ちゃん。この間の夜は楽しかったわね？」

「……全然楽しくありませんでした」

「あら、そう？　香奈ちゃんはお姉ちゃんと一緒にご飯かしら？　わたしも生徒会の人々と一緒にご飯食べてくるね」

「生徒会、ですか？」

「そうよ。わたし、生徒会の顧問で、生徒会の子たちと仲が良いの。ほら、そこで待ってくれてるわ。三年生の夏希ちゃん」

美優先生の視線の先を見ると、可愛い女の子がドアのところでニコニコしていた。

細い体のわりに、やたら大きなおっぱいの先輩だ。女のわたしでも触ってみたいと思ってしまうほど。その姿を見て思い出した。夏希ちゃんと呼ばれたその子は確か、生徒会長だったはずだ。何かの冊子に、顔が載っていた。

生徒会でご飯を一緒に食べるというのは、どうやら本当の事らしかった。

「それじゃあね、香奈ちゃん。また彩陽ちゃんの部屋で会えるといいわね」

美優先生は、また含みのあることを言って教室を出て行った。夏希先輩と並んで歩き、楽しそうに話している。どうやら詩織の言う通り人当たりがいいのは間違いなさそうだった。生徒会室に行くというのなら、妙なことはしないだろう。生徒会役員の人たちが一緒にいるのなら問題ないはずだ。

わたしはお腹も減っていたし、教室に戻って詩織と一緒にご飯を食べに食堂にでも行くことにした。

放課後も、わたしはすぐに教室を出て、「2―D」へと向かう。

再び教室を覗き込むと、美優先生はすでにそこにはいなかった。その代わり、机に突っ伏しているお姉ちゃんと目が合って、なんとなく話しかけてしまった。

「お姉ちゃん、また机で寝てたの？　相変わらずだらないなあ」

「うるさいなあ、ちよつと具合が悪くて突っ伏してただけよ」

お姉ちゃんはなんだか顔が火照っていて、本当に熱でもありそうだ。ちよつと心配になって気遣ってあげようかとも思ったけど、お姉ちゃんだからいいや、という結論に落ち着いた。「香奈こそ何してるの？　お昼休みも来てたよね？」

「なんでもないってば。こっちの話だから、お姉ちゃんには関係ないの」

「それならどっか行つてよ、今色々やばいんだから……」

よくわからないけど、本人がそう言うなら間違いない。肩をすくめるくらいしか出来なかった。

わたしは素直に言うことを聞いて、じゃあね、とその場を後にした。

とにかく美優先生を見つけないといけない。わたしは職員室にいるんじゃないかと思当をつけた。

向かっている途中に、美優先生が保健室から出てくるところにばったり出くわした。

「あら、今日はよく会うわね？」

美優先生は微笑んで、階段の方へ歩いて行った。わたしは適当に会釈しながら、行き先を考える。階段のほうへ行っただけということは、寮へ戻るというわけではなく、校舎の中にまだ用事があるということだ。

もしかしたら生徒会に関係することなのかもしれない。そう考えつつ、わたしは嫌な予感がしていた。

——また保健室だ。

やっぱり、何かあるのはこの保健室なのではないかと思って、ごくりと唾を飲む。

美優先生は特別な理由がなければ保健室に寄ることなんてないはずだ。体調が悪いようには見えなかった。これは絶対に、何かある……。

「中で、何やってるんだろう……」

わたしは扉の隙間が少し空いているのを見て、また顔を寄せて覗こうとした——その時、ガラリと向こう側からドアが開けられた。

「あっ」

そこにいた女生徒を見て、心臓がドクン、と変な動き方をした。

八重歯が口もとに光る一つ上の生徒——英梨先輩。あの時の記憶が一気に蘇って、わたしは体の奥がじいんとなってしまった。

英梨先輩はわたしを見てにやりと笑う。

「あれ、香奈ちゃんじゃん。何してんの」

「た、ただの通りすがりですけど……」

「ふーん……もしかして暇してる？ それなら付き合ってよ」

わたしは強引に手を引かれて、保健室に連れ込まれてしまった。抵抗しようと思ったけど、怖くて力が入らなかった。びしょりと後ろでドアを閉められてしまう。

保健室には他に、凜先生がいた。わたしを見つけると無理やりわたしの手を引く英梨先輩を見て驚いた表情を見せた。

「あらあら、何してるの、二人とも？」

「た、助けてください……！ わたし、保健室に用事なんてなくて……」

「まあまあ……そんなに暴れなくてもいいじゃん」

見世物でも見るような顔の英梨先輩は、わたしが嫌がっているのを見て舌なめずりをした。凜先生が傍ににいるのに、意にも介していない。

見かねたように凜先生に注意されても、全然気にしていないようだった。

「英梨ちゃん、強引なのはダメよ」

「先生、違うんです。この子、本当はシたいくせに、それを認めようとしただけなんです

よお♥ ほら、この間、わたしとどんなことしたか、凜先生に言ってみなよ♥」

「い、嫌です……！ 離してくださいっ」

わたしはなんとか英梨先輩の腕を振り切った。すぐに逃げ出そうかと思ったけど、そこに凜先生が思いもよらないことを言ってくる。

「香奈ちゃんったら、英梨ちゃんとそういう関係になったのね……意外だわ♥ こういうちよつと強引な子が趣味だったのね♥」

まるで、英梨先輩のことを認めるような口ぶり。もしかして、この人も美優先生や、彩陽先輩と仲間になって、やらしいことをしているんだろうか。

以前詩織にああいうことをしてあげたのは、仕方ないからじゃなかったんだろうか。ふたりの女の子たちみんなに手を貸して、凜先生も楽しんでいたりするんだろうか。

わたしは、自分の周りに仲間が一人もいないんじゃないかという恐怖に襲われた。頭の中でそれを否定する。わたしは間違っていない……あんな風にいやらしいことをするのは、普通じゃないはずだ。

「今、すつごくムラムラしてるんだよね♥ ちょっとだけでいいから、エッチなことさせてよ♥」

「や、やめて……！」

「そうだ、今日のパーティー、友梨佳ちゃんも来るらしいけど、香奈ちゃんのお姉ちゃんなんだって？ 確かによく見ると顔つきとか似てるね。美少女姉妹じゃん」

「お姉ちゃん……？ お姉ちゃんがどうかしたの？」

わたしは、急に知らないことを語りだす英梨先輩を見つめた。

パーティーって？ お姉ちゃんが、この人と知り合い？ 何もかもが意味不明で、わたしは頭の中がぐちゃぐちゃになっていく。

「あれえ？ 知らないの？ 友梨佳が今、どんな風になってるか。姉妹でベタベタするほど仲良しってわけじゃないとは聞いてたけど、まさかそんな大事な話もされてないの？」

「お、お姉ちゃんにもわたしにしたような、いやらしいこと、してるの！？」

「あははっ、香奈ちゃん、何にもわかってないね。可愛い♥」

いくらなんでも、わたしは怒りが湧き上がってくるのを抑えられなかった。

英梨先輩は、わたしや詩織だけでなく、お姉ちゃんやもつとたくさんの人に、ああいうやらしいことをして、めちゃくちゃにしているんだろうか。

わたしみたいな嫌な思いをしている人が、この学園にはたくさんいるのだろうか。なんてひどい学園なんだろう。わたしは今すぐにでも逃げ出したい気持ちでいっぱいになった。

睨みつけるわたしを見て英梨先輩はおかしそうに笑った。

「やめてよっ！ お姉ちゃんにもひどいことしてるの？ 許せない！」

「だから、何にもわかってないよ、香奈ちゃんは。香奈ちゃんのお姉ちゃんはこれから生徒会室で、生徒会長の夏希先輩に童貞を卒業させてもらうところだよ。女の子とのセックスにハマって、抜け出せなくなっちゃうところ♥」

「な、なに言ってるの……？」

「友梨佳ちゃんは、ふたなりになっちゃったんだってば。香奈ちゃんの友達の時織ちゃんみたいに」

わたしは何を言っているのかわからなくて、ただただ哑然とした。

お姉ちゃんが、ふたなりに……？ あのスカートの下には、ちんぼが生えているのだろうか？ そんなはずはなかった。さっきまで、わたしと普通に会話していたのに。

きつと、この人は嘘をついている。わたしはそう確信した。ありえないことだった。わたしを騙して、その気にさせて、いやらしいことをしようとしているに違いない。

「う、嘘……！ お姉ちゃんは、ふたなりなんかじゃないよ……！」

「絶対嘘だよ……そんなわけないもん……！」

「それなら、証拠見せてあげる。先生、例の学生のリスト、見せてよ。この学園の女生徒たち全員を載せたリストを。その机の中に入ってるでしょ？」

英梨先輩は、机でわたしたちの言い争いを傍観していた凜先生に言った。

凜先生は机からファイルを取り出しながら言った。

「ああ、友梨佳ちゃんの妹さんだったのね？ 友梨佳ちゃんのちんぼは発育がよくて、すごく大きかったわよ」

「な、なに言ってるんですか……凜先生？」

「そういえば、ここ保健室で、精通させてあげたわね。そのベッドだったかしら。ちよつと懐かしいわ。すごく気持ちよさそうに射精してて印象的だったわ」

「ここに書いてあるでしょ？ 友梨佳、って文字。よく見て」

英梨先輩は何枚も紙が入ったファイルを受け取って、わたしの顔の前に突き付ける。

そこには、学年順、出席番号順に生徒たちの名前が羅列されていた。そのうち、三分のいくらいの名前に、赤い丸印がついている。

「赤い丸印がついているのが、ふたなりの女の子。たくさんいるでしょう？ この学園の女の子たちはふたなりばかりなんだよ」

どのページも、赤い丸印で埋め尽くされていた。

全身に鳥肌が立った。この学園そのものが、どうかしている……途方もない絶望感に襲われた。

いやらしいことはいけなことだ。そういう、わたしと同一ような考えを持った人は、この学園にはいないんじゃないか。その感覚が唐突に現実感を持って降りてきた。とんでもない場所にわたしは転校してきてしまったのではないか。

ちんぼが生えてきて、射精せずにはいられなくなってしまう女の子たち。この学園は、そんな存在で埋め尽くされているのだ。きつとわたしが知らないだけで、同じクラスのあの女の子も、水泳部のあの先輩も、ちんぼが生えていてわたしのことをいやらしい目で見ていたのかもしれない。

足がすくんで、わたしはその場にへたりこんでしまった。力が入らないのだ。どうすればいいかわからなかった。ただただ茫然としていた。

英梨先輩はリストの何か所に指を当てて言った。

「これが香奈ちゃんのお姉ちゃんだね」

友梨佳と言う名前。そこにはしっかりと赤い丸印がついていた。

はつきりとした証拠が目の前にあった。いつの間に、お姉ちゃんはふたなりになってしまったのだろうか？ 今頃、ちんぼが疼いてしょうがなくて、誰かに精液を出してもらうために徘徊しているのだろうか。

凜先生はへたり込んだわたしを、少し憐れむような視線で見ながら説明してくれた。

「これは仕方のない現象なの。〈病気〉のようなものだ」とわたしは考えてるわ。もともと普通の女の子だったのに、一定の割合の女の子たちに男性器が生えてしまう。この学園で生活している女の子たちに広まる伝染病のようなもの……常識で考えたらありえないことだけど、それは実際にこの学園で起こっていることなのよ」

「〈呪い〉だって言ってる子たちもいるよ。勝手にちんぼが生えてきて、その女の子を乗っ取ったみたいに、射精することばかり考えさせるんだからね。科学じゃ説明できないじゃん？ この学園に伝わる、何年も前から脈々と引き継がれてきた呪い……でも、わたしはその呪いが自分にかかってよかったと思ってるよ？ だって、こんなに気持ちいい思いが出来るんだもんね」

英梨先輩が、自分のスカートをたくしあげる。

そこには、黒つぶいちんぼがガチガチに勃起してわたしを向いていた。目の前に猛々しいそれを突き付けられると、腰が抜けたようになってしまった。

「や、やめてください……英梨先輩」

「香奈ちゃんみたいな子に、前から啞えさせたかったんだよ♥ ほら、口開けて♥」

「い、いやです……きやあつ！」

わたしは、英梨先輩にがつしりと顔を掴まれてしまう。同じ女の子で、それほど力は強くないのに、わたしのほうが力が入らなくなってしまうって、抵抗できない。

そのまま唇にちんぼを押し付けられて、わたしは異様な気分に見舞われていた。

これから、英梨先輩にめちやくちやにされてしまう……嫌なはずなのに、以前英梨先輩に胸を揉まれたり、おまんこに指を入れられたりしたときの記憶が蘇って、胸がドキドキしてしまっていた。

これは興奮なのかもしれない……認めたくなくても、体が反応してしまっていた。

「ん、んううっ！ ちんぼ、そんなにくっつけないでえ……」

「言葉だけ嫌がっても、本当はちょっと期待してるの、わたしにはわかるからね♥ 他の子たちも、こういう風に堕ちていったんだよ。彩陽だってそうだった♥」

「あ、彩陽先輩が……？」

「最初からちんぼを舐めるのが好きな女の子なんて、いないじゃん？ わたしが調教した

んだよ♥」

「そんな——んぐうつ！」

声を上げたところに、無理矢理ちんぽをねじ込まれてしまった。口の中に固い棒が強引に侵入してくる。

独特の味が口の中に広がる。わたしは顔を押さえつけられたまま抵抗できず、その味を覚え込まされた。

「おいしいでしょ？ 彩陽はおいしいって言ってくれるよ、わたしのちんぽ♥」

「や、らめへ……んぐうつ！ んごお、ううつ！」

「ほら、ちゃんとしゃぶってよ……舌を絡みつけて、涎をまみれさせるの♥ ……あんっ♥ そうだよ、それそれっ」

どうしていいかわからずに、言われる通りちんぽをぺろと舐めると、英梨先輩は嬌声をあげた。

意外にも甘ったるい声。こんなに可愛い声で喘ぐんだ、とわたしは妙な感情を覚えてしまった。可愛い——こんなに醜悪なちんぽを舐めさせられているのに、こんな感情を抱くのは異様だと思いながらも、わたしは英梨先輩のちんぽを舐め続けてしまう。

口を塞がれて、悲鳴をあげることも、こんなことを間違っていると主張することも出来なかった。

「あつ、あはあ……♥ いいじゃん、わかってるじゃん、香奈ちゃん……♥」

「んう……じゆるうう、んぐぐ……」

「そうそう、しゃぶりついて、精液を吸い出すみたいに……んひっ♥」

やたら気持ちが良いように、英梨先輩はカクカクと膝を震わせる。その声は、切羽詰まったもののへと変わっていった。

「あゝ♥ 香奈ちゃんみたいな子を開発するのが、一番興奮する♥」

「んうつんうつ！」

「はあっ♥ これで香奈ちゃんも、わたしのものだね♥ ああつ、イク、すぐイっちゃう……くうつ！」

びゅーっ！ びゅくくっ！ びゅるっ！

口の中に、何かが一斉に雪崩れ込んできた。大量のねばねばした液体。

わたしはその独特の舌触りに、一瞬怯んだけれど、そのまま英梨先輩のちんぽを吸い続けてしまう。どんどん先っぽから液体が出てきて、わたしは反射的にそれを嚥下してしまった。ごくり、ごくり……英梨先輩の身体から出てきたものを、飲み込んでいく。熱い液体が喉を通って、お腹にまで落ちていくのが分かった。

「んはあっ」

一通り出し終わったところで、英梨先輩はちんぽをわたしの口から引き抜いた。たばたばと、唾液が床にこぼれる。

英梨先輩はそのまま、床に座り込んで、はあ、はあと息を荒げて余韻に浸る。

「……ふう◆ たまんなかったよ、香奈ちゃんのくちまんこ◆」

「わたし……英梨先輩に、口の中で……」

「ふふ、初めての相手の、彩陽のこと思い出すなあ◆ 最初は今みたいに香奈ちゃんみたいに茫然としてたけど、今じゃ自分から喜んでちんぽを咥えるからね◆」

英梨先輩はそう言って、余韻から戻ってきて、すっと立ち上がった。

「わたし、今日は大忙しなんだよね。本当はもっとここで香奈ちゃんといろんなことしたいけど、実は待たせてる人がいて。生徒会室で、美優先生が待ってるんだ。また今度、たっぷり本番セックスしようね◆ じゃあね」

そして、保健室のドアを開け、外へと出て行ってしまった。

生徒会室。美優先生——危険なワードばかりだ。追いかければいけないと頭の片隅で思いながらも、口内を犯されるという初めての体験に圧倒され、わたしはその場でへたり込んだまま動けなかった。

英梨先輩が出て行った後、凜先生が声をかけてくる。

「もしかして香奈ちゃん、英梨ちゃんの精液、全部飲んじゃったの？」

凜先生が、口に手を当てながらおかしそうに言った。

さっきから、わたしたちの行為を傍観していた凜先生。わたしはふと思った。どうして、この人は女生徒たちのリストなんか作っていたんだろう。

どう考えても、この人はおかしい……普段浮かべている優しげな笑みに裏があるのではないか——そんな疑念に襲われた。

そして、わたしはこの時、その疑念が正しいものであったことを証明する異様なものを目撃することになるのだった。

それはこの学園のもう一つの秘密であり、この〈ふたなり〉という現象のもう一つの側面なのだった。

凜先生は、この時わたしにわざわざそれを説明してくれた。それはぎよつとする言葉から始まったことを、今でもはっきりと覚えている。

それはまさに〈呪い〉と呼ぶにふさわしいものだった。異変が起きているのは、ふたなりの女の子だけではないということを、わたしは思い知ることになるのだった。

「一回精液を飲んじゃえば、きつとわたしたちと同じになれるわよ◆ 最初は嫌かもしれないけど、すぐに良さがわかってくるわ」

その場から動けないわたしに、凜先生はそう言った。

——わたしたちと同じ。どうということだろう？

うふふ、と笑う凜先生に、わたしは底知れない影を感じた。

この人は、わたしとは根本的に違う存在なのではないかと言う直感が来た。

そして同時に、わたしは自分のお腹に熱さを感じて手を当てた。英梨先輩の精液がここに入っているのだとはつきりわかった。

「……んっ◆ な、なにこれ……」

お腹の中に入ってきた精液の熱さが自分に浸透してくるような奇妙な感覚を得ていた。凜先生は、机に置いてあった白い液体の入った試験管を手に取り、目の高さに掲げた。

わたしはその液体が何だろうとは以前から思っていたけど、今ようやく、そこに入っている白い液体がふたなりの生徒が出した精液なのだと察していた。

初めての精飲を体験して茫然しているわたしに、試験管をゆるく振りながらゆつくりと説明した。

「わたしはね、この（ふたなり）という現象に興味を持って、わたしなりに研究していたの。こうやって、精子を採取したりしてね。成分を分析したら、ごく普通の、男の子が出すのと同じ精液だったんだけど……驚くべきことがわかったの」

「驚くべきこと……？」

「ふたなり精液には特殊な効用があるのよ。これも、説明する科学的根拠はないんだけど……それを摂取した女の子を発情させるっていう、信じられない効用がね」

わたしは、今飲み込んだたっぷりの精液がじわじわと体の中で広がっていくのを感じながら、わたしの中で変化が起きるのを感じていた。

何かが吹っ切れていた。わたしはちんぽを咥えてしまった。口の中で射精されてしまった。穢れてしまった存在になったという自覚があった。

そして、今したことが、自分を別の何かへと変えていくのだという途方もない理解が訪れていた。まるで、初めてセックスを体験して、世界が変わったかのような認識の変化があった。

これは、たとえいやらしいことでも、必要なことなんだ――

「つまりこれは媚薬みたいなものよ。そしてそれだけじゃない。もう一つ効用があるの」

「もう一つの効用……？」

「見ていればわかるわ。さてと」

凜先生は試験管の蓋を取った。

「わたしも、ふたなりの生徒に無理やり犯されたことがあるの。精液を体内に摂取してしまったその日から、わたしの中にまた犯されたっていう感情が生まれたわ」

「そんな……」

「でも保健室の先生であるわたしまでしょっちゅう発情していたら、この学園はめちゃくちゃになっちゃうでしょう？ だから、わたしはこれで我慢することにしてるの……これで、ね」

凜先生は、試験管を口の前で傾ける。

――そして、ありえないことが起こった。

「れるお……んぐ、んぐ……これを飲むだけで、ちょっと満足できるのよね♥」

舌を伸ばした凜先生。

傾けた試験管の口から溢れ出した精液を舌で受け取り、こくこくと飲み込んでいく。

――伸びた舌。これは、比喩ではない。

文字通り、凜先生の舌は通常の人間ではありえないところまで伸びて、精液を舐めとっていた。

鼻の頭から顎の下まで届きそうな、異様な長さの舌——凜先生はそれを駆使して精液を集め、試験管に入っていた分すべてを飲み干した。

すると、その長い舌が口の中に戻っていく。そんなに長い舌が口の中にあつたことに、これまで気付かなかった。

わたしはその姿を見て、不気味ささえ感じていたが、凜先生は空の試験管を机に置き、いつも通りにっこりと笑顔を浮かべるといつも通りの凜先生に戻っていた。

「ふう、美味しかった♪」

今のはいったい、なんなのか——

この学園は、どう考えても普通じゃない。わたしは戦慄に襲われながらも、体の奥が熱くなってくるのを感じていた。

わたしは英梨先輩の精液を飲んでしまった。身体にじんわりと浸透してくるのがよくわかった。

体温が上がって、身体の奥が疼きだす。以前英梨先輩に身体をまさぐられた記憶が、勝手に蘇ってくる。

その媚薬効果が、現れようとしていた。気持ちよくなりたい……その感情が、ふつつと湧き上がってくるのだ。

〈友梨佳 四章〉

わたしはふたなりとして学園生活を送る中で、悶々とした気持ちを抱くようになっていた。

この女子校で一緒に生活している可愛い女の子たちを、自分のものにしたいという気持ちが日に日に強まっていたのだ。

凜先生や彩陽に処理してもらうだけでは物足りない。もっと気持ちがいいコトをしたい……想像する中で、ひときわやってみたいことがあった。

女の子を、犯したい——おまんこにちんぼを思い切り突き込んで、めちやくちやに動かしたい。ちんぼが生えてくる前は男の子の「やりたい」という気持ちはさっぱり理解できなかったけど、今なら痛いほどわかった。

色々なプレイを体験するうちに、どんどん欲望が大きくなっていくのだ。

最初は手でももらうだけだった。順々に、フェラチオやパイズリをしてもらって、ついにこの間、紗耶香が彩陽のおまんこにちんぼを突き立てるところを見てしまった。

わたしもあれをしたい。女の子の大事なところに、自分のちんぼを突き込みたい。ついに、わたしはその段階にまで来てしまっていた。

「……はぁ」

何気なく廊下の方を見ていると、妹の香奈がこっそりとわたしの教室を覗いているのが見えた。目が合うと、香奈がわたしの机のところに歩いてきた。

「お姉ちゃん、また机で寝てたの？ 相変わらずだらないなあ」

「うるさいなあ、ちよつと具合が悪くて突っ伏してただけよ」

香奈は見た目はわたしによく似ているけど、性格は結構違う。わたしと違って、神経質と云うか、理屈っぽいというか、どうでもいいことをイチイチ考える面倒くさいところがある。妹のくせにわたしより胸が大きいところも嫌いだ。

それでも、ずっと子供のころから一緒にいるだけあって、口喧嘩はよくしても仲は良い。

「香奈こそ何してるの？ お昼休みも来てたよね？」

「なんでもないってば。こっちの話だから、お姉ちゃんには関係ないの」

「それならどっか行つてよ、今色々やばいんだから……」

机の下でちんぼはびんびんに固くなっている。

元氣よく勃起するちんぼに呆れるような嬉しいような気持ちになりながら、わたしはスカートの上からちんぼを触ってみる。石みたいに固くて、わたしの指の一回りも二回りも太い。

最近、はつきりと自覚することがあった。

——ちんぼが、前より大きくなってきているのだ。

この間、紗耶香や彩陽とエッチなことをしたときにも二人に言われて気付いて、あの時から意識し始めたのだけど、ようやく今になってその成長具合に自分でも驚き始めていた。ふたなりになったばかりの時と比べて、長さも太さも、段違いだった。定規で計ってみると、一番勃起しているとき、長さは十七センチくらいあった。

ふたなりになってから、何度も何度も射精していたから、鍛えられたのかもしれない。そんな馬鹿なことを考えながら、嫌な気はしなかった。

大きいちんぼのほうが、挿入したときに女の子も気持ちいいし、わたしも気持ちいいと彩陽に聞いていたから、わたしははやく試してみたくてしうがなかった。

香奈は肩をすくめたかと思うと、じゃあねと言って教室から出て行ってしまった。しばらくの間、突っ伏していると眠くなってきて、わたしは眠ってしまった。

「ゆーりかつ」

声をかけられて目を覚ますと、紗耶香と彩陽が来ていた。二人とも、なんだか嬉しげに頬を緩ませている。

「友梨佳さん、今日はこの後、予定を入れてませんわよね？ 今日がなんの日か、忘れていませんこと？」

「えーっと……なんの日だっけ」

「友梨佳って、前から思ってたけど結構ズボラだね」

「そんなことないってばー」

「それなら、今日の放課後、何があるんだっけ？」

「あ……思い出した！ 生徒会のパーティーー！」

そう、今日はあの夏希先輩に誘われた生徒会のパーティーが行われる日だった。

わたしはあの日以来ちょこちょこ生徒会に遊びに行っていたけれど、準備はほとんど手伝っていないかった。新入りだからという理由で、免除されていたのだ。どんなパーティーを行うかすら知らされずに、秘密にされたまま、今日まで来てしまった。

何をするのかわからない期待でいっぱいだったし、三年生の夏希先輩のことを思い出すだけでも気分が晴れやかだった。細いの、胸はびっくりするくらい育っている抜群のスタイルの良さと、物腰の柔らかさ——あの人に会えるというだけで上機嫌だ。

「彩陽もパーティーに呼ばれてたんだ。生徒会の役員じゃないのに」

「もちろん。わたしはパーティーで大事な役回りだからね♥ それじゃあ行こっか」

わたしは二人に連れられて、浮き浮きしながら廊下を歩いていく。

その途中、急に彩陽が囁きかけてきた。

「ねえ、友梨佳はこのパーティーがどういうパーティーだか知ってるの？」

「どういうパーティーって？」

「知らないんだ、友梨佳。紗耶香、教えてあげなかったの？」

「わたしも、何も知らずに生徒会に入りましたわ。最初のパーティーの喜びは格別でしたのよ。友梨佳にもそれを味わってほしくて、これまでずっと内緒にしてきましたの」

「なるほどね……そういうことなら、わたしも教えてあげない」

「なにそれ、気になるよお」

何度も聞いても答えてくれなかった。わたしは色々想像しながら、廊下を歩いていく。

夏希先輩たちが用意してくれたパーティー。きつと楽しいに違いない。

ただ、わたしの脳裏に最初に生徒会に行った時の記憶がよみがえる。机の下でわたしの太ももを撫でてくれた夏希先輩のいやらしい手つき。

その淫らなイメージが、なんだか忘れられずにいた。

そしてわたしはふと気づいた。隣にいる紗耶香は、最初わたしに発情して、襲い掛かってこようとした時と同じように頬を赤らめていた。股間を見ると、どうやら勃起しているらしかった。

これからパーティーだというのに、なぜそんなことになっているのか。そこまで考えて、ありえるかもしれない一つの答えが思い浮かんだ。

——まさか、そんなわけ……

わたしは自分の中でそれを笑い飛ばしたが、さっきの彩陽の意味深な口ぶりを考えると、ますますその可能性が高くなっていく気がして、ごくりと唾を飲んだ。

「あら、こんにちは友梨佳さん♥」

廊下の角から、待ち望んでいた人物が現れた。

夏希先輩。胸は大きいのにほっそりとした相変わらず理想的な容姿。今日もわたしに微笑みかけてくれたかと思うと、やたらボディータッチしてくる。わたしの手のひらを両手で包み込んで、引っ張った。

「待ってたわよ。一緒に行きましょう？」

わたしは高揚感でいっぱいになりながら、夏希先輩に手を引かれるままに生徒会室へと向かっていく。

紗耶香と彩陽が後ろからついてきていても、こうして手を握ってもらって、目線を合わせてもらうと、まるで二人きりになったかのように錯覚してしまう。

「今日はね、特別なお楽しみを用意したの。友梨佳さんにもたっぷり、気持ちよくなってもらえるはずよ♥」

「気持ちよく……ですか？」

「そうよ。友梨佳さん、今日はここの具合はどう？ ふふ♥」

手のひらが股間に伸びてきて、スカートを押し上げているちんぽを布の上からさわさわと触られた。

信じられない気分だった。わたしがふたなりであることを夏希先輩は、当然のように扱ってくれている。そのことも驚きだったけど、わたしのちんぽを優しく撫でてくれることがうれしくてしよがなかった。

「あっ……♥ 夏希先輩、そこ、ダメですって……っ」

「いい勃ちっぷりね♥ 水泳部の彩陽ちゃんに聞いたけど、すごいおちんちん大きいらし

いじゃない？ このスカートをまくり上げて実物を見るのが楽しみ◆」

「夏希先輩……！？ わたしがふたなりってこと、知ってたんですか……？」

「友梨佳さん、わたしたちは、そういう組織なのよ◆ 生徒会っていうのは建前で、最初からそのために集まっているの。あなたを誘ったのも、そういう意図があったからに決まっているでしょ？」

「え……？」

「もう、先客がいるみたいね。もう始めちゃってるかもしれないわ。ドアを開けてみて」生徒会室からは、ほんの少し、喘ぎ声のようなものが漏れ聞こえてしまっていた。

ドアに恐る恐る手をかける。わたしは紗耶香や彩陽、そして夏希先輩たちが一緒になってわたしに隠しごとをしていたことがちよっぴり怖かったけど、それよりも中で何が起きているのか、真実が知りたいという気持ちが強くなってしまっていた。

そして何より、夏希先輩がわたしのちんぼを触る手つきのいやらしさに、様々なものを期待してしまつて、余計な思考を許してくれなかった。

ドアを開くと、そこには二人の女の子が折り重なつて、嬌声をあげていた。

「美優……先生っ◆ はあっ◆」

「英梨ちゃん、いい調子よ◆ あんっ、いいわ、もっと突いてえ◆」

そこにある光景が目には焼き付いてしまった。

いつも通り白いシャツの美優先生が、生徒会の机の上に横たわつて、股を大きく開いていた。黒いタイトスカートと下着は脱ぎ捨てられ、床に放り出されている。

その美優先生の足の間で立ったまま腰を振るのは、わたしの知らない女の子だった。着ている制服は少しよれているし、スカートからシャツ出していて、だらしない印象だ。開いている口から鋭い八重歯垣間見える。

足元に脱いだ下着が落ちていいる。スカートを履いたまま、ちんぼだけを出してセックスしていた。おまんこを出入りする血管が浮き出した黒っぽい色をしたちんぼ。

二人とも、快楽に表情を歪め、たまらなそうに喘いでいる。

「ああ◆ 先生のおまんこ、たまらないい……◆ もっともっと突きまくりたくなっちゃうじゃん……ふあぁっ◆」

激しく出し入れされるちんぼが、愛液を掻き出している。

じゅぽっ、じゅぽっ、といやらしい音が結合部から聞こえてきていて、わたしは英梨ちゃんと呼ばれたふたなりの女の子のちんぼが、美優先生のおまんこを犯しているその姿から目を離せなくなってしまった。

夏希先輩が、慣れた口調で言う。

「ねえ、ちよっとフライングしすぎなんじゃないかしら、二人とも」

「いいじゃない、夏希ちゃん◆ 善は急げ、よ……んっ、ああ◆ こんなに気持ちいいコト、我慢するなんて体に毒なんだから◆」

「そうだよ、夏希先輩。わたしもずっと先生とやりたくてやりたくて仕方なかったんだから

さ◆ はあ、はあっ◆」

普段、お菓子を食べながら談笑を楽しむ場として使われていた生徒会室。そこが淫行のための場と化していた。まるで夢でも見ているかのような非日常感。

二人の行為に思わず魅入ってしまいながら、自然にかすれた言葉が漏れた。あまりにも卑猥な光景に感情が追い付かなくても、言葉が反射的に漏れたのだ。

「これが、パーティー……?」

「そうよ◆ 楽しんでいつてね、友梨佳さん。まずは一旦、この場の雰囲気慣れてもらうのが手っ取り早いかしら◆ 英梨と美優先生のセックス、すぐく見応えがあると思わない?」

英梨は美優先生のシャツに手をかけて引っぱり、ボタンを乱暴に外した。いやん◆ と美優先生が声を上げ、いくつかのボタンが弾け飛んだが、二人ともそんなことは気にしていない。それほどお互いに夢中になっていた。

ブラジャーに包まれた丰满なバストが露わになる。英梨は待ちきれないと言わんばかりにブラジャーを急いでずらすと、大ぶりの乳首が現れる。

「先生のおっぱい、おっきい◆ 我慢できない……モミモミするね◆」

「いいわ、強く揉んで◆ あんっ、乱暴なくらい、つよくっ◆」

英梨はぎゅっ、ぎゅっと言音が出そうなくらい、そのポリウムたっぷりのおっぱいを強く揉んだ。それに反応して、たまらなそうに仰け反る美優先生。

二人が性欲をぶつけ合うようなセックス。まるで猫の交尾のようだった。女の子同士だとは思えないほどがつついていたけど、英梨もやっぱり男の子じゃないから腰の振り方はどこか弱いところがあって、美優先生に覆いかぶさる姿もそれほど迫力があるわけではなく、どこか可愛らしさがあった。

美優先生の乳首にしゃぶりつきながら、恍惚とする英梨。

「じゅるう、たままないっ、先生のおっぱい◆ ……ああ◆ イっちゃう、イキそう、イクー——んぐうっ」

びくん、と体を震わせて、生々しい声をあげながら果てる英梨。美優先生のおっぱいに顔を埋めながら動かなくなってしまう。その腰だけがまだヒクヒクと動いていて、おまんこにナカだし射精が続けているのがわかる。

美優先生は倒れ込んできた英梨の頭をよしよしと撫でて、優しい言葉をかけている。

「気持ちよかったね、英梨ちゃん◆ 最後までびゅーびゅーしちゃいなさい? もちろん、まだまだこれからもっと気持ちよくなってもらうけどね◆」

「あゝ、先生、最高じゃん……◆」

英梨が八重歯を覗かせた唇から涎を垂らして余韻に浸っているのが見えた。

女同士で体を重ね、快楽を味わう二人。耽美的で甘ったるい光景に、わたしのちんぽはますます勃起を強めてしまった。

「大丈夫、英梨? これからもっと頑張ってもらうんだからしっかりね◆」

「ふう……わかってるよ、彩陽◆ もう二日くらいオナ禁してるんだから、まだまだ余裕だ

って▼」

彩陽に背中を撫でられながら、英梨はまだまだ目の焦点が合わない感じだけど、体をなんとか起こした。

わたしはそれを呆気に取られて見ていたが、ふいに隣でわたしのちんぽをいじっていた夏希先輩が紗耶香の手を取る。

「友梨佳ちゃん、まだまだこの場の雰囲気慣れてないみたいね。見せてあげましょう、紗耶香さん？」

「夏希先輩……▼」

紗耶香はふらふらと蜜に誘われる蝶のように、夏希先輩についていった。

夏希先輩は美優先生と同じように、机の上にお尻を乗せた。

何を始めるのか、と思うまでもなかった。これから二人がしようとしていることはわかってしまった。

それでも目が離せない。続きが気になって仕方ない。わたしはその場に棒立ちになったまま、二人を見つめ続けた。

「さあ、紗耶香さん……いつも通り、楽しみましょう？」

「い、いいんですこと、夏希先輩？」

「わたしたち、これが初めてではないじゃない▼」

「そうですわね……▼」

夏希先輩がスカートをめくりあげると、下着がじつとりと愛液に濡れて染みを作っていた。

紗耶香もスカートをまくりあげると、やたらエラの大きいちんぽをが反り立っていた。

同じ女子高生のはずなのに、股間についているものが違うだけでここまで印象が違うのかとやっぱり驚いた。

夏希先輩はとろんとした瞳で、紗耶香のことを見つめた。下着に指をかけて、するすると太ももから膝の方へと下ろしていく。

足を大きく開くと、股間の割れ目がくばあ、と粘液の糸を引いている。その淫らな眺めだけで、わたしはちんぽがピクピクと震えた。

「さあ、紗耶香さんのそれを、わたしの中に頂戴？」

「何回もしてるのに、緊張してしまいますわ……んっ▼」

びとり、と亀頭を割れ目にくっつける紗耶香。何度か割れ目を撫でるように往復させたのち、そのままぬっぷりとちんぽを挿入していく。

ゆっくりと夏希先輩の中に入っていく紗耶香のちんぽが羨ましくて仕方なかった。この間、彩陽といやらしいことをしたときも、紗耶香が挿入して美味しい思いをしていた。

わたしもこれをしたい——そう思いながら、勝手に手のひらが自分のちんぽをしごき始めていた。

「おほおおっ▼ これすごい、たまらないですわあ▼」

「相変わらず、だらしのない声ね◆ まだ半分くらいしか入っていないのにそんなに気持ちいいのかしら」

「気持ちいいですう、夏希先輩◆ おちんぼ、溶けちゃいそうですわあ……◆ んふうっ」
「ちゃんと最後まで、奥まで挿れてよ◆ そう、もつと……んっ◆」

ぴったりと紗耶香と夏希先輩の腰が密着して、ちんぼが全部入ってしまった。紗耶香はそこで動けなくなつて、夏希先輩の腰にしがみついたまま、悲鳴じみた声を上げる。

「ああっ◆ 夏希先輩の中、グニグニ動いてますうっ◆ わたくしのちんぼ、先輩のおまんこにしごかれて……ひいいっ◆」

「まだ射精しないでね、紗耶香さん◆ もつともつと楽しみましょう？ あんっ◆」

夏希先輩はぐりぐりと腰をすりつけるように、グラインドさせる。ヌチャヌチャと淫らかな水音とともに、愛液が結合部から滴り落ちる。

紗耶香はたまらなそうな表情で震えながらも、少しずつ腰を降り始める。必死に射精を我慢しているのが痛いほど伝わってきた。

「あっぐう……◆ 夏希先輩、限界ですう……こんな風にナカが蠢いて、反則ですわあっ！◆」

「ちんぼ、パンパンに膨れ上がってるわよ、紗耶香さん◆ もつと我慢して、わたしを強く突いて頂戴◆」

「ひいいっ◆ もう、もう駄目ですわあ◆ 頭がおかしくなりそうですわあ◆ イク、イクイクうっ——んぎいっ◆」

びゅー！ びゆるびゆるびゆるっ！ びゅくっ！

紗耶香は直前でちんぼを引き抜き、精液を勢いよく夏希先輩に放った。着衣したままだった夏希先輩の胸元のリボンや、純白の制服に、黄色っぽい精液がとんで、こびりついた。

背中をびくん、と反り返らせながら、ヒクヒクと痙攣した。何度も何度も、精液を発射するのが止まらない。しばらく出してようやく射精が収まって、紗耶香はへなへなとその場へたり込んだ。

熱い吐息とともに、涎が垂れてしまっている。

「はあ、はあ◆ 夏希先輩のおまんこは、すごすぎですわ……これ以上搾り取られたら、おかしくなつてしまいそう◆」

「わたし、まだイってないのに◆」

そして、夏希先輩は潤んだ瞳をわたしに向けた。どの淫靡な眼差しに射止められて、見つめあうことをやめられなかった。興奮が全身を駆け抜けて、心臓の鼓動が早くなつていく。

夏希先輩は、わたしに向かって人差し指を突き出した。

「紗耶香さんの代わりにわたしを気持ちよくしてくれる人、この指とまれ◆」

「夏希先輩……◆」

「ありがとう、友梨佳さん◆ わたしをイかせる役目を任せるわね？ もちろん、ここが気持ちいいのは保証するわよ◆」

「頑張ります、夏希先輩♥」

その指を手のひらで包んだ私は、そのまま導かれるように至近距離へと寄った。

夏希先輩のもう一方の手のひらは、おまんこをくぱぁ、と開いていた。紗耶香のおかげでぐじゅぐじゅにほぐされて、湯気が立つようなおまんこ。

愛液がダダ漏れで、発情を示すいやらしい匂いが漂ってくる。

夏希先輩は、スカートから突き出たわたしのちんぼの先端に触れた。

「おちんぼから、我慢汁がこんなに♥ ふえろっ……おいしい♥」

透明な液体を指で掬って、口元へともっていく。

——そして、わたしはありえないものを見た。

夏希先輩が口を開き、舌を出して……信じられない長さまで伸びていた。指に何周か巻き付けられるほどの。

一瞬ぎよつとしたけれど、それがいやに煽情的で、わたしはついうつとりと見惚れてしまっていた。

桃色に色づく肉厚の舌——唾液でしつとりと濡れて、てらてらと光っている。

その舌でちんぼを舐められたり、キスをされたりしたら、一体どれだけ気持ちが良いのだろうか？ わたしたちふたなりを興奮させ、気持ちよくさせるためにあるようなその異様な舌に、悦びの戦慄が走った。

「ふふ、この舌すごいでしょ？ 紗耶香も最初は驚いていたわ♥ このなが〜い舌でいやらしいキス、してみる？」

「は、はい……♥」

「それじゃあ、おいで♥ 舌を出して……んはあ♥ れろお♥」

唇が触れたかと思うと、長い舌がゆっくりとわたしの口の周りを舐めまわし、絡みついてきた。夏希先輩の唾液の甘い匂いが、鼻腔に広がる。生温かいそれが這いまわるのは、ゾクゾクするほど鳥肌が立った。

間近で息遣いが感じられて、熱い吐息が吹きかかる。

そしてついに、舌が唇の奥へと割り込んできた。

「んれえ……んあっ♥ んふう……っ♥」

ヌメヌメと、わたしの口内を蹂躪していく。歯を隅々まで舐められて、わたしの舌に巻き付いてぎゅつと締め付けてくる。

あまりにも異質な感触。わけのわからないほどの興奮で、ガチガチのちんぼの先から我慢汁がびゅつと迸った。

憧れの夏希先輩とキスが出来るだけで嬉しいのに、こんなに気持ちいいなんて、反則だった。

わたしの舌をしごいていた、その長い舌から解放された時には、わたしは口から大量の唾液を溢れさせながらそれだけでイキそうになっていた。

「んはあっ……気持ちよかった♥ もう、おちんぼ限界だね♥ ちゃんとわたしをイカせる

まで頑張っただけ？」

「な、夏希しえんぱい……」

「うふ、舌で責めすぎたかしら。呂律、回ってないわよ？」

「はやく、挿れたいです……」

「いいわよ♥ そういえば、友梨佳さんはまだ童貞なんでしょう？ 今日で晴れて童貞卒業ね。初めてのおまんこ、たあっぷり楽しんでね」

わたしはヒクヒク震えるちんぽを、夏希先輩のおまんこに近づける。

その時点で、おまんこがわたしのちんぽを求めるように、ぱっくりと口を開いて啜えこもうとするかのようにうねうねと蠢き出した。

目を丸くするわたしに、夏希先輩はとろけた視線を向けながら言う。

「まず、指を挿れてごらん♥ わたしたちのおまんこ、すごいから♥」

言われる通り、わたしは指を、そつと夏希先輩の秘所へと伸ばす。

すると、夏希先輩のおまんこが独りでにぱっくりと口を広げ、わたしの指を待ち焦がれるようにヒダヒダを揺らした。驚きながらも指を触れ、ナカに挿入する。

ちゅぷん♥ わたしが入れたというより、粘液まみれのおまんこに指を飲み込まれていたわたしは痺れたようになってその蠢きに指を任せる。

勝手にナカに引き込まれていく。そして、グニグニ……と、指を撫でこすり、締め付けるような異様な動き方。

引き抜いた指には、たっぷりと愛液がこびりついてヌルヌルと光っていた。

「さつき、紗耶香がすぐにイっちゃったのもわかるでしょう？」

「はい……すぎです」

「ね、とっても気持ち良そうでしょう？ 普通の女の子のおまんこの、何十倍も何百倍も、気持ちいいんだって♥ それじゃあ次は、指じゃなくておちんぽを挿入してみよっか♥」

——まるでわたしたちふたなりから精液を搾り取ることに特化したような女体だ。

わたしは感動すら覚えながら、ちんぽをゆつくりと近づける。さつきと同じように蠢くおまんこは、むにゅむにゅとちんぽを求める軟体動物のようだ。

「はやくおいで♥ わたしも待ちきれないから、ね？」

「夏希先輩……ん、ふう♥ ……んひっ！」

ちんぽをその割れ目に触れ合わせた途端、ヒダヒダが勝手に絡みついてきて、あつという間にナカへと引きずり込まれてしまう。

にゅるにゅる……♥ ゆつくりと、ちんぽが吸い込まれるかのように飲み込まれていく。おまんこには自分で突き込むものだと思っていたのに、あまりにも想定外だった。亀頭がヒダヒダに覆われ、腰が勝手に、夏希先輩に近づいていく。

痺れるような鋭い快感で全身を貫かれるようだった。わたしは息が止まりそうになりながら、喘ぐように言った。

「あ、あつ……♥ なに、これえ……♥」

「友梨佳さんのぶつといちんぼが、入ってくるわあ……♥ こんなに引きずり込み甲斐があるちんぼ、久しぶり……♥」

「ちよつと待ってください、夏希先輩……ひゃあつ♥」

自分でペースを整える暇もなく、ちんぼが一番奥まで到達してしまった。こつん、と亀頭が奥の壁に当たるのがわかった。

根元まで咥えこまれてからが、本当の快樂の始まりだった。

「それじゃあ、始めるわね♥」

「え……？ んひいっ！♥」

さつき紗耶香が挿入した後動けなくなった理由を、わたしは身をもって知ることになった。

夏希先輩のおまんこが、指を咥えこませた時と同じ動きをした。

幾層にも連なったヒダヒダが、一斉にちんぼをしごき立て始める。などで、ヌルヌルとこすられて、愛液をぐちゃぐちゃに塗りつけられる。

これまで感じたことのない、唯一無二の感触だった。たとえようがない快樂が一気に押し寄せ、わたしは白目を剥きそうになった。

「うふふふ、気持ちいいんでしょう♥ 童貞おちんぼ、ぱんっぱんに膨れ上がって苦しそうよ♥」

「な、夏希先輩……だ、ダメです、これえ♥」

「まだ出し入れもしていないのに音をあげるだなんて、情けないおちんぼね♥ わたしが動いてあげる♥」

そして、わたしはさらにこの上の快樂があることを思い知った。

夏希先輩は、両足でわたしの腰をホールドする。

そしてゆっくりと腰を円を描くように動かし、蜜たっぶりの壺をぐりぐりと押し付けられる。

まるで天にでも昇ってしまったかのようなようだった。もう、性器がこすれあうぐちゅぐちゅといういやらしい音しか聞こえない。

頭の中をぐちゃぐちゃに掻き回されているかのような快樂の波に揉まれ、至上の悦びでちんぼが引き攣れそうだった。

「あつ、あつ……♥ せ、先輩い……♥」

「んっ♥ わたしも友梨佳さんのガチガチちんぼ、気持ちいいよ♥」

「あゝ♥ もう、本当にダメえ……♥」

「ええ？ 友梨佳さんったら、もうダメそうね……まあいいわ、本当にイクっていうのは、こういうことなのよ？ 本当の快樂ってものを味わって♥」

「あぐう……♥ い、イク、イグイグう……♥ んんっ！」

びゅっ♥ びゅるるう♥ びゅくっ♥

我慢するだとか、そういうことを考える前に、精液が迸っていた。

わたしは冗談抜きで気絶しそうになるのを感じた。目の前がチカチカして、くらくらっと視界が揺れる。おまんこにぎゅうぎゅうに締め付けられたまま、精液を搾り取られていく。

このままカラカラの出廻らしになるまで精液を吸われてしまうのではないかと思うほど射精は続いた。終わったころには、わたしは全身にじつとりと汗をかいて、息も絶え絶えだった。

わたしがちんぽを引き抜こうとしたけど、その時異変に気付いた。

締め付けるおまんこの力が強まって来ていた。カリ首がヒダヒダに引っかかって、ちんぽを抜くことが出来ない……！

夏希先輩は、長い舌で自分の指を舐めながら、わたしをいやらしい目でじつとりと見つめていた。

「大丈夫、友梨佳さん？ 一回目の射精は終わったかしら」

「一回目……？」

「さっき、わたしのことイかせてくれるって約束したわよね？ 先輩のわたしに嘘をついたのかしら、うふふ」

「な、夏希先輩……ひうつ」

またうねうねとおまんこが蠢きだして、わたしは敏感なイったばかりのちんぽを襲う強すぎる刺激に悲鳴をあげた。

夏希先輩は、わたしの指に指を絡めて、恋人つなぎみたいにして、ますますわたしが逃げられないようにする。

「満足させて頂戴？ 友梨佳さんのおちんぽ、気に入っちゃったの」 もっとおまんこでしやぶらせてくれないと、逃がしてあげないから」

「そ、そんなぁ……んひいっ」

「あんっ」 このぶつといおちんぽ、気持ちよくてたまらないの……」 もう少し味わわせてくれたらイケるから、それまで我慢してね」

「あっ……あゝ」 だ、ダメですつ、あゝっ」

ヌルヌルと、愛液と精液の混じりあったエキスの中で、しゃぶり尽くされる。

根元から先端まで、一寸の逃げ場もなく、ヒダヒダが絡みついていて。わたしはあまりの快感に爪先立ったまま、腰を前後に動かし始める。

ますます快感が強くなって、わたしはたらたらと口の端から涎が零れているのに後から気付いた。

「いいわ、友梨佳さん」 すっごくだらしなくて可愛いお顔してる」

「せん……ばい……」 んあぁっ」

「タマタマの中、空っぽになるまで射精しようね」 友梨佳さんの精液はぜんぶ、わたしのものよ」 うふふっ」

ぎゅゅと玉が縮み上がって、最後の射精に備えて精子を無理やり絞り出し始める。

もう出ないはずなのに、夏希先輩に捕食されるかのように、ちんぽが勝手に精液を吐き出そうと震えていた。

そして、びくっ、びくっ！ とちんぽが痙攣し始める。わたしはその度にイっているのと同じ快樂が走り抜けるのを感じた。

どうやら、空撃ち^{からう}しているらしかった。すっからかんなのに、ちんぽが射精せずにはいられなくて、精液すら出さずにイっているのだ。

「あっ！ ああっ……っ」

精液が出せないのが、もどかしくて仕方ない。

腰はがっしりとホルルドされ、おまんこはキツく締め付けてきている。

わたしは声にならない声をあげながら、夏希先輩にしがみつくことしかできない。その巨乳に顔を埋めて、夏希先輩の甘い匂いに包まれる。柔らかくて弾力のあるその感触は、これまで触った誰よりも大きくて、興奮がますます高まる。

「っっっ！ くは、あゝっ」

「あれえ、精液が出てないわよっ もっともっと頑張れるでしょう？」

「や、やばい、ですう……っ」

「頑張れ、友梨佳さんっ 頑張れっ」

よしよし、とわたしの頭を撫でる夏希先輩をイかせるために、わたしはなよなよとした腰振りのスピードを、なんとか上げていく。強烈な快感でどうにかなりそうになったけど、効果はあるようだった。

「あんっっ あっっ いいじゃない、もっと、もっと突いてっ」

顔を上げると、すっかり蕩けた表情をしていた。そのまま顔を近づけて、また舌を絡めてキスを始めてしまう。

「ん、んちゅう……れろおっ」

「んぐ……ぐっっ」

ちんぽも口の中も、全部夏希先輩に攻めこまれて、本当に逃げ場がなくなってしまった。

わたしは再び腰の奥から込み上げてくるものを感じて、最後のスパートをかける。もはや力の入らない腰に鞭を入れる。

舌を絡め合わせ、目の前で気持ち良さそうに微笑む夏希先輩を見ながら、わたしは最後の絶頂を迎えた。

「っっっ イク、イク……んぐっっ」

「友梨佳さん、わたしもイクわっっ あっ、あゝっっ」

びゅーっっ びゅくびゅくっっ びゆるるっっ

わたしは尿道を勢いよく流れる精液が、夏希先輩のナカに注ぎ込まれるのを感じながら、ようやくおまんこがわなわなと震え、ほぐれてわたしのちんぽを解放するのを感じた。

ちゅぽん、と引っ張り抜くと、ねとねとの愛液にまみれて糸を引き、亀頭が真っ赤になっ

てしまっている。

その場で尻もちをついて、余韻に浸る。

割れ目からとろとろと精液と愛液の混じった得体のしれないものが溢れ出して、とろとろと机に滴った。

夏希先輩は、ヒクヒクと全身を震わせながら、脱力して動かなくなっていた。

「あっ……はぁ……っ ♣ 友梨佳さんの、すごく気持ちよかったわ……っ ♣」

「わたしも気がおかしくなりそうでした、夏希先輩……っ ♣」

「ふう……久しぶりに、クラクラするエッチが出来たわ……っ ♣」

夏希先輩は焦点のあっていなかった瞳に光を灯して、体を起こす。そして、わたしににっこりと微笑んだ。

「童貞さんのくせに、上手だったわね ♣ また今度、二人きりで会いましょう？ その時は、この特別な舌で友梨佳さんのおちんぼを舐めしゃぶってあげる ♣」

あの長い舌を絡められたら、一体どんな快樂が待ち受けているのだろうか？

その言葉を聞いて嬉しくなりながらも、わたしは何かがおかしいことに気付いた。

そう、夏希先輩の後ろ、生徒会室のドアが開いているのだ。わたしが入ってきた時には閉めたはずだった。

誰かが、見ている……？ そしてわたしは、扉の陰から、一人の女の子がこちらを覗いているのを見た。

よく見覚えのある顔——その子は、妹の香奈だった。

〈香奈 四章〉

わたしは保健室を出て、気付けば生徒会室を目指していた。

そこに行けば、気持ちよくしてもらえる……その期待が勝手にわたしを動かしていた。

英梨先輩は言った。美優先生が待つてゐるから、行かないと——どうして、生徒会室なのだろう。わたしはどどん^{もや}霨がかかり始めている頭で考える。

美優先生は生徒会の顧問だから、生徒会室を自由に使える……そのことが関係あるのかもしれない。

その他にも、もっと深い理由があるんじゃないか。そんな気がしてならなかった。

例えば、生徒会そのものに対する疑いの念——わたしは未だに、生徒会が何をやっている組織なのか、ちゃんとした話を聞いたことがなかった。

英梨先輩は、パーティーをするとも言っていた。それは一体、どういうパーティーなのか。なんとなく、想像が付き始めていた。

階段を上り終わり、生徒会室に近づいていくと、わずかに開いた扉から明らかな嬌声が響いていた。

「……っ！ くは、あ……♥」

「あれえ、精液が出てないわよ♥ もっともつと頑張れるでしょう？」

「や、やばい、ですう……♥」

「頑張れ、友梨佳さん♥ 頑張れ♥」

いやらしい女の子たちの声に、わたしまで体の奥がじいんとなつてしまった。

以前のように、逃げ出したいとは思わなかった。お腹の中でじんわりと広がる英梨の精液が、わたしの身体を火照らせていく。

これではいけないとわかっているのに、生徒会室で行われているだろう淫行に期待してしまっていた。

身体の疼きを鎮めてくれるのではないか……その思いがわたしを衝き動かす。

まるで示し合わされたかのように、周囲に生徒の影はない。わたしはこっそりと、生徒会室を覗き見た。

そこは想像したこともないほど淫らな空間だった。女の子たちが、体を重ねあつて快楽に身をゆだねている。美優先生に英梨先輩がおそいかかつて腰を振っている隣で、わたしのよく知る人が、嬌声をあげていた。

「……っ♥ イク、イツ……んぐうっ♥」

「友梨佳さん、わたしもイクわっ♥ あっ、あ……っ♥」

わたしは、英梨先輩に言われて覚悟していた。それでも、目の当たりにしたときの衝撃は

ただならないものだった。

お姉ちゃんが、生徒会長の夏希先輩にのしかかって、へこへこと腰を振っていた。いやらしい声を上げて、涎を垂らしながら悦楽に浸る様子は、墮落を体現しているかのようだった。もとのお姉ちゃんに戻って欲しい。一瞬悲しみがよぎったけど、今のわたしはどうもおかしくなっていた。

——気持ちが悪さそう。

ついつい、お姉ちゃんを感じているはずだろう快感を思い描いて、股間が濡れ始めていた。夢中になって、夏希先輩の大事なところから、ちゅぽん、とちんぽを引っ張りぬく姿を見つめてしまう。

「あっ……はぁ……っ ♣ 友梨佳さんの、すごく気持ちよかったわ……っ ♣」

「わたしも気がおかしくなりそうでした、夏希先輩……っ ♣」

「ふう……久しぶりに、クラクラするエッチが出来たわ……っ ♣」

夏希先輩は、秘所からとろとろと白濁液を溢れ出させて、身体をだらりと横たえている。あのちんぽを突き込まれるのは、そんなに気持ちが良いんだろうか？ あんなに醜いものを突き込まれるだなんて、以前なら考えられなかったのに、好奇心がわたしの心をくすぐる。

「香奈ちゃん……？ どうして……？」

ふいに近づいてきたのは、詩織だった。

振り返ったわたしと目が合うと、気負うものがあるように視線をそらした。わたしがあれだけ、彩陽先輩や美優先生と離れるように言ったのに、それを破ってこの場所に来てしまったのだから、その気持ちはよく分かった。

しかし、わたしがこの部屋の前にいる理由は、英梨先輩たちを止めることじゃない。自分もその中に入ってしまったという欲求に抗いきれないせいなのだ。

「詩織ちゃん、ごめんね……わたしが、間違ってたのかも」

「香奈ちゃん……？」

「わたし、英梨先輩にいやらしいことされて……気持ちよくなっちゃったの。詩織ちゃんが、ちんぽを触られた時みたいに。今も、お腹の奥がじんじん疼いて、我慢できない……いつもこんな感じだったんだね」

詩織はあまりに驚いて、声も出ない様子だった。

てっきり、あれだけ他人に我慢するように言っておいてこの体たらくなのだから、怒られてもおかしくないと思っていた。

だから、詩織がほっとしたような顔でこう言った時は、その優しさについ頬が緩んでしまった。

「なんだ……よかったあ。わかってもらえたんだね、わたしの気持ち」

「詩織……許してくれるの？」

「え？ 香奈ちゃんは何も悪いこと、してないよ……？」

「詩織い……◆」

わたしは、ついつい詩織に抱き着いてしまう。相変わらず困ったように、詩織はもがいた。

「やめてよ、香奈ちゃん……ちんぼ、勃っちゃうからあ◆」

「あつ、ごめんね」

「ちんぼ、気持ち悪くないの……？」

「うん……なんでかわからないけど、あんまり嫌な感じがしないの」

腰のあたりに当たる詩織のちんぼの固い感触に、むしろ愛おしささえ感じていた。詩織にちんぼが生えてきて以来、初めて詩織と一緒にいて穏やかな気持ちになることが出来ていた。

「よかったあ……わたし、香奈ちゃんが離れて行っちゃう気がしてたの。でもそんなことなかったんだね」

「当たり前じゃん。それじゃあ、入ろうか」

わたしは詩織と一緒に、生徒会室を再び覗き込む。

そして、わたしはついに、お姉ちゃんと目が合ってしまった。

お姉ちゃんが驚きに目を見開いてわたしを見ていた。もう、逃げ出しても意味がない。

何より、さつきから股間が疼いて仕方なかった。割れ目から溢れ出した愛液が下着を濡らして、ぐじゅぐじゅだ。

このいやらしい空間に自分も染まってしまいたい。わたしは誘い込まれるように淫行部屋と化した生徒会室に足を踏み入れてしまった。

「あれえ、詩織ちゃんに、香奈ちゃんじゃん。ムラムラして、来ちゃったの？」

ちようど行為に一区切りを付けていた英梨先輩が、わたしを見て、八重歯を見せて笑った。

「ち、ちがう……そんなんじゃ……」

「それじゃあ、どうしてここにいるのかな？ ふふ◆ とりあえず二人ともこっちに来なよ」

わたしは、なぜだか英梨先輩の言うことに従ってしまった。こんなにも嫌悪感でいっぱいなのに、どこかで期待している身体が、勝手に従ってしまうのだ。

「えっ、ちよつと香奈ちゃん、いつの間に英梨の言いなりになったの？ ふふ◆」

彩陽先輩におかしそうに笑われて、わたしは恥ずかしくて顔から火が出そうだった。わたしは、英梨先輩の言いなりになっているんだ……快感を狂おしいほどに求めているという自覚が、わたしを吹っ切れさせていく。

もう、後戻りできないんだ。わたしは英梨先輩の精液を飲まされてしまった。英梨先輩にこのまま、犯されちゃうんだ……あの、黒っぽい使い込まれたちんぼを突き込まれて。

英梨先輩は、ポケットから何か錠剤のようなものが入った小包みを取り出し、彩陽先輩に呼び掛ける。

「ねえねえ彩陽、いつものアレ、美優先生と保健室に行ってもらってきたよ◆」

「ありがと、英梨◆」

彩陽先輩は、その錠剤を数粒もらって、口の中に放り込んだ。

普段からその錠剤を使っているみたいだけど、一体なんなのだろうか。気になって声に出していた。

「それは……？」

「このこと？ そっか、香奈ちゃんはまだ知らないんだ。驚かないでね。凜先生特製の媚薬だよ」わたしたちの精液が主な原料なんだって。ウケるよね？」

こんなにムラムラして仕方なくなるんだから、その錠剤の効果もてきめんに違いない。ほんのり頬を朱色に染めた彩陽先輩と英梨先輩が、わたしたちに向かい合う。

「それじゃあ、詩織ちゃんに、香奈ちゃん……今日はまずわたしたちが相手してあげる」先輩たちが気持ちいいコト教えてあげるんだから感謝しなよ？」

詩織には彩陽先輩が、わたしには英梨先輩が近づく。八重歯を見せてニヤリとしながら、英梨先輩は言った。

「香奈ちゃん、自分からわたしに体を委ねるだなんて、今後に期待しちゃうよ？ わたしが、香奈ちゃんのこと、おちんぼがないと生活できないエッチな子に調教してあげる」

「英梨せん、ばい……ん、ちゅうっ」

唇をついばまれ、舌を強引にねじ込まれる。欲望に任せたキスカと思いきや、ねっとりとした舌に絡みついてきて、わたしは頭がますますぼおっとしてきてしまう。

涎の糸を引きながらキスを終えたときには、わたしは立っていられなくなつて英梨先輩にもたれかかってしまっていた。そのまま、促されるまま生徒会室のカーペットの上に横になつてしまう。

わたしの上にのしかかってくる英梨先輩の熱を感じながら、わたしは隣で行われている、彩陽先輩と詩織の情事に目をやった。この二人も床に倒れ込んでいた。スカートを捲り上げられた詩織の股間に、彩陽先輩がばくりと食いっている。

「あ、彩陽先輩い……いひいっ」いきなりしゃぶらないでくださいい」

「じゅるるう」ほらほら、頑張っておちんちん、もっと大きくして？」

「む、無理ですう」むりい……！ あ、ああ……」

詩織は相変わらずちっちゃなちんぽをばんばんに膨れ上がらせて、彩陽の口淫に耐えていた。たまらなそうな表情で、天井を遠い目で見上げる。

わたしの視線に気がつくと、えへへ、といやらしく歪んだ微笑みを返してくれた。わたしも同じように、自分の頬が快楽で歪むのを感じながら、笑い返す。

「香奈ちゃんのうぶな処女おまんこ、いただきっ……」

英梨先輩がわたしのスカートをめくりあげ、下着を脱がせるのをどこか遠くに感じた。このままでいいんだ……わたしは、このまま英梨先輩に犯されて、処女を奪われるんだ。そのことがむしろ嬉しいような気すらし始めていた。ようやく、わたしはつまらない恥じらいや意地から解放されて、自由になれる。

「そろそろ、おしゃぶりはおしまい。詩織ちゃんも童貞だったよね？」

「そ、そうです……◆ あの、今日は、やっと……してくれる約束でしたよね？」

「そんなにわたしのおまんこ欲しいんだ？　しょうがないなあ、先輩の気持ちいいおまんこ、いっぱい味わうんだよ◆」

「はい……◆」

彩陽先輩は、スカートの中に手を入れて下着を脱いで、おまんこを詩織に見せつける。詩織のちんぽがひくひくとなって、興奮しているのが見て取れた。

「す、すごい……◆　これが、彩陽先輩の……◆」

「ピンク色で、てらてら愛液で濡れてるのがわかるでしょ？　ナカにちんぽ插れると、ヌルヌルなヒダヒダが絡みついてきて、気持ちよくてどうにかなっちゃうよ◆」

「插りたい、です……◆　插れても、いいですか……◆」

「すぐに射精しちゃダメだからね？　気持ちよくつても、ちゃんと我慢するんだよ◆　いい？」

「精子、出しません……◆　だから、おまんこに挿入させてください……◆」

「ふふ、しょうがないなあ……考えてみれば、水泳部のシャワー室で気持ちよくしてあげて以来、ずっと本番セックスしてなかったんだね、わたしたち◆」

彩陽先輩は、横になった詩織のちんぽを上に向け、腰を下ろしていく。騎乗位で、詩織のふたなり童貞を奪うつもりなのだ。

おまんこの割れ目にちんぽをくつつけて、ぬりぬりゆと擦りつけた後、見せつけるようにゆつくりと彩陽先輩は詩織の短小ちんぽを飲み込んでいく。

「んっ……入ってきた、詩織ちゃんのちんぽ◆　亀頭が入って……根元まで入っちゃったね◆」

「ああっ……◆　彩陽、せん、ばい……◆　こ、これすごいです……！」

「どう、生まれて初めて味わうおまんこの感触は？」

「きもち、よすぎて……◆　あうう◆」

詩織は、びったりとおまんこを密着させられながら、舌を突き出して喘いだ。

よほど気持ちが良いのだろう、馬乗りになった彩陽先輩の太ももを掴んだ手に力が入っている。

「もつとよくしてあげる◆　おまんこセックスがやめられなくなっちゃうように、ね◆」

彩陽先輩は、ゆつくりと腰を揺する。ぐちゅ、ぐちゅと音を立てて小さなちんぽが蹂躪され、詩織は逃れられない快感に身悶えた。

「さて、そろそろ香奈ちゃんにも、初めてのちんぽ快樂、教えてあげる◆」

「英梨先輩……ゆつくり、お願いしますう……◆」

「えー？　この初々しいおまんこに、早く插れたくてたまらないんだから、少し気のはやるのも許して◆」

「ちよ、ちよっと待……あ、ああん◆」

くちゅり、といういやらしい音。

わたしは、割れ目にちんぽが押し付けられただけで、ビリビリと電気のような快感が走るのを感じた。このまま突き込まれたらどうなってしまうのだろう——そう想像するより先に、英梨先輩は、一気に肉竿を突き刺してきた。

隠しようのない痛みが、どうしようもなく身体に響いた。めりめりと、自分の中に固いそれが入ってくる。肉のヒダを掻き分けて、体の奥へと迫ってくるのが分かる。

「あ、ああ……◆ 英梨先輩のが、わたしのナカに……◆」

「ふう……◆ や、やばいよ、香奈ちゃん、キツキツまんこ、たまらない◆ 腰が勝手に動いちやう◆」

英梨先輩は、はあ、はあ◆ と息を荒げながら、わたしのナカに侵入してくる。

奥に亀頭の先端がこつんと当たる。自分でも触れたことのない、大事なところに英梨先輩の肉棒が押し付けられている。悦びに近い、なんともいえない感情に襲われながら、わたしは痛みが少しずつ引いていくのが分かった。

その代わりに、ヒダをこすられる快感が、ゾクゾクと込み上げてくる。

「あつ、ああん……◆ 英梨先輩い……◆」

「わたしのちんぽ、気持ちいいでしょ？ これからもっと動かしてあげる◆」

本来ならこんなに早く破瓜の痛みが鎮まるはずがない。そのくらいの知識はあった。もしかしたら、飲み込んだ例のアレのせいで、快楽が何倍にも増幅されて感じやすくなっているのかもしれない。

英梨先輩がずちゅ、ずちゅ、と愛液を撥ねさせながら、腰を前後に動かし始める。

これまで得たのことはない、とろけるような甘美な感覚。きゅつ、と自分の膣が締まるのが自分でもわかった。そこを強引にエラの張ったカリ首に逆撫でられて、悶えるほどの気持ちよさだった。甲高い声をあげてしまう。

「はあ……◆ そんなに、動いたら……あつ、あつ◆」

「香奈ちゃんのおまんこ、ひたひた吸い付いてきて最高◆ ああんつ、ずっとこうしてたい……◆」

英梨先輩は、胸をふるふると揺らして腰振りを加速させながら、わたしの胸に手を当てて揉みしだく。獣のような激しい揉み方だったけど、わたしは感じてしまって、乳首がビンビンに立ちあがってしまった。

全身が情事の熱に覆われ、思考が遠のいていく。犯される快感を味わうメスになっていく。ぼおっとしてただただちんぽを受け入れるわたしに、英梨先輩は顔を近づけた。そのまま、唇を合わせてキスを始める。

「んちゅ……んっんう◆ れろお……うはあ◆」

「香奈ちゃん……可愛いよ、香奈ちゃん◆ ちゅるう……はう◆」

女の子の甘い吐息とともに、ヌメる舌がわたしの舌に絡みつく。何もかもが気持ちよくて、どうにかなりそうだった。

そして、その淫らな多幸福感の中で、何かが近づいてくるのが分かった。これ以上こらえき

れない、限界が。絶頂の予感が、ひたひたと少しずつ迫っていた。

「ああ……♥ 英梨先輩、わたしい……♥」

「わたしもイキそう♥ 一緒に行こう、香奈ちゃん、はあ……♥」

英梨先輩がますます腰を激しく打ち付けてきて、わたしの快感は最高潮を迎えた。一番奥に思い切り突き入れてきて、わたしはその一撃で果ててしまった。

「あっくく♥ イク……ううつ」

「もうダメ、出る出る出るっ♥ 精液めちやくちやナカ出しするう♥ ……んぐっ!」

びゅーっ♥ びゆるーっ♥ びゆるる♥

英梨先輩の液体が、体の奥に噴きかけられて、浸透してくるのが分かった。一番大事なところを穢されていく……気持ちよさが、そんな嫌なイメージを上書きしていった。

——セックスって、すっごく気持ちいい……♥

わたしの中に、新たな引き出しが生まれた。ふたなりの女の子と体を重ねる喜び。これまでいけないものだとレッテルを貼っていたものが、実は素晴らしいものだと思い知って、これまでの自分を反省した。何ごとも体験してみないと、本当のところはわからない。

わたしは心の底から、英梨先輩とのセックスに満足していた。

「……あっ♥ 精液絞られるう♥ ……ふう、香奈ちゃんのナカ、最高だったよ♥」

「英梨先輩……英梨先輩のちんぼも、すっごくよかったです♥」

「これで、香奈ちゃんもすっかりわたしたちの仲間入りじゃん♥ やつとこの学園に馴染めそうだね。改めて、ふたなり女学園へようこそ♥」

英梨先輩の言葉に、わたしはふにやふにやに蕩けているだろう顔に淫らな笑顔を浮かべた。

その隣で、騎乗位で逆レイプ状態の詩織が、涎を垂らしながら一際高い嬌声をあげた。

「あっ、ああっ♥ ダメです、精液出ちゃいますう♥ ああん……イクうつ♥」

「もうイツちゃうの？ ちんぼちっちゃいんだから、もっと頑張つてよ♥ ……あ、ナカで出てる♥」

詩織が、びくんと体を震わせて、彩陽先輩のナカに精液を放っていた。

わたしは、その手のひらに自分の手のひらを重ねる。詩織は、とろんとした目でわたしを見た。

「気持ちよかったね、詩織……♥」

「うん、香奈ちゃん……♥」

お互いに、満たされた表情のまま、わたしは手を握り合い指を絡めあった。詩織とこれまでになく、心の深いところで通じ合っている気がした。

こうして、わたしは犯される快楽を知ることになった。

わたしはキーボードを叩く手を止め、椅子から立ち上がった。P Cの電源を落とし、伸び

をする。やっと書き終わった、という達成感でいっぱいになった。

文章を書くのは好きだけど、ここまで長いものをしたためるとなると、話は少し変わってくる。さすがに嫌になる時はあったし、面倒になって放り出したくもなった。それでも、最後まで書ききった時の解放感のような心地よさを今知って、また執筆してみてもいいかな、と思ったりした。

——丁度いい時間。これから詩織ちゃんに会うのが楽しみ。

ここまで描いたのは過去のわたしの物語だ。今のわたしは、さっき書いた小説に登場した香奈とはもう変わってしまったている。

快楽を求める女生徒に。ちんぽを突き込まれて、ふたなりの女の子たちにだらしなくしなだれかかる淫らなメスに。この淫靡な慣習の蔓延る白百合女学園の一員に。

わたしは、この女学園の風習に取り込まれた。女学園で、犯された女の子たちの列に、わたしも加わって闇の中へ堕ちてしまった。

これでよかったのだ。だって、あんなに気持ちいいことは、この学園じゃなきゃ味わえなかったから♥

ゾクゾクと湧き上がる興奮に身を躍らせながら、わたしは詩織のもとへと向かった。

〈香奈 五章〉

わたしはすでに何度か、詩織と体を重ねていた。

あの日、生徒会室で先輩たちに犯されて以来、ルームメイトのわたしたちは頻繁にセックスをしていた。同じ部屋にふたなりの女の子がいる……そのことは、抗えない誘惑だった。

もう一度、おまんこのナカにあの気持ちのいいちんぽを突き込んで欲しい。下腹部をとろ火で炙られるように、欲求がふつふつと湧き上がってきて、勝手に股間が濡れてしまうのだ。

「詩織……◆ 今日も楽しみだなあ」

わたしは図書室を出て、自分の部屋に戻りながら、印刷した原稿を読み返していた。

図書館のPCで執筆したものをコピー機で紙に写して持ってきたのだ。これを書き始めてからずっと、詩織に何度か見せて、一緒に推敲したり、間違っている部分を直してもらったりしていた。

詩織は、わたしの書いたこの百合女学園の実態を描いた小説を、楽しんで読んでくれた。卑猥な表現に顔を赤らめながらも、熱心に読み進めてくれていた。

ついに完成したこの原稿を読んでどんな反応してくれるか、わくわくしてしまう。

自分の部屋に戻ると、寝間着姿の詩織が迎えてくれた。

「香奈ちゃん、おかえり◆ また夜遅くまで小説書いてたの？」

「ただいま◆ うん……でもね、ついに完成したの！ タイトルも決まったよ。へふたなり女学園へようこそ」っていうの。読んで読んでっ」

「すごい……！ こんなにいっぱい書いたんだね。香奈ちゃんはもう立派な小説家だよ」
「そんなことないってば」

わたしたちは布団の上で二人並んで座る。

紙の束を渡すと、詩織は期待通り目をキラキラさせて読み始めた。この間見せたときは、わたしが保健室で英梨先輩に口を犯されたところまでしか書き上げていなかった。その後の、わたしと詩織が生徒会室で先輩たちに犯されるシーンは、初めて見せることになる。

「この場面、すごくえっち……◆ わたしたち、こんなにいやらしいこと、口走ってたっけ……？ わ、わたしこんなに情けないこと言っていないよっ」

「言ってたよ、この時詩織は童貞ふたなりだったじゃん。彩陽先輩に騎乗位で責められて、もうダメって感じだったよ？」

「は、恥ずかしい……わたし、女の子たちに責められてばかりなんだね……この原稿、みんなに見せたりしないよね？」

「うーん、わたしもそのこと、考えてたんだけど……やっぱり読んでもらわないと意味ないじゃん。だから、本当に仲の良い人たちには見せようと思ってるよ」

「やめてよお……わたし、こんなにだらしなない子じゃないよお……」

「ふふっ、大丈夫だよ。登場する女の子たち全員のだらしないところ、たっぷり書き込んでから。これが全部本当のことなんだから、この学園はすごいよね」

わたしは改めて自分の書いたものに目を通してみる。実は、詩織に言われて大きな訂正をした部分があった。作品の雰囲気に関わる文章そのものの大幅な訂正。

「ハートマーク、詩織に言われて付けてみてよかった。これがあるとやっぱり、雰囲気が出るね♥」

「なんだか静かで淡々とした感じになっちゃってたから……」

「可愛くなったし、ラブラブな感じも出たもんね。お手柄だよ、詩織♥」

わたしはいつも通り、ふざけて詩織に抱き着く。頬を擦りつけると、詩織がやめてよお、と言いながら軽くもがく。

以前だったらこれはただのおふざけだった。でも今は別の意味があった。

このハグは、詩織とセックスしてもいいよ、という意思表示だ。ムラムラしているときは、わざと詩織に体をくっつけて、こうやって誘惑するのだ。

詩織はムズムズと腰を揺らして、わたしの目をじつとりと見つめる。これはわたしに欲情している証だ。どうやら、今日は詩織もムラムラしているみたいで、その股間でゆっくりと突起が起き上がるのが見えた。

「詩織……♥」

「香奈ちゃん……んっ♥」

わたしは詩織の唇に、自分の唇をくっつける。お互いの吐息が混じりあう。はむはむ、と唇をついばみあうキスから始まって、わたしは詩織の唇を割って舌を入れていく。

「んん……ちゅうう……♥」

「んはぁ……れるお……♥ 香奈ちゃ、んう♥」

わたしは同時に、服の中に手を入れて詩織のちんぽを手のひらで包む。そのミニサイズのちんぽの先端は、すでに我慢汁でヌルヌルとしていた。

シコシコとしごいてあげると、詩織はたまらなそうな声を上げて、ちんぽをヒクヒクとさせる。

「香奈ちゃん……あっ♥ そこ、気持ちいい……もつとしごいてっ♥」

「詩織の声可愛いよ♥ もつとちんぽがビンビンになるまでコいてあげる♥」

キスをやめて目を開くと、詩織はすっかり蕩けた表情で、わたしの手コキの快感に浸っている。部屋の中に詩織の喘ぎ声が響いて、わたしたちの部屋は妖しい雰囲気包まれていく。わたしは詩織のはだけた寝間着から覗いた女体にキスをしていく。首筋、胸元、乳首、お腹……少しずつ、下半身の方へと降りていく。

これは、彩陽先輩に教わった、ふたなりの子を興奮させるテクニクだ。あれ以来、わたしたちは先輩たちと例のパーティーを何度も重ねて、色々なセックスを体験していた。先輩たちはやっぱりセックスが上手で、わたしたちも追い付かなきゃいけない、と日々努力して

いる。

「詩織、ちんぼ、舐めていい？」

「香奈ちゃん……いいよ♥ どんどん、いやらしいこと上手になっていくね……」

「もっと詩織に気持ちよくなってもらうためだもん。……ちゅっ、じゅるっ♥」

わたしは詩織の小ぶりのちんぼに、音を立ててキスをして、その先端に舌を這わせる。

見せつけるように舌を出して、ねっとりと唾液をまぶしていく。ちんぼが涎まみれになるまで、しつこくしつこくなぶりまわすのだ。詩織はちんぼをヒクヒクさせて喜んでくれた。

「ああっ♥ 香奈ちゃん上手……ぺろぺろするの、気持ちいいよお♥」

「詩織のちんぼ、ちっちゃいから、簡単に咥えこめちゃう♥ あむ……んん♥」

「あんまりちっちゃいって言わないでよお……あっ♥ そんなにしゃぶりつかれたらあ……」

詩織のちんぼを根元まで口に含んでわたしはストローを吸うように吸引する。詩織はひやああ♥ と情けない声をあげて、もう絶頂が近いのか、ちんぼが口の中でピクピク震えるのが止まらない。

「まだ精液出さないでよ、詩織♥ 先輩たちにも早漏ってからかわれてるじゃん。もっと頑張れるふたなりにならないと♥」

「わ、わかってるよお……♥ でも、我慢しようとしても、勝手に出ちゃうんだもん♥ あっ、イクイクうっ♥ ああ〜♥」

ぴゅる♥ ぴゅっぴゅっ♥

小さなちんぼが可愛らしく脈打って、わずかな精液が口内に飛び出してくる。ねばねばとして、口の中にこびりつくような舌触り。もう慣れっこだった。わたしはその独特の味を楽しんで、ごくりと飲み込む。

詩織は眉を寄せてぼんやりと射精の快感に浸っていたけど、わたしが髪を撫でてあげると、わたしにふにやりとした笑みを見せる。

「香奈ちゃんのフェラ、また上手になってる……♥」

「英梨先輩にいっぱい練習させられてるからね。詩織は感じやすいから、すぐイかせてあげられるの♥」

「それで、香奈ちゃん……その、本番セックス、してもいい？」

詩織は、我慢が出来なさそうに、射精したばかりのちんぼを反り返らせている。

ちようどわたしも、飲み込んだ精液がお腹の中に浸透してくるのを感じていたところだった。煮え返るような快樂への欲求。おまんこに何か突っ込まないとどうにかなってしまいそうな、強烈な誘惑が訪れていた。

わたしは着ていた制服を、下半身だけ脱いでいく。スカートと下着を下ろして、お尻を丸出しにしてしまう。

詩織の視線がねっとりとわたしのお尻にまわりつくのを感じた。わたしの身体を求めてくれている——そのことが悦びとして感じられた。

わたしは改めて、詩織がふたなりになってくれてよかった、と心の底から思った。これは呪いなんかじゃなく、贈り物なのだ。わたしと詩織が、もっと深いところで繋がるための。

「香奈ちゃん……♥ 挿れていい？」

「詩織、来ていいよ。一番深いところで、繋がりう♥」

わたしは、体にしなを作って、お尻をくいっと詩織の方に突き出す。後背位でつながるために、お尻を少し揺らして、誘惑する。

割れ目から、いやらしい女の匂いが広がっていくのがわかる。それを嗅いで、詩織が興奮しているのもわたしにはわかる。

はやくちんぽが欲しい——トロトロと、愛液が割れ目から溢れ出して布団に滴るのが感じられた。ちんぽが肉ヒダを掻き分けてくるのが待ち遠しくて仕方なくて、愛液が次から次へと湧き出してしまうのだ。

詩織がわたしのお尻を両手でつかんで、ちんぽが割れ目にあてがわれると、体の中を歓喜が駆け回る。

「いくよ、香奈ちゃん……んう♥」

「はやく挿れて……あんっ♥」

じゅぶり。結合部から透明な汁を溢れさせながら、肉棒が侵入してくる。

小さなちんぽでも、挿入の快感はひとしおだ。何より、詩織が自分の中に入って、気持ちよくなってくれているというのが一番うれしかった。

根元まで挿入しても、詩織のちんぽは奥まで届かない。中途半端な位置で、わたしのおまんこに締め付けられてヒクヒクしている。

わたしは詩織を振り返って、媚びるように甘えた声を出す。

「詩織、動いて……♥ 掻き回してくれないと、気持ちよくないよ♥」

「ふう、ふう♥ そんな、香奈ちゃん……ちよつと待ってよお……あぁっ♥」

ばちゅん、ばちゅん、と詩織が腰を前後に揺すりだす。

ヒダヒダが亀頭で逆撫でられて、浅いところまで戻ったかと思うと、再びナカをえぐってくる。たまらない快感が訪れて、わたしはあられのない嬌声をあげた。口の端から涎が垂れていても気にならないほど、心地がいい。

「あぁっ♥ 詩織、いいよお♥ もっと突いて♥ もっともっと激しく♥」

「そんなの、無理だよお♥ 香奈ちゃんのおまんこ、気持ちいい……♥ すぐ出ちゃいそう♥」

「いいよ♥ ナカ出しして♥ いっぱいびゅるびゅるって、わたしのおまんこに精液注ぎ込んで♥」

「香奈ちゃん、香奈ちゃん……♥ あぁ、イクう♥ いっぱいお漏らししちゃう……んくうっ♥」

びゅっ♥ びゅるびゅるっ♥

体の一番奥に、詩織の精液がかかるのがわかる。熱くてどろどろの汁で、満たされていく。

それは至福の瞬間だった。気持ちが良いのはもちろん、詩織と一つになった、と実感できるのだ。セックスを繰り返すたび、わたしは詩織と何の隔たりもなく繋がっているという感覚を得ていた。

親友を超えた存在。恋人と言ってもいいのかもしれない。詩織はわたしにとってかけがえのない存在になっていた。

わたしの腰にしがみついて射精して、詩織は仰け反って震えていた。

「あぁっ……◆ 香奈ちゃんのおまんこ、すごい締め付け……◆」

「詩織、もっと精液出せるよね……？ わたし、まだイってないよ……◆」

わたしはいやらしく腰をくねらせて、詩織とどこまでも深くつながるために、詩織に微笑んだ――

ふたなりの詩織と、毎晩のように体を交わらせる学園生活。

わたしはそんな淫らな生活を送って、これまでのどんな時より幸せを感じていた。充実していると感じて言えた。

詩織がいれば他に何もいらぬ。そんな風に実感できる日がくるだなんて、思いもよらなかった。

何にも代えがたい、ふたなりの子を夢中にさせる女としての喜び。それがこんなにも甘い蜜だなんて。

詩織も同様に、セックスより素晴らしいものはないと思っているみたいだった。わたしとの約束を何よりも大事にしてくれるし、頑張っていた水泳も、今はそれほど力を入れていない。

水泳部には、彩陽先輩を中心とした又いてくれる先輩たちや、同じようにふたなりになってしまった同級生たちがいて、練習はそこそこに、淫らな特訓をもらっている。

この学園のどの組織も、部活動、スポーツを頑張るというのは建前で、実態はセックスを楽しむ同好会と化している。顧問の先生たちもそれに加わっているのだから、もうどうしようもなかった。それが、わたしがこの学園のあらゆる組織を調べた結果の、あまりにもだらない実態だった。

でも、わたしはそれがしょうがないのはよくわかっている。だってこんなにも気持ちいいんだから。これは最近知ったのだけど、ふたなりの女の子たちの精液は媚薬効果と例の特殊作用があるだけで、子供を作る能力がない。いくらでも生セックスやナカ出しし放題なのだから、歯止めが効くはずもなかった。

そして、わたしにも変化が訪れていた。

――おまんこを、自分の意思で動かせるようになってきたのだ。

凜先生や夏希先輩の身体に現れたのと同じ、精液を大量に摂取した女の子に現れる特質。ふたなりの女の子たちから精液を搾り取るために進化したとしか考えられない女体の変化。

嫌な気持ちは微塵もない。わたしも、この女学園の一員になれているのだと、嬉しくなった。これで、ふたなりの女の子たちをもっと悦ばせることが出来る。そうすれば、もっとたぐさんのふたなりの女の子たちから求められることになるはずだ。

来年、わたしたちは新しい一年生たちを迎え入れることになる。そうしたらわたしは先輩だ。一つ下の女の子たちのうち、一定数がふたなりになることになる。その子たちにちんぽ射精の悦びを教えて、この女学園の淫らな風習を伝えていかなければならない。

これは脈々と受け継がれてきた伝統なのだ。絶えさせることなく、これからも引き継いでいかなければならない。彩陽先輩たちがそうしたように。

それは今度こそ、わたしたちの役目なのだ。わたしはその時に備えて、もっといやらしくふたなりの女の子たちを誘惑して、気持ちよくさせることが出来るよう、日々頑張っている。

目標として、思い浮かぶ光景があった。ある言葉を新入生に囁くこと。それは英梨先輩からかけられた言葉だ。わたしも、その言葉を新入生に受け継いでいきたい。

わたしの女体で童貞を卒業したふたなりの女の子に、こう言うのだ。

——ふたなり女学園へ、ようこそ。

〈友梨佳 五章〉

生徒会室でのパーティーの後、暗くなった道を、わたしは夏希先輩と二人で寮への帰り道を歩いていた。

さっきまで繰り広げられていた、甘々でだらしないことこの上ない、女の子たちのパーティーは、一生頭から離れることはない気がする。

美優先生と、英梨の激しいセックス。夏希先輩が紗耶香の精液を搾り取るセックス。

そして、夏希先輩との初めての童貞卒業セックス。優しく導いてくれて、わたし至最高のセックスを経験できたと思う。

あの長い舌を絡ませるキス。ぐにゅぐにゅと動くおまんこ。どうしてそんなすごい身体を持っているのかわからないけど、とにかくあんなに気持ちが良いセックスが出来るだなんて、夏希先輩はすごい。

「夏希先輩……♪ 今日はありがとうございました♪ これからもずっと一緒にいさせてください♪」

「もちろん♪ あなたを生徒会に招いて本当に良かったと思ってるわ。童貞ふたなりとは思えないくらいよかったわよ♪ ……突然だけど、今夜、あなたの部屋は空いてるかしら♪」

「え……？」

「まだ、少しやり足りないのよ♪ うずうずが収まりきってないの。ダメかしら？」

あれだけセックスしたのに、まだ満足していないだなんて。驚いたけど、わたしはそれよりも嬉しくて仕方なかった。

また夏希先輩といやらしいことが出来る。あんなことやこんなことが妄想に広がって、クラクラしてしまう。たとえば、その大きなおっぱいで気持ちよくしてもらったり、長い舌でフェラしてもらったり……想像の種は事欠かない。

何より、夏希先輩に、相手として選ばれているのがたまらない悦びだった。好きな人に好いてもらえるのはこんなに幸せなことだったのか、と思い知らされた。

「もちろん、大丈夫です！ 実はわたしの部屋は一人部屋で……」

「そうだったの。夜は寂しいんじゃない？ これから夜は定期的に、友梨佳さんの部屋に行くのもいいかもしれないわね♪」

「夏希せんばあい……♪」

わたしは早くセックスしたくて仕方なくて、早足で二年生の部屋がある階まで上って、夏希先輩を自分の部屋へと案内した。

扉を開けて、夏希先輩を自分の部屋に連れ込むのは、なんだか不思議な満足感があつた。

あの憧れの先輩に、わたしの部屋を訪れてもらっている。

少し散らかっていたからどういいう反応をされるか不安だったけど、杞憂に終わった。

「綺麗なお部屋ね♥ 女の子らしいお部屋」

「ありがとうございます♥」

「さて……それじゃあ、部屋の鍵を閉めて？ もう一回友梨佳さんのでっかいおちんぽを見せて♥」

「はい♥」

夏希先輩の方から、小声でそう囁いてくる。わたしは従わないわけもなく、慌てて鍵を閉める。

「友梨佳さんには、まだわたしのおっぱいを味わってもらってなかったと思うの。おっぱいは好き？」

「大好きです……♥」

以前はそんなことはなかったのに、ふたなりになってからというもの、わたしは大きなおっぱいを見るだけで気分が良くなるようになっていた。

夏希先輩の、Hカップはあろうかという大きなおっぱいは、わたしの羨望的だった。あのおっぱいを触って、乳首舐めしゃぶって、ちんぽを挟んで欲しい……そんな妄想を、これまで何度したことだろう。

「さあ、そこに座って。おちんぽを出さない♥」

夏希先輩は、シャツの前のボタンを自ら外していく。もともとわずかに透けて見えていた、ピンク色のブラジャーが露わになる。たぶたぶの巨乳を下から支え、はち切れそうになっているブラジャー。

わたしはそれに視線を吸い寄せられながら、下着を脱いで椅子に座った。スカートを押し上げる勃起ちんぽの形が、夏希先輩に見られてしまう。

スカートをめくって、夏希先輩の目の前にさらすと、くんくんと匂いを嗅がれて、微笑まされた。

「うふふ、相変わらずぶっといおちんぽ♥ そんなに固くしちゃって、興奮しすぎなんじゃない？」

「夏希先輩のおっぱい、すごくエッチで……♥」

「ありがとうございます♥ 生おっぱい見せてあげる♥」

そして、夏希先輩はブラジャーを外し、床へ放り投げた。

たぶん、という音がしてきそうなほどボリュームたっぷりのおっぱいが、目の前で揺れていた。こんなに綺麗なおっぱいは見たことがないと思った。

見惚れていると、夏希先輩はわたしの手をとって、胸に当ててくれた。下から持ち上げるように揉むと、信じられないくらい柔らかいの、ちゃんと押し返してくる弾力もある。触っているだけで癒された。

「んふふ、おっぱいの感触、気持ちいい？」

「たまらないです……♥」

「そういう顔してるわね♥ 乳首も吸ってみる？ 実はわたし、おっぱいも特別なよ♥」

特別、という言葉の意味を考えながら、わたしは言われるがまま、おっぱいを揉みながら、乳首に吸い付くと、その先端からとろとろと液体が染み出してくるのがわかった。

母乳が出ているのだ。わたしは夢中になってそれを吸ってしまった。おいしい……◆甘くてとろけるような味わい。夏希先輩の優しさをそのまま表したような、お乳の味だった。

「あんっ◆ 強く吸いすぎよ◆」

「おいしいです……◆ もっと吸わせてください◆」

「しょうがないわね◆ このお乳はね、最近出るようになってきたの。ふたなりの女の子とセックスばかりしてたら、体に変化していくのよ。この長い舌と同じ。この女学園の呪いみたいなものね。わたしは呪いなんかじゃなくて、祝福だと思ってるけどね◆」

わたしは夏希先輩の説明を聞き流しながら、おっぱいを揉むのと吸うので忙しかった。わたしがいつまでも乳首を吸っていることにしびれを切らしたのか、夏希先輩がふいにちんぽをぎゅっと握った。わたしは乳首から口を離して喘いでしまう。

「あんっ◆ 先輩、いきなりい……◆」

「そろそろわたしにも、友梨佳さんのおちんぽ、味わわせてよ◆ こんなに大きくて、太くて、立派なんだから、美味しいに決まってるわ◆」

そして、夏希先輩はわたしの太ももの間に身を寄せて、べろお、と舌を出した。例の異様に長い舌。それが、ゆっくりとわたしのちんぽに近づいてくる。

亀頭をべろと舐められると、それだけでたまらない快感が押し寄せる。唾液でヌルついた温かいべろで擦られる気持ちよさ。

そして、次第に夏希先輩の舌が、わたしのちんぽに絡みついてくる。

最初はカリ首に一周、巻き付くように舌が絡んできた。こんな感触は初めて味わうものだった。蒸気の立つ舌が蛇のように、わたしのちんぽを余すことなく締め付けてくる。

「あっ◆ 先輩、そんなの反則ですう……◆」

「んれろお……◆ んふふ、れろえろお……◆」

そして、夏希先輩はさらに舌を伸ばした。

もう半周、今度は根元の方まで絡みついてくる。そしてその舌がひとりでに動き始めた。まるで独立した生き物のようだった。唾液を泡立たせながら、にゆるにゆるとわたしのちんぽを舌だけでしごいてくるのだ。

あんまりにも異質だったけど、ありえないくらい気持ちがよくて、わたしは一瞬声も出なかった。

「……な、なにこれえ◆ すごくいですう、夏希先輩……◆」

「これ、すっごく練習したんだからね◆ んっ……れろお◆」

ビクビク震えるちんぽを、舌が受け止めている。

一旦舌を離すと、夏希先輩の舌は喉のあたりまで垂れさがっていた。ぼたぼたと涎を垂らすさまは、たまらない卑猥さだった。もはやその舌は、物を味わうための器官ではなく、わたしたちふたなりを誘惑する性器にしか見えなかった。

垂れた唾液は、おっぱいの谷間に流れて、ヌルヌルと泡を立てている。準備は整っていた。

「今日は特別フルコースにしてあげる♥ おっぱいの谷間にちんぼを近づけて……♥」

「わかりました……♥」

言われるがまま、ちんぼを突き出した。

わたしのちんぼは、今日のパーティーで成長したようで、さらに大きくなっていた。いつの間にか二十センチはありそうなほどの、巨大なちんぼ。外国人のちんぼの平均サイズまで超えるほどの大きさにまであって、自分でも驚いてしまう。

「どうしたら、こんなに立派になるのかしら♥ この学園でも、トップクラスの大きさだと思おうわ♥」

「褒めてもらって嬉しいです……♥」

「たぶん、これ以上は大きくならないと思うけどね。おまんこに入らなくなっちゃうから♥ あなたの身体も、女の子を悦ばせるために進化してるってこと。わたしの舌と同じ♥」

そして、夏希先輩はそのHカップおっぱいでわたしのちんぼを挟んだ。

たっぷりのボリウムで、包み込まれる。たまらない感触とビジュアルに、興奮して仕方なかった。

わたしのちんぼが大きいせいで、先端が谷間から飛び出してしまっていた。夏希先輩は体を上下に動かして、ちんぼ全体をおっぱいでこすってくれた。

「ああ♥ 夏希先輩のおっぱい、すごいです♥ ずっと挟んでもらいたいです♥」

「おっぱいの中で、おちんぼビクビクしてるわよ♥ そろそろイキそうなのかしら♥」

「もう、限界が来そうです、夏希先輩……♥」

「それなら、わたしも搾り取ってあげる♥ んれえ……♥」

そして、夏希先輩は下を向いて、谷間から飛び出したわたしのちんぼの亀頭を、その長い舌で舐め始めた。

ヌルヌルと柔らかいおっぱいでこすられて、谷間から出たかと思うと、舌でフタをされる。逃げ場のない快感で、わたしはおかしくなりそうだった。これまでかとはかりに、舌で亀頭をにゅるにゅると刺激されて、わたしは絶頂を迎えた。

「あっ♥ ああ♥ 夏希先輩、イキます♥ わたし、イキます♥——んくうっ♥」

びゅー♥ びゅるるる♥ びゅっ♥

精液が放たれて、いくらかは舌で受け止められたけど、残りが夏希先輩の顔へとかかっっていく。

白濁液で汚していくのは、ゾクゾクとする支配感があつて、ますます射精の勢いが増してしまった。

ぼたぼたと精液を垂らしながら、夏希先輩は淫靡に微笑んだ。

「んふ、おいしい♥ 友梨佳さん、気持ちよく出せた？ わたしの身体、すごいでしょ♥ もっともっと、犯したくなってこない？」

「夏希先輩……♥ お願いしますう……♥」

わたしは、夏希先輩に今日何度目かの挿入をする用意は出来ていた。ちんぽは全く萎えることなく、そそり立っていた。

そうして、その晩は一晚中、夏希先輩とセックスしてしまった。

翌日の朝起きると、夏希先輩はわたしたちの体液で汚れた部屋の掃除や、片付けをしてくれていて、わたしはずっとこの人と一緒にいたいと思わされてしまった。

「早く起きないと遅刻するわよ、友梨佳さん◆」

「ごめんなさい……◆」

わたしは幸せに包まれながら、朝の準備をした。シャワーを浴びて、体に染みついた淫行の匂いを落として、クラスへと向かう。

初めてのおまんこセックスを味わった次の日は、普段何気なく過ごしていたこの女学園が違ったものに見えた。何もかも鮮やかに、輝いて見える。これからの生活が楽しみでならない。生徒会の女の子たちと何度でもセックスしたかったし、生徒会に限らず色んな女の子たちとセックスして行きたかった。

なんて楽しい学園生活なんだろう……◆

ふたなりになってよかった、と改めて思った。

それから、わたしはこの女学園で許される限り、女の子たちを犯していった。

生徒会の女の子たちだけではなく、彩陽に紹介してもらって、水泳部の女の子たちを犯したり、他の部活の女の子たちにも手を出していった。

毎日のように、女の子たちとセックスする生活。わたしは良いモノを持っているおかげで、どんな女の子でも悦ばせることが出来た。

そして、ついにわたしは先生たちにも手を出し始めた。生徒たちとセックスする、淫らな女教師たち。彼女たちも、この女学園に染まって淫乱そのものと化していた。

今日は保健室で、あの先生たちとセックスの約束をしていた。

「楽しみだなあ……◆ ふふっ◆」

わたしは四限の授業が終わって、抑えきれない性欲を抱えながら呟いた。机の下で、相変わらずスカートは TENT を張っている。

そこに、廊下からわたしの姿を覗いている人影がいることに気付く。

妹の香奈だ。何か用事があるのだろうかと思って、視線を合わせて首をかしげると、わたしのところに駆け寄ってきた。

「お姉ちゃん、やっと書きあがったよ！ この学園の小説なの」

香奈はやたらかさばる紙の束を抱えていて、驚いてしまう。昔から、香奈は小説を読んだ

り文章を書いたりするのが好きだったけど、いつの間に小説なんて書き始めていたんだろう。

「どうしたの、これ……？」

「最近あったことを書いたの。私小説っていうのかな？ 主人公はわたし。お姉ちゃんもちよろつと出てくるから読んでよ」

渡された紙に記された文字の多さに、わたしは目が回りそうになった。もともと、わたしは小説なんて読まないタイプだ。どちらかというと漫画が好きで、活字を読み続けていると疲れてしまう。

「す、すごいね……これ何文字あるの？ っていうかこれ、もしかしてエッチな小説……？」
さらっと目を通してだけで、会話文にハートマークが入っているのがわかった。女の子たちが喘いで、セックスしている場面が描かれている。

香奈はうつ、と言葉に詰まって、でもすぐになんだか攻撃的に言い返してきた。

「……エ、エッチな小説書いちゃダメなの？ 官能小説家って、けっこう女性の人も多いって知ってる？」

「へえ、そうなんだ……でも香奈、こういう趣味だったの？」

「こういう趣味って？ 百合？ それともふたなり？」

「なんていうか、すごいエッチだし……もしかして、これ書きながら、興奮したりしてるの？ オナニーとかしたり？」

「そんなこと、お姉ちゃんには関係ないでしょ！ わたしのはいいから、この小説読んでみてよ」

「でも、わたし官能小説とか、あんまり読まないし……エッチなことは十分やってるし、どうせリアルでセックスするほうが楽しいじゃん」

わたしはそう言うと、香奈は急に癇癪を起こした。

「お姉ちゃんひどい！ 決めつけないで！ ちゃんと最後まで読んでから感想言てよ。小説ってそういうものなんだから」

「ふ、ふうん……わかった、後で読んでみるね」

「どうせ読む気ないでしょ……別にいいもん、詩織は面白かったって言ってくれたから」
ふりふり怒った様子で、教室の外へ出て行ってしまった。香奈が一生懸命書いた小説を、小馬鹿にするようなことを言ったから、怒られちゃったのだろうか……小説なんて書いたことがないから、ちつとも気持ちがわからない。

香奈とは、生徒会室のパーティー会場で出くわしてから、大して関係性は変わってない。香奈もこの女学園に取り込まれちゃったんだなあと思いつつも、そのことに関して何も会話をしなかった。

わたしがふたなりになったことも分かっているみたいだけど、香奈はそのことには触れてこない。姉妹でムラムラするなんてことはなかったし、これまで通り、仲が良いのか悪いのか、よくわからない状態が続いていくんだろうなと思う。

「友梨佳さん、その紙の束はどうしたんですの？」

トイレから戻ってきた、隣の席の紗耶香が話しかけてきて、わたしは説明してあげた。

「うちの妹が、エッチな小説書いたから、読んでーって見せてきたんだけどさ……」

とりあえず、保健室に行くまでの間、紗耶香と一緒に最初の一ページ目から読み始めてみた。

香奈が自分のことを語ることから始まるその小説は「ふたなり女学園へようこそ」というタイトルだった。最初はエッチなことに興味のなかった、というか毛嫌いしていた香奈が、いやらしいことにハマっていく過程を描いているみたいだ。

赤裸々なその内容に、読んでいるこっちがちよっと恥ずかしくなってしまう。

「よく書いていますわね……香奈ちゃん、文才があるのではなくて？」

「そうなのかな？ よくわかんないけど、ちよっと興味湧いてきたかも」

相変わらず理屈っぽい香奈らしい文体で語られる、香奈自身の気持ち。わたしはここまで香奈の気持ちを深く考えたことがなかったから、こうして初めて触れてみて新鮮な気分でもあった。そして、妙にエッチな場面の描写がねちっこくて、ドキドキしてしまったのも正直なところだった。

「そうそう、先生たちとの約束があるんだった。とりあえず行かなくちゃ。じゃあね、紗耶香」

「わたし、続きが気になりますわ……一旦、この小説を借りてもよろしくて？」

「いいよ。持つといて」

わたしは適当にそれを紗耶香に渡して、教室を出ようとすると、声をかけられた。

その声の主は、今日の相手の一人だった。グラビアアイドルのような容姿——わたしのクラスを担当の、あの先生が書類を持っていないほうの手をわたしに振っていた。

「あら、友梨佳さんじゃない♥ ちようどわたしも向かうところよ。一緒に行きましょう♥」

保健室に向かう道すがら、わたしはドキドキしてきてしまっていた。

美優先生は本当に美人だ。今日はいつもと装いが違って、びったりと体のラインが出る桃色のセーターを身に着けている。おっぱいの大きさがこれでもかと強調されて、わたしの視線は勝手にそっちに向かってしまった。

髪もゆるく巻いてセットしてくれているし、なんだか大人の色気がむんむんと漂っている気がしてならない。

妙に女の色香がしてくる理由は、すぐに明らかになった。

「わたし、今日のことずっと楽しみにしてたのよ♥ 友梨佳さん、最近巷で有名じゃない」

「有名！？ そうなんですか？」

「そうよ。とっても気持ちいいセックスしてくれるって評判なの♥ 今日わたし期待して、気合い入れてきちゃったんだから」

どうやら、わたしのためにしつかりおめかししてくれたみたいだった。そこまで期待されるとちよっと不安になるけど、わたしも多少は自信があった。これまでセックスしてきた女の子たちの大半は、わたしの大きなちんぽを突き込まれて、よがり狂うくらいに乱れてしまっていた。

「そんなにハードル上げないでくださいよ♥ わたしだって、先生たちとそういうこと出来るっただけで嬉しいんですから」

「そうね、わたしたちは、限られたふたなりの子としか、そういうことしないものね。友梨佳さんは選ばれたのよ？ うふふ」

わたしはこの女学園でもなかなか出来ない体験をこれからさせてもらうのだと思うと、ますます興奮してきてしまう。

保健室にたどり着き、ドアを開けると、もう全員が揃っていた。

「友梨佳ちゃん、来てくれてありがとう♥ 美優も一緒だったのね」

「あ、友梨佳。おはよ」

そこにいたのは、いつも通り白衣を着こなした凜先生ともう一人——英梨だった。八重歯を出してにやりと笑う。

わたしは生徒会でのパーティーに何度か呼ばれる中で、英梨ともふたなり同士仲良くなった。彩陽のルームメイトということで、一緒に遊ぶ機会も多くて、今ではすっかり友達だ。英梨はどの部活にも所属していないくせに、どの部活にも顔を出す子だった。あらゆる場所に出没して、セックスして帰っていく。ふたなりの子たちの中でも一番のやり手と言って間違いなかった。

とにかく、テクニシャンだという話だった。色んな女の子たちを夢中にして、手籠めにしているらしい。

だから、先生たちのお眼鏡に適っているというのも納得がいった。

「さて、早速始めましょう？ うふ♥」

凜先生がドアに鍵を閉めて、保健室は貸切状態になった。わたしは、スカートの下でちんぽが勃起しすぎて痛いくらいだった。

英梨は、先生たちとセックスするのは初めてではないらしく、すっかり慣れた口調で言った。

「それで、今日はどんなことしてくれるの？ 美優先生に、凜先生♥」

「もちろん、たっぷり満足させてあげるわ♥ 二人のために色々と用意したんだから♥ ね、凜？」

「そうよ、二人とも♥ 他の若い女の子たちじゃ満足できないようにしてあげるわ♥」

巨乳揃いの先生二人が、くすくすと顔を見合わせて笑った。

英梨はにやりとして、わたしに言う。その股間では、まぎれもなくちんぽがスカートを押し上げて勃起していた。

「先生たち、いつもすごいことしてくれるから、期待しておいて損はないよ、友梨佳。この間はわざわざコスプレしてくれたもんね」

「そうなんだ。興奮してきちゃった……」

わたしは、ごくりと唾を飲む。一体、どんなことを用意してくれていると言うのだろうか。

そして、先生たちの普段の様子から想像できないくらい、淫らなプレイが始まった。わたしは服をほぼ脱いで、ほとんど裸になっていた。

英梨とわたしは首のリボンと、スカートだけしか着ていないし、美優先生は下半身を黒いストッキングで包んだだけで、凜先生はガーターベルトでニーソックスを吊っているだけだ。

中途半端に服を残した、セックスするための装い。その格好だけで卑猥なのに、持ち出してきたアイテムがもつと卑猥だった。

凜先生が机の下から出したのは、透明な液体の入った、大きな容器だった。

「じゃーん、ぬるぬるローション」二人はローションプレイ、したことあるかしら？」

「ないです」「あるわけないじゃん？」

「だよね」今日は特別に、先生たちがこれを使って、二人のちんぽをビンビンに興奮させてあげる」

今、洗面器に大量のローションが準備されて、わたしと英梨は、ベッドに座らされていた。ちんぽが勃起してヒクヒク震えている。

上半身の服を全て脱いだ先生たちは、おっぱいを揺らしながら、わたしたちに近づいてきた。

わたしの前には、美優先生が来てくれた。英梨には、凜先生が相手をするみたいだ。

英梨は早くも我慢が出来ないのか、ローションを使う前に、凜先生とキスを始めている。

「先生、我慢できない……ちゅう」

「英梨ちゃんは積極的なんだから……ん、ちゅう」

ねっとりとした二人のキスを見ているだけで、興奮してしまう。凜先生は、舌をねろりと伸ばしたかと思うと、その異様に長い舌で英梨の口の中を蹂躪していく。英梨のちんぽが反応して、びくびくしているのがわかる。

「ちよつと、友梨佳さんはわたしのことを見て？ わたしたちもキスしようか」

「はい……んっ」

美優先生との、舌を絡めるディープキス。近づくだけで、いい匂いが漂ってきてたまらない。

舌を絡め合っていると、くちゅくちゅと唾液を送り込まれて、それだけで夢見心地になってしまう。

たっぷりと美優先生の唾液を味わい終わると、頭がぼんやりしてきて、もう気持ちよくな

りたいという思いで頭がいっぱいだ。

美優先生も、蕩けた表情で、わたしを見つめ、洗面器に用意されたローションを手にとった。

「んはあっ……それじゃあ、塗っていくわね♥ 友梨佳さんも手伝って♥」

「分かりました……♥」

両手にヌルヌルのローションをとって、自分の胸に塗りたくっていく美優先生。見せつけるようなその動きがいやらしくて、それを見ているだけでたまらない気持ちになってくる。わたしはローションまみれの手で、美優先生のおっぱいに触る。Gカップのふにふにのおっぱいの触り心地は最高だった。ぺちやぺちやと音を立てて、光沢でてらと光るくらいにまで塗り込んだ。

「こっちも塗って……あんっ♥」

美優先生はローションのついたわたしの手を、太ももや股間に持っていく。

わたしはドキドキしながら、ストッキングを着けたままの太ももや、股間にも塗りたくっていく。女体がぬるぬるにまみれて、エッチなことこの上なかった。もともとスタイル抜群の身体が、ますます魅力的になっていく。

美優先生のお尻は丸くて柔らかくてたまらなかった。ストッキング越しに触る、この薄い生地の触り心地が何とも言えない。

そのままおまんこをローションを潤滑液にして撫でると、甘い声で誘惑してきた。

「友梨佳さん、もっと触って……♥ ほら、ナカからも、ヌルヌルのが出てくるの、わかるでしょう？ ふふ」

「美優先生……♥」

割れ目から湧き出す愛液。美優先生が興奮している証拠だ。

どうやら、事前に例の凛先生特性の媚薬も服用しているみたいだった。わたしのちんぽを、物欲しそうな目で見て舌なめずりした。

「おっきなちんぽ……♥ おっぱいで挟むわね♥」

「お願いします……あっ♥」

美優先生は、てらてらとローションで光るたわわなおっぱいで、わたしのちんぽを挟んだ。むにゆうう、と柔らかいおっぱいが押し付けられる感触。ローションで限りなく摩擦はゼロになっていて、普通のパイずりとは全然違う感触だ。すべすべして、ヌメヌメして、とにかく心地いい。

「すごい……♥ これ、すごいです、美優先生♥」

「楽しんでね、友梨佳さん……うふふ♥」

美優先生が体を動かすと、おっぱいがぬるり、ぬるり、とどこまでも優しくちんぽをしごきあげていく。その独特な快感がたまらなかった。もしかしたら、ローションプレイにハマってしまうかもしれない。

喘ぐことしかできずに、ただただ美優先生の愛撫を受け止めていると、隣で同じことをし

ていた凜先生が声をかけてくる。

「そうだ美優、折角だから二人で、一人の子を相手してあげない？」

「いいわね♥ わたしたち二人に責められるだなんて、とっても贅沢♥」

「まずは友梨佳ちゃん、あなたを天国にご招待♥」

そして、ベッドに座ったわたしのところに、全身をヌルヌルにした先生たちが群がった。

二人して、ローションまみれの巨乳をたゆんたゆんと揺らしながら、わたしのちんぽに狙いを定める。

「もしかして……美優先生、凜先生？」

「もちろん、それよ♥」

「お姉さんたちのダブルパイずりだなんて、ふたなり冥利に尽きるんじゃないかしら♥」

先生たちのGカップおっぱいが、両側からちんぽを挟んだ。

ふによんっ♥ 四つのばんばんに膨らませた水風船のようなふくらみが、ちんぽを中心にむにゅむにゅと押し付けられる。ぬちゃああ、とぬめりにぬめった感触。

美優先生と凜先生が一緒になって胸を動かすと、これまでではありえなかったような気持ちよさだった。

「ああ♥ おちんぽがおっぱいに溺れてます……♥」

「わたしたちのおっぱい、気持ちいいでしょう？」

「どこに当たっても柔らかいんじゃない？ うふふ♥」

「そんな風にされたら、わたし……もうイっちゃいそうです、あんっ♥」

どんどん射精の予感が近づいてきて、長い間もちそうになかった。わたしは至高の時間を目いっぱい楽しむために、限界まで我慢する。

それでも、精液が込み上げてくるのは止まらない。

「ほら、イっちゃいなさい、友梨佳さん♥」

「我慢しなくていいんだから♥ 力を抜いて、びゅーってしちゃいましょう？」

「あ、美優先生、凜先生、わたし……イクうつ♥ ——ああっ！」

びゅーっ♥ びゅるるっ♥ びゅー♥

精液が迸って、二人のおっぱいにトロトロとかかかってしまう。そのままローションと混じりあって、ぬるぬると半透明の液体になった。

わたしが射精したのを見て、二人は嬉しそうにくすぐすと笑う。

「いっぱい出たわね、友梨佳さん♥ でもおちんちはガチガチよ？ まだまだ期待できそうね♥」

二人はわたしがベッドに倒れ込んで余韻に浸ると、先生達は英梨のところに群がった。

わたしは英梨がイクまで、ぼんやりとその姿を眺めていた。

「ああ♥ やばい、先生たち、それたまらない……♥ イクイクイクっ♥」

美優先生も凜先生も、ノリノリでダブルパイずりしてあげていた。おっぱいがお互いに入れ違って、英梨を追い詰めていく。英梨はちんぽをびくびくさせて、最高に気持ち良かった。頬を緩めて喘いでいたかと思うと、身体をびくつと震わせて精液を噴き出した。

だいぶたくさんの精液を出していたけど、さすがは英梨で、わずかに余韻に浸っていたかと思うと、すぐに気を取り戻した。

そして、まだまだ性欲を持て余している先生達は、もう我慢がならないのか、そのままわたしたちを誘惑してくる。

「ねえ、そろそろわたしたちのナカに突き込みたくない？」

「先生達のおまんこ、とっても気持ちいいわよ♥こんなにトロトロにほぐれて、食べ頃なんだから♥」

先生達は、床にぐったりと横になって、少女と言うには熟れた女体を、わたしたちの前にさらけ出す。

四つん這いになって、お尻をわたしたちの方に突き出した。ローションまみれのお尻が、物欲しそうにわずかに揺れている。

さっき射精したというのに、襲い掛かるのを我慢できないほど魅惑的なお尻だった。凜先生の、ガーターベルトが着いたセクシーな下半身。美優先生の、ストッキングに覆われて肉感の増した下半身。どちらも甲乙つけがたい。

英梨が凜先生のお尻に引き寄せられて、ちんぽを挿入せずにいられないのを横目に見ながら、わたしは美優先生の黒い薄生地覆われたお尻を揉んだ。

そして、ストッキングをゆつくりと下ろしていく。真っ白でつるつるな光沢を帯びたお尻が、少しずつ出てくるのは、まるで何かの果実の皮を剥いているような気分させられた。

その中にくるまれた甘い実を味わうために、太もものところまで下ろしてしまう。お尻の中心では、ピンク色の割れ目がぐじゅぐじゅに熟れて、いやらしい匂いを漂わせていた。欲求をどこまでも焚きつけるそのお尻を掴みながら、わたしはちんぽをびとりとくつつけた。

「友梨佳さん、それえ♥ぶつといのを突き刺して……♥んあぁっ♥」

ぐじゅり、とガチガチに固まったちんぽをヌルヌルのおまんこに押し込んでいく。

精液を求めるように、ひたひたと吸い付いてきて、たまらない感触だった。そのまま一番奥まで挿入すると、美優先生は眉を寄せた媚びるような表情で、わたしのちんぽを賛美した。

「あんっ♥とっても大きくて熱うい……♥こんなに大きいなんて、おまんこの穴が広がつちやうわぁ♥」

「ふう……♥美優、せんせい……♥」

「大人のお姉さんのおまんこの、具合はいかが？ たまらないかしら♥」

「いっぱい甘やかしてきて、溶けちゃいそうですっ♥」

わたしは、早くも射精しそうになりながらも、先生のおまんこをたっぷり味わいながら腰を振った。ぱちゅん、ぱちゅんと愛液が撥ねる音。

突き込むときは緩んで、抜くときにはきゅうつと締め付けてくる。抜き差しするたびに、

ゾワゾワと快楽の波が押し寄せる。

隣で、英梨も同じように凜先生を犯していた。後ろからガンガン突いて、涎を垂らしながら感じ切っている。

「凜先生、凜先生……」 これ、やつぱり気がおかしくなりそうです」 はあっ」

「気が狂うまでおちんぼじゅぼじゅぼしてちょうだい」 あはあ……気持ちいいわあ」

「あゝ」 ダメです、これ……」 中毒になりそうです、凜先生のおまんこ」 ふああ」

「いいわよ、また今度セックスしましょう？ 英梨ちゃんの腰振り、くせになるわね……」 あんっ」

わたしも美優先生のおまんこでしごきたてられて、イキそうになっていると、凜先生がまた声をかけてくる。

「そろそろ、おちんぼとおまんこ、交代しない？ わたし、友梨佳ちゃんのおちんぼも味わいたいので」

「いいわね、凜」 それじゃあ、一旦ペア交代ね？」

先生たちは、はあ」 はあ」 と甘い息を吐きながら、そんな会話を交わす。

わたしは、ぬるり、とおちんぼを引き抜いて、凜先生のもとにふらふらと向かった。もう美優先生のおまんこであれだけ気持ちよくさせてもらったのに、まだまだ凜先生のおまんこに突き込めると思うとたまらない。

「んふう……」 英梨ちゃんにじゅぼじゅぼ突かれて、もうトロけちゃいそうなのに」 友梨佳ちゃん、もっとわたしのこと追い詰めて」

「凜先生……わかりましたあ」

わたしは、もう一度、挿入を始める。

突き込もうとして、美優先生とは様子が違うことに気付いた。ひとりでおまんこの入口が蠢いて、ちんぽを待ちわびている——夏希先輩と同じだ。

そう、凜先生の女体も、わたしみたいなふたなりを気持ちよくするために特化されているのだ。

ちんぽを触れ合わせると、すぐにおまんこが食いついてきて、わたしのちんぽをナカへ、ナカへと引き込んでいく。

「んっ」 凜先生の、すごい……」 勝手に、ちんぽが入っちゃいますっ」

「うふふ、すっごくやらしく動いてるでしょう？ 友梨佳ちゃんのおちんぼ、もっとぐじゅぐじゅのおまんこで締め付けてあげる」

凜先生は、言葉通りに、わたしの肉竿を、これでもかとかばかりにヒダヒダで刺激してくる。夏希先輩とシたときに近い、強烈な快楽に、涎が垂れてしまうほど気持ちが悪くなってしまう。わたしはそれを味わわされるともうダメで、思い切り腰を振り始めてしまう。

わたしのピストンに合わせるように、絡みついてくる凜先生のおまんこ。もうどうにかなくなってしまうそうだった。

「ああんっ」 友梨佳ちゃんの、すっごい大きくて奥まで当たってるわあ」 突いて突いて

◆ もう頭がおかしくなっちゃいそうよお◆

「先生……◆ わたしも、そろそろお……◆」

「イっちゃいなさい◆ 先生のおまんこにたっぷり出して、気持ちよくなっちゃいなさい◆ ああっ◆」

「はあ、んく◆ 凜先生、出ますう◆ 精液ドクドク出ちゃいますう——んううっ◆」

どびゅるるるっ◆ びゅー◆ びゅくく◆

わたしがイクと同時に、凜先生のおまんこもきゅううつと締め付けて、ますます射精を促すようにうねうねと動いた。わたしは搾り取られるような感覚に陥りながら、何度も何度も射精した——

保健室から出るころには、すっかり日が暮れてしまっていた。

享樂の限りを尽くして、最高の満足感に浸っていた。人生で今日が一番幸せだったのではないか、と本気で思ってしまうほどだ。

美優先生や英梨と次の約束をしてから別れて、文字通り精根尽き果てかけながら自分の部屋に戻ると、なぜか彩陽や紗耶香が待っていた。

「あれ、どうしたの、二人とも？」

「香奈ちゃんの書いた小説、二人で読んだの」

「友梨佳さんに返さなくてはと思って、ここで待っていたのですわ」

どうやら彩陽まで、香奈から渡されたあの紙の束に興味を持ったらしかった。わたしは小説は普段読まないから、面白いとか、面白くないとか、よくわからないのだけど、どうやらみんなに好評らしい。

彩陽が真顔で面白い、と勧めてくるから、少なくとも駄作ではないみたいだ。

「最後まで一気読みしちゃったんだけどさ、よく考えてるよね。へたなり女学園へようこそ」
「っっていうタイトルってそういう意味だったんだ、って思った」

「どういうこと？」

「最後まで読まないといけないようになってますわ。そういうところが、小説の面白みですもの。友梨佳さんも通して読んでみたらいかがでしょう？」

「えー、めんどくさいよ」

「まあ別に無理には進めないけどさ。全部読まなくてもわかるのは、この小説、とにかくすごいエッチだよ◆ 香奈ちゃんって、もしかしたらすごい変態なのかも」

「そうかもしれないわね。そうじゃなきゃ、こんなに卑猥な表現、できませんもの」

「なんだか、その紙束のせいでわたしの妹が変態だって広まってるみたいで、あんまりいい気分じゃないかも……」

「でも、才能あるんじゃない？ 読んでて飽きなかったもん。もっと色んな子に読ませてあげたいよね」

「そうですわね。きっと香奈ちゃん、人気者になれますわ」

「ちよつと待ってよ。わたし、まだ本当にそれ全然読んでないの。どんな話だった？」

二人に話の筋を聞いてみると、香奈の体験を描いた小説の中に、いやらしいシーンが散りばめられている感じなんだろうな、というイメージをわたしは持った。

説明の途中で、彩陽は微妙な顔で付け加えた。納得いかない部分があるらしい。

「それでね、一年の詩織ちゃんのことをわたしが誘惑するシーンが出てくるんだけど……完全にわたしが悪役なんだよね、これ。印象操作だよ。もうちよつと書き方あったんじゃないかな？」

「あら、そういえば彩陽さん、詩織ちゃんにこんないやらしいことしてたんですの？」

「ええ？ たしかに事実としては間違っていないんだけど……間違っていないから悪質っていうか……うーん」

「それって、彩陽が本当に悪いやつだったってことじゃないの？ ふふ」

「違うってばあ、友梨佳あ」

わたしたちはおかしくて笑いながら、香奈の小説の話でだいぶ盛り上がってしまった。

この学園に来てから色々あったけど、ふたなりになる前となった後で、変わらずにこうしてわたしの部屋で談笑してられるのは、嬉しいことだ。

話している中で、わたしはちよつと気になることを思い出した。確か、香奈はこの小説にわたしがちよろつと登場していると言っていたはず。

「あー、出てきたよ。なんだかすごくどうでもよさそうな扱いだったよね。偶然会っちゃったから声かけたけどつまんなかった、みたいな」

「なによそれ？」

「友梨佳さんは話の本筋には関係ないですから、しょうがないのではなくて？」

「ちよつと待ってよ！ じゃあなんで登場させたの？ その場面、見せて！ ……これ、わたしのこと馬鹿にしてるでしょ！」

後日、わたしは当然のごとく香奈に文句を言いに行った。

あの描写じゃ、わたしがいつも机に突っ伏して寝ているみたいだし、わたしがだらしない、なんていう間違った記述もある。あんなものが出回ったら、恥ずかしいなんてものじゃ済まない。名誉棄損だ。

確かあの時、わたしはちんぼが疼いてしょうがなくて、適当にあしらってしまっていた。もつと可愛く受け答える、もつとおしとやかな女の子として描いてくれないと困る。

申し立てを受けて、香奈はちよつと考えていたけど、返答は意外にも良心的なものだった。「それじゃあ、お姉ちゃんの話も書いてあげるよ。そうだなあ……友梨佳編、みたいな感じだ。この間お姉ちゃんに見せたのは、香奈編っていう風にして、ダブル主人公ものにアレンジしてみる」

「え？ 本当に書き直してくれるの？」

「今のへふたなり女学園へようこそ」もいい感じなんだけど、このままだとふたなりの女の

子たちの淫乱っぷりが書き足りてない気がするし……何より、今のままだとふたりの女の子たちが何を考えているのか、この小説を読んでもよくわからないから。別にお姉ちゃんのためじゃなくて、小説の完成度を上げるために書き直すんだからね」

「何よそれ。そういう余計なことは言わなくてもいいのに」

「なんでお姉ちゃんのために書き直さなきゃいけないの？ お姉ちゃんのばーか」

「はぁ！？」

散々な言われようだったけど、結局書き直してもらうことになって、わたしは香奈にけっこう細かいインタビューみたいなのを受けた。転校してきてから、ふたなりになって、生徒会のパーティーに参加するまでの期間のことを、事細かにしつつこいくらい聞かれて、わたしも負けずに丁寧話して聞かせた。相変わらずどうでもいいことをイチイチ考える子だなあ、と思いつつ洗いざらい語ってしまった。

それを反映して、わたし視点の小説を書いてくれると言うのだから、多少の面倒くさは我慢するのがお姉ちゃんだと思って辛抱した。

一体どんな形になるのだろう、と期待を膨らませて待つこと数週間。

香奈は再びわたしのクラスにやってきて、二倍近い厚さになった紙束を持ってきた。

気になったのは、香奈がやたらニヤニヤしながらそれを見せてきたことだ。まるでわたしを馬鹿にしているかのような笑い方。

「ふっ……お姉ちゃんの話してくれた通り、忠実に小説にしたら、こうなったよ」

わたしは仕方ないから、香奈が丁寧に書き上げてくれた文章の「友梨佳編」を読んで、一気に怒りが込み上げるのを感じた。

わたしが女の子のことばかり考えている描写。気持ちよければそれでいいや、というだらしなない考え方。一日中ちんぽが疼いて発情している描写。こんなものが出回るだなんてありえない！

「ちよっ……これじゃあますます、わたしのイメージが最悪じゃない！」

「だって本当の事じゃん」

文句をつけまくって、書き直すように何度も言っただけけど、香奈がそれに応じてくれることはなかった。

この小説が、この女学園で何十年も後まで読み継がれることになることなんて、わたしは知る由もなかった。

ふたなり女学園へようこそ 女教師友梨佳編

しゃーぷ

CHARACTERS

（教師陣）

友梨佳^{ゆりか} 前作の主人公の一人。女子高生時代にふたなりになり、ふたなり女教師として学園に再び戻ってきた。

美優先生^{みゆう} グラマラスな体型の先輩女教師。友梨佳の学生時代の担任。

凜先生^{りん} 保健室の先生。白衣が似合う大人の女性。

（一年生）

美姫^{みぎ} 黒髪ロングのクールな女の子。

撫子^{なでこ} 栗色の髪を縦ロールにしたおとなしい引っ込み思案なお嬢様。

愛衣^{あい} ポニーテールの活発な体育系女子。

女教師友梨佳 序章

白百合女学園という名の女子校がある。

そこでは可愛い女の子たちが何にも汚されることなく、優雅な生活を送っていた。全寮制をとっているおかげで、生徒たちは皆、女子寮で寝泊まりをし、学園の外へ出ることはほとんどない。高校三年間、異性と関わることなく、純潔を保つ女の子たちの園だった。

——そのはずだった。

わたしは、五年前、白百合女学園に通う女子高生だった。高校二年生の時に、転校してその学園で過ごすことになったのだ。

女子しかいない空間をごく当たり前に満喫する時間は、ほとんどなかった。この学園で、わたしは人生を変えてしまうような経験をした。

突然、わたしの股間にちんぼが生えてきたのだ。

巷ではふたなり女学園と呼ばれるその学園では、一定数の女の子たちになぜかちんぼが生えてきてしまう現象が起きていた。わたしも、その現象に巻き込まれてしまったのだ。

最初は驚き慌てたが、ちょうどその時一緒にいた彩陽というクラスメートにちんぼをしがかれ、初めての射精を味わった。これまでに感じたことのない快感を得て、一気にちんぼ快樂の虜になった。

わたしは、ふたなりとして生まれ変わったのだ。

それ以来、わたしはたくさん女の子たちを犯した。生徒会長の夏希先輩、保健室の凜先生、担任の美優先生……誰もがわたしのちんぼにより狂い、喘ぎ声をあげた。

ふたなりセックスが横行するその学園は、わたしにとつての天国となった。わたしは高校三年生の卒業まで毎日女の子たちを犯し続け、最高の快樂を食った。

——そして、今年の春。

わたしは再び、ふたなり女学園へと帰ってきた。生徒ではなく、女教師として。

「今日からこの白百合女学園で一年B組を担当する友梨佳と言います！ 友梨香先生って呼んでね。よろしくお願いします！」

そう挨拶すると、一年B組の生徒たちは拍手して温かく迎え入れてくれた。

股間にちんぼを生やしたわたしが、彼女たちに欲望まみれの視線を向けていることを知らずに。

わたしは白いシャツを着て、黒いタイトスカートを履き、教壇に立っていた。ここから見下ろすと、無垢な女生徒たちが、わたしを同じ女の子だと思って、油断しきっているのがよくわかる。

この子たちはまだ、この白百合女学園の真実を知らない。ふたなりだらけのこの女学園の実態を知らないのだ。

もう少し時間が経てば、このクラスの中にも突然股間にちんぼが生えてくる女生徒たちが現れるだろう。彼女たちはその時、何を感じ、どう行動するのか。楽しみで仕方ない。

ちんぼが生えてきたふたなり女子は、射精の誘惑に絶対に打ち勝つことが出来ない。そのことはわたしが身をもって知っている。一日一回は射精しないと夜も眠れない体になってしまうのだ。

ふたなりちんぼは一日中ほとんど勃起し続け、その女生徒を快楽への欲求へと引きずり込む。どれだけ我慢しようとしても、オス性欲を我慢することは出来ない。一度生えてきたら最後、ふたなりちんぼから精液を放つことに忠実な、淫らな生き物と化してしまう。

「まだこの女学園に来たばかりで、不安もたくさんあると思います。もし何か困ったことやわからないことがあったら、わたしに遠慮なく聞いてください♥ それじゃあ、今日のHRはおしまい！」

始業式を終えたわたしは、タイトスカートの途中でムクムクと勃起しかけていたちんぼを押さえつけながら、職員室へと向かった。

女教師友梨佳 一章

このふたなり女学園で、再び淫行三昧を目論んでいるわたしには、強い味方がいた。五年前にわたしとたくさんセックスしてくれたあの先生。生徒会の顧問を務め、たくさんの女の子たちを淫らな宴へと誘った、いやらしい美人教師。

「初めてのHRはどうだったかしら、友梨佳ちゃん」 いえ、友梨佳先生と呼ぶべきかしら？」

美優先生は、五年前と変わらぬ美貌のまま、職員室でわたしを待っていた。

わたしと似たような白いシャツと黒いタイトスカートを履き、にっこりと笑顔を浮かべている。

あの時、担任の先生だった美優先生は、今のわたしにとって、尊敬する先輩教師となっていた。そのことがなんともいえないこそばゆい感じだった。

「友梨佳ちゃんのままで大丈夫です！ よろしくお願いします」

「よろしくね」 また友梨佳ちゃんといやらしいことが沢山できると思うと嬉しいわ

わたしが大学生だった間も、ずっとこの女学園で教師を務め、今では教頭先生にまでなっている美優先生は、以前よりますます大人の魅力たっぷりになっていた。

あれだけ色んなふたなり女生徒を誘惑し、セックスをしまくっていたあの頃も、フェロモンをむんむんに漂わせる美人だったが、今ではさらに大人の女性として成熟を深めていた。おかげでわたしのふたなりちゃんばは美優先生に反応して、ビンビンに固くなってしまっている。

もしかしたら、美優先生にお相手をしてもらえるだろうかと様子を窺いながら、わたしは会話を続けた。

「一年B組、可愛い女の子たちばかりでびっくりしました！ あの子たちをわたしの好きにしたいんですね？」

「ええ」 友梨佳ちゃんの欲望が赴くまま、犯しまくってあげて

「ありがとうございます！」

「いいのよ、ここ白百合女学園はふたなりの女の子にとっての天国なんだから」 存分に気持ちいいセックスを味わってちょうだい」 実はね、友梨佳ちゃんにとって嬉しい知らせがあるの」

「なんですか？」

「うふふ、驚かないでね？ この女学園は友梨佳さんが在籍していた五年前より、ちょっとだけ……性が乱れてるの」

「そうなんですか？」

「ええ」 昔は裏で隠れてやっていたセックスを、表で堂々とやる生徒たちが少しずつ現れ

てきているのよ」

「もしかして……」

「放課後、二年生や三年生のクラスを見に行ってみると面白いわよ」人目を憚らずにふたなりセックスする女の子たちが見れると思うわ」

もともと、この女学園にはふたなりセックスが蔓延っていた。

放課後になると、わたしを含むふたなり女生徒たちは、ここそと屋上や誰もいない教室に向かいふたなりセックスを始めていたし、あらゆる部活はふたなりセックスの巣窟となっていた。

それでも、一応空気を読んで、表に出て堂々とセックスするようなことはしなかった。

しかし、その風潮が変わりつつあると、美優先生は言うのだ。

「だから、友梨佳ちゃんにとってはますますやりやすくなっているということよ」そうだ、一年B組の名簿を見せてちょうだい」わたしも気になるの。どの子がふたなりになって、どの子がふたなりにならないか」

わたしは言われた通り、ファイルにまとめていた名簿を取り出し、美優先生と一緒に読んだ。

すでに何人か、さっきのHRの時に目星をつけていた女の子たちがいた。みんな可愛い美少女だらけだけど、その中でわたしは三人を厳選して、名前に丸印をつけていた。

美姫——十六歳。B 8 6 W 5 3 H 8 2。黒髪ロングのクールな女の子。

撫子——十六歳。B 9 4 W 4 7 H 9 2。栗色の髪を縦ロールにしたおとなしい引っ込み思

案なお嬢様。

愛衣——十六歳。B 8 1 W 5 2 H 8 3。ポニーテールの活発な体育系女子。

三人とも違うタイプの選り抜きの美少女だった。このうち誰かがふたなりになってしまいう可能性もあるけど、誰か一人はきつとわたしのふたなりセックス相手になってくれるはずだ。

強引にでも、そうさせるつもりだった。

「可愛い子たちばかりね」さて、今年も登校一日から、体に異変を感じる子たちが出てくるはずよ。股間に痛みやむず痒さを感じて、保健室にやってくるはずだわ」わたしはそっちを見てくるわね」

「わかりました」

わたしは美優先生を見送って、まずはどちらの子をターゲットにするか考えた。女教師としてこの学園に来て初めて犯す女生徒はどの子がふさわしいだろうか？

美姫 序章

わたしはこの白百合女学園に入学するのが小さい頃からの夢だった。

歴史あるこの学園には、由緒正しい家柄の女の子たちが集まるという話で、可愛い女の子たちの優雅な生活を夢見ていた。

だから、今こうしてこの制服を着ているのが、何よりもうれしい。良い感じの色のプリーツスカート、おしゃれなデザインのブレザー、そして可愛い赤いリボンを胸元につける。この制服が大好きだ。

しかも、幼馴染の撫子と愛衣と一緒に合格できたから、人生で今が一番幸せなのかと思ってしまうほどだった。

「担任の先生、美人さんでしたね」

HRが終わったとたん、同じクラスになった撫子がわたしの席にやってきて話しかけてきた。

撫子はちょっとしたお金持ちの一家のお嬢様だ。縦ロールの栗色の髪がそれを象徴している。

小学生の時からずっと仲良しの幼馴染で、今ではその上品な言葉遣いや立ち居振る舞いにも、すっかり慣れてしまった。

そんな撫子と、いつも通り、何気ない会話を交わすのが楽しい。

「そうだったね。友梨佳先生、って言ったっけ。良い先生に当たったみたいでよかった」

「高校の先生って、みんな怖いのかと思ってドキドキしてましたの。すごくフレンドリーな先生でよかったです」

「撫子ったら、中学に入った時も、同じこと言ってなかったっけ？ 中学の先生は皆怖いのかと思ってましたあ、優しそうでよかったですうって」

「そうでしたか？ ふふ、わたししたら何も変わってないんですね」

撫子はぼわぼわとした癒される雰囲気を出していて、わたしは一緒にいると安心してしまう。

そこに、もう一人の幼馴染、愛衣が駆けよってくる。わたしたち二人を元氣よく抱きしめて、にじっと歯を見せて笑った。

愛衣は中学生の時、陸上部で短距離走をやっていた運動が大好きな女の子だ。いつもエネルギーに満ち溢れていて、テンションが高いとポニーテールが犬の尻尾みたいにぶんぶん揺れている。

「わーい、美姫、撫子！ わたしたち全員同じクラスだね！ いえーい！」

「いえーい、ですねっ」

「いえいつ、愛衣。運いいよねっ。このまま寮の部屋も近くだったりしてね」

「そうだったら、本当に最高だね！　でも遠くでも毎日遊びに行くからね！」

「えー、毎日はちよつとめんどうかも。愛衣がいるとうるさいし」

「ガーン、そんな、ひどいよ、美姫……」

「嘘だよ、愛衣。わたしも愛衣の部屋行くね」

「びっくりさせないでよ、美姫。まあ、冗談だってわかってたけどね」

わたしは談笑しながら、とある事情でついちよつと顔をしかめた。

折角愛衣と撫子とお喋りしていい気分のはずなのに、さっきからずつと下腹部の辺りが痛むのだ。正確には股間の辺りがズキズキして、二人との会話に集中できない。

顔色が優れていなかったのだろうか、愛衣は少し心配そうに首を傾けた。ポニーテールが揺れる。

「どうしたの、美姫？　美姫がいつもクールなのはわかってるけど、ちよつと今日はテンション低すぎない？」

「ううん、なんでもない……」

股間が痛いだなんてちよつと言いくい。我慢していれば治るだろうと思って黙り込むと、撫子が茶化してくれた。

「愛衣ちゃんがテンション高すぎるだけですよ」

「そうかなあ、あははっ」

わたしは、何か不穏な予感を感じ取っていた。

この痛みは、普通でない感じがするのだ。根拠はないけれど、そんな感じがしてならない。こっそりと二人の死角でスカートの上から股間を触ってみると、何かが腫れ上がったかのような突起があった。

（なんだろう、これ）

それはちよつとおまんこの割れ目の上あたりから生えていた。小さな豆のような感じで、しこりが出来ているのだ。

まあいいか。とりあえず、放っておけば治るだろう。痛みだつてすぐに引くに違いない。わたしはそれを放置したまま、撫子と愛衣と一緒にこれから生活する寮へと向かった。

女教師友梨佳 二章

わたしは楽しみで楽しみで仕方なかった。この女学園のぴちぴちの十六歳JKの身体を好きに弄んで、犯しまくるのが。

生徒として女学園に在籍していた頃は、クラスメートや先生たちを犯しまくって性欲を発散させていたけれど、大学に入ってからはずうもいなくなってしまうていたのだ。一人寂しくふたなりちんぽをしごいてオナニーする日も多かった。

常習的にふたなりセックスをするこの学園で、またいやらしい発情ナカ出しセックスが出来ると思うと、ちんぽが疼いて仕方ない。スカートの中で射精するのを待ちわびて我慢汁を垂らしながら、鬼のように勃起している。

期待でいっぱいになりながら、わたしは一人の女生徒を放課後の教室に呼び出していた。他の女生徒たちは部活の体験入部に向かったり、寮で友達と一緒にお茶したりしているはずで、この教室にはわたしの他に誰もいなかった。

西日を受けて、橙色に染まる一年B組のクラス。整然と並んだ机と椅子たちが、学生時代への懐かしさを感じさせるような夕方の光で照らされている。

机の一つに腰かけて待っていると、とある女生徒が、教室に入ってきた。

「失礼します。友梨佳先生、あの……わたくし、何か悪いことをしましたか……？」

栗色の髪を縦ロールに巻いお金持ちのお嬢様、撫子ちゃんだった。おっとりとした雰囲気、胸やお尻が人並み外れて大きい女の子だ。わたしのお気に入り女生徒リストの中でもトップクラスの美少女。

わたしに呼び出しを食らったことで、不安そうな上目づかいでわたしを見つめている。

わたしが女生徒だった時も、クラスメートに紗耶香という金髪碧眼お嬢様がいた。この女学園は由緒正しい家柄のお嬢様が集まってくることで有名なのだ。お金持ちの人たちが、自分の自慢の娘がふたなり化するかもしれないことなんて何も知らず、入学させるのだから、ちよつと可哀想だった。

「とりあえずそこに座って、撫子ちゃん」

「は、はい……」

撫子ちゃんはちよつと怯えながら、わたしが腰かけていた机の椅子に腰を下ろした。

こうして呼び出したのは、わたしにとって都合の良い事実があったからなのだ。

わたしはバインダーに用意していたとある書類を撫子ちゃんに見えるように机に置いた。

「あ……っ、これは……っ」

それを見てあつと息をのむ撫子。その書類とは、入学直後の実力テストの結果だった。

惨憺たる点数だった。百点満点中、八点しか取れていない。高校受験して実力で入ってきたとは思えない出来だった。

「これはどういうこと？ 撫子ちゃん？」

わたしはあくまで冷たい目で撫子ちゃんを見下ろしながら叱責すると、撫子ちゃんはどうしよう、と困り切った表情になって震えた声で弁解し始めた。

「友梨佳先生、あ、あの……わたくし、お勉強が苦手で……」

「苦手にしても、あまりにも点数が悪すぎない？ この問題なんて、中学校で習った基礎的な部分すら理解できていないのが、丸わかりよ」

「そ、それは……ふええ」

目をうるうるとさせながら、言いよどむ撫子ちゃん。そうやって、泣いて頼めば許してもらえると思い込んでいるようだ。

どうやら、この撫子ちゃんはイマイチ頭がよくないようで、普段おっとりとして要領が悪いのもそのせいだった。

本来ならこんな子は、この白百合学園に入学できるはずがない。

この撫子ちゃんは、どうも不正してこの学園に入学したのではないかという疑惑があった。もしそれが本当なら、ふたなりセックス相手として調教するには申し分ない弱みを掴むことになる。

ふたなりちんぽが勃起しているのをバレないようにしながら、わたしは疑惑をぶつけた。

「実はね、撫子ちゃん。教師陣の間で、あなたに関する悪い噂が出回っているの」

「っ……」

「撫子ちゃんは、お金持ちのお父さんによる多額の不正献金で、入学試験の結果が悪かったにもかかわらず、裏口入学したんじゃないかって噂よ」

「わ、わたしは、お父様に頼んでいないんです……お父様が勝手にっ！」

「あれ、もしかして凶星なの？ そんなわけないよね？ 一生懸命勉強して、この白百合学園に入学したんだよね？」

「ふええ、ごめん、なさい……」

「えっ……？ 本当にお金の力でこの学園に入学したの？ 撫子ちゃん、それはまずいわ。ズルして入学したことが他のクラスメートたちにバレたらどうなっちゃうでしょうね？ うふっ♥」

「うう……」

俯いて、怯えるように震える撫子ちゃん。

その様子がわたしにとってはソッotte仕方なかった。このわがままボディの美少女の弱みを掴んだ。これからわたしの言いなりにさせて、ふたなり肉便器にしてあげるのだ。ふたなりちんぽが我慢できないとばかりにヒクヒクし始めて、わたしは頭の中がふたなりちんぽ快感への渴望でいっぱいになってしまった。

「許してください……わたくし、ずっと仲良しの幼馴染の美姫ちゃんや愛衣ちゃんとこの

学園に入学できて、今が一番幸せなんです。楽しい学園生活が始まったばかりで……やめた
くありませんっ」

「もしこの学園を退学になりたくないのなら、一つだけ方法があるわ」

わたしは、にこりと笑みを浮かべて、撫子ちゃんの耳元に顔を寄せてこっそりと囁いた。

「友梨佳先生の言うこと、なんでも聞いてくれるかしら」

「そんな……でも、この学園に残るためなら……はい、なんでも言うこと聞きますっ」

「イイ子ね」 すんすん……」 撫子ちゃんの髪、とってもいい匂いがする」 首筋、舐めて
もいい？」

「え……えっ？」

「なんでも言うこと聞くんでしょう？」

「どうして、そんなこと……は、はい、舐めても構いません……ひゃんっ」

わたしが首筋に舌を這わすと、撫子ちゃんは小さく悲鳴をあげて、体を強張らせる。

撫子ちゃんは若い女の子特有の甘い味がした。髪からふわっと香るシャンプーの匂いを
楽しみながら、わたしはしばらく撫子ちゃんの味を堪能した。

首筋を唾液まみれにした後、舌を離して撫子ちゃんの表情を見ると、顔を真っ赤にして涙
目になっていた。わたしの行動が信じられないのか、混乱しきった感じで言ってくる。

「あ、あの……友梨佳先生……？」

「ふふ、本当に退学したくないのなら、撫子ちゃんにして欲しいことがあるの。最初は驚く
と思うわ。でも、すぐにわかってもらええると思うから」

わたしはついに、スカートを脱ぎ、セクシーな下着を露わにした。その下着から、醜悪な
アレがはみ出ている。

撫子ちゃんはそのを見てはっと息をのんだ。わたしが下着も脱いでしまうと、そそり立つ
たふたなりちんぽが、撫子ちゃんの目の前にさらけ出された。

ビクビクと震える血管の浮き出した醜悪な肉の棒。外国人並みの大きさと太さを誇って
いた。先っぽからは透明な液体が溢れ出し、はやくしごいて欲しそうにしている。

（ああっ」 はやく撫子ちゃんにシコシコしてもらって気持ちよくなりたいっ」 びゅーび
ゅー精液出して撫子ちゃんの可愛い顔にぶっかけてあげたい」

わたしはその気持ちに苛まれながら、あくまで平静を装った。

撫子ちゃんはふたなりちんぽに釘付けになった目を大きく見開いていた。その表情には
恐怖が垣間見える。

「な、なんですか、これ……うそ、そんなのありえないですっ」

「わたしはちんぽが生えた女なの。いわゆる、ふたなりっというやつね」

「い、意味わかりませんっ……ふたなりだなんて、いるわけないですっ」

「撫子ちゃんはまだ何も知らないのよ」 この白百合女学園の真実を。この学園にはたくさ
んのふたなりがいる。わたしみたいな先生だけでなく、生徒にもね。ある時突然、ちんぽが
生えてきてしまうの」

「な、何を言って……!？」 とにかく、は、はやくそれをしまってくださいよおっ」

「そうするわけにはいかないわ。お金で裏口入学した撫子ちゃんは、なんでも言うことを聞いてくれるんでしょう？」

「うっ……そ、そんな、卑怯ですうっ」

「みんなが努力して入学したのに、一人だけ楽してこの学園に入った撫子ちゃんのほうがよっぽど卑怯よ」 さて、まずはこのふたなりちんぽを両手で優しく握って、シコシコして」

「わ、わたくし、そんなこと……っ」

「それなら退学ね」

「う、ううう……」

撫子ちゃんは仕方なく、という感じで、わたしを睨めつけながら、ふたなりちんぽにそつと触れた。その睨んだ顔もまた可愛い。触れた瞬間ぴくつと震えるちんぽに驚いて、ひゃうつ、という声をあげていたが、そのまま両手でわたしのふたなりちんぽを包み込んだ。

そのまま十本の細い指を絡めつけ、上下にしゅこしゅこことすりだす。

（あぁ、気持ちいい、撫子ちゃんがわたしのふたなりちんぽを嫌な顔しながらしごいてくれている）

不慣れな手つきだったけど、それがまた興奮の材料になった。

根元のところからカリ首のところまで、満遍なく握ってしごいてくれていた。

「ふう、ふう、すごくいいわ、撫子ちゃん」

「わたくしがこんなにいやらしいこと……どうして、こんなことに……」

「ふたなりちんぽ、ギンギンになってるでしょう？ 撫子ちゃんが可愛いから、興奮してる

の、あぁ、たまらないっ」

「友梨佳先生、気持ち悪いですよ……綺麗な先生だと思ってたのに、こんな人だったなんて……」

「ふふ、そういうことを言っていられるのも、今のうちだけかもしれないわ、撫子ちゃんはこの学園のふたなりについて、なんにも知らないんだから、いずれ撫子ちゃんもわたしのふたなりちんぽが欲しくて欲しくてたまらなくなって、自分から懇願するようになるわ」

「わけのわからないこと、言わないでください……早く終わらせてください」

「もつとちゃんと握ってしごいて、あぁ、そこそこ、気持ちいいわ、どんどんふたなりちんぽ固くなっちゃうっ」

「この、変態教師い……友梨佳先生がこんな人だったなんて、本当にがっかりです……っ」「言うだけ言っておきなさい、あとで後悔することになるわよ、はぁん、さて、そろそろ撫子ちゃんのお口を堪能したいわね、舌でわたしのふたなりちんぽを舐めなさい」

「こ、これを舐める……？ あ、ありえないですっ、絶対に嫌です……っ」

「それなら、撫子ちゃんは今日限りでこの学園を退学ということでもいいわね？」

「ふええ……！ 屈辱ですうっ……！ こんなに汚いものを、舐めるだなんてっ……！」
撫子ちゃんは、泣きそうな表情になりながら顔を近づけ、ほんの少し突き出した舌で、そつと先端を舐めた。先走り汁をふえろつと舐めとって、顔をしかめた。

「変な味がしますう……っ、本当に最悪うっ、こんなことさせられるくらいなら、いつそ死んでしまいたいですうっ」

そのまま、撫子ちゃんは嫌そうな顔でわたしのふたなりちんぽを舐め続けた。亀頭にぺろぺろと満遍なく涎を塗りつけてもらったあと、わたしは先づぽを咥えこむように命令した。

「口の中に、入れるなんて……っ、あむっ……んんっ」

撫子ちゃんが、わたしのふたなりちんぽに咥えつき、口の中でれろろと舐めまわしてくれた。

（最高……◆ 撫子ちゃんの初々しいフェラ、気持ちいいっ◆ 温かくてヌルヌルして、もう射精しちやいそうっ◆）

吸い付くように命令すると、撫子ちゃんわたしはわたしのふたなりちんぽを咥えたまま上目づかいで睨みつけてきた。それでもわたしの命令を聞かないと退学とわかつているので、じゅるじゅるといやらしい音を立てながら、吸引してくれた。

「十六歳の撫子ちゃんの、ぴちぴち口まんこ最高っ◆ まだ誰にも犯されてない口まんこ、わたしのものにしちやった◆ ごめんね、撫子ちゃん◆」

「んん、うう、んぐうぐうっ」

口にふたなりちんぽを突っ込まれているせいで、何も言葉を発することが出来ず、ただただわたしを睨みつけることしか出来ない撫子ちゃん。

そんな撫子ちゃんの涎まみれにされながら、精液を吸い出すようにふたなりちんぽをしやぶられると、もうダメだった。

「ああ〜イクイクイクうっ◆ 撫子ちゃんにふたなりちんぽちゅうちゅうしやぶられてイチちやうう◆ 精液ドクドク発射しちやう◆ んぐうっ◆」

びゅるるるるっ◆ ぴゅっぴゅっ◆ びゅ〜っ◆

ふたなりちんぽを咥えたままの撫子ちゃんの口内に、大量の精液を放出していく。突然放たれた精液に撫子ちゃんは驚いてぐもった声をあげながらも、わたしが手で顔を押さええているせいで口からちんぽを抜くことが出来ず、全て余さず口内射精されてしまう。

「んん〜っ！ んんっ！ んぐう……◆」

やがて撫子ちゃんは反射的にそれを嚥下し始めてしまっていた。喉にぶっかけられたドロドロの精液がそれを促すのだ。こく、こくと喉を動かしてわたしのふたなり精液を体内に摂取していくのを確認して、わたしはふたなりちんぽを口から引き抜いた。

撫子ちゃんにふたなり精液を飲ませるのも、わたしの目的の一つだった。実はこの精液には、想像もつかないような特別な効用があるのだ。

催淫効果。これを飲み込んでしまった女の子は、もうふたなりちんぽなしでは生きていけない体になってしまう。ふたなりに欲情し、ふたなりのちんぽをしやぶったり、おまんこに

突き込まれたりしない限り、ムラムラしてどうしようもなくなってしまうのだ。

そんなことなど露知らず、撫子ちゃんはわたしが出した精液を全部飲み込んで、ぷはあ、と息をついていた。ちよつと息苦しそうになりながらも、わたしを睨みつける目は変わらない。

「こ、これで満足ですかあ、友梨佳先生……」

「ふふ◆ 気持ちよかったわよ、撫子ちゃん◆ 明日からもよろしくね◆」

「最悪ですう……どうしてわたくしが、こんな目に……」

「そんな風な感想を抱くのはきつと今日が最後よ◆ 明日の撫子ちゃんはきつと、わたしのふたなりちんぽが欲しくて欲しくてたまらなくなってるわ◆」

「な、何を言っているんですか？ そんなの、ありえないです……もう、帰っていいですか？」

「いいわよ、また明日ね◆」

「友梨佳先生なんて、大嫌いですっ」

そう言って立ち去る撫子ちゃんを、わたしはついついニヤニヤしながら見送ってしまった。

わたしのふたなり精液を飲んだからには、あんなことを言っていられるのはそう長くない。きつと今日の晩には発情してたまらなくなつて、おまんこが疼いてしまうはずだ。

そして、わたしのふたなりちんぽを咥えたことを思い出しながら、オナニーするに違いない。

明日は、撫子ちゃんにどんなことをしてあげよう◆

わたしはこれからのふたなり女学園での生活、女教師としての学園生活が改めて楽しみになりながら、乱れた服装を整えて、職員室へと戻った。

女教師友梨佳 三章

翌日の放課後も、わたしは撫子ちゃんを教室に呼び出した。

わたしのふたなり精液を飲み込ませた撫子ちゃんが一体どんな状態になっているか、期待でいっぱいだった。

（今日も撫子ちゃんをたっぷり味わっちゃおう♪ 昨日はフェラしてもらったから、今日はずっとすごいことだってしちゃおっかなあ♪）

わくわくしているのを悟られないように澄ました顔で待っていると、ドアを開けて撫子ちゃんが入ってきた。昨日のような不安でいっぱい表情ではなく、わたしを可愛い顔で睨みつけてきている。

「ちゃんと来てくれたのね、撫子ちゃん♪」

「わ、わたくしの身体に、何をしたんですか……♪」

開口一番に、そんなことを言ってきた。

撫子ちゃんの声は掠れて、弱弱しくなっていた。

はあ、はあ♪ と熱い吐息。上気して赤く染まった頬。内股になり太もも同士をこすりあわせている。

わたしに発情しているのを必死に堪えているのが伝わってくる。狙い通りの結果に、わたしは内心大喜びしていた。

これまでこういう風に、ふたなりセックスに興味のない女の子を、こちら側に引きずり込むようなことはあまりしたことがなかった。大抵はすでにセックス快楽の沼にどっぷり浸かった、淫乱な女の子ばかりを相手してきたから、撫子ちゃんをふたなり精液便器に調教していくのは初めての感じでゾクゾクした。

わたしはあえて撫子ちゃんに意地悪をして、ふたなり精液の効用について教えないことにした。

「どういう意味かしら？ 何か体調が悪いの？」

「なんだか、体が火照って仕方ないんです……♪ しかも、わたくし、そんなはずなのに、今日、友梨佳先生と会ったのが、楽しみになってきて……♪」

「もしかして、わたしのちんぽをしゃぶりとくって、頭がおかしくなりそうなんじゃない？」

「そ、そんなわけっ！ あんな汚いものを舐めるだなんて、そんなこと、したいわけないじゃないですかっ……！」

撫子ちゃんは、自分に言い聞かせるように強く言った。

しかし、本当はわかっているはずだ。自分の身体がふたなりちんぽを求めているということ。わたしのちんぽを舐めしゃぶって、おまんこに突き込まれたいと心のどこかで思ってしまったのだ。

わたしはスカートと下着を脱ぎ、昨日覚えた快感を期待してガチガチに勃起したちんぽをさらけ出した。

それを見た撫子ちゃんは、恐怖すら滲ませていた昨日の表情とは少し違う反応をした。とろんと見惚れてしまっているかのようだった。瞳を潤ませ、だらしなく頬を緩めていかにも欲しそうな表情をしている。

「す、すごいです……友梨佳先生の、おっきい……♥」

「ふふ♥　しゃぶりがたくなってきた？」

「違いますっ……！　ただ、ちよつとすごいって思っちゃっただけです……全然、欲しいだなんて思っていませんからっ」

そう言いつつも、わたしのちんぽから目を離せなくなってしまっている撫子ちゃん。

口の中でちろちろと舌が動いて、物欲しそうにムズムズと腰を揺らしている。わたしのふたなりちんぽの虜になってしまっているのははや疑いようがなかった。

わたしは椅子に座り、股を開いて撫子ちゃんのスペースを作った。ちんぽをピクピクさせながら、撫子ちゃんを待ち受ける。

「さて、退学になりたくなければ、わたしの欲望まみれの勃起ちんぽ、しつかり舐めて♥」

「は、はい……友梨佳先生♥」

撫子ちゃんはまるでようやく許可を得たかのように、ちよつと嬉しそうに頬を染めてわたしの足の間にひざまずいた。

そのまま惹き寄せられるようにわたしのふたなりちんぽの先端の匂いを嗅ぎ、うつとりとした表情を見せる。

「おかしいです……この匂いが、好きになっちゃいそうです……♥」

「撫子ちゃん、淫乱のちんぽ好きになっちゃっていいのよ？　ちんぽは撫子ちゃんを気持ちよくする、撫子ちゃんの味方なんだからね♥」

「そ、そうなんですかあ……？　あっ！　ダメ、わたくし、何を考えて……！　わたくし、どうにかしてます……友梨佳先生のちんぽがおいしそうに見えるだなんてっ」

「その気持ちは間違っていないわ♥　ほら、たくさん舐めしやぶっちゃって♥　撫子ちゃんの口まんこで、ヌルヌルの涎まみれにして、いっぱいしごいちゃって♥」

「こんなの、我慢、出来ない……♥　友梨佳先生のふたなりちんぽ、おしゃぶりがたくてたまらない……♥」

撫子ちゃんはいかに欲求を抑えきれなくなり、わたしのちんぽを両手で大事そうに支え、ぱくりと咥えた。

（ああんっ♥　やっぱり十六歳のJK口まんこ最高っ♥　わたしのふたなりちんぽの味覚え込ませてあげたいっ♥）

温かいお口の中で、たつぷりと舐めまわしてもらうのはやっぱり最高に気持ちよかった。

撫子ちゃんは夢中になってフェラを続けていた。亀頭を何度も何度も舌でこすりあげて

その味を堪能したり、根元をしごいてふたなり精子がいっぱい出るよう促してくる。

じゆるじゆるる♥ と吸引まで始めながら、撫子ちゃんは観念して言った。

「おいひいっ♥ なんであつ? なんれこんなにおいひいのお……♥」

「撫子ちゃんはんぼを舐めて喜ぶ淫乱ちゃんなのね♥ おとなしいお嬢様だと思っ
たのに、そんなはしたない子だったなんて♥」

「ちがうう、ちがうのにい♥ んじゆるるう♥ だって、友梨佳先生のおちんぼ、舐めるの
やめられないんですう♥」

撫子ちゃんは口をすぼめて顔を上下に動かして、ふたなりちんぼをイかせて精液を搾り
取るためにいやらしい刺激を与えてくれている。

そして、わたしは撫子ちゃんのさらなる痴態に気がついた。

フェラを続けながら、撫子ちゃんの片方の手がそろり、そろりとスカートの下の自らの股
間に伸び、アソコをいじり始めたのだ。

ヌレヌレになっているおまんこを慰めたくて仕方なくなってしまったのだろう。情けな
くもいやらしい手つきでおまんこをクニクニと撫でまわし、喘ぎ声をあげてしまっている。

「あれあれ? 撫子ちゃん、そっちの手でどこをいじってるのかしら♥」

「バレちゃったあ♥ 友梨佳先生にわたくしのエッチなところバレちゃったよお♥ ふたな
りちんぼ舐めながらおまんこ触って気持ちよくなってるのお♥ あゝっ♥」

撫子ちゃんは完全に発情したメスとなって、わたしの目を憚らずに、くちゅくちゅと音を
立ててオナニーを始めてしまった。

きつと普段から一人でエッチな妄想をしながらオナニーしているのだろう。その手つき
は慣れたもので、どんどん卑猥に、どんどん激しくなっていく。

ちんぼをしやぶる激しさも増していった、わたしもふたなり射精の我慢が出来なくなっ
てしまっそうだった。

（気持ちいい♥ オナニーしちゃうくらい興奮してる撫子ちゃんフェラ、ねちっこくて
たまらないい♥）

撫子ちゃんは快楽を求めてもう見境がつかなくなっているみたいだった。丁度いい頃合
いかもしれない。わたしはそろそろ、本番をしてあげようと思って、こゝろ声をかけた。

「撫子ちゃん、そんなにおまんこがうずうずするなら、このふたなりちんぼで犯してあげて
もいいわよ♥」

「そ、そんなあ、ダメですう♥ 変態ふたなりの友梨佳先生にわたくしの処女あげちゃうな
んで、ダメなのにい……あぁっ♥ したい、エッチしたいよお♥」

「身体は正直ね♥ エッチしたいなら、その机に横になって、おちんぼ挿入を懇願しなさ
い♥」

「いやですう♥ そんなはしたないことしたら、恥ずかしくて死んじゃいますう♥ でもエ
ッチしたい、したすぎておかしくなるう……♥」

「自分の欲求に素直になりなさい♥ 撫子ちゃんは本当は大人しいお嬢様なんかじゃなく

て、ふたなりちんぽに発情しちゃう、どうしようもないメス犬なんだって自覚するのよ」
「どうしようもない、メス犬……」 わたくし、そんなにだらしのない子なんですかあ……」

「そうよ」 だからはおまんこを見せて、わたしのことを誘惑しなさい」

「ああ」 もうダメえ」 我慢できないっ」 わたくし、ダメな子になっちゃいますっ」
友梨佳先生にふたなりちんぽ挿入してもらいたくて、たまらない……」

撫子ちゃんは、わたしの命令に従って、机の上に横になった。

そして、制服の前のボタンをはずして、ブラジャーをずらした。バスト94センチの巨乳がたゆん、とおいしそうに揺れてますますわたしを興奮させる。アンダーカップとの差を考えるときつとGカップ近くある。

「友梨佳先生、わたくし、はしたない子になっちゃいましたあ」 おまんこうずうずして頭おかしくなりそうっ」 ほら、こんなになってるんですう、見てくださいい」

撫子ちゃんはスカートをたくしあげ、ビショビショに濡れた下着を見せつけた。

さらに、下着をするすると脱いで、お股を大きく開いて、撫子ちゃんのナマおまんこを見せてくれた。

愛液で濡れて、ホカホカと蒸気が立っている。若々しいメスの発情の匂いが漂ってきて、ふたなりちんぽは暴発寸前だ。

割れ目を指でくばあ」 と広げて、撫子ちゃんはいやらしい笑みを浮かべて懇願した。

「友梨佳先生のおちんぽ欲しくてたまらないですう」 そのバキバキ勃起ふたなりちんぽ、お嬢様なのに淫乱な撫子の発情トロトロおまんこにください」

「撫子ちゃん、最高ね」 よくできました」 ご褒美にいっぱい、おまんこばんばん」 って突いてあげる」

わたしは待ちに待った至福の時を味わうことにした。

撫子ちゃんが限界までばっくりと開いたおまんこに、太いふたなりちんぽを突き込んでいく。

(んっ」 これこれえっ……)」

入口に亀頭がちゅぽん」 と飲み込まれたかと思うと、むにゅむにゅ」 とおいしそうにおまんこが吸い付いてくる。

そのまま奥まで挿入してしまうと、ふたなりちんぽ全体がヒダヒダにしごかれて、天にも昇るような快楽に全身を貫かれた。

(やば……」 久しぶりの女子高生おまんこ、たまらない」 ホカホカでヌルヌルで、最っ高っ)」

思わず射精してしまいそうになるのをなんとか堪えていると、撫子ちゃんもだらしのない淫語で快感を伝えてくる。

「ああ」 友梨佳先生のでっかいちんぽ、入ってくるう」 ダメえ、処女まんこすぐ負けちゃうう」 きゅうきゅう締め付けてもぶっといちんぽが強引に掻き分けてくるう」

「わたしのふたなりおちんぽ、気持ちいいのね」 ふふっ」

「もうこんな気持ちいいの知っちゃったら、やめられなくなるぅ♥ ふたなりおちんぼなしじゃ生きていけない」

「もっともっと気持ちよくしてあげるわ♥」

わたしは腰をじゅぷじゅぷ♥ と動かし、撫子ちゃんのナカを掻き回す。

突き込むときは優しく受け入れてくれて、引き抜くときはきゅうきゅうと締め付けてくる欲望まみれのおまんこが気持ちよすぎた。ちんぽを逃がすまいとそうしているのが、バレバレだ。

さらにさらけ出された巨乳おっぱいをわしづかみにして、モミモミ♥ と揉みしだくと、撫子ちゃんも可愛すぎる嬌声をあげてくれた。

「いやあ♥ おっぱい、触らないでえ♥ ビリビリ感じちゃって、おまんこもおっぱいも気持ちよすぎて、バカになっちゃう♥ ああんっ♥」

「もう快感狂いの淫乱ちゃんになっちゃったわね♥ そのままどんどん堕ちていっちゃいなさい♥」

「もういやあ♥ 感じたくない♥ これ以上感じたらダメになるのに気持ちいいっ♥ 友梨佳先生のガチガチちんぽに犯されてイっちゃう♥ イクイクイクうっ♥」

「わたしも精液すぐそこまで来てるぅ♥ いっぱいナカ出してあげるからふたなり種付けセックスでイキ狂っちゃいなさい♥」

「友梨佳先生い♥ 精子出しまくっちゃってください♥ わたくしのおまんこ便器に出してえ♥」

「ああっ♥ びゆるびゆるしちゃうっ♥ 撫子ちゃんの淫乱おまんこに搾り取られて本気の射精しちゃうっ♥」

じゅぷじゅぷじゅぷ♥ と腰振りの最後のスパートをかけて、わたしは絶頂した。

どびゆるるるるっ♥ びゅくうっ♥ びゅっびゅっ♥

大量の精液が撫子ちゃんの子宮に向かって発射される。ふたなりちんぽの脈動は止まらず、一向に射精が終わる気配はない。

新鮮な精子たちが今ごろ撫子ちゃんの卵子にたっぷりと食いついているに違いない。

それでも安心していい。わたしちふたなりちんぽから出る精子たちに子作り機能はなかった。女の子たちにどれだけナカ出ししようと、赤ちゃんは出来ないのだ。

その代わり、ふたなり精子は女の子たちの身体に吸収されて、女の子たちをますますエッチにしている。

わたしが射精している間、一緒にがくがく震えていた撫子ちゃんは、一生懸命ふたなりちんぽを締め付けて精液を一通り搾り切ると、やらしい笑顔を浮かべて言った。

「気持ちよかったあ♥ 友梨佳先生、明日もふたなりセックスのご指導、よろしくお願いしますっ♥ 友梨佳先生が性欲溜まってびゅっびゅしたくなった時は、いつでも呼んでください♥ 待ってますっ♥」

「わかったわ♥ 撫子ちゃんのことはいこれから徹底的に指導してあげる♥ 覚悟しておきな

さい♥」

そう言うと、撫子ちゃんは嬉しそうに頬をユルユルに緩ませた。
たっぷり楽しませてもらったけれど、わたしはこんなに淫乱な本性を隠し持っていた撫子ちゃんならもつとこの学園で活躍できると思っていた。

わたしだけで撫子ちゃんを楽しむのはもったいない。

このクラスのふたなり肉便器に、撫子ちゃんを育て上げたい。

わたしはそんな計画を考え始めていた。

美姫 一章

わたしはあれ以来ずっと、股間に生えてきた謎の突起に悩まされていた。

入学初日から何日か経過しても、その突起は消えることなく、むしろ少しずつ大きくなっていった。今では五センチほどの大きさになっていて、無視するにも限界が来ていた。

触ってみると、なんだか変な感覚があつて、わたしは出来るだけその突起に触れないようにしていた。

(どうしよう……これ、まるで男の子のおちんちんみたい……こんなの、誰にも相談できないよ)

幼馴染で親友であるはずの愛衣や撫子にも、恥ずかしくて言えなかった。だって、こんなものが生えている女の子なんて気持ち悪い、というの自分が一番わかっていた。

わたしは共同浴場に行くことも出来ず、毎日部屋に備え付けのシャワーを浴び、その度に鏡に映る股間に生えたおちんちんのようなものを見てため息をついていた。

日に日に大きくなっているのが分かるのだ。

このままのペースで行けば、取り返しのつかないことになる。わたしはようやく、保健室で診てもらったほうがいいのかもしれないと真剣に考え始めた。

わたしは中学生のころ水泳部で部活を頑張っていた。水の中を泳いでいく感覚が好きで、いつまでも泳いでいられた。他の人と比べてもタイムは短いし、この白百合女学園でも水泳部に所属しようと思っていた。

今はなんとかスカートの前がもっこりせずに済んでいるけれど、もしこの股間の突起が小さくならなかったら、みんなの前で水着を着ることが出来なくなってしまう。それだけは避けたかった。

まだ体験入部期間は始まっていないから、今のうちに何とかしなければならぬ。

よし、保健室で診てもらおうしかない。嫌々ながらそう決めた。

その日、保健室に向かう途中も、恥ずかしさで何度も躊躇した。

こんなものが生えてしまったところを、保健室の先生だとは言え見られてしまうだなんて、顔から火が出そうだった。

勇気を出して保健室の扉を開けると、すでに先客が待っていた。

「あれ？ 美姫……？ ちよ、ちよつと見るなあつ」

そこには保健室の先生の前でスカートを脱いでばんつも今まさに脱ぎようとしている愛衣がいた。

どうして、先生の前でそんな姿に……その答えはすぐに聞いた。

もしかして、愛衣も同じ症状なのだろうか？ わたしと同じように、アソコにおちんちん

みたいなものが生えてきてしまったのかな？

「愛衣ちゃん、隠さなくていいのよ♥ 恥ずかしいモノじゃないんだから♥」

「で、でも凜先生、こんなの……変だし……」

「大丈夫♥ もしかしてだけど……あなたも、お股のところに、デキモノが出来ちゃったからここに来たんじゃない？」

「どうしてそれを？」

わたしは衝撃を受けた。どうして、この女の先生はそのことを知っているんだろう？ やっぱり、愛衣にも同じことが？ というか、お股におちんちんみたいなものが生えてきちゃうことって、よくあることなんだろうか？

困惑していると、その白衣を着た保健室の先生はもう一つ椅子を持ってきてくれて、愛衣が座っている隣に置いてくれた。そして、そこに腰を下ろすよう手で示した。

「わたしのことは凜先生って呼んでね♥ よろしくね♥」

その先生はなんだか大人の女性の色気を醸し出していた。身体を動かすたび、羽織っている白衣の下に着ているブラウスの中で、とっても大きな胸がプルプルと揺れているのがわかった。

ものすごくセクシーな先生だなと思っていると、にこりと笑顔でこう言われた。

「お名前は？」

「美姫です」

「あら、同じクラスなのね♥ しかも二人とも友梨佳ちゃんのお気に入り♥ あらあら♥」

「え？ 今、なんて……？」

「なんでもないわ♥ さてさて二人とも、とりあえず見せてもらえないと何もわからないわ。スカートと下着を脱いで、お股をわたしに見せてもらんなさい♥」

「は、はい……」「わかりました……」

わたしたちは顔を見合わせた後、揃って、凜先生の前で下半身を裸にさせられた。親友同士で一緒にお風呂も入ったことのある間柄だったから、恥じらいつつもスカートも下着も脱いでしまったのだ。

診療目的だとは言え、他人に自分の股間を見られるのは恥ずかしくてもじもじしてしまっただけだ。

ちらっと愛衣の股間を見ると、そこにはわたしのより二倍くらい大きな腫れ物が出来ていた。

いや、それはもはや完全に男の子のおちんちんと言ってよかった。先っぽが太くなっている皮が剥けている。さらに、わたしのおちんちんと違って、なぜかカチカチに固くなっていた。

「うわ、美姫にもこれ、生えてきちゃったんだ……仲間がいてよかったあ」

「そうだね。でも……愛衣ちゃんのおつきくなってる？ さっきからピクピクしてるし」「うん、なんかおかしくて……朝からずっとこういう風に石みたいに固くなっちゃって、し

かもムズムズするんだよね」

愛衣ちゃんは不思議そうにそれを指でつんと触っている。

その様子を見て、凜先生はなぜか嬉しそうに笑顔を浮かべた。そしてわたしたちの全身を品定めするような目つきで見て、舌なめずりをしている。なんだか様子がおかしかった。

そして、凜先生はわけのわからないことを言った。

「おめでとう、二人とも。愛衣ちゃんと美姫ちゃんは、今日から晴れてふたなりよ」

「ふたなり？」「なんだそれ？」

「おちんぼが生えてきちゃった女の子のことよ」これは正真正銘のおちんちん、男の子に生えているのと基本的には同じものよ」

「え……？」「うそ、それって……？」

「これから二人は、メスちんぽ性欲に悩まされることになるわ」女の子のことが可愛くてしょうがなくなつて、そのおちんぽを触らせたり、舐めさせたり、しまいにはおまんこに入れたくなっちゃうのよ」

「は？」「い、意味わかんない……」

「もう、普通の女の子としての生活は出来ないと思いなさい」

「ちよ、ちよつと待つてよ……そんなの、おかしいでしょ！ ありえないって……んんっ」

反論していた愛衣ちゃんが、突然妙な声を上げる。

見ると、凜先生におちんちんを手のひらで握られていた。根元のところを優しく手のひらで包まれ、ゆっくりと上下に動かし始めている。

わたしはようやく頭が働き始めた。あれは、男の子がよくするらしいオナニーと同じ動きだ。

男の子とおちんちんが生えてきたということは、そのおちんちんをああい風にしごかれたら、愛衣ちゃんはもしかして、気持ちよくなってしまう……？

「な、なにこれっ……」り、凜先生、やめてっ」それっ、なんか変な感じっ」

「最初は慣れなくても、徐々に気持ちよさがわかってくるわ」ほらほら、凜先生のおてで初めての射精しちやいましょうね」

「しゃ、射精……！？ んああっ」や、やばっ」ちよつと、本当にやめてってば……んおおっ」

わたしはしびれたように動けなくなつてしまいがら、目を見開いて、愛衣ちゃんがおかしくなつていくのを見つめていた。

しごいてもらっているおちんちんがどんどん赤く大きくなつて、ぱんぱんに膨れ上がつていく。

愛衣ちゃんは段々と目元がとろんとなつてきてしまつて、なぜかぴーんと足を伸ばして、悶えていた。

「これ、なに……んおおっ」なんか、ゾクゾクする……」

「いっぱい気持ちよくなっちゃういなさい」その感覚は、快感よ」たっぷり味わつて」

「だ……ダメだこれ、き、気持ちいいっ♥ 凜先生、そうやってシコシコすると、気持ちいいよおっ♥ んおほおっ♥」

おほお♥ とありえないくらいだらしないうで喘ぐ愛衣ちゃん。

ただただわけがわからないまま、気持ちよさそうな愛衣ちゃんを見ると、突然体をびくつと震わせて背中を波打たせた。

「あっ、なんか出るう♥ ちんぽから熱いの出ちやいそうう♥ 止めらんない♥ んおおおおっ♥ おおおおお♥ んぐう♥」

びゆるっ♥ びゆるるっ♥

愛衣ちゃんはいきなり、おちんちんから白い液体を飛ばした。それは勢いよく凜先生のストッキングにかかり、べつとりとこびりついた。

びくびくと震えて、下品な声でうわ言のように呟いている。

「おおお♥ んおおお……♥ 射精、しちゃった……♥ ふたなりちんぽで精液出しちゃった……♥ おおお♥」

「どう？ 射精するの、頭おかしくなるくらい気持ちよかったですでしょう？ これがふたなりの特権、超強烈な快感よ♥ 一度味わうと、普通の子は毎日射精しないと気が済まなくなっちゃうわ♥」

「やば……♥ こんな知ったら、ダメになっちゃうじゃん……♥ めちゃくちゃ気持ちよかったよお……♥」

いまだにゾクゾク♥ と体を震わせている愛衣ちゃん。その姿はあまりにもだらしなくて、わたしは正直ドン引きしてしまった。

だから、凜先生がこう言ってきた時、わたしは首を縦に振らなかった。

「さて、次は美姫ちゃんの番♥ おちんぽしごいて、たっぷり射精しましょうね♥」

「や、やめてくださいっ」

凜先生がわたしのおちんちんに手を伸ばしてきたのを、すつと避けて、自分のスカートとぱんつを慌てて拾った。そして大急ぎで身に着けながらじりじりと後ずさりした。

こんなの、おかしいに決まってる！

「失礼しますっ！」

わたしは保健室を出て一目散に自分の寮部屋へと向かって駆けだした。

愛衣があんな風になってしまったのがショックだった。精液を出してだらしないう笑みを浮かべる愛衣の姿が脳裏にこびりついて離れない。

絶対に、あんな風になりたくない。わたしは絶対に射精なんてしてたままるものかと決心した。

女教師友梨佳 四章

わたしはその日、職員室で凜先生に手招きされた。

凜先生は、あれから五年経ったのにも関わらず、全くその美貌は衰えていなかった。

先生自身の研究でわかったらしいのだけど、実はふたなり精液を飲み続けると、年を取っても老けるスピードがありえないほど遅くなるらしかった。

ますます肌はびちびちになっているし、胸も以前より大きくなっている気がする。どんな魅力的になっていく凜先生も、もちろんわたしの尊敬する先輩教師の一人だった。

「どうしたんですか、凜先生◆」

「こっちにきて◆」

意味深な笑みを浮かべているから、期待して身を寄せると、こっそり教えてくれた。

「これが最新のふたなり女生徒のリストよ。新入生の欄を見て◆ 一年B組の、友梨佳ちゃんが気に入ってた二人に、おちんぼが生えてきたわ◆」

「本当に……？ 美姫ちゃんに、愛衣ちゃんまで……。これからわたしが犯してあげようと思ってたのに。ちょっとがっかりです」

「あら、喜んでくれると思ったのに。だってふたなり教え子と一緒に、同じ女の子を輪姦してあげられるのに◆」

「誰がふたなりになるかはランダムだから仕方ないですけどね……。あれ、凜先生、今、なんて言いましたか？」

「同じ女の子を輪姦してあげられるのに、って言ったのよ◆」

わたしはその言葉から閃いていた。

この子たちと一緒に撫子ちゃんを犯すことで、ふたなり精液便器として一步步調教していくのはどうだろう？

これまで観察した限りだと、三人は偶然にも同じ中学出身の幼馴染らしかった。いつも仲良く一緒にいて、楽しそうにじゃれあっている。

撫子ちゃんがわたしの淫乱メス犬に成り下がっているのを知らずに。

愛衣ちゃんと美姫ちゃんの二人にオスちんぼが生えてきてふたなり化してしまったのなら、好都合だ。

きつとまだ二人はふたなり性欲に覚醒していないに違いない。だから、撫子ちゃんを襲わないのだ。

わたしが二人を導いて、何年間も仲良くしてきた幼馴染を犯す、とびきりの快感を教え込んでやればいい。

三人を撫子ちゃんのおまんこでつながった、穴兄弟ならぬ、ふたなり穴姉妹にしてしまうのだ。

「凜先生、わたし、いいこと思いついたんです！」

「どういうことかしら？」

「愛衣ちゃんも美姫ちゃんも、撫子ちゃんに夢中にさせちゃいましょう♥」

わたしは一通り計画を話した。撫子ちゃんを自分のメス奴隷にしたこと、これからクラス
のふたなり精液便器にしたいこと、そのための第一歩としてふたなり愛衣ちゃんに撫子
ちゃんのおまんこの虜になって欲しいこと。

凜先生はにこりといやらしい笑みを浮かべて、わたしの案に協力してくれた。

「素敵なアイデアね♥ もちろん手を貸すわ♥ さっそく今日の放課後、実行しましょう♥」
わたしの撫子ちゃん精液便器計画は、着々と順調に進行していくのだった。

放課後、わたしはいつも通り一年B組に撫子ちゃんを呼び出した。

「友梨佳先生♥ 今日もいっぱい気持ちいいことしましょう♥」

これまで毎日おまんこにナカ出し射精して、入念にふたなり精液を込み込ませた撫子
ちゃんは、すっかり淫乱ドスケベ娘になってしまっていた。

わたしの顔を見るたび発情し、頬を染め、媚びるような目でわたしを見つめてくる。

普段は清楚でおとなしいお嬢様なのは変わらないのに、わたしと目が合った時だけ色
溢れる表情を見せる撫子ちゃん。すっかりふたなりちんぼ狂いと化していた。

「今日は、特別なお客さんと呼んでるって話したでしょう？ もうすぐ到着するから、たっ
ぷり歓迎してあげるのよ♥」

「はあい、友梨佳先生っ♥」

従順にわたしに従う様子は、完全に隷属したメス奴隷だった。

少し待つと、予定通り、凜先生が愛衣ちゃんを連れてきた。

愛衣ちゃんは最近、毎日保健室に通い詰めて、凜先生に抜いてもらって快楽欲求を満た
しているらしかった。今日も抜いてもらえるはずなのに、自分の教室に連れ戻されてちよつと
困惑しているのが読み取れた。

すでにちんぼ快楽を待ちわびて、スカートを押し上げてふたなりちんぼがガチガチに勃
起しているのが丸見えだ。

わたしと撫子ちゃんが並んで机に腰かけているのを見て驚いた顔をした。

「撫子……？ どうして……？」

「愛衣ちゃん♥ 友梨佳先生から聞いたよ♥ ふたなりおちんぼが生えてきちゃったんです
ね♥」

「なっ！ そ、それは……どうして、そんなこと撫子に言ったんですか、友梨佳先生！？
っていうか、どういうつもりなんですかつ！？」

「それは撫子ちゃんの口から聞きなさい♥」

わたしが顎をしゃくって指図すると、撫子ちゃんはふらふら♥ と愛衣ちゃんに近づいて、

ドスケベないやらしい笑みを浮かべる。

「それは、わたくしが愛衣ちゃんのおちんぼをヌキヌキしてあげるためです♥」

「な、撫子……！？ んおおっ♥」

撫子ちゃんがスカートの上からナデナデ♥ としてあげただけで、愛衣ちゃんのちんぼはビクビク動いて、感じまくっているのが分かる。

スカートを捲り上げ、下着から飛び出した血管の浮き出たバキバキ勃起ちんぼをしごいてあげると、愛衣ちゃんは至福とばかりの表情を浮かべ、うわ言のように言った。

「こんなに、いやらしい手つき……撫子、どうしちゃったの？ んほおっ♥」

随分とだらしのない喘ぎ声をあげるなあ、とわたしはかつてのふたなりクラスメート、紗耶香を頭の片隅で思い出しながら、例の計画を離れた。

「撫子ちゃんには、このクラスのふたなりの精液便器になってもらおうと思ってるの♥ いずれふたなりっ娘が増えてきた時に、ちゃんと処理してあげられる女の子が必要だと思っ♥て♥」

「そうなんです♥ わたしはみんなの性欲処理がかりになるんですよ♥ 愛衣ちゃんのふたなりちんぼが勃起して苦しそうなときは、わたしがいつでもコキコキ♥ してあげます♥」

「そ、そんな……撫子は、それでいいの？ んひいっ♥ そこしごいたらやばいいいっ♥」

「んふふ♥ 気持ちいいんですね♥ わたしは愛衣ちゃんのそんな顔が見れて嬉しいです♥ これからも色んなふたなり女の子たちの快樂に溺れた顔が見れると思うと、ゾクゾクしちゃういます♥」

「撫子……？ そ、それダメえっ♥ 本当に興奮しちゃうからあっ♥」

愛衣ちゃんは撫子が制服の前を開けて、ブラジャーのホックを外し出すと、焦った声をあげた。

同じふたなりとして、必死に射精をこらえているのがわかる。どうやら自分が射精するだらない姿を見せたくないと思っているらしかった。

ブラを外すと、例のボリュームたつぷりの巨乳が姿を現す。愛衣ちゃんの目はそれに釘付けになって、すっかり息を荒げてしまっている。むしゃぶりつきたくてたまらなそうだ。

「な、撫子の胸、すごお……♥」

「愛衣ちゃんに気持ちよく射精してもらうために、おっぱい奉仕してあげます♥」

そのたゆんだゆんのおっぱいで、ふたなりちんぼをびったりと挟んでしまった。むにゅう♥ と圧迫され、愛衣ちゃんは恍惚としながらも辛うじて理性が残っているようだった。

「ダメだよ、撫子……こんなこと、やめよう？ ……んおおっ♥ おおおっ♥」

「そんな真面目なこと言いながら、すごい声出ちゃってますよ、愛衣ちゃん♥」

「おほおっ♥ だって、おっぱいで挟むなんて卑怯だよお♥」

撫子ちゃんは弾力たつぷりの巨乳を、両手で左右から挟んで、愛衣ちゃんのちんぼにムニユムニユ♥ と押し付けている。

愛衣ちゃんは耐えられないとばかりにポニーテールの髪を振り乱してよかった。

「おっぱいすっごい柔らかい♥ このままじゃわたしたち友達じゃいられなくなっちゃう♥ 撫子のこと、性欲の捌け口にしか考えられなくなっちゃう♥ おおお♥ これダメ、気持ちいい♥」

「わたしのこと、メス奴隷にしちゃっていいんですよ♥ わたしのおっぱいにふたなり精液ぶちまけてください♥」

「おおおお♥ イクイク♥ 撫子ちゃんにばいずりされてイク♥ 射精するところ見られるの恥ずかしいよ♥ で、出るう〜♥ おぐっ♥ おおお♥」

びゅるっ♥ びゅーっ♥

愛衣ちゃんはびくんっ♥ と背筋を伸ばして精液を放った。撫子ちゃんのおっぱいで受け止めきれずに、ぼたぼたと白濁液が教室の床へと垂れる。

よほど気持ち良かったようで、愛衣ちゃんはしばらく射精が止まらず、全身に力を入れたままおおお♥ おおお♥ と変な喘ぎ声をあげながら震えていた。

撫子ちゃんは射精が終わるまでおっぱいをムニムニ♥ と動かし続け、ねばねばの精液まみれになってしまった。首筋や顔にまで、ドロドロの精子がこびりついている。

わたしはその様子を見ても満足していなかった。

まだまだ愛衣ちゃんなら射精できると思った。撫子ちゃんにもっともつと搾り取らせて、もう本当に撫子ちゃんに奉仕してもらわなければ満足できない体になってしまうのだ。

「撫子ちゃん、まだまだ続けて♥ 愛衣ちゃんが精液出し尽くしてカラカラになっちゃうまでエッチなことやめちゃダメよ♥」

「わかりました、友梨佳先生♥ 愛衣ちゃん、ごめんね♥ イったばかりなのに気持ちよくしちゃうね♥」

「えっ……撫子？ ちょ、ちょっと待って、もう少し休ませて……♥」

「ダメです♥ 次はわたしの淫乱おまんこが、愛衣ちゃんのふたなりちんぽを待ちわびて、ビショビショになってるんですから♥」

撫子ちゃんは、スカートの下から下着だけを脱ぎ、ヌレヌレのおまんこを見せつけた。

愛衣ちゃんの手を取って、その指をそこに触れさせ、くちゅくちゅ♥ と愛撫させる。割れ目をいじられる快感に撫子ちゃんはあんっ♥ と可愛い声を上げた。

「こ、これが……撫子のおまんこ……♥」

愛衣ちゃんはその感触にまた興奮が加速してしまったようで、射精したばかりのふたなりちんぽがビクビク震えてしまっている。

（おまんこにふたなりちんぽ、いれてみたいんだよね♥ すぐわかるわ♥）

可愛い♥ と思いながら眺めていると、撫子ちゃんはそっと囁いた。

「触るだけで満足なんて、してないですよ♥」

そして、椅子に座った愛衣ちゃんのふとももの上に跨った。二人は向かい合ったまま距離を詰めて、おまんこふたなりちんぽが触れ合うほどびったりとくっついた。

「な、撫子の身体の体温、感じる……♥ どうしよう、わたし、撫子とセックスしたくなっ

てきちゃったあ……」

「それでいいんだよ、愛衣ちゃん。わたくしのいやらしい体でもっとも興奮してください」

撫子ちゃんがふたなりをダメにする、優しい囁きで誘惑した。愛衣ちゃんはすっかり脳みそをトロけさせられて、おまんこのナカで精液を出しまくることを妄想せずにはいられないはずだ。

「それでは、いれちゃいますね」

「ま、待つて……撫子、それは、やっぱりだめっ」

「どうしてですか？」

「セックスしたら、戻れなくなるう……」撫子のこと、エッチな肉便器としか考えられなくなっちゃう」

「そうしていいんです。わたくしはこのクラスの肉便器になるんです。ほら、このおまんこのナカで、びゅーびゅー。って、したくないんですかあ？」

「そ、それは……」

「愛液まみれでネチョネチョになったふたなりちんぼを、おまんこのヒダヒダでくちゅくちゅ。ってしごいてあげます。想像してみてください、愛衣ちゃんのちんぼが、わたくしの一番エッチなところにはいるところを……」

「そ、そんなの、気持ちいいに決まってる！想像したらダメなのに、想像しちゃったあ。入れたくて仕方なくなってきたあ。撫子とセックスしたいっ、おちんぼ突っ込んで気持ちよくなりたいい……」

「正直でいいですね。すぐにびゅっ。って精液出ちゃわないようにしてくださいね」

撫子ちゃんは、愛衣ちゃんのバキバキ勃起ちんぼの上に腰を下ろしていく。

トロけた割れ目の入口が亀頭に触れて、ちゅぼん。と肉棒を飲み込んだ。そのままぐじゅぐじゅと奥深くまで、迎え入れていく。

「おほおっ。おおおっ。撫子のまんこおっ、気持ちいい……。絡みついてくるうっ」

撫子ちゃんのお尻がぺたんと愛衣ちゃんの太ももに落ちて、二人は深く深く結合した。きつとおまんこのナカで、亀頭が子宮口にびったりとくっついてキスをしているに違いない。

愛衣ちゃんは亀頭が入っただけで、唇の端から涎を垂らし始め、一番奥まで挿入した今も、たまらない快感で体をヒクヒクと震わせている。

「わ、わたしいい、ふたなり童貞、卒業しちゃったあ……。撫子のおまんこで、卒業しちゃったよ……」

「あんっ……。愛衣ちゃんのおちんぼ、カチカチになって喜んでるのが伝わってきます……。初めてののおまんこの入れ心地はどうですか」

「こんなの、一回味わったらやめられなくなっちゃうう……。女の子とセックスしないと生きていけない子になっちゃうってえ……」

「エッチしたくなったら、わたくしに言ってください♥ いつでもわたしが、愛衣ちゃんのおちんぽをおまんこで優しく受け止めてあげます♥」

そして撫子は、愛衣ちゃんの上で腰をグラインドさせ始めた。

ぬちゅぬちゅ♥ と音を立てて、こすりつけるように腰をゆらゆらと動かす撫子。愛衣ちゃんはポニーテールを振り乱してよがっていた。

「あつ、あぁっ♥ ダメ、それダメえっ♥ おほおほっ♥」

「さっき出したから、まだ我慢できるはずです♥ いっぱい精液溜めて、気持ちよくぴゅっぴゅっ♥ ってしましょうね♥」

撫子ちゃんは容赦なく、わたしが教え込んだいやらしい腰使いで、愛衣ちゃんを責め立てていく。

ふたなりちんぽにたっぷり愛液をまぶして、柔らかいヒダヒダでしごきあげ、最高の快楽を与えてあげているのだ。

（愛衣ちゃん、あんなにだらしない顔になっちゃって、すっごく気持ちよさそう♥ これはもう、撫子ちゃんなしでは生活できなくなっちゃうわね♥）

わたしはまた一人、女生徒が快楽の沼に引きずり込まれていくのを見て、にやりと笑みを浮かべてしまった。

「な、撫子お♥ ふたなりちんぽ、溶けちゃいそう♥ もっと撫子と、エッチなことしたい♥」

「いいですよ♥ 心ゆくまでわたくしの身体で気持ちよくなってください♥」

「おおお♥ おおおお……♥ おっぱい……♥ 撫子のおっぱい、触らせて♥」

「愛衣ちゃんの精液まみれになっちゃってますけど、それでよかったら♥」

撫子がにこりと笑みを浮かべると、撫子是我慢できないとばかりに激しくそのもちもちおっぱいを鷲掴みにして揉みしだいた。

「柔らかいっ……♥ 撫子の身体、気持ちよくて、あったかくて、ふにふにでえ……♥」

「うふふ♥ 愛衣ちゃん、わたくしも、愛衣ちゃんとキスしたくなってきちゃいました♥ ちゅーっ♥ ってしていいですか？」

「こんな気持ちいいのに、キスなんて、そんなことしたら……♥ すぐにイっちゃうって……んちゅ♥ あむう♥ ちゅうう♥」

愛衣ちゃんにびったりと唇を重ねられ、愛衣ちゃんはそれを美味しそうに味わっていた。くちゅくちゅ♥ と舌を絡め合わせ、唇をお互いにはむはむと甘噛みしあって、貪りあうようなキスをしている。

可愛い女生徒同士が、こんなにいやらしいことをしている姿は、なんともいえない耽美的な光景だった。彼女たちがついこの間までただの幼馴染で、ちんぽさえ生えてこなければこんなことにはならなかったのだと思うと、ますます興奮してしまふ。

ふたなりちんぽをおまんこで咥えこまれ、両手でおっぱいを揉みしだき、唇まで甘い涎まみれにされて、愛衣ちゃんは限界を迎えた。

「撫子ちゃ……あむう♥ んんう……♥」

「ちゅっ♥ ちゅっ……れろお♥」

「んんんんっ♥ んはあっ、撫子っ……んちゅ♥ んむう……んんん〜!」

ぴゅるるるっ♥ ぴゅっぴゅっ♥ ぴゅくうっ♥

イクと叫ぶことすらできず、ガクガクと腰を震わせながら、ふたなりちんぽから精液を噴き出す愛衣ちゃん。ぴんと足を伸ばしたまま、白目を剥きそうになっている。

最後まで腰をグラインドされながら精液を搾り取られ続け、唇を吸われ続けていた。

撫子がキスをやめると、愛衣ちゃんはぐったりと背もたれにもたれかかり、まだ弱弱しく痙攣していた。

「れろれろお♥ んちゅ……んはあ♥ 愛衣ちゃん、すっごく気持ちよさそうにイキましたね♥ 大丈夫ですかあ♥」

「もう、ダメえ……♥ 撫子、気持ちよすぎ♥ 毎日撫子とセックスするう……♥」

「そうしましょうね♥ いつでも愛衣ちゃんの便器になってあげますよ♥ それより、まだ、ふたなりちんぽに精液、残ってないですか？ 最後までしーしー♥ っってお漏らししてください♥」

「おおおっ♥ 撫子のおまんこ、ぎゅうって締まってるう♥ 射精止まんないっ♥ おおおお……♥」

ぴゅくぴゅく……♥ と愛衣ちゃんが再び射精した。最後の一滴まで撫子ちゃんは逃さないのだった。

くちゅり♥ と音を立ててふたなりちんぽを引き抜き、立ち上がった撫子ちゃんを、わたしはねぎらってあげた。

「よくできたわね、撫子ちゃん。なかなかの淫乱っぶりだったわ♥」

「ありがとうございます、友梨佳先生♥ ここまでこれたのも、友梨佳先生のご指導のおかげです♥」

「この調子で、これから頑張ってちょうだい♥ 次の標的は、美姫ちゃんよ」

「美姫ちゃんのふたなりちんぽを、わたくしに虜になるまで搾って搾って搾りまくればいいんですね♥ わかりました♥」

撫子ちゃんはすっかり精液便器にふさわしくなってしまった、いやらしい笑みを浮かべるのだった。

わたしは最後に、射精したときそのまま椅子に座り続け、ぼんやりと余韻に浸っている愛衣ちゃんに話しかける。

「愛衣ちゃん、明日からも撫子ちゃんのナカで射精したい?」

「したいですっ、させてもらえるなら、何回だってっ」

「それなら、わたしの言うことを聞いてくれるかしら? ふふ♥ 簡単なことよ。美姫ちゃんを、明日の放課後、保健室に連れてきなさい♥ もちろん何をするかは秘密にして、なんとしてでも捕まえてくるのよ」

「美姫を……？　でも、美姫はふたなり射精、したくないって……絶対、他の人にはちんぽを触らせたくないって……」

「撫子ちゃんとセックスし放題よ？　それなのに、美姫ちゃんとの友情を優先するのかしら」

「わたし……撫子とセックスしたいです♥　わかりました、美姫のこと、連れてきます♥　きつと美姫だって、射精の気持ちよさを知れば、わかってくれるはず……」

愛衣ちゃんは情けないことに、自分のふたなりちんぽ快樂のために、友達をわたしに売り渡してしまうのだった。

美姫 二章

わたしはあれ以来、ひたすら、ふたなりちんぼが疼くのを我慢し続けていた。

愛衣ちゃんが目の前で射精したあの日から、ちんぼが固くなって、うずうずして仕方なくなってしまうのだ。

（ダメ……絶対射精しないって、決めたんだからっ）

わたしは絶対に射精しないと決めていた。

しかし、ふたなりちんぼはいつの間にか愛衣ちゃんと同じくらいの大きさまで成長し、わたしの意思に反してカチカチに勃起してしまうようになっていた。

ヒクヒクと震えて、苦しそうに、はちきれんばかりになってしまふのだ。

次第にちんぼは元気を増していき、朝起きたときも、授業中も、放課後も、ずっと勃起し続けるようになった。

ちよつとだけしごけば、すぐにでも射精して気持ちよくなれるのかもしれない。

わたしはまだ、ふたなりになってから一度も射精していない。あれだけ気持ちよさそうにしていたから、よほどイインだろうだと何度も想像した。

ちんぼが我慢汁を漏らして刺激を求めてきて、悪魔の囁きが耳に聞こえるようになり始めていた。

ふたなり射精は、どれくらい気持ちいいんだろう？

一回くらい射精しても、ハマってしまうことはないんじゃないかな？

他の人が見ていないところで、一回くらいオナニーしてしまえばいいんじゃないかな？

好奇心と誘惑に負け、つついっい勃起したふたなりちんぼを触ってみたことは何度もあった。一瞬でなんともいえない甘い感覚が走り抜けて、わたしは決まってそこで我に返ることを繰り返していた。

「触っちゃダメっ」

一度でも射精したら、やめられなくなっちゃうに決まってる。毎日オナニーばかりするようになっちゃう。わたしは誘惑に打ち勝って見せるんじゃないかな？ そう思いつつも、愛衣のだらしのない姿を思い出すと、意地でもオナニーしないことを貫き通せた。

（絶対にあんな風になりたくないっ）

おとおおっ ♡ とだらしのない声をあげ、ちんぼの先から白くてドロドロの汁を漏らす愛衣の姿。

でも、愛衣ちゃんだって、望んであんな風になってしまったわけじゃない。

「ちんぽが勝手に勃起して、射精したい、射精したい♥ って言ってる気がするの」

愛衣ちゃんは保健室で初めて射精した次の日、そう言った。

あれ以来、毎日射精しないと気が済まなくなってしまうらしく、すっかりふたなり快樂にハマってしまっていた。

ちんぽをしごいてもらって、精液を出させてもらうのを、「抜く」というらしいけど、愛衣ちゃんは凜先生にそれから何度も抜いてもらっているらしく、それをしてもらえない時はトイレで一人寂しくちんぽをコキコキして、便器に精液を出していると恥ずかしそうに教えてくれた。

本当は射精なんて気持ちの悪いことはしたくないのに、勝手にふたなりちんぽが勃起して、しごかずにはいられなくなってしまうと言うのだ。

「もうやだよお……ちんぽなんて要らないよお……」

愛衣ちゃんもわたしと同じように、ふたなりちんぽに迷惑をかけられているのだった。

そこで、わたしたちは二人で一緒に考えるようになった。

あれから愛衣ちゃんとわたしは、どうにかしてふたなりちんぽを消すことが出来ないか、方法を探し始めたのだ。

そしてある日、ついに愛衣ちゃんから、救いの手が差し伸べられた。

「ねえ美姫、聞いて聞いて！ わたし、すっごいいい話聞いてきたの！」

「なにになに？」

「凜先生がふたなりちんぽを消す方法を見つけてくれたらしいの！」

わたしの中で喜びが駆け抜けた。

これで、わたしはふたなりちんぽ射精の誘惑から逃れることが出来る。

我慢し続けた甲斐があった、と思う一方で、ちょっともったいないような気がするのも事実だった。一度も射精の味を知らずに、ちんぽを消してしまうのは、なんだか損じゃないかなと思ってしまったのだ。

そんなだらしなない自分を押し殺して、わたしは愛衣に話の続きを聞いた。

「それで、どうすればふたなりちんぽを消すことが出来るの？」

「えっと、それは……凜先生の口から、直接聞いて」

「え？ なんて？」

「い、いいじゃん、わたし説明するの下手だから……とりあえず、保健室一緒に行こうっ」

わたしはなんとなく違和感を感じて首を傾げた。

愛衣はそんな風に自ら卑下するような子じゃなかったはずだ。何か、嘘をつかれているような気がしてならなかった。

（もしかして、ドッキリとか？）

色々考えようとしていると、愛衣に背中を押されて、ぐいぐいと保健室へと連れていかれてしまった。

とにかく、ふたなりちんぽが消えるという朗報で舞い上がってしまったって、嫌な記憶が残っている保健室にも、素直に入ってしまった。

「あら、いらっしやい◆ 二人とも◆」

凜先生が出迎えてくれて——そして、隣にもう一人女の先生がいた。

美優先生。ホールで行われた始業式で、みんなの前で話していた美人の先生だ。胸やお尻が大きくて、すごく美人だったから覚えていた。

どうして美優先生がこんなところに。そう思っていると、愛衣が妙なことを言った。

「ごめんっ、美姫……わたし、美姫のこと騙したっ」

「え……？」

呆気にと取られているうちに、わたしは愛衣に両腕を掴まれて、がしやりと何かを嵌められた。カチャカチャと鳴る金属製の何か。振り返ってそれを見て愕然とした。

手錠。後ろ手に嵌められ、振りほどこうとしても無駄だった。

救いを求めて美優先生や凜先生を見ても、二人ともいやらしい笑みを浮かべるだけで、助けようともしてくれない。

後ろで、愛衣が懺悔するかのように呟き続けていた。

「美姫、ごめん……わたし、美姫を売った……ごめん……」

「ちよつと待って、愛衣、なにこれ……」

「わたしたちが、愛衣ちゃんにそうするようお願いしたのよ」

言ったのは美優先生だった。

理解が及ぶのに時間がかかった。美優先生の指示で、愛衣はわたしを保健室に連れてきて、手錠をかけた……そういうことなら、わたしは、これから何をされてしまうんだろう？

答えは簡単だった。

わたしのふたなりちんぽを、射精させてしまおうとしているのだ。

「や、やめてっ！ 愛衣、離してよっ」

「ごめんね……」

愛衣は繰り返して謝りながら、わたしを椅子に座らせ、動けなくなるよう椅子に素早く括り付けた。そのまま縄でわたしの腕や足を、椅子に縛り付けてしまう。

抵抗しようとしても、愛衣は何かにとり憑かれたようにためらいなく縄をわたしに巻く手を止めることはなかった。

身動きが取れなくなったわたしの前で、愛衣は凜先生のところに駆け寄った。

「凜先生、わたし、ちゃんと行われたとおりにやりました◆ 約束通り、気持ちいいコト、してくれそうですよね……？」

「もちろんよ◆ あとでたっぷり二人で楽しみましょうね◆」

「は、はい◆ あ、ありがとうございます◆」

愛衣の股間では、ふたなりちんぽが勃起して反り返り、スカートを押し上げていた。

悲しくて仕方なかった。愛衣はメスちんぽ欲求に負けて、わたしを生贄に差し出したのだ。

心の底から信用していた愛衣がわたしを裏切った。そのことがショックだった。

そして恐ろしかった。ふたなりちんぼの射精欲求は、こんなにも簡単に友情を壊してしまふということが。

「つていうことは、ふたなりちんぼを消す方法が見つかったつて言うのも……」

「全部、嘘なの……ごめんね、美姫。ふたなりちんぼは、一度生えたら絶対に消えることなんてないつて、凜先生が言つてた。だから、ちんぼを受け入れて、ふたなりとして楽しく生活するしかないんだつて」

「やだ……やだやだやだつ！ わたしは、普通の女の子に戻りたいのつ！」

「美姫も、きつと一度射精したらわかるよ……あんなに気持ちいいことが出来るんだつたら、ふたなりになるのも悪くないつて、考え直してくれるよ」

「絶対イヤつ！ やめてつ、この縄をほどこいてよつ！」

わたしの悲痛な叫び声に応じてくれる人は、この保健室にはいなかった。

代わりに、美優先生がくすくすと笑つて近づいてくる。

「落ち着いて、美姫ちゃん。これからいっぱい気持ちよくしてあげるから、大人しくしててね♥」

「え！？ 気持ちよくつて……やめてつ」

このままでは、美優先生に搾り取られてしまう。

大人の雰囲気漂う、この綺麗な先生にちんぼを触られたりしたら、すぐにでも射精してしまいそうな気がした。椅子に縛り付けられているわたしは逃げる事なんて出来ず、足元で美優先生が上品に膝をそろえて屈むのを見ているしかなかった。

「まずは、美姫ちゃんのおちんぼを見せてちょうだい♥」

「いやつ！ スカート、めくらないでつ！ ぱんつ脱がせないでつ！」

美優先生の手が、そろりとスカートをめくりあげ、ぱんつをするするとわたしの足から引き抜いていくのを、抵抗できずに見守るしかなかった。

わたしは下半身を丸裸にされ、半勃起になったふたなりちんぼをさらけ出されてしまった。

こんなにも恥ずかしいところを見られているのに、なぜかどこかで興奮していて、ちんぼがムクムクと大きくなり始めているのが悔しくて仕方なかった。

(どうして……勃起なんてしたくないのにっ)

美優先生はそれを見て、嬉しそうににこりと笑つた。

「美姫ちゃんの童貞ちんぼ、可愛いわね♥ わたしに脱がされて興奮しちゃったのかしら？ ちよつとずつ大きくなつてきてるわよ♥」

「違うんですつ！ これは、勝手に……っ」

「もつと興奮すれば、もつと大きくなるかしら♥ わたしのおっぱい見せてあげてもいいわよ♥ ふふ♥」

シャツのボタンに指をかけて、外していく美優先生。

紫色のいやらしいブラジャーを下にずらすと、びっくりするくらいたわわで大きなおっぱいが姿を現した。

(すごい……柔らかそう……)♥

ついついわたしはそれに見惚れてしまった。昔はおっぱいなんて見ても見惚れなかったのに、どうにかしてしまっている。視線をその巨乳から外そうとしても、どうしてもじろじろと見つめるのをやめられなかった。

股間で、ふたなりちんぽがますます大きくなって、ガチガチに固く勃起してしまった。

ヒクヒクと震えだし、まるで刺激を待ちわびているようだった。

(こんなはずじゃないのに……)♥ ああ……)♥ ちんぽ、触って欲しい……)♥

ちんぽの先から、我慢汁がトロトロと溢れ出し、どうしようもなく欲望が体を駆け巡った。

「あらあら、随分スケベな顔になっちゃってるわよ、美姫ちゃん♥」

「イヤ……っ！　なんで、なんでわたし、先生のおっぱいで興奮してるの……)♥　こんなはずじゃないのに……)♥」

「ふたなりのメスちんぽ欲求を認めなさい？　一度生えてきてしまったからには、女の子にしごいてもらって、射精したいって思うのは仕方ないことなのよ♥」

「そんなわけっ！　わたしは我慢して見せるっ！　絶対、射精なんてしない……っ！」

「どこまで我慢できるかしらね♥　ふふ♥」

そして、美優先生は、細くて綺麗な指で、わたしの醜悪なフル勃起ちんぽを握った。血管が浮き出て、パンパンに膨れ上がったオナ禁ちんぽを、優しくさすられた。

「ひいひいっ♥」

勝手に背筋がぴんと伸びて、ぐっと奥歯を噛んで叫んでしまった。

温かい手のひらでカリ首のところを包皮の上から握られ、上下に動かされるのが、たまらない。

凄まじい心地よさが、腰から背中へとゾクゾク♥　と駆け上ってきたのだ。

(な、なにこれえ……)♥

初めて女の人にちんぽをシコられて、わたしは未知の感覚に襲われていた。

素直に気持ち良かった。このまま触られたら、頭がどうにかなってしまうと思った。それほど怒涛の快楽だった。

「すごい声出てるわよ、美姫ちゃん♥　これまでオナニーもしたことないって、愛衣ちゃんに聞いたわよ？　それだったら、こうなっちゃうのも仕方ないわね♥」

「だ、ダメえっ……)♥　それダメですう……)♥　シコシコしないでえ……)♥」

「ゆっくりしごいてあげるから、たっぷり堪能なさい♥　ほら、シコシコ、シコシコ……)♥」

「いひいっ♥　そ、そんなとこ、こすられたらあ……)♥　ダメ、絶対射精なんてしないっ！　しないんだからあっ！」

わたしは必死になって、その身震いするほどの快感をシャットアウトしようとした。

別のことで頭をいっぱいにとしようとした。

中学時代に頑張っていた水泳部。このままちんぼが生えたままだったら、水着を着ることが出来なくなる。夢だった大会出場も出来なくなるし、恥ずかしくてプールにも入れない。どうしてもそれだけは避けたかった。わたしはこのふたなりちんぼをどうにかして消すのだ。

一度射精したら、後戻りが出来なくなるとわかっていた。

愛衣が凜先生にちんぼをしごかれて、どぴゅどぴゅ射精する姿を思い出す。涎が垂れそうなほどだらしなく口を開けたまま、夢見心地という表情で、変な声を出してイッてしまう愛衣。

あんな風には絶対になりたくないのだ。わたしは声に出して叫んでいた。

「愛衣ちゃんみたいになりたくないっ ♡ ああっ ♡ ふたなりちんぼから精液出すことしか考えられない女の子になりたくないよぉっ ♡」

「我慢しても無駄よ ♡ 手コキ快感に溺れて、ぴゅっぴゅっってお漏らししちゃいなさい ♡ 誘惑に負けて、ぴゅっぴゅっ ♡ ってしたら、すっごく気持ちいいわよう？」

「やだやだやだ、絶対ヤダっ ♡ ひいっ ♡ 射精したくない、したくない、したくないよぉっ ♡」

「射精するのは悪いことじゃないのよ？ 一回射精しちゃえば、美姫ちゃんもその良さがきつとわかるわ ♡ ヒクヒクしてるちんぼから、白くてドロドロの精液、出しちゃいなさい ♡」

「ダメ、気持ちいい…… ♡ ふたなりちんぼコキコキされるの、気持ちよすぎだよぉ ♡ 無理い、我慢むりい…… ♡」

手のひらでぎゅっと根元を握り、ゴシゴシとちんぼをこすりまくる美優先生。

かと思うと、人差し指と親指で輪っかを作り、素早く上下にこすりあげるテクニカルな手コキを披露して見せた。

（それもいいっ ♡ 快感漬けでダメになっちゃうう ♡）

動かす度にくちゅくちゅくちゅ ♡ と卑猥な音が立ってしまうほど、ちんぼは喜びのうれし涙を溢れ出させている。

腰が浮き上がってしまうほど、快感まみれになったちんぼが暴発しそうになった時——美優先生はいきなりしごくのをやめて、透明なカウパーまみれの手のひらを、ねちより ♡ と離れた。

ぴくぴく、とちんぼはいきり立ったまま震え続け、ダラダラと我慢汁を垂れ流しにしている。

「え……っ？」

「あら、続けて欲しいの？ 射精したくないんじゃないのかしら」

「そ、そうですっ、わたしは射精、なんか……絶対、しない……」

さっきまで叩き込まれていた快感がなくなつて、わたしは少し寂しさを感じていた。

手コキ快樂が恋しくなってしまうていた。

（わたし、なんてだらしなの……◆ 折角射精を我慢するチャンスなのに、コキコキして欲しくなっちゃってるよお……◆）

「本当にいいのかしら？ もうすぐで射精できそうだったのにね◆」

「うう……◆ もう十分です、から……もう、わたしのちんぼ、触らないで……◆」

わたしはやらしく股を開いて、さっきみたいに亀頭からカリ首を手のひらで包んでシコシコして欲しいと懇願したい気持ちを抑えてそう言った。

氣力を振り絞ってそう言ったのに、美優先生は気持ちいいコトをやめてくれなかった。

「そんな悲しそうな顔で言われてもね？ 表情が、手コキを続けて欲しいって、言ってるわよ◆」

そして、わたしのちんぼに、さっきとは違う刺激を咥え始めた。

根元のところを掴んで、ちんぼの皮を、ぐりぐりと剥き始めたのだ。

「あひいっ◆ やめてっ◆ 皮、それ以上剥かないでっ◆ ズル剥けになっちゃうよお……◆」

「ちゃんと皮はムキムキしないと、不潔なのよ？ ちょっと包茎気味だから、今日は亀頭を丸ごと全部、剥いちゃいましょうね◆」

「だめ、ダメダメダメっ！ そんなに強引に剥いたら、皮が元に戻らなくなっちゃう◆ ふたなりちんぼの先っぽ、無防備にさらけ出しちゃう……あっ◆」

にゅるん◆ と包皮が全て剥けて、真っ赤になった亀頭が丸出しになった。

初めて外の世界と触れたその部分は、美優先生にふー、ふー◆ と息を吹きかけられるだけで感じてしまうほど敏感だった。

一切触られていないのに、今にも射精しそうになってしまって、必死になって堪えた。

つつ、つと丸出しの亀頭を指で触れるか触れないかの優しさで撫でられるだけで、ちんぼはヒクヒク震えて喜んでしまう。

そして、わたしのちんぼはお手入れ不足で、とある状態に陥っていた。

美優先生は、わたしのちんぼのカリ首周りを見て、笑いながら目を細めた。

「なにこれ、チンカスだらけじゃない◆ いくらオナニーしないからって、お手入れをサボっちゃだめよ？ チンカス掃除はふたなりの嗜みなんだから◆」

確かに、わたしのカリ首は黄色っぽいカスが大量にこびりついていて、これまで一度も剥いたことがなかったんだから、仕方ない。

美優先生は舌なめずりをして、わたしにいやらしい笑みを浮かべた。

「こんなに汚いと、お掃除してあげないといけないわね◆ 今日は特別に、わたしがお口でチンカスを全部こそげとってあげる◆」

「や、やめてええっ！ そんなことしたら、絶対射精しちゃうっ◆ フェラなんてわたしの童貞ちんぼが、我慢できるわけないっ◆」

「さっそく、お掃除始めるわね◆ あーむっ◆」

ぱくりと、美優先生のエッチなお口が、わたしのチンカスだらけのちんぼを咥えこんだ。

厚ぼったい唇が、ぴったりと吸い付いている。

涎がいっぱい溜まった、温かい美優先生のお口のナカに包まれた。

ちんぼの根元から先まで染みわたるような、強烈な快感が来た。ちよつとでも気を抜いたら精液が漏れちゃいそうで、わたしは汗をダラダラかきながらなんとか堪え続ける。

咥えられているだけなのに、気持ちが悪かった。少しでも舌でべろべろされたり、じゅるじゅると吸われたら、すぐにでも射精してしまう自信があった。

（もう、ダメかも……）　すぐそこまで、精液来てる……　わたし、だらしな顔して精液びゅるびゅる出す、変態ふたなりっ娘になっちゃうんだ……）

諦めの念を抱いたと同時に、美優先生は強烈なバキュームを始めた。頬がぺったりとちんぽに張り付くほどの吸引。

「じゅるるるじゅるるるるるるるるるっ　ずずずりゅるるるっ」

そして、同時に分厚い舌がカリ首の周りにこびりついたチンカスをこそげとるように、ぐりぐりと一周するようにねつとりと絡みついてきた。

もう本当に限界だった。頭が真っ白になって、ただただメスちんぼ欲求でいっぱいになっていた。

（射精したい射精したい射精したい射精したい射精したいっ）

わたしはついにコルクの栓を抜いたような解放感と共に、一気に精液を出していた。

びゅくっ　びゅくっ　びゅくっ　びゅるびゅるる……

「あつ、ありあつ……　出る出る出る、とまんないっ　ちんぼ汁が勝手にい……」

わたしはこれまで感じたことのない、ありえないほどの気持ちよさで全身を震わせながら、絶頂していた。

射精は何度も続き、その間美優先生はわたしのチンカスを念入りに舐めとり続け、鈴口から溢れる精液を吸い取り続けてくれていた。

その刺激でまた気持ちよくなってしまう、なかなかちんぼの脈動は終わらなかった。

何もかも搾り取られたような達成感と共に、わたしは射精を終え、全身を包む気怠さと幸せたつぷりの余韻に身を預けてしまっていた。

きつと今頃、あの時の愛衣と同じようなだらしな顔で、涎を垂らしているんだろうな、と想像がついても、もうどうでもよくなっていた。

（き、き、気持ちいい……　これ、ハマるに決まってる……　毎日射精しないと、正気じゃいられなくなっちゃう……）

なんとか正気に戻ったところには、美優先生は、口の中にたつぷりと精液とチンカスを溜めて、わたしに見せつけていた。

「美姫ちゃんのザーメンとチンカス、濃厚ですっごく臭かったわ　ずっとオナ禁してたせいかしらね」

そして、ゴクリ、とそれらを全部飲み込んでしまった。

おいしそうにっこりと笑って、美優先生は口元の残りの精液を舐めとった後、ハンカチ

で拭った。

そして、凜先生に目配せをして、何やら意味深なことを言った。

「最近ね、ふたなりの女の子に意地悪するのが、マイブームなの」

意地悪する……？　今、十分に意地悪されたような気がしたけど、もっとひどいことをしようと言うのだろうか？

凜先生は、何やら見たことのない器具を美優先生に手渡した。

「そんなものをつけたら、ちょっと可哀想じゃないかしら？」

「いいのよ」わたしたちにここまで手をかけさせた罰なんだから」

その器具は金属製で、何か棒を収納できそうな形状をしていた。そこにゴムのバンドがついていて、どこかに取り付けられるようになっていてる。

(何のケースだろう……？)

それを手に持って美優先生はにこりと笑った。

「美姫ちゃん、やっと味わえた射精はどうだった？」

「気持ちよくて死んじやいそうでした……」

「あら、そうなの。でも、今日から美姫ちゃんは射精禁止ね」

「えっ」

わたしが呆気にとられている間に、美優先生はわたしの腰にバンドを取りつけ、金属製の棒状のケースに、萎えかけているわたしのふたなりちんぽを、収納した。

そして、がっちりと固定した後、小さな力ぎを取り出し、カチャリ、と音を立てて施錠した。

(うそ……もしかしてっ)

わたしは絶望感に包まれながら美優先生に視線を戻すと、にやりとしながら言われた。

「最初、絶対射精なんてしないって言ってたじゃない。そんなに射精したくないなら、この貞操帯をつけてあげる」

「そ、そんなっ！　貞操帯だなんてっ！　折角、ふたなりちんぽ射精の気持ちよさ、教えてもらったのにいっ」

「隠れてオナニーしようとしても無駄よ」金属ケースの上から触ろうとしても無理だから」わたしが許可しない限り、射精するのは禁止」うふっ、頑張ってね」

「ひどいですっ！　わ、わたしもっ射精したいよおっ！　勃起しても射精できないなんて、地獄ですよおっ」

「一週間後に、わたしのところにいらっしやい」ふたなりちんぽから溜まりに溜まった大量の精液をひり出す極上の快楽を、もう一度味わわせてあげる」

「い、一週間……！？　そ、そんなに我慢できるわけないっ！　精子出せなくて頭おかしくなるうっ」

「これから毎日、美姫ちゃんのちんぽの中で、新鮮なびちびち精子が外に出たいっつ、ドクドク射精して欲しいっつ、て跳ね回るわよ」正気のまま、我慢できるかしら」じゃあね

」

美優先生は、その言葉を最後に、保健室を出て言った。

美姫 三章

貞操帯をつけられてからのわたしの日々は、地獄そのものだった。

あれだけ射精するのを嫌がっていたはずなのに、今度は射精したくてたまらなかった。自分でふたなりちんぽをコキコキしごいて、びゆるびゆる白くてドロドロの精液をたっぷり出したくて仕方なかった。

美優先生に抜いてもらった次の日には、射精欲求はもう限界に達していた。

「出したい出したいっ、精液出したいっ♥」

貞操帯の中でギンギンにちんぽを勃起させたまま、一回もしごくことが出来ず、ただただ発情ちんぽをもてあますしかなかった。

朝起きてても、授業中も、放課後も、ひたすらちんぽのことを考え続けた。

泣きそうになりながら貞操帯の上から虚しく引つ掻き回しても、一切ちんぽに刺激は届かなかった。

ムラムラが体中に溜まって、常に体が火照っていた。ぐったりと机に頭を乗せてぼんやりしていると、愛衣が話しかけてきた。

「美姫……大丈夫？」

「射精したいよおっ！ 愛衣、助けてよお……頭おかしくなっちゃうよお……」

「ごめんね、わたしにはどうすることも出来ないよ……」

そして、愛衣はどうしようもないことに、わたしがちんぽ快楽を我慢し続けているのを知りつつも、保健室に通い続け、凜先生に手コキしてもらっていた。

わたしは、愛衣と一緒に凜先生のところに行き、貞操帯を外してもらえるよう懇願しに行った。

しかし、それは無駄足だった。

「貞操帯のカギは、美優先生しか持っていないわ。力になれなくてごめんね」

「そんなぁ……こんなの、死ぬう……♥ 射精できなくて死ぬう……♥」

そして、わたしが悶えている目の前で、愛衣は凜先生に手コキしてもらっていた。

くちゅくちゅくちゅ、とちんぽをしごかれて、だらしないうへ顔を浮かべて感じる愛衣が羨ましかった。

「ごめんね、わたしだけ射精しちゃうね……凜先生にしごかれて……きもちよくなっちゃうね♥」

「羨ましい羨ましい羨ましいっ！ わたしも精液出したいっ！ オナニーでもいいから、なんでもいいから精液出したいよお……♥」

「おおー、おほおお……♥ イクイクっ、美姫の目の前で射精するうっ♥ んぐううっ♥」
びゅっ♥ びゆるびゆるっ♥

愛衣が気持ちよさそうに、ねばねばの精液を吐き出すのを見て、発狂しそうになった。わたしもなんとかして射精しようと、ぴよんぴよん跳ねて、貞操帯の中で、貞操帯とちんぽを擦り合わせて気持ちよくなろうとしたけど、無駄だった。なにより、そんなバカみたいなことをしようとしている自分に嫌気がさしてやめてしまった。

何度も美優先生のところに、貞操帯を外してもらえよう懇願しに行った。

しかしいつも答えはノーで、その場に這いつくばってお願いしても、カギを外してもらえないことはなかった。

そして、わたしはほとんど気が狂いそうになりながら、なんとか一週間をやり過ごしていた。

我慢汁をダラダラに垂らしたふたなりちんぽは、ひたすら勃起し続け、一週間一度も、萎えることはなかった。

三日目からは夜も眠れず、女子寮を徘徊して可愛い女の子を見つけると、襲い掛かりそうになった。すんでのところで堪えて、オナニーしようとして、貞操帯の上から虚しくちんぽをしごこうとすることを繰り返した。

目の下にうつすらと隈が出来てしまい、撫子にも心配された。

「大丈夫ですか……？ 最近、美姫ちゃんの様子がおかしいって、クラスで噂になってますよ？」

「気が狂うう……誰か、助けてえ……」

「わたしでよければ、いくらでも力になりますよ」

最近、わたしの目には撫子がひどく魅力的に見えてたまらなかった。この可愛い親友のお嬢様に、精液をぶっかけて犯しまくってやりたいと思うようになってしまっていた。

わたしが射精を我慢しているせいもあると思うけど、なんとなく、撫子の色っぽくなっている気がするのはいのせいだろうか。

ほんの少し、撫子の髪から精液臭い匂いが漂ってきたような気がしたけど、きつと気のせいだろう。

この大人しい撫子が、ふたなりの子とセックスなんてしてるわけがない。

「撫子には、どうしようもないよ……折角力になるって言ってくれたのにごめんね」

わたしは、撫子にふたなりちんぽが生えてきたことを伝えていなかった。

お嬢様の撫子には、あまりにもショッキングだろうと思ったのだ。たとえ親友だとしても、もしかしたらちんぽが生えてるなんて気持ち悪いと思われて、仲に亀裂が入ってしまうかもしれない。

大事な友達だからこそ、秘密にしてしまったのだ。

結局、一週間たったその日の放課後、わたしは我慢することに疲れ果て、美優先生のいる職員室へ向かった。

「あら、美姫ちゃん♥ 一週間のオナ禁、おつかれさま♥」

「はやく貞操帯、外してくださいっ！ もうおかしくなりそうなんですうっ！」

「しょうがないわねえ……その前に、来て欲しいところがあるの。ね、友梨佳先生？」

いつの間にか隣に来ていた担任の友梨佳先生が、感心した顔をしていた。

「すっごい辛そうな顔♥ 一週間我慢なんて、わたしには考えられない♥ 毎日射精しなくても、ふたなりって生きてられるのね♥」

「友梨佳先生……美優先生と、仲間だったんですか……？ わたしがふたなりで、貞操帯つけられてるの、知ってたんですか……？」

「そうよ♥ わたしもね、美姫ちゃんと同じふたなりなの♥ 実は、美姫ちゃんに貞操帯をつけるアイデアを最初に思いついたのはわたし♥ 今日の特別な集まりで、極上の快感を感じてもらうための計画だったの。許して♥」

美優先生は、友梨佳先生の計画に従って動いていた……？

それなら、全ての黒幕はこの友梨佳先生ということだろうか？

「せ、先生……っ！ わたし、友梨佳先生のこと、許せませんっ……！」

「ごめんね♥ でも、美姫ちゃんはちよつと強情で、射精欲求に素直になれない子だって聞いてたから、貞操帯っていうひどい道具を使うしかなかったの♥」

「っ……！ 許さないっ！」

「あらあら、そんな風な態度でいると、貞操帯をつけてもらう期間を、もう一週間延ばそうかしら？」

「み、美優先生っ！ それだけはっ！ それだけはやめてください……お願いしますう……精液出さないと、ほんとに死んじゃうんですっ♥ 夜も興奮しちゃって、最近一睡もできてないんですっ」

わたしが泣きそうになりながら頼み込むと、友梨佳先生と美優先生はふふ♥ と笑ってわたしを職員室から連れ出した。

階段を上って連れていかれたのは、まさかのわたしのクラス、1－Bだった。

教室の扉を開くと、驚嘆すべきものをわたしは見してしまった。

あんぐりと口を開けて目を離せないでいると、美優先生が耳元で囁いてくる。

「ほら、ご覧なさい♥ そこに可愛いてエッチな女の子がいるわよ？ 犯したくなってこない？」

もう片方の耳に、友梨佳先生も囁いてきた。

「もつとよく見て♥ そこで、たくさんの女の子たちに犯されてる、撫子ちゃんの姿を♥」

それは、倒錯的な光景だった。

夕暮れに照らされた、放課後の教室。そこで、あまりにも甘美で墮落した饗宴が開かれていた。

制服を着た二人の女の子たちに群がられて、口にもおまんこにもふたなりちんぽをぶちこまれた撫子がそこにいた。

「あむっ♥ んぐううう……♥ じゅるる、じゅるるる……♥」

撫子は、口に突っ込まれたちんぽに吸い付いて、いやらしい笑みを浮かべていた。

「んじゅるう♥ んはあっ♥ もっとたくさん、おいしいちんぽ、しゃぶらせてくださいっ♥ じゅるる♥」

あの、大人しいお嬢様だった撫子が、どうしてこんなことを……。

きつと、誰かが撫子を墮落させてしまったのだ。きつと、友梨佳先生あたりが、ふたなりちんぽに犯される快感を教え込んだのだろう。

撫子にちんぽを突っ込んでいる女の子は、どうやら一年生ではなく、二年生の先輩のようだった。

腰まで伸びるほど長いやつやのストレートの黒髪を、風に揺らす綺麗な人だ。

ちんぽを吸われて快感で顔を歪めながら、気持ち良さそうに腰を揺すっている。

撫子は引き抜かれようとするちんぽに吸い付いて、タコのように口のところが伸びてしまっている。亀頭のところには一際強く吸い付いて、最後まで精液の残滓を吸い取ってから、ちゅぽん♥ とやらしい音を立ててようやくちんぽが外に出た。

つるつるに磨き上げられた先輩の亀頭からは、だらしないことに舐めとられるたび、新しいカウパーが溢れてしまっている。

「撫子ちゃん、わたし、イキそう……♥ 先輩なのに、早漏でごめんね……♥」

「イってください、奈々先輩♥ わたくしのお口でたっぷり感じて……じゅるるるう♥」

「イクイクっ♥ ああ〜っ♥」

びゅるびゅるっ♥ びゅっ♥

撫子の顔に、奈々と呼ばれた先輩が大量の精液をぶっかけていく。白濁液まみれにされても、撫子はにへら、といやらしい笑みを浮かべたままだった。

「奈々先輩の精液、すっごくくっさいです……♥ もっとぶっかけてくださいっ♥ 精液便器として、撫子をもっと使ってください……♥」

あまりにも卑猥な言葉を使う撫子に呆然とした。

そして隣で、わたしの知っている人物が撫子のおまんこにちんぽを挿入して、腰を振りまくっているのを見てさらに愕然とした。

それは愛衣だった。ポニーテールをぶんぶん揺らしながら、撫子のおまんこセックスで気持ちよさそうにしている。

「おおお♥ 撫子のおまんこ、最高っ♥ ごめんね、撫子、わたし、腰振るの我慢できないよおっ♥」

「いいんですよ♥ ぐちゅぐちゅに濡れたおまんこに、たっぷり射精して気持ちよくなってください♥」

「ああもうダメっ♥ わたしも早漏でごめんっ、撫子、イクイクイクううっ♥ あぐうっ♥」

びゅく〜っ♥ びゅっびゅっ♥

愛衣が撫子のおまんこに挿入したまま、たつぷりと精液を注ぎ込んで、白目を剥くほど感じまくっている姿は、相変わらずだらしがなくて仕方なかった。

口から出した舌の先から涎を垂らしながら、愛衣は射精を終え、ちゅぽん◆ とちんぽを引き抜いた。

「相変わず、奈々ちゃんも愛衣ちゃんも、気持ちよさそうね◆」

わたしは隣で、そう言う美優先生が貞操帯のカギをポケットから取り出し、手に持っているのを見つけた。

「はやく、貞操帯外してくださいっ」

「焦らないの◆ 撫子ちゃんは逃げないわよ◆ わたしたちと一緒に撫子ちゃんのところに行きましょう？」

「そ、そんな……わたし、撫子とセックスしたくないっ、撫子は親友だからあつ」

「愛衣ちゃんも最初はそんなこと言ってたわね◆ 貞操帯を外してもらいたかったら友梨佳先生の言うこと聞きなさい◆」

美優先生と友梨佳先生は、わたしたちを教室の中へ連れ込んだ。

わたしは、やつと貞操帯を外してもらえるという欲求に支配されて、撫子の目の前まで連れていかれてしまった。

自分の中で、これまで考えられなかったような欲望がムクムクと膨らむのを感じていた。撫子を犯したい。愛衣や奈々先輩がしているように、わたしもあの中に入って精液を出しまくるのだ。

(ダメダメ……そんなこと考えちゃダメだよおっ)

でも、貞操帯の中でちんぽはガチガチにありえないほど勃起し、射精を待ちわびていた。目を合わせると、撫子は、わたしを見てにっこりといつも通りの笑みを浮かべた。

「あら、美姫ちゃん……◆ わたくし、こんなにやらしい姿になってしまったの……◆ 友梨佳先生にやらしいことを教えられて、気がついたら、ふたなりの女の子たちの精液便器になっちゃった◆」

制服をはだけ、たゆんたゆんの巨乳をさらけだし、スカートをめくりあげられ、下着を脱がされていた。

あまりにもひどい痴態。顔にドロドロの精液をかけられ、おまんこも白濁液まみれだ。ふいに、カチャリ、と音がした。美優先生が、ついに貞操帯を外してくれたのだ。

貞操帯の中でむわつと蒸れて、ガチガチに固くなったちんぽと、久しぶりに対面した。

(わたしのちんぽっ……◆ 久しぶりのちんぽ……◆)

「さあ、一週間ぶりのちんぽ快樂、楽しみなさい◆」と美優先生。

「撫子ちゃん、美姫ちゃんを気持ちよくしてあげて◆」と友梨佳先生。

友梨佳先生の言う通りに、撫子はわたしの童貞ちんぽにためらいなく、指を触れた。

片手で根元から先つぽまで、滑らかな指の動きで、コキコキとしごかれた。

一週間ぶりのセンズリ快樂に襲われ、ちんぽが一気に甘い痺れに満ちて、ドクドクと精液

が込み上げてくるのを感じた。

自分の中で、何か大事なものが壊れて、快楽に従順な体になってしまうのが分かった。

(気持ちいいいっ♥ ちんぽ触られるのって、やっぱり最高く♥)

「あ、ありっ、ありああっ……♥ ちよつと触られただけにイクう♥ イクイクうっ♥」

びゅっ♥ びゅっ♥ びゅくっ♥

あまりにも呆気なく精液が迸り、すごい距離を飛んで、撫子のおっぱいにべったりとかかっていた。

巨乳を白濁液まみれにされながら、撫子にはっこりと笑顔を浮かべ、わたしの射精を喜んでくれた。

「いっぱい出ましたね♥ 久しぶりの射精、気持ちよかったですか？」

「めちやくちやよかったあ♥ 頭の中ぐちゃぐちゃに掻き回されるくらい気持ちよかったあ♥」

「美姫ちゃんはしっかり者だと思ってたのに、やっぱりちんぽ快楽には抗えないんですね♥ もっと気持ちよくなっていいますよ♥ 美姫ちゃんはまだ、童貞ふたりさんですよね？」

「童貞卒業したいっ♥ 撫子のおまんこで卒業したいっ♥」

「もちろんいいですよ♥ 愛衣ちゃんの精液まみれのおまんこ、もっとドロドロにしてください♥」

撫子は、股を大きく開いて、指で割れ目をばっくりと開いた。

とろり、と愛衣が出した精液が奥から溢れ出しているが、そんなことは気にならなかった。親友とセックスしようとしていることなんて、もうどうでもよくなっていた。

わたしは精液を出してもバキバキ勃起したままのちんぽを、撫子のおまんこにぴとりとちんぽをくつつけた。ぬるぬる♥ と滑るその卑猥な穴の入口に、ちんぽを擦りつけるだけで興奮してイキそうだった。

「入れているい？ 撫子、入れるよっ♥」

「どうぞ♥ 撫子のドスケベおまんこ味わってください♥」

初めてのおまんこに、わたしはぬるぬるとふたなりちんぽを突き込んだ。

むにゅり♥ と柔らかいヒダヒダが絡みついてきてたまらなかった。ちんぽ全体が甘い快感に浸され、全身を痺れるような心地よさが駆け巡る。

気がついたら、ぐちゅぐちゅといやらしい音をたてながら、腰を振っていた。

「あああっ♥ おまんこいいっ♥ すっごい気持ちいいっ♥」

「んっ♥ 美姫ちゃんのおちんぽ、大きいですね♥ 撫子のおまんこ広がって、だらしないガバガバまんこになっちゃいます♥」

「これハマるうっ♥ 撫子の身体で気持ちよくなるのやめられなくなるうっ♥」

ちんぽの力り首にヒダヒダがひっかかり、にちゅにちゅ♥ としごきあげられるのが想像を絶する気持ちよさだった。

我慢しようにもできなくて、あっという間に射精していた。

「あーっ♥ 出る出るっ♥ 白いちんぼ汁でるうっ♥」
びゅくっ♥ ぶびゅるるっ♥

射精しながら、腰を振り続ける。わたしのふたなりちんぼ汁を撫子にすりこんでいく。
一週間分我慢した精液は、まだまだ出し切れていなかった。もっと出しまくって、撫子を精液まみれにしていまいたかった。

快感で震えながら、撫子のおっぱいに手のひらを触れた。

もっちりとした吸い付いてくるような肌。精液にまみれてぐちゃぐちゃになっても、柔らかさは変わらない。

夢中になって揉みしだくと、ますます興奮してちんぼが撫子のナカで一回り大きくなった。

「あぁっ♥ 気持ちよすぎっ♥ んん……ぐうっ♥ おーっ♥」

「撫子はみんなの精液便器ですから♥ いい気持ちになってもらって、たっぷり精液をもらうのが役目です♥」

すっかり精液臭くなってしまった撫子が、そんな言葉を吐くのはたまらない淫乱さを醸し出していた。

そして、わたしはなかなか気づかなかった。

撫子とのセックスにのめり込んでいて、隣で愛衣や奈々先輩が撫子にちんぼをすりつけていることに。

愛衣も奈々先輩も、わたしと撫子のセックスを見ていたまらなくなったように、各々欲求を抑えきれなくなってしまうたようだ。

「おおっ♥ たまんないっ、お掃除フェラっ♥」

愛衣は撫子に、さっきまでおまんこに突っ込んでいたちんぼを咥えさせ、舐めさせていた。
じゅるる……♥ と音を立てて、ちんぼを頬張る撫子は嬉しそうだった。犯されるのが自分の役割だと、心の底から納得している顔だった。

「撫子、もっと強く握ってっ♥ いやらしい手コキ、お願いっ♥」

その横で、奈々先輩は撫子に自分のふたなりちんぼを握らせ、しゅこしゅこ♥ とちんぼをしごかせていた。撫子は慣れた手つきで、高速手コキ奉仕をしてあげていて、奈々先輩は気持ち良さそうに、頬を緩めている。

三人のふたなりを相手にして、全員を発情させ絶頂まで導こうとする撫子は、まさに彼女の望む精液便器と化していた。

愛衣が突然撫子の顔を両手で固定し、腰を振るイラマチオを始めながら叫んだ。

「あぁっ……撫子、イクイクっ♥ また射精するっ♥ 何回でも、撫子になら精液出しちゃうよおっ♥ あぐっ♥」

ぶびゅっ♥ びゅぶぶっ♥

粘っこい精液が撫子の喉に発射されていくのが見えるような気がした。

そして奈々先輩も、手コキ快樂では飽き足らず、撫子のふにおっぱいにちんぼを押し

付けながら、メス絶頂を迎えた。

「んんんっ◆ 撫子ちゃんのおっぱい柔らかくて我慢できないっ◆ イクうつ◆」

びゅるるるっ◆ ぶびゅりゅるっ◆

おっぱいにわたしの出した精液の上に、その精液が上乘せされ、目も当てられないドロドロの惨状になっていく。肌に精液がすりこまれ、甘い体臭に精液のすえた匂いが混ざっていく。

わたしもおまんこを味わい尽くして限界を迎えようとしていた。

何度も精液が出され、愛液とそれらが一体になったドロドロの中で、ぐちゃぐちゃとちんぽを掻き回し、撫子のおまんこにきゅううつ◆ と締め付けられながら、溜め込んでいた分の最後の精液を、ぶちまけた。

「わたしもイクうつ……◆ 撫子、撫子撫子撫子おっ◆」

「撫子もイキそうですっ◆ みんなでわたくしのことを犯して、精液まみれにする変態セックスで、イっちゃいますう……◆」

びゅるるるっ◆ びりゅっ◆ どぴゅっ◆

最高の快感が駆け抜けて、精液を思う存分ひり出していく。

ちんぽをおまんこから引き抜いた時には、割れ目からどろり◆ と大量の精液が溢れ出してしまっていた。

（もう、わたしたち、後戻りできない……このままこの学園で、卒業する日まで撫子を犯しまくるんだ……◆）

最初は射精すら拒んでいたのに、今では親友の撫子を、親友の愛衣と一緒に犯している。すっかり薄汚れてしまった自分を意識しながらも、後悔はなかった。

女教師友梨佳 五章

わたしのお気に入りの三人を全員堕とすことに、成功した。

美姫——十六歳。B 8 6 W 5 3 H 8 2。黒髪ロングのクールな女の子。今日からは撫子のおまんこに毎日射精するのにご執心になること間違いないし。

撫子——十六歳。B 9 4 W 4 7 H 9 2。栗色の髪を縦ロールにしたおとなしい引つ込み思案なお嬢様。ふたなり精液を浴びせられることに快感を覚えて、みんなの精液便器に。

愛衣——十六歳。B 8 1 W 5 2 H 8 3。ポニーテールの活発な体育系女子。朝から晩までふたなりちんぽを気持ちよくしてもらうことばかり考えるドスケベ系女子に変貌。

彼女たちは今、入学当初の見る影もないほどに、淫乱ドスケベJKと化していた。

わたしと美優先生の目の前、放課後の教室のど真ん中で、お互いに求めあい、性欲のままに犯しあっている。

「あらあら♥ こうやって、みんなこの女学園に染まっていくのね♥」

「すごくいい乱れっぷりですね、美優先生♥ 苦労して快樂の沼に引きずり込んだ甲斐がありました♥」

この計画はこれでひとまず終わりを迎える。

長い時間と手間暇がかかった計画だった。一部始終を思い出すと、よく頑張ったねと自分を褒めたくなる。

まずは撫子にふたなり精液を込み込ませ、淫乱ビッチにした。

その次に比較的だらしのない愛衣を引きずり込み、美姫を引きずり込むダシにした。

最後に、連れてきてもらった美姫にふたなり射精を経験させ、貞操帯を使ってメスちんぽ欲求を最大限まで高めてもらい、乱交パーティーに誘い込んだ。

これで、精液便器と自称する撫子ちゃんを中心としたふたなりハーレムの完成だ。

二年生の奈々ちゃんは、そのドスケベっぷりに感心したわたしがスカウトしてきた女の子だ。普段は同級生だけでなく三年生の先輩とふたなりエッチをして毎日を過ごしているという。

二年生や三年生には、一年生では及びのつかないような、いやらしい女の子たちがたくさんいるらしく、わたしはその子たちに会うことを秘かに楽しみにしているのだった。

次のわたしの目標としては、二年生や三年生の痴態も見ておきたかった。美優先生に協力してもらって、女子高生たちの性の乱れっぷりを確かめたくて仕方なくなっている。

そして、わたしがどの部活の顧問になるかも、決まっていない。これから色んな部活を見

に行って、それぞれでどれほど淫らなふたりセックスが行われているのか、見極めに行くつもりだ。

どんないやらしいJKたちとふたなりエッチが出来るのか、今から楽しみでならない。

ひとまず、今は計画の成功を祝って、快樂を味わうことにしようと思った。四人の女生徒たちが犯しあう姿に興奮して、わたしもふたりちんぽが勃起してきてしまっているのだ。

愛衣ちゃん、美姫ちゃん、奈々ちゃんたちが囲う撫子ちゃんに精液をぶちまけるべく、わたしはその輪の中に入っていったのだった。

ふたなりお嬢様 紗耶香編

大学生の紗耶香の朝は、エッチなご奉仕で始まる。

お嬢様である彼女には、何人ものメイドさんが仕えていた。紗耶香はそのメイドたちに命令し、身の回りのお世話や、ちょっとした面倒ごとをさせていた。

もともと紗耶香はメイドたちに慕われていた。金髪碧眼の、まるで西洋人形のような美しい容姿はメイドたちの憧れの的だったのだ。

だが、女学園から戻ってきた紗耶香には、大きな変化が起こっていた。身体的にも、精神的にも。

親密とは違う特別な感情をメイドたちに抱くようになってしまっていた。

——「欲情」という感情を。

その欲情は主に紗耶香と同一年のメイド、明日花あすかに向けられていた。

今、紗耶香の寝室で淫らな饗宴が行われていた。

可愛らしいネグリジェに身を包んだ紗耶香、メイド服がよく似合う明日香。

二人が絡み合う姿は一見可憐で美しい光景に見えるが、実際にやっていることは淫乱そのものだ。

「そう、そこですわっ……んっ、 ああ……♥」

紗耶香は、朝勃ちしたふたなりちんぽを、メイドの明日花にしゃぶらせていた。

天蓋つきベッドに寝転び、滑らかな肌触りのネグリジェをはだけ、上質な布地の下着から醜い肉棒を飛び出させていた。

凶暴に勃起し、ばんばんに膨れあがった紗耶香の肉棒を見た女の子は、最初こそ驚くが、何度もしゃぶらされるうちに、自分から口に咥えなくなってしまう。

「ご主人様、気持ちいいですか……？ れろおっ、もっと舐めて差し上げます……♥」

メイドの明日花もそんな女の子の一人だった。

彼女はメイドたちのうちでも、特に可愛らしい子だった。

どんなときでもニコニコと笑顔を絶やさず、献身的に主人たる紗耶香に奉仕する。その見本のような姿は、他のメイドたちにも好評だった。

最初にフェラをするよう、紗耶香に迫られたときは、どう言葉を返せば良いかわからなかった。

——ご主人様はこんな方ではなかった。

白百合女学園に入学する前、紗耶香は普通の女の子だった。たとえ豪華な調度品に囲まれ、恵まれた生活を送っていたとしても、中身はただの可愛い女の子だった。

——なのに、いつの間にか変わり果ててしまった。

そういう悲嘆に似た感情が彼女の中で何度も響き渡ったが、無理矢理肉棒をしゃぶらされるうち、彼女の気持ちは変わっていった。

我慢汁を舐めとっていくうちに、その媚薬に似た効用で、彼女自身も発情し始めてしまったのだ。

——お、おいしい……◆ ご主人様のおちんぼ、素敵……◆

あつという間に明日花は紗耶香の肉棒に魅了され、自分から進んでフェラチオをおこなっていったのだった。

「今日も明日花の朝のご奉仕、最高ですわ……どうにかなってしまいそう◆ はあんっ◆」

「いえ◆ もっと我慢して、我慢汁をいっぱい味わわせてください、ご主人様……ちゅるっ◆」

今日も、主人である紗耶香に対して、欲望のままにちんぼをおねだりしてしまうのだった。今にもふたなり精液が漏れそうになっている紗耶香。

唾液にまみれた舌をねっとりと言わせ、発情顔でときおり表情を窺ってくる明日花の淫らさに、もう射精まで一刻の猶予を許さない状態になっていた。

「明日花、そんなこと出来ませんわ……◆ ふうっ◆ そんなことを言われても、おちんぼは言うことを聞いてくれませんか？」

「こんなことを言っでは、失礼に当たるのかもしれませんが……ふえろっ◆ ご主人様は、少し早漏気味ではないですか？」

「そんなことはありませんわっ！ わたくしは、白百合女学園でたくさんの女の子たちと、こういうことをしていたのですわよっ……ひいっ◆ 先っぽ、そんなに舐められたらあっ◆ いひっ◆」

にわかには明日花のおしゃぶりが激しくなり、紗耶香はまともに反論できなくなってしまう。

柔らかい唇で根元を甘噛みし、口内で舌を絡みつける。何度も繰り返した紗耶香との淫らかな営みのおかげで、明日花のフェラはまるで娼婦のように上達していた。

あつという間に我慢が出来なくなり、紗耶香は腰を突き出しながら、甲高い嬌声をあげた。「ああっ◆ もうダメですわあっ◆ イク、イクイクイクうっっ◆」

すっかり仲の良い二人の間柄では、そんな下品な声を張り上げることすら必要は

ない。

びゅっ、びゅるるっ！

紗耶香の肉棒から、白濁液が噴き出し、明日花の口の中を汚していく。

「んぐ、んぐう……おいしゅうございましたぁ……♪」

「ふう……♪ 今日もお上手でしたわ、明日花」

「滅相もございません、そのようなお褒めの言葉……わたしはただ、ご主人様のものをお舐めしたただけです」

「あら……もう、明日花ったら♪」

紗耶香が股間を下着の中にしまい、熱狂の余韻から醒めてきた頃だった。コンコン、と部屋扉の扉がノックされる。

「紗耶香様、失礼します」

「どうぞ」

美しいメイドが一人、入ってきた。

長い間、紗耶香の家に仕えている真宵^{まよい}さん。メイドたちの中では最年長の二十五歳、みんなの見本となる立派なメイドさんだ。

豊満な胸がメイド服を押し上げており、大人の女性の魅力をむんむんと漂わせている。黒髪は一つにまとめ、背中に流しており、まさに大和撫子の風情があった。

「紗耶香様、そろそろ朝ご飯の時間です」

ひんやりとした口調で淡々と伝える姿は、私情を交えないクールさがあった。

表情が硬くめったに笑うことはないが、それが一層、彫像のような美しさを深めるのだった。

「明日花、何をしているのです。紗耶香様を起こしてきなさいと言ったのに」

「すみません、真宵さん」

「ご主人様も、お寝坊が過ぎますよ。ご自分で起きれるようにならないと」

「わかっていますわ。全く、真宵は融通が利かないのね」

「これは失礼いたしました。わたくしも出来るだけこういった注意はしたくないのです。これもご主人様のためなのですよ」

真宵は、静かに頭を下げ、部屋から出て行く。

その姿を見て、紗耶香は下半身が熱くなるのを感じた。

——あの真宵さんを自分のものにした……。

女学園から帰って以来ずっと感じていた欲望が、ムラムラと湧き上がり抑えられなくなつた。

幼い頃から一緒にいた真宵を犯すというのは、とつてもなく甘美な罪のように思えるのだ。

「今晚、例の計画を実行しましょう、明日花」

そう伝えると、明日花はぱつと笑顔になった。

「はいっ……真宵さんにもご主人様のおちんぼの素晴らしさを知ってもらいましょう！」
すっかり紗耶香の虜となった明日花には、この淫らな関係性に堕ちることは幸せそのものだと思っていた。

その幸せな輪に、真宵さんも取り込めるなんて。

二人はだらしなない笑みを浮かべながら、妄想して早くも発情してしまうのだった。

……

真宵は、紗耶香が大切な存在だからこそ、安易に親しくなってはいけないと思っていた。高校生の頃からこの家に七年間も住え続けてきた。

住え始めた当初は、中学生になったばかりの幼い紗耶香の可愛らしさに心を打たれたものだ。

おっちょこちよいで、しょっちゅう転んだり、物を壊してしまう姿は微笑ましいものだった。

外見も、金髪碧眼のハーフと言っても、ここまでの美貌の持ち主はなかなかいない。これからどれだけ美しく育つのだろうと思うと楽しみだった。

期待通り、女学園を卒業し家に戻った紗耶香は、美しく花盛りを迎えていた。

しゃんと背筋を伸ばし、立派なお嬢様となった姿はとても立派だった。

真宵はその姿を見たとき、嬉しくて胸が温かくなったが、それを隠していつも通り無表情を貫いた。

わたしは遠くから見守るだけだ。そう自ら定めていた。自分などが、親しくなりたいという欲望に負けて関わりすぎては、迷惑になる。そう考えていた。

ただ、紗耶香の様子がどこかおかしくなってしまうていたのは、残念というわけではないが、ただただ真宵の理解できないところだった。

紗耶香は、なぜか、真宵のことを見て挙動不審になったり、緊張した素振りを見せるのだ。こんな例えを使って良いのか分らないが、中学生の男子が女性に興奮して、いてもたってもいられなくなるような感じによく似ていた。そうとしか言えないほど、妙にちらちらと真宵の顔を見て頬を染めたりしてくるのだ。

しかし、きつと何か理由があるのだろうと、真宵は戸惑いを押し隠した。

そう、わたしは紗耶香がどう変わろうとも、身を尽くしてお仕えすることに変わらない。わたしは私情を交えてはいけない。紗耶香様に喜んでいただけるよう尽力するだけだ。心に決めていた。

人の間には、ちょうどいい距離感というものがある。メイドの分際で変に仲良くなつては、

逆に気を遣わせてしまうだろう。

大事なご主人様だからこそ、遠くから見守るに留め、自分の役割をまっとうする。それが紗耶香の幸せにつながるだろう。

それが紗耶香のことを一番に考える真宵のやり方だった。

……

「お帰りなさいませ、ご主人様」

真宵はその日も、家に帰る紗耶香を淡々と迎えた。

しかし異変が起きた。お屋敷に入った途端、メイドたちが真宵の周りを取り巻いて動かなくなったのだ。

しかも、そのうちの一人、明日花は手に縄を握っていた。

紗耶香がだしぬけに言った。

「真宵を縛りなさい、明日花」

「えっ？ な、何を言うのです、ご主人様……」

真宵はわけがわからず、その場で固まってしまったが、紗耶香が下した命令に目の前が真っ暗になった。

「真宵も、おとなしくするのですよ。わたくしに恥をかかせないようにしてほしいですわ」

「失礼します、真宵さん」

静かに明日花に手に縄をかけられ、奥の部屋へと連れて行かれた。

カーテンは全て閉じられ、暗い室内は、天井のシャンデリアが弱く照らし出すのみだ。

そのまま椅子に縛られ、身動きがとれなくなってしまう。

自分が何か、悪いことをしてしまったに違いない。大きな過失をしでかしたに違いない。

真宵はただただ、これから下されるだろう処罰を恐れて震えた。

しかし、主人たる紗耶香は妙なことをし始めた。

「真宵……わたくし、わたくし我慢できませんの……っ」

履いていたスカートをするすると捲り上げ、下着を露出したのだ。なんてはしたない格好だろう。

そして真宵は目を剥いた。その股間に、本来あり得ない異変が起きていることに。

まるで男の逸物が生えているかのように、下着がこんもりと盛り上がっている。

紗耶香は頬を上気させ、言い訳するように言った。

「このおちんぼがいけないんですわ……こんなに熱く疼いて……真宵を犯したくてたまらなくさせるのですもの……」

「今、お、おちんぼ……とおっしやったのですか？」

「はい、そうですわ。わたくしは、もう普通の女の子ではないのです。ふたなりになってし

まったわたくしを、真宵に……認めて欲しいのです◆」

そう言って、紗耶香は下着をゆつくりと下ろした。

ぶるん、としりながら姿を現す男性器。女を求めて猛り狂い、鋼鉄のごとく固くなっているのが見て取れた。

ひくひくと震え、刺激を待ちわびてどうしようもなくなっている。

そんなことが……真宵はただただ愕然となった。

今起きていることが信じられない。きっと紗耶香様は自分を犯そうとしているのだと、頭ではわかっていてもその現実を受け入れられなかった。

「明日香、真宵の胸をはだけなさい」

「かしこまりました、ご主人様……」

「ご主人様……っ？ い、いやです、恥ずかしいっ」

真宵はつい感情的に叫んでしまう。普段とは全く違う反応を見て、紗耶香がますます興奮しているのが真宵にはわかってしまった。

ああ………そんないやらしい目で、わたしを見ないでください……。

抵抗しても無駄だと察しつつも、もがかずにはいられなかった。

こんな形で、紗耶香に好意を向けられることになるだなんて。

以前から紗耶香を娘のように、家族のように可愛がっていた真宵にとって、その好意はあってはいけないものだった。

ずっと大事に、ちようど良い距離感を保ってきた。そうやって積み重ねてきたものが、何もかもが台無しになってしまう気がした。

そんな思いは届かず、明日花の手で豊かな胸をさらけ出されてしまう。紗耶香の視線がじいつと注がれる。視線が触れてくるような感じがして、じんじんと乳首がくすぐたくて身悶えた。

「大きいお乳……桃色の小さい乳首が可愛らしいですわ◆」

「ご主人様、おやめになって……」

あんなに小さくて可愛かった紗耶香。美しい女性に育ったかと思っただのに、こんな淫らな行為を好むようになってしまうだなんて。

どうしてそんなおぞましいものを股間に生やしてしまったのだろう………きっとあれが生えてきてしまったせいで、紗耶香様は変わってしまったのだ。

「そんなに大きくして……はしたないです、ご主人様……」

「こ、これは仕方ないのですわっ。本当は早くおちんぼをしごきたくてウズウズして……

……ああ、真宵………あなたのお乳で擦らせてちようだい」

「だめです、ご主人様………そんな……」

真宵はもがいても縄はびくともしない。静かに、諦めが体に染みこんできた。虚ろな目で動かなくなった真宵の胸に、紗耶香がはぁ、はぁと息を荒げながら肉棒を近づける。

先走り汁をだらだらと垂らし、いやらしい匂いを振りまくそれを、真宵の胸に押し当てる。片手で膨らみを揉み、滑らかな手つきで愛撫されると、ぴりぴりとかすかな電流が肌を走る。

その心地良い感覚は段々と肌に染みこんできて、真宵の中で温かい何かがとろとろと溢れ出した。

真宵は不思議と、全てが壊れゆくを感じながらも、それに身を任せてしまっていた。

紗耶香になれば、こういったことをされてもまんざらでもない……真宵は自らの主人に愛情とも、欲情とも言えない、不思議な温かい気持ちを感じていた。

紗耶香は夢中になって胸を揉みしだき、欲望まみれの肉棒を押しつける。

「なんて柔らかいのお……◆ 真宵のおっぱい、いいですわぁ」

「ご主人様、みっともない……そんなお下品なお顔をしないでください……」

「げ、下品だなんて、失礼ですわ、真宵」

「これは失言でした、ご主人様……ああ、なんて固くて、熱い……」

押しつけられるいやらしい怒張は、ますます大きく太くなって、はちきれんばかりだ。

これは紗耶香のわたしに対する感情の表れなのだろうか。それならば、こんなにも大きく膨れあがってしまった、それだけわたしのことを思っているということだろうか。

まとまらない思考は、漠然とした幸福感を真宵にもたらず。

「いやがらないのですわね、真宵……他のメイドたちは、最初は激しく暴れましたのに」
紗耶香がそう言うのを聞いて、真宵は自然と言葉がこぼれた。

いつもの引き締まった表情ではいられず、わずかに火照ってゆるんだ表情になってしまっていることに、自分でも気付いていた。

どんな形であろうと、紗耶香と親しい関係になりたい……そう願っていたことを思い知らされた。

「ご主人様がこういった関係を望むのならば……わたしは、この身を委ねます……」

「真宵……あなたは、なんて素晴らしいメイドなのかしら……◆ もう、おっぱいに擦りつけているだけなのに、熱いものが込み上げてきてしまいますわ……◆」

紗耶香が真宵の双乳を手のひらで掬い上げ、その谷間に肉棒を挟むと、その熱さがますます体の芯に近いところで感じられた。

ぴっちり肉棒をお乳に押し当て、くちゅくちゅと肉棒を出し入れし、唇の端から涎を零しながら喜ぶ紗耶香は、滑稽なほど幸せそうだった。

「おほお……♪ やっぱりパイずりは最高ですわね……おお、おお……♪」

へこへこみつともなく腰を振り、欲望のままに快楽を味わう紗耶香の姿は、きっちりとお嬢様を演じる紗耶香からかけ離れていた。

幼い頃の紗耶香を思い返させるような、可愛らしさがあった。

真宵は思わず、笑みがこぼれてしまう。

「ご主人様は、子供の頃から何も変わっていないのですね……うふ」

それは真宵が初めて紗耶香の前で見せた笑顔だった。

それを見た紗耶香は一気に射精感が高まり、一気に精子を迸らせてしまう。

「ま、真宵っ……そんな表情、は、反則ですわっ……んっ、くうくうっ！」

びゅるるる！　びゅくっ！　どびゅどびゅっ！

その白濁液を胸に浴びて、真宵はぼんやりと色っぽい笑みを艶然と浮かべていた。

「全く、こんなに汚して……ご主人様はとんだお転婆娘ですね。でも、そんなに心地よさそうにされたら、嬉しくなってしまうでしょう？」

……

紗耶香は射精の余韻に浸る余裕もなく、再び肉棒がいきり立つのを感じた。

真宵が自分を優しく受け止めてくれる喜びでいっぱいになり、もつともつと、思うがままに精を放ちたいという欲求でたまらなくなっていた。

幼い頃からずっと、一切文句を言わず献身的に使えてくれていた真宵。

彼女は紗耶香にとって、二人目の母親のような側面があった。今も、母親のように自分のわがままを許し、包み込んでもらっている。

最初こそ、どうしてここまで、わたしに身を捧げてくれるのだろう、という疑問があったが、真宵ならここまでしてくれてもおかしくないという確信が湧いてきていた。

それならば、この自分勝手な肉棒が満足するまで相手になってもらうまでだ。

下着を脱がせ、股を開かせ、だらしなくも秘所をさらけだしたポーズを取らせても、もう真宵は一切抵抗しなかった。

とろお、と女陰は湿り気を帯びており、雌の発情の匂いを紗耶香の鼻に届けた。

「ご主人様、そんなに見つめられたら、困ってしまいます……」

真宵が恥じらう姿を見て、一気に頭がかあつと熱くなる。ぶつり、と理性を失い紗耶香は勝手にびくびく震える怒張をあてがった。

「ま、真宵……いきますわよ……う、ううっ」

突き込んでいくと、温かくぬめぬめと包み込んでくる膣にうっとりしてしまう。あまりにも甘美な快楽が流れ込み、ぶるぶると身震いしてしまった。

「ん、ん……お好きなように動かしてくださいませ……」

「いつも厳しいあなたがそんなにわたくしを甘やかすだなんて……ずるいですわよおっ」
「本当はずっとこうして、優しくしてあげたかったですよ。ご主人様が立派なお嬢様になるまでは、わたしがそういう役目を引き受けなければと思っていたのです」

「真宵……あなたはなんて……おほおっ」

紗耶香は言葉が続かないほどの快樂に見舞われ、かくかくと腰を動かすのを止められない。

じゅぶじゅぶ、と卑猥な音を立てておまんこを抉ってしまう。目の前でチカチカと火花が散るようで、夢中になって女体を貪ってしまう。

「あ、んあ、……ああ」

控えめに喘ぎ声をあげる真宵も、実際のところひどく感じているようだった。表情はとろんと蕩け、至福の時に浸ってしまっているのがよくわかる。

紗耶香は全身を駆け巡る激しい電流で我を忘れて、快樂の沼に溺れていってしまう。

「真宵、真宵……最後まで甘えさせてもらいますわぁっ……んちゅう」

真宵の乳首に吸い付き、母乳をねだる赤子のようにその身にもたれかかった。

「あらあら、ご主人様ったら……」

頭を大切なものを扱うように撫でてもらいながら、ヒダヒダで肉棒を擦り上げるのは、天国にいるかのような感覚だった。

紗耶香はあつという間に上り詰め、相変わらずだらしない声をあげ、だらしない表情で果てた。

「おお……気持ちいい、真宵のナカ気持ちよすぎですわぁ……うんっ！」

頭の中で何かが弾けるような感覚と共に、ふたなりちんぼの中を精液が勢いよく流れ出していった。

びゅくっ！　びゅくびゅくっ！　びゅくっ！

「ああ、ご主人様……すごく熱い……」

真宵は心地よさそうに肉棒の脈動を感じつつ、優しく紗耶香を諫めた。

「そんなに出してはいけません……ああ……でも、まだ出てる……仕方ないですね、全くもう……」

そういう言葉をかけられては、ますます射精が止まらなくなってしまう紗耶香だった。

快樂の虜となった真宵は、他のメイドたちと同様、紗耶香の欲望のはけ口となった。

だが、誰も文句を言う者はおらず、それどころか紗耶香のちんぼが欲しくてたまらない者が続出した。

幸せな墮落が、紗耶香の家にはびこっていったのだった。

そして、真宵は紗耶香の一番のお気に入りとなり、毎晩のようにその精液を受け止めることになるのだった。

そのことを真宵は何も後悔していない。本当はずっと紗耶香と親密になったかったのだ。むしろ、最初からこうなることを求めていたのではないかと思うようになってしまった

の
だ
っ
た。
。

（終）